

秋田県文化財調査報告書第532集

久保田城跡

—あきた芸術劇場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—
(第1分冊 本文・遺構図版編)

2024・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の「岩佩」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

久^く保^ほ田^た城^{じょう}跡^{あと}

—あきた芸術劇場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—
(第1分冊 本文・遺構図版編)

2024・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約5,200か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財は、県民が地域の歴史や伝統を理解し、ふるさと秋田への誇りや愛着を高めていく上で、欠くことのできないものであります。

一方、県・市連携文化施設の整備は、秋田の歴史・文化の中心として長く県民・市民に親しまれている千秋公園の隣接地に、人々が集い、芸術文化に触れる機会を拡充し、地域の活性化に貢献することを目的に進められてきました。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、あきた芸術劇場整備事業に先立って、平成31年度・令和元年度・2年度に実施した久保田城跡三の丸の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代の陥し穴、平安時代の建物跡、江戸時代の武家屋敷正門跡等が見つかりました。なかでも藩政時代に家老職を多く輩出した上級武士である渋江氏の屋敷跡からは豊富な遺物が出土し、当時の生活の様子を詳しく知ることができました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県観光文化スポーツ部文化振興課、秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

秋田県教育委員会

教育長 安田 浩 幸

例言

1 本書は、あきた芸術劇場整備事業に伴い、平成30年度から令和2年度に発掘調査した秋田市所在の久保田城跡三の丸渋谷屋敷の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報等によって公表されてきたが、本報告書を正式なものとする。

2 調査要項

遺跡名 久保田城跡（くぼたじょうあと）

遺跡番号 5KBTJ

調査期間 平成30年6月4日～12月14日、平成31年2月14日～令和元年7月26日、
令和3年2月16日～3月25日

調査面積 12,310㎡

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者

宇田川浩一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹）

平成30年度・平成31年度（令和元年度）・令和2年度

村上 義直（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹）

平成30年度

武内 真之（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事）

平成30年度

伊藤 智範（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事）

平成31年度（令和元年度）・令和2年度

山村 剛（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事）

平成30年度・平成31年度（令和元年度）

利部 修（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主査）

平成30年度

巴 亜子（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

平成30年度・平成31年度（令和元年度）

乙戸 崇（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主事）

平成30年度

富樫 那美（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主事）

平成31年度（令和元年度）

赤星 純平（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

平成30年度・平成31年度（令和元年度）

安田 創（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

平成30年度・平成31年度（令和元年度）

森谷 康平（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

平成30年度・平成31年度（令和元年度）

久住 駿介（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

平成31年度（令和元年度）

- 小松 和平 (秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事)
平成 31 年度 (令和元年度)
- 大上 立朗 (秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事)
平成 31 年度 (令和元年度)

整理担当者

- 宇田川浩一 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹)
平成 30 年度～令和 5 年度
- 村上 義直 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹)
平成 30 年度
- 武内 真之 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)
平成 30 年度
- 伊藤 智範 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)
平成 31 年度 (令和元年度)・令和 2 年度
- 山村 剛 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)
平成 30 年度・平成 31 年度 (令和元年度)
- 利部 修 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主査)
平成 30 年度
- 巴 亜子 (秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事)
平成 30 年度・平成 31 年度 (令和元年度)
- 乙戸 崇 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主事)
平成 30 年度
- 富樫 那美 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主事)
平成 31 年度 (令和元年度)
- 赤星 純平 (秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事)
平成 30 年度・平成 31 年度 (令和元年度)
- 安田 創 (秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事)
平成 30 年度・平成 31 年度 (令和元年度)
- 森谷 康平 (秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事)
平成 30 年度・平成 31 年度 (令和元年度)
- 久住 駿介 (秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事)
平成 31 年度 (令和元年度)
- 小松 和平 (秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事)
平成 31 年度 (令和元年度)
- 大上 立朗 (秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事)
平成 31 年度 (令和元年度)

総務担当者

- 大坂 真弓 (秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹)
平成 30 年度～令和 2 年度

小松恵美子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹）
令和3年度～5年度

調査協力機関 秋田県観光文化スポーツ部 秋田市観光文化スポーツ部 秋田市企画財政部
学校法人和洋学園

【平成31年度・令和元年度】

平成31年4月1日～令和元年7月26日

- 3 本書は、久保田城跡報告書第1分冊「本文編」である。
- 4 陶磁器の整理に当たっては、佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問大橋康二氏のご指導を得た。大橋氏が作成した観察所見は、「大橋氏所見2022」・「大橋氏所見2023」として、秋田県埋蔵文化財センターで保管している。
- 5 木製品の整理に当たっては、木材高度加工研究所助教工藤佳世氏、沈昱東氏、教授栗本康司氏、高田克彦氏、東北大学植物園助教大山幹成氏のご指導を得た。また、秋田県立大学木材高度加工研究所との共同研究「渋江屋敷発掘調査における木製品の樹種データベースの構築」の成果を含む。
- 6 漆器・金属製品・凝灰岩の蛍光X線分析にあたっては、秋田県立産業技術センターの遠田幸生氏、千葉隆氏、杵名調子氏、伊藤千咲氏の多大なご協力を得た。
- 7 出土文字資料の解説は、秋田県立博物館新堀道生氏による。
- 8 発掘調査においては、東京都古泉弘氏、二本松市遠藤嘉一氏のご教示を得た。また、整理作業に当たっては、東京大学堀内秀樹氏、湯沢丈氏、筑波大学内田昌太郎氏、山口博之氏、八重樫忠郎氏、秋田市観光文化スポーツ部文化振興課伊藤武士氏、秋田城跡調査事務所神田和彦氏、大館郷土博物館嶋影社憲氏、仙北市教育委員会遠藤元氏のご教示を得た。
- 9 蛍光X線分析データの処理について、佐々木繁喜氏からエクセル用プログラムを提供していただき、操作方法や結果の解釈についてご教示を得た。
- 10 掘立柱建物跡の分析については、八戸市立博物館・八戸工業大学非常勤講師の中村隼人氏の多大なご協力を得た。中村氏の復元案は秋田県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 遺構計測業務を株式会社シン技術コンサル、掘削業務を旭建設株式会社、株式会社宮原組に委託した。

凡例

- 1 各遺構の焼土や炭化物分布などは、各図にそれぞれのパターンを示した。
- 2 各遺物の計測点は、各章節に示した。
- 3 漆塗りや炭化物等の付着物は、各図にそれぞれの凡例を示した。
- 4 遺構・遺物の計測に当たって、部分的な検出遺構や破損品の計測値は、現存長・重量とし（ ）に入れた。遺物復元のために用いた補填材の重量が含まれる場合は、その旨記載した。
- 5 木製品の重量は湿重量を基本とし乾燥重量、半乾燥重量を計測した場合は、その旨記載した。
- 6 出土遺物の数的特徴をつかむため、各種計算をしている。

①修正ウェーバー値（ウィーバー値） 複数種類の出土遺物にそれぞれ数量比が与えられている場合に、どれぐらいの多さだと「主体的」と言えるかを示す値（土井1970）。

修正ウェーバー値 = ((ある構成要素の現実の値% - 理論モデル比率%) の2乗) の総和
計算例

遺構1から陶磁器A、B、C、Dがそれぞれ10、20、30、40%の比率で出土したとする。出土比の多い順に何位までが主体的遺物と言えるかを求める。

1種類しか出ていない場合は、理論的出土率 = $100 \div 1 = 100\%$

2種類出ている場合は、 $2 \div 100 = 50\%$

4種類の遺物なら、理論的出土率 = $4 \div 100 = 25\%$ である。

出土率を多い順に並べる。(D40%、C30%、B20%、A10%)

遺物D = $(40-100)^2 = 3600$

遺物C = $(40-50)^2 + (30-50)^2 = 100 + 400 = 500$

遺物B = $(40-33)^2 + (30-33)^2 + (20-33)^2 = 49 + 9 + 49 = 107$ ←最小値

遺物A = $(40-25)^2 + (30-25)^2 + (20-25)^2 + (10-25)^2 = 225 + 25 + 25 + 225 = 500$

計算結果が最小になる所までを主体とする。従って遺構1の主体的遺物はD、C、B。論文によっては、結果が最小になるひとつ前の数値を採用する場合もある。その場合はD、Cが主体。本書では最小値までを主体とした。また、遺物組成に対して主体、主体的という用語を用いる場合、全て修正ウェーバー値を算出した結果を踏まえているが、計算数値は必要な場合に限って掲載した。

②特化度 1遺構から出土したある種類の遺物比÷遺跡全体から出土したある種類の遺物比。

例えば、遺構Aから出土した青磁の比率0.1%、白磁が50%、遺跡全体から出土した青磁の比率0.05%、白磁が70%だったとする。この場合、遺構Aの青磁に対する特化度は、 $0.1 \div 0.05 = 2$ 。白磁の特化度は $50 \div 70 = 0.71$ 。百分率比較であれば、白磁が圧倒的多数を占めるため、青磁の比率は重要視されない。出土数が少なく単純な比率の大小比較では埋没してしまう少数遺物の中に、その遺構を特徴付けるものが含まれる可能性がある。そのような少数派を拾い上げる手法である。

これらの計算法については、日本大学農学部日暮見氏のご指導を得た。深く感謝いたします。

目次

序	
例言	ii
凡例	iv
目次	v
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 地質的環境	4
第3節 歴史的環境	7
第3章 調査の方法と成果	14
第1節 調査の方法	14
1 発掘調査	14
2 整理作業	14
第2節 基本層序	16
第3節 遺構と遺物	24
1 縄文・続縄文・弥生時代	24
2 平安時代の遺構と遺物	24
3 江戸時代の遺構	104
4 近現代の遺構	255
5 江戸時代の遺物	264
第4章 総括	298
報告書抄録	
付図	
第2分冊（遺物図版編）	
第3分冊（写真図版編）	
第4分冊（観察表）	
第5分冊（自然科学分析編）	

第1章 調査の経過

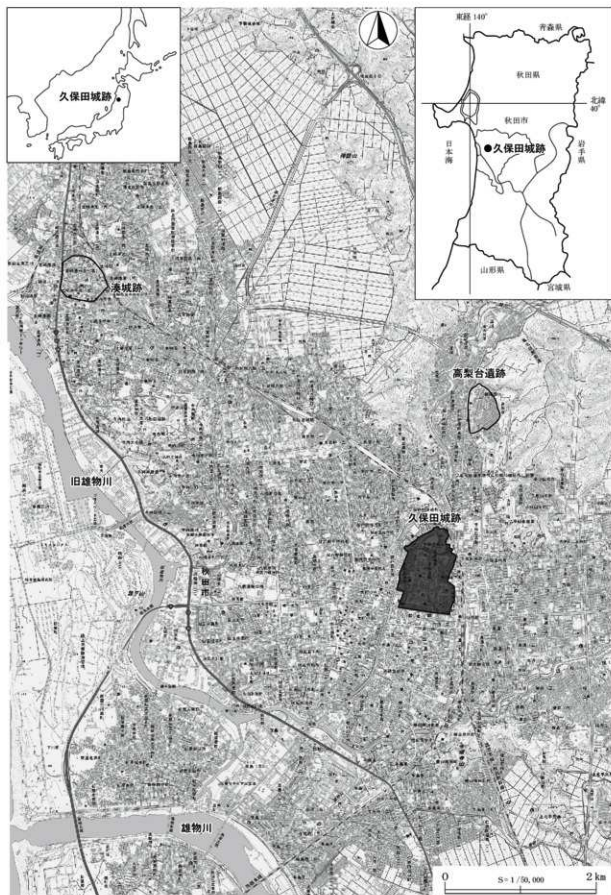
第1節 調査に至る経緯と経過

あきた芸術劇場ミルハスは、老朽化等の課題を抱えていた旧秋田県民会館と旧秋田市文化会館の機能を一体的に継承する施設として、秋田県と秋田市が共同で整備を進め、令和4年6月に開館したものである。

平成25年度に有識者による文化施設整備構想検討委員会を県・秋田市の連名で設置し、「新たな文化施設に関する整備構想」を、翌年度には「新たな文化施設に関する基本計画」を策定した。さらに、平成27年度には、「県民会館・市文化会館の建替による県・市連携文化施設整備方針」を策定し、新文化施設の建設場所について、解体後の県民会館跡地を候補地とすることが明らかにされた。この間、県議会及び市議会で多岐にわたり議論が深められたほか、パブリックコメントに加え、県民や文化団体との意見交換会を開催した。これらの内容を踏まえ、平成29年1月に「県・市連携文化施設に関する整備計画」が策定されるに至った。平成29年度に基本設計、同30年度に実施設計が取りまとめられ、同30年度に解体工事、同31年度から建設工事着手、同33（令和3）年度中に完成及び開館という目標が定められた。

旧県民会館の敷地は、全面が周知の遺跡である近世「久保田城跡」の範囲になっており、事業計画段階ですでに埋蔵文化財事前調査の対応が必須な場所であった。このため、平成28年6月、秋田県文化振興課から秋田県教育委員会に対し、分布調査の依頼があり、協議を重ね同年7月に文化財保護室が試掘調査を行うこととなった。県民会館を使用するコンサート、イベント等が平成30年5月まで決まっていたため、試掘調査は、営業に影響のないジョイナス駐車場の未舗装部分（北西～西側の土塁裾部分）を対象に実施された。その結果、近世の生活面が複数あることと、その下に古代の生活面が存在することを確認した。

平成29年11月と同30年2月には、秋田県埋蔵文化財センターが確認調査を行った。土塁の構造と建屋周辺の地下状況を把握するために、一部舗装を除去しながら掘り下げを行ったところ、近世以降、現地表面が大きく掘削されることはなく、比較的良好な状態で残されていることを確認した。建屋部分については、地下状況の把握が困難であることから、全て本発掘調査対象範囲とされた。これにより、建設工事で掘削される範囲12,310㎡全面が本調査対応とされた。整備計画で新文化施設の開館が平成33（令和3）年度中とされたことから、これに間に合わせるため解体工事と発掘調査を併行して行うこととなり、発掘調査は、県民会館営業終了後の平成30年6月18日から実施することとなった。解体工事に伴う建築部材の飛散など安全面での懸念が大きく、工事区と発掘区を厳密に区分し、解体工事施工業者と毎日綿密に打ち合わせをして調査を進めた。途中、平成30年12月15日から同31年2月9日の間は、本調査を中断し、建屋解体、ジョイナス表土除去に立ち会った。その後、平成31年2月12日から本調査を再開し、令和元年7月26日に施設本体の発掘調査を終了した。駐車場については、近隣に一定規模の駐車場を確保する観点から、隣接する秋田洋女子高等学校移転後の敷地に整備することが決定し、令和2年9月から12月にかけて行われた試掘調査を経て、令和3年2月16日から3月31日まで本調査を実施し、新文化施設の発掘調査全工程を終了した。



第1図 遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡が位置する秋田市は、日本海に面した秋田県海岸平野部のほぼ中央にあり、東方には出羽山地の端にあたる太平山が位置し、市内南部には県南東部の大仙山を水源とした雄物川が流れる。現雄物川河口付近に繋がる旧雄物川は、市街地の南から北西方向に流れ秋田港で日本海に注ぐ。

調査地である久保田城跡三の丸洪江屋敷跡は、JR奥羽本線秋田駅の北西約800mの平坦地に位置している。秋田市街地の秋田市千秋久保田町地内で、北緯39°43'0"、東経140°7'30"（調査地点MA50の世界測地系：X=-30900.000、Y=-61000.000）に位置する。周辺は秋田市の都市公園「千秋公園」となっている（第1図）。西側には、太平山を水源とし、市街地を南北に横断して雄物川に合流する旭川が流れている。この旭川は、近世久保田城下町を建設する際、流路が久保田城の敷地にあまりに近く、土砂崩れを引き起こす危険性があった。そのため初代藩主佐竹義宣は築城にあたり、城の防禦や城下町を内町（侍町）と外町（町人町）に区画整備することを合わせ、流路を西に掘り替え、旧流路を城の外堀とした（第2図）。掘り替えた旭川の東が内町、西が外町で城下町の骨格が形成された。現秋田市の市街地の中心部は、当時の城下町を踏襲している。古川堀反町の名は旧流路である外堀（穴門堀）に由来し、古川堀反町の西隣に接する土手長町の町名は、流路を掘り替えた際にあげられた土砂を埋め立て、整備したことに由来する。

久保田城跡は地形分類で台地・丘陵にあたり、千秋公園台地と呼ばれ、北東に位置する手形山から旧旭川の浸食で分断されたと考えられている。千秋公園台地は標高40m・35m・25mの3面からなる旭川の河岸段丘である。手形山と同様に、第4紀系の礫層や含礫砂層（濁り層）からなっている。台地の西側には段丘面があり、前述したように旭川がせまっていた。このため、久保田城築城の際には、旧流路の一部を埋め立て、段丘面も含めて盛り土を施して整地が行われている。本調査の調査区は台地の南西の裾に位置し、旧流路である外堀に面している。本調査区においても、台地側の高い部分を削り、発生した土砂で旧流路側の低い部分に盛り土を施して整地を行っていることが確認された。

千秋公園台地の周囲は雄物川をはじめとする周辺河川の浸食を受け、第4紀後期以降に埋没した地形で（第4図）、低地に分類される。久保田城築城時に作製された『御国替当座御城下絵図』に拠れば、久保田城の周辺は湿地帯として描かれている。

久保田城下町は、標高4mから10m強に渡る。城の南側、侍町の中央を標高4～5m台の等高線が走り、南に開口する谷が埋没していることを示唆する。この谷は付け替え前の旭川の旧河道と後期更新世の浸食谷が合流したものである。また、城の北東に接して旧河道に造営された中島町には、標高3m台がある。

米軍撮影（1948年）の空中写真を元に地形を判読し、現在の地形図に重ねた（第3図）。城下西側を雄物川が北上し、城下中央を旭川が南流する。城の堀は旭川の旧流路を利用する。東の出羽山地から太平川が西に流れ、城下町南西で旭川・雄物川と合流する。その結果、雄物川東側から城下南西側にかけての広い範囲には、雄物川の曲流に伴う谷底平野が形成され、特に城下南西部の3河川合流地点は頻繁な洪水を起こす氾濫原（雄物川の三角州）となっている。1938年に新屋放水路を開鑿するまで洪水の被害を受けていた。

久保田城跡と同時期の遺跡として、久保田城跡の南側に近接して藩校明徳館跡と東根小屋町遺跡が

位置し、西側に隣接して古川堀反町遺跡が位置している（第2図）。平成12年に行った藩校明徳館跡の調査と、平成14・15年に行った東根小屋町遺跡の調査では、最下層に「スクモ層」を確認し、絵図にあるような広大な湿地帯であることが分かった。特に後者の調査では、湿地帯の埋め立てや地盤改良の整地が繰り返されたことが分かり、1.5m以上に及ぶ江戸時代遺物包含層も確認した。平成16・17年に行った古川堀反町遺跡の調査でも、東根小屋町遺跡と同様に、地盤沈下のために何度も整地を行った状態であることを確認し、絵図と同様の地形であることを確認した。

また、2023年7月の豪雨によって起きた水害では、城下の中下級武士町に当たる地域が広く水没した。因らずも雄物川放水路が開削するまで、江戸時代から近代においてバック・ウォーター現象に起因する水害に悩まされた地域と合致していることを、改めて認識させる災害となった。

第2節 地質的環境

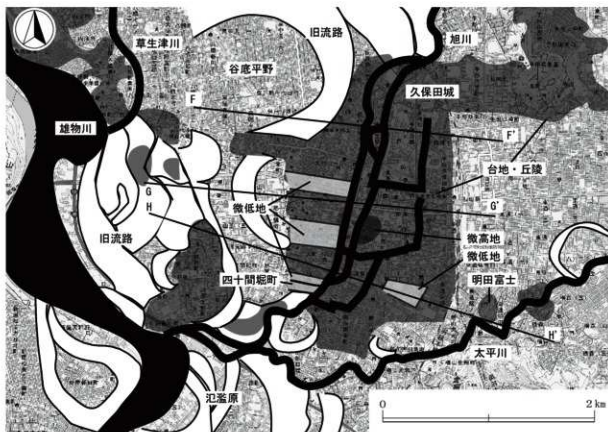
秋田市内では、戦前から石油探掘を目的としたボーリング調査が広く行われており、また1983年に甚大な被害を引き起こした日本海中部地震に関する活断層研究のためのボーリング調査などによって地下の埋没地形が詳しく明らかになっている（大橋1938・1953、狩野1964、藤岡・狩野1966、秋田大学地質調査班1986、第4～6図）。これらの成果によれば、最終氷期最寒冷期（およそ2.7万年前）雄物川が下刻した埋没谷（古雄物川谷）が、久保田城の西側（現在の国道7号線から新国道）の地下80mの深さにあり、更新世後葉から完新世に向かう温暖化の過程で埋積された。完新世になって久保田城の乗る段丘面が埋没を免れた残丘として顕れており、埋没しきれなかった谷や段丘面が現在に至るまで、城下の表層地形となっている。

千秋公園の丘麓から伸びる地下の埋没谷は、南下する1本と西進する1本がある。南下する谷は現在の東根小屋通りの地下を走る。東根小屋通りの末端に「保健所微高地」（狩野1964、現在は東北森林局とその周辺）と命名された地点があり、この微高地は氷河期の埋没段丘面を母体としている。江戸時代にはこの微高地が上中級武士町の入口にあたり楕円形を形成していた。東根小屋通りは段丘面を侵食下刻した埋没谷の少し西側（段丘面東側の肩部から少し下がった位置）となる。洪江家南側の中土橋の堀と大手門の堀を分ける中土橋は、その名の通り旧地形を削り出しており（秋田県教育委員会2006）、東根小屋町西側と西根小屋町東側・藩校明徳館（秋田市教育委員会2002）を乗せる埋没段丘＝保健所微高地に連続する。

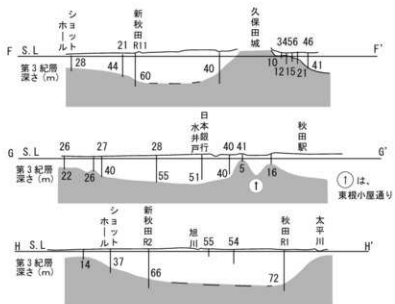
また、古雄物川谷に向かって西へ流れる小谷は、町人町（現在の通町目抜き通り）の地下を走る。町人町は、西に開く小谷に画された段丘面上に割り付けられている。

参考文献

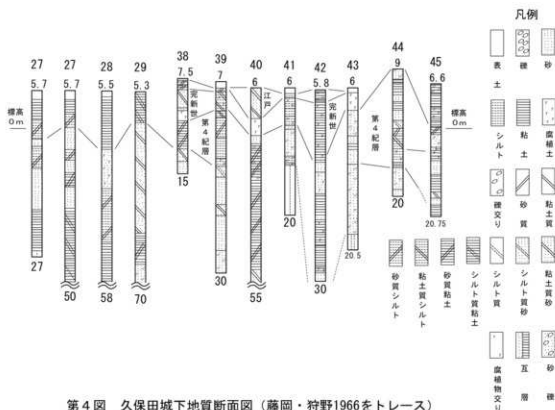
- 秋田県文化振興課・株式会社ウスマ地域総研 2017 「平成28年度県・市連携文化施設整備事業地質調査業務委託 秋田市千秋明徳町地内地質調査報告書」 秋田県文化振興課
- 秋田大学地質調査班 1986 「秋田臨海平野の形成史」『地質学論集第27号 都市地盤の形成史と地層の液状化』
- 大橋良一 1938 「秋田平野中の残丘」『地理学』第六巻第十二号 p1-6
- 大橋良一 1953 「秋田市の地学（其の一）」『教育秋田』No50 p25-29
- 大橋良一 1953 「秋田市の地学（其の二）」『教育秋田』No51 p26-30
- 狩野豊太郎 1964 「秋田市街地域の地形および第四系について」『秋田大学地下資源報告』No30 p21-34 秋田大学
- 藤岡一男・狩野豊太郎 1966 「表層地質 秋田」『土地分類基本調査 地形・表層地質・土じょう』p1-35 経済企画庁



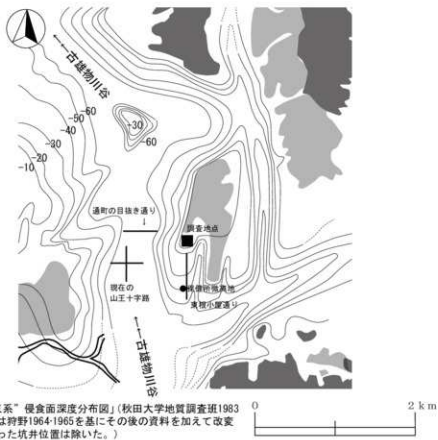
第2図 久保田城下地形分類図 (国土地理院1/2.5万「秋田西部」「秋田東部」に加筆)



第3図 久保田城下断面・第3紀層標高図 (藤岡・狩野1966をトレース)



第4図 久保田城下地質断面図（藤岡・狩野1966をトレース）



第5図 最終氷期浸食地形と調査地点

第3節 歴史的環境

秋田市には、令和4年度末時点で519遺跡が登録されている。ここでは、久保田城跡（1）と周辺の遺跡について第5図によって概観する。

縄文時代の遺跡や奈良・平安時代の遺跡は、主に久保田城跡の北側から東側の微高地や台地上に分布している。縄文時代では蛇野遺跡（8）、柳沢遺跡（9）、桜田邸内遺跡（10）、高梨台遺跡（13）、大松沢I遺跡（16）、三嶽根遺跡（22）がある。1974年（昭和49）に発掘調査された柳沢遺跡は縄文時代前期の集落跡で、秋田市指定の史跡となっている。

奈良・平安時代の遺跡は、蛇野遺跡（8）、大松沢I遺跡（16）、三嶽根遺跡（22）など縄文時代の遺跡と複合するものがある。久保田城跡の北東約2.7kmにある手形山窯跡（19）は、須恵器を焼いた窯跡で、生産品は秋田城へ供給されたと考えられている。また、久保田城跡北側の沖積地である泉地区、保戸野地区一帯は一ノ坪条里制遺構として周知されている。中世では、北側の山崎館（20）、三嶽根遺跡（22）、東側の蛇野遺跡（8）に館跡が把握されている。

近世城郭の平山城である久保田城跡（1）は、秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城で、現在の千秋公園一帯がその範囲であり、秋田市の名勝に指定されている。1602年（慶長7）に常陸国水戸城（茨城県水戸市）から秋田に転封された佐竹義宣（1570～1633）は、当初藩主秋田（安東）実季（1576～1659）の居城であった土崎の湊城に入城した。しかし、海岸線に近い湊城は狭小の平城であることから、家臣団の居住地の確保と諸施設の建設用地等の取容能力的な問題や、防衛的な不安などから新城を築くこととなった。実地検分の結果、仁別川（旭川）を西方に移すことを前提に久保田神明山を選定し、翌年の1603年（慶長8）5月に着工した。神明山には川尻村の肝煎であり、後の川尻氏である豪族三浦氏の氏神（後に川尻総社神社）や数軒の人家があったが、それぞれを移転させている。そして、城は未完成であったが約1年後の1604年8月には湊城を破却して新城へ移り、それ以降も継続して城の整備を続けた。

久保田城は、本丸、二の丸、三の丸と北の丸からなる三重構造である。本丸は東西65間（約117m）、南北120間（216m）で、藩主に住居である本丸御殿や政務所等がおかれ城の中核となっている。本丸は台地の最も高台に位置し、一面を平らにして外周には土塁を巡らし、土塁の間には表門、裏門、帯曲輪門、埋門の4か所の門と5か所の切戸口を設けていた。そして、門を除く土塁の上には多間長屋を建て、多間長屋のない部分は板塀となっているなど、城内を厳重に守り固めていた。また、北西隅には御隅櫓（新兵具庫）、南西隅には御出書院がおかれていた。

二の丸は東西39間（約70m）、南北240間（432m）で、境目方役所、勘定方役所等の諸役所や金蔵、既等がおかれていた。この二の丸は本丸の正面としての玄関口にあたり、外部からの道はすべてここに集まり、内堀を渡る所に黒門、松下門、不浄門、土門の4か所の門をもうけ、足軽番所をおいて警備していた。

三の丸は二の丸の北、東、南の3方をコの字型に囲んでいる一段低い地区である。二の丸を囲む内堀と町を画する外堀の間にあり、家老級の重臣の屋敷等がおかれていた。三の丸は3つの地域からなっており、二の丸東方で大手門と大手北の門との間の高地を上中城、二の丸南方の低地を下中城、上中城から北へ続く北の丸を山の手という。三の丸地域の詳細な記録は少ないが、規模については東西64間（約115m）、南北144間（約259m）と台地の大きさが記載されている。

これらの基本となる構造に加え、本丸の西には堀と土塁によって囲まれた独立した郭がつくられ、兵具庫がおかれた。この兵具庫がおかれた郭は西曲輪や捨曲輪と呼ばれる。堀は、本丸、二の丸を囲

む内堀、北の丸と西曲輪を含む三の丸を囲む外堀がある。西曲輪部分では内堀と外堀が合流する部分がある。

久保田城跡では、これまで公園整備事業や開発事前の試掘調査、本発掘調査等あわせて40次を超える調査の蓄積がある(第2図)。本丸で7回、二の丸で9回、三の丸等で24回である。1988年(昭和63)に本丸北西隅で初めて行われた発掘調査では御御槽と多間長屋等が検出されている。2000年(平成12)の表門復元のための調査では、柱掘方や小規模な建物跡が発見されて創建期の門と考えられている。また、2008年(平成20)までに行われた黒門周辺の調査では、門に新田2時期あることや内堀に架かる唐金橋橋脚の掘方が確認されている。今回の調査地点はNo.48で、久保田城跡南西部のこの地点は久保田城跡三の丸の南西角にあたる。正保4年(1647)「羽田国秋田郡久保田城絵図」によれば、侍屋敷となっており、家老洪江氏の屋敷がおかれていた。明治に入ってからは藩庁等がおかれた後、1904年(明治37)にルネッサンス様式の秋田県公会堂が建てられた。1918年(大正7)、公会堂南側に秋田県記念館が完成するが、公会堂は完成をみずに焼損し跡地は記念館の庭園となる。その後1950年(昭和25)には秋田県児童会館、1961年(昭和36)の児童会館移転後に秋田県民会館と秋田県立図書館、1993年(平成5)年の秋田県立図書館移転後は秋田県生涯学習センター分館ジョイナスとして、県民に広く親しまれてきた場所である。

久保田城跡周辺の近世の遺跡は久保田城下を中心に分布している。南西に古川堀反町遺跡(2)、南側に藩校明德館跡(3)、東根小屋遺跡(4)がある。また、久保田城跡から北北西約1.9kmに万古山天徳寺(21)、北約1.7kmに名勝旧秋田藩主佐竹氏別邸(如斯亭)庭園(6)、北東約1.3kmに平田篤胤墓(7)、西約2kmに八橋一里塚(11)、北北東約2.1kmに高梨台遺跡(13)等がある。

古川堀反町遺跡は、2004・2005年(平成16・17)に秋田中央警察署改築事業に伴い秋田県教育委員会による緊急発掘調査が実施された。秋田藩家老が居住していた武家屋敷跡である。藩校明德館跡は、2000年(平成12)に市街地再開発事業に伴って秋田市教育委員会による緊急発掘調査が実施された。江戸・明治期の建物跡、溝跡、井戸跡等の遺構とともに、近世陶磁器が出土している。東根小屋遺跡は、2002・2003年(平成14・15)に教育・福祉複合施設整備に伴い秋田県教育委員会による緊急発掘調査が実施された。建物跡、井戸跡等が発見され、秋田藩の上級武士の宅地跡であることが判明している。

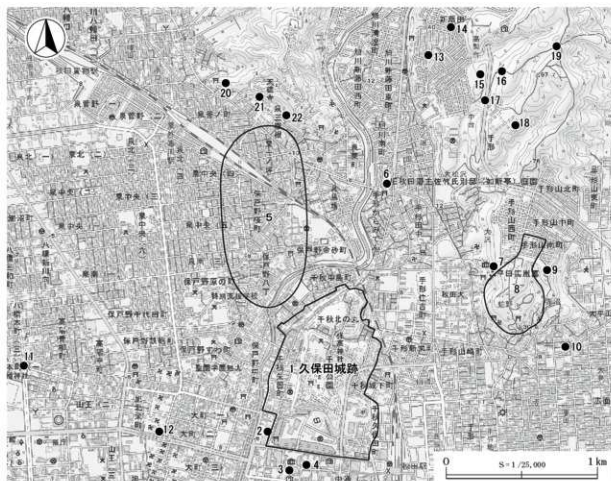
万古山天徳寺は秋田藩主佐竹氏の菩提寺で、佐竹氏の国替えに伴って秋田に移された曹洞宗の寺院である。本堂、書院、山門、総門と本堂西側にある佐竹家霊屋は重要文化財に指定されており、境内とその周辺は秋田県指定の史跡である。重要文化財天徳寺本堂ほか2棟の保存修理事業に伴い、秋田市教育委員会により本堂及び書院部分の発掘調査が行われ、本堂は2期の変遷、書院は3期の変遷があることが判明した。名勝旧秋田藩主佐竹氏別邸(如斯亭)庭園は、元禄年間(1688~1704)に家臣が3代藩主佐竹義興から与えられた土地に立てた得月亭と称する別荘が起源とされ、藩主の鷹狩りの際の休憩所として利用された。5代藩主義隆の時に庭園として整備され、9代藩主義和の時に回遊式庭園ができあがり如斯亭と名付けられた庭園で、国指定名勝である。2012年(平成24)に修復整備に伴って、秋田市教育委員会による発掘調査が行われ、元禄年間に整備された佐竹家別邸庭園であることが考古学的調査によっても追認され、当時の建物遺構や庭園遺構についての所見が得られている。

国指定史跡である平田篤胤墓は、本居宣長らとともに国学四大人の一人と称される平田篤胤(1776~1843)の墓である。八橋一里塚は1604年(慶長9)に江戸日本橋を起点として主要街道の一里ごとにおかれた塚で、八橋一里塚は日本橋から143里である。高梨台遺跡は縄文時代中期の土器を出土した遺跡だが、2016・2017年(平成28・29)に秋田市教育委員会の市営住宅建築工事に伴う範囲確認調

査により近世瓦が出土している。

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会 2003「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財報告書第365集
- 秋田県教育委員会 2005「東根小屋町遺跡－秋田県教育・福祉複合施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－」秋田県文化財報告書第387集
- 秋田県教育委員会 2005「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財報告書第401集
- 秋田県教育委員会 2006「久保田城跡・藩校明徳館跡－秋田中央道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－」秋田県文化財報告書第412集
- 秋田県教育委員会 2006「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財報告書第413集
- 秋田県教育委員会 2008「古川堀反町遺跡－秋田中央警察署改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－」秋田県文化財報告書第435集
- 秋田県教育委員会 2012「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財報告書第475集
- 秋田県教育委員会 2018「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財報告書第511集
- 秋田県教育委員会 2019「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財報告書第515集
- 秋田県教育委員会 2021「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財報告書第520集
- 秋田県教育委員会 2022「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財報告書第525集
- 秋田市教育委員会 1989「久保田城跡－本丸御門櫓跡発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 1992「久保田城跡－佐竹史料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 1997「秋田市久保田城跡－表門復元に伴う発掘調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2001「秋田市久保田城跡－表門復元に伴う発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 2002「秋田市藩校明徳館跡－市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 2002「秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－」
- 秋田市教育委員会 2003「秋田市市内遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2006「平成17年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2007「平成18年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2008「秋田市久保田城跡－秋田駅西北地区土地区画整理事業都市計画道路千秋久保田町線に伴う三の丸堀跡発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 2008「平成19年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2009「秋田市久保田城跡－千秋公園再整備計画黒門再建に伴う発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 2009「平成20年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2012「平成23年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2013「平成24年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2013「秋田市市勝旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園－修復整備に伴う発掘調査概報－」
- 秋田市教育委員会 2015「平成26年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2017「平成28年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2018「平成29年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2019「秋田市久保田城跡－秋田和洋女子高等学校校舎建設事業に伴う発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 2019「平成30年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2020「秋田市万古山天徳寺－重要文化財天徳寺本堂ほか2棟保存修理事業に伴う発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 2020「令和元年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2021「秋田市久保田城跡－千秋公園整備事業（大坂等融雪設備工事）に伴う発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 2021「令和2年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2022「秋田市久保田城跡－千秋久保田町マンション建設工事に伴う発掘調査報告書－」
- 秋田市教育委員会 2022「令和3年度秋田市遺跡確認調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2023「令和4年度秋田市遺跡確認調査報告書」



第6図 周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	類別	所在地	時代	遺構・遺物
1	久保田城跡	城郭	秋田市千秋公園・千秋明徳町等	近世	建物跡・土塼・土取り穴・瓦・銅製品・鉄製品・ガラス製品・陶磁器
2	古川風反町遺跡	武家屋敷跡	秋田市千秋明徳町1-9	近世	近世陶磁器
3	藤村明徳館跡	遺物包含地、武家屋敷・学校跡	秋田市中通一丁目4	近世	掘立柱建物跡・柱列・井戸跡・溝跡・土坑・近世陶磁器
4	栗根小町町遺跡	武家屋敷跡	秋田市中通二丁目152	近世	柱列・井戸跡・溝跡・土坑・柱穴・近世陶磁器・土器・木製品・金属製品・鉄貨動物遺体・袴突遺体
5	一ノ坪赤星別荘遺構	赤星別荘遺構	秋田市保戸野8丁。菓一ノ坪地	奈良・平安	
6	若藤田秋田藩主佐竹氏別邸(知事邸)庭園	庭園	秋田市旭川南町2-73	近世	建物跡・柱列跡・溝跡・土坑・柱穴・通路・礎石・土器・銅器・陶磁器・木製品・鉄製品
7	平田風風墓	墓跡	秋田市手形字大沢	近世	
8	観野遺跡	遺物包含地、城郭	秋田市手形字観野、藤子、大沢	縄文・奈良・平安	石器・赤褐色土器
9	柳沢遺跡	集落跡	秋田市広面字柳沢	縄文	
10	稲田内遺跡	遺物包含地	秋田市広面字赤沼	縄文	
11	八橋一里塚	一里塚	秋田市八橋本町一丁目	近世	
12	雲根寺石造物	宝篋印塔・板碑	秋田市旭北堂町一丁目	中世・近世	宝篋印塔・板碑
13	高野台遺跡	遺物包含地	秋田市新藤田字高野台	縄文・近世	縄文土器・石鏡・石鏡・スレイバー・瓦
14	中山台遺跡	遺物包含地	秋田市新藤田字中山台	奈良・平安	須臾器
15	中台遺跡	集落跡	秋田市手形字中台58-1他	縄文	掘穴住居・縄文土器
16	大松沢1遺跡	遺物包含地	秋田市手形字大松沢	縄文・平安	縄文土器・須臾器・土師器・陶器・石器
17	大松沢2遺跡	遺物包含地	秋田市手形字大松沢	中世	中世陶器
18	手形山南遺跡	集落跡・遺物包含地	秋田市手形字大松沢	平安	赤褐色土器・須臾器・土師器・近世陶磁器・硯石
19	手形山頂跡	窯跡	秋田市手形字大松沢	奈良・平安	窯跡・須臾器
20	山崎跡	館跡	秋田市外旭川水口字山崎等	中世	瓦・甕器
21	万原山天徳寺	社寺	秋田市泉三旗根10	近世	柱列・溝跡・礎石跡・礎土・礎土・ピット・陶磁器・赤瓦らひ・木製品・金属製品・鉄貨
22	三旗根遺跡	遺物包含地、館跡	秋田市泉三旗根・五地山	縄文・平安 中世	縄文土器・赤褐色土器

第2表 久保田城跡および周辺の既往調査一覧(1)

No	遺跡名	所在地	調査期間	面積	状況	調査理由・概要	文献
1	久保田城跡	秋田市千秋公園7番1	1988.5.23 ～6.16	600㎡	発掘	御膳所遺文、御講堂と多門櫓、柱列の発掘を概出。	秋田市教育委員会1989「久保田城跡～本丸御膳所跡発掘調査報告書～」
2	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	1991.12.9 ～1992.1.8	144㎡	発掘	佐竹史料館増築、二の丸東南部の検定所、堀目方役所の区画施設を概出。	秋田市教育委員会1992「久保田城跡～佐竹史料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書～」
3	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	1997.5.29 ～6.24	280㎡	発掘	表門遺構。表門の礎石や地覆石、土塼、石列を概出。	秋田市教育委員会1997「久保田城跡～表門復元に伴う発掘調査報告書～」
4	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2000.5.8 ～5.16	217㎡	発掘	表門復元。表門土状の状況を確認。	秋田市教育委員会2001「久保田城跡～表門復元に伴う発掘調査報告書～」
5	藩校明徳館跡	秋田市中通一丁目4番地内	2000.6.5 ～11.10	2200㎡	発掘	市街地内開発事業。建物7棟、柱列、溝、井戸などを概出。	秋田市教育委員会2002「藩校明徳館跡～市街地内開発事業に伴う発掘調査報告書～」
6	久保田城跡	秋田市千秋明徳町	2002.5.12 ～7.12	528㎡	試掘	秋田中央道路建設。旧中土橋や堀遺構を概出。	秋田県教育委員会2003「遺跡詳細分布調査報告書～」
7	藩校明徳館跡	秋田市中通一丁目	2002.12.10 ～12.12	30㎡	試掘	秋田中央道路建設。溝、ビツトを概出。	秋田県教育委員会2003「遺跡詳細分布調査報告書～」
8	久保田城跡	秋田市千秋明徳町204番21、205番14	2002.11.18 ～11.19	57.5㎡	試掘	学校建設。状況の旧地形および内堀を確認。	秋田市教育委員会2002「秋田市市内遺跡確認調査報告書～」
9	久保田城跡	秋田市千秋明徳町204番地 外	2003.5.26 ～7.7	722㎡	発掘	秋田中央道路建設。旧中土橋や六門の堀遺構を概出。	秋田県教育委員会2006「久保田城跡～藩校明徳館跡」
10	藩校明徳館跡	秋田市中通一丁目4番地 外	2003.7.8 ～8.1	200㎡	発掘	秋田中央道路建設。17世紀前半遺構の武家屋敷。	秋田県教育委員会2006「久保田城跡～藩校明徳館跡」
11	久保田城跡	秋田市千秋明徳町	2004.8.23 ～9.7	—	踏査・試掘	秋田中央警察署庁舎建設。武家屋敷に伴う遺構・遺物を概出。	秋田県教育委員会2005「遺跡詳細分布調査報告書～」
12	久保田城跡	秋田市千秋明徳町	2004.10.27 ～11.25	225㎡	試掘	秋田中央警察署庁舎建設。武家屋敷に伴う遺構・遺物を概出。	秋田県教育委員会2005「遺跡詳細分布調査報告書～」
13	古川堀反町遺跡	秋田市千秋明徳町1番9	2005.3.15 ～7.26	1690㎡	発掘	秋田中央警察署庁舎建設。旧地蔵石の礎石遺構の状況と武家屋敷を確認。	秋田県教育委員会2008「古川堀反町遺跡」
14	久保田城跡	秋田市千秋久保田町3番28、37	2005.5.18	20㎡	試掘	シメテ建設。外堀内、遺構・遺物の確認なし。	秋田市教育委員会2006「平成17年度秋田市遺跡確認調査報告書」
15	久保田城跡	秋田市千秋明徳町205番11、18	2005.5.25 ～5.26	34.8㎡	試掘	事務所建設。旧地の埋立。武家屋敷に伴う遺構・遺物を概出。	秋田市教育委員会2006「平成17年度秋田市遺跡確認調査報告書」
16	久保田城跡	秋田市千秋公園1番8号	2005.7.11 ～7.12	17.8㎡	試掘	古堀建設。近世の整地層、遺構・遺物を概出。	秋田市教育委員会2006「平成17年度秋田市遺跡確認調査報告書」
17	久保田城跡	秋田市千秋久保田町内	2005.11.15 ～11.16	69.6㎡	試掘	土地区画整理。外堀の東西両内堀を確認。	秋田市教育委員会2006「平成17年度秋田市遺跡確認調査報告書」
18	久保田城跡	秋田市千秋明徳町、大町二丁目	2006.1.25 ～2.22	—	試掘	秋田中央道路整備。近代の溝跡を確認。	秋田県教育委員会2006「遺跡詳細分布調査報告書～」
19	久保田城跡	秋田市千秋久保田町3番92 堀	2006.11.20	20㎡	試掘	マンション建設。外堀内。土上りには未掘削。	秋田市教育委員会2006「平成18年度秋田市遺跡確認調査報告書」
20	久保田城跡	秋田市千秋久保田町地内	2006.12.22 ～2007.1.12	45.8㎡	試掘	土地区画整理。外堀の西側立上りを確認。	秋田市教育委員会2006「平成18年度秋田市遺跡確認調査報告書」
21	久保田城跡	秋田市千秋明徳町204番10	2007.6.26 ～2007.6.28	195.3㎡	試掘	高等学校校舎新築前。三の丸跡。礎石、柱立、土塼、ビツト、整地層を確認。	秋田市教育委員会2008「平成19年度秋田市遺跡確認調査報告書」
22	久保田城跡	秋田市千秋久保田町地内	2007.8.7 ～11.15	360㎡	発掘	秋田駅西北地区土地区画整理。一の丸を埋立む外堀と秋久保田町堀に伴う三の丸堀跡発掘調査報告書～」	秋田市教育委員会2008「久保田城跡～秋田駅西北地区土地区画整理事業並に古川堀跡と秋久保田町堀に伴う三の丸堀跡発掘調査報告書～」
23	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2007.11.2 ～12.10	150㎡	発掘	千秋公園再整備計画西門内建設。新田2時期の堀門の礎石を概出。	秋田市教育委員会2009「久保田城跡～千秋公園再整備計画西門内建設に伴う発掘調査報告書～」

第3表 久保田城跡および周辺の既往調査一覧(2)

No.	遺跡名	所在地	調査期間	面積	状況	調査内容・概要	文献
24	久保田城跡	秋田市千秋北の丸2番209地内	2008/5/23	98㎡	試掘	宗教法会館前跡、厨平を受け遺構確認なし。	秋田市教育委員会2009「平成23年度秋田市遺跡確認調査報告書」
25	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2008/10/14 ～12/12	80㎡	発掘	千秋公園別荘建設計画西門内跡、黒門内の内堀に架かる石金橋跡の東方を掘削。	秋田市教育委員会2009「久保田城跡・千秋公園内整備計画西門内建に伴う発掘調査報告書二」
26	藩校明徳館跡	秋田市中通一丁目地内	2011/3/10 ～3/11	35.5㎡	試掘	市街地開発事業。遺構の確認なし。	秋田市教育委員会2012「平成23年度秋田市遺跡確認調査報告書」
27	久保田城跡	秋田市千秋城下町外	2011/3/14 ～3/18	50㎡	試掘	主要地方道秋田川見岩間線建設。外堀内。立上りは未掘削。	秋田県教育委員会2012「遺跡詳細分布調査報告書」
28	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2012/12/27	2.7㎡	試掘	千秋公園整備事業。遺構・遺物の確認なし。	秋田市教育委員会2013「平成24年度秋田市遺跡確認調査報告書」
29	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2014/7/22	8.6㎡	試掘	千秋公園市民広場ゾーン整備。遺構の確認なし。	秋田市教育委員会2015「平成26年度秋田市遺跡確認調査報告書」
30	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2014/11/19	8.4㎡	試掘	千秋公園さくら景観整備。遺構の確認なし。	秋田市教育委員会2015「平成26年度秋田市遺跡確認調査報告書」
31	久保田城跡	秋田市千秋明徳町304 外	2016/2	—	試掘	船・市道文化施設整備。遺構確認可試掘。	秋田県教育委員会2016「遺跡詳細分布調査報告書」
32	久保田城跡	秋田市千秋城下町地内	2016/11/7	26.4㎡	試掘	秋田駅北地区土地地区調整。湖地の状況を確認。	秋田市教育委員会2017「平成28年度秋田市遺跡確認調査報告書」
33	久保田城跡	秋田市千秋大塚町9番22	2017/11/13 ～11/20	230㎡	試掘	船・市道文化施設整備事業に伴う関連施設移転。内堀跡を確認。跡を確認。	秋田市教育委員会2018「平成29年度秋田市遺跡確認調査報告書」
34	久保田城跡	秋田市千秋明徳町304 外	2017/11/13 ～11/16	16.1㎡	試掘	船・市道文化施設整備。土塁・土坑・柱穴を確認。	秋田県教育委員会2018「遺跡詳細分布調査報告書」
35	久保田城跡	秋田市千秋明徳町304 外	2018/2/5 ～2/8	11㎡	試掘	船・市道文化施設整備。近世築地跡・柱穴	秋田県教育委員会2019「遺跡詳細分布調査報告書」
36	久保田城跡	秋田市千秋大塚町地内	2018/6/18 ～11/14	1272㎡	発掘	秋田和洋女子高等学校校舎建設。西曲輪築港築港跡を掘削。	秋田市教育委員会2019「久保田城跡・秋田和洋女子高等学校校舎建設に伴う発掘調査報告書一」
37	久保田城跡	秋田市千秋城下町地内 外	2018/9/12 ～9/13	19.4㎡	試掘	秋田駅東地区土地地区調整。湖地の状況を確認。	秋田市教育委員会2019「平成29年度秋田市遺跡確認調査報告書」
38	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2019/7/17	2㎡	試掘	内堀水質浄化整備。内堀内。古代以降の地盤上。	秋田市教育委員会2020「令和元年秋田市遺跡確認調査報告書」
39	久保田城跡	秋田市千秋公園地内(本丸)	2020/1/15 ～1/16	30㎡	試掘	千秋公園さくら景観整備。御殿間池遺構および惣地堀を確認。	秋田市教育委員会2020「令和元年秋田市遺跡確認調査報告書」
40	久保田城跡	秋田市千秋北の丸地内	2020/4/28	2㎡	試掘	集合住宅建設。3期の惣地堀を掘削。	秋田市教育委員会2021「令和2年度秋田市遺跡確認調査報告書」
41	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2020/6/2	3㎡	試掘	千秋公園整備事業。二の丸惣地堀を確認。	秋田市教育委員会2021「令和2年度秋田市遺跡確認調査報告書」
42	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2020/11/4 ～11/5	11㎡	試掘	佐竹史料館改築。二の丸惣地堀を確認。	秋田市教育委員会2021「令和2年度秋田市遺跡確認調査報告書」
43	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2020/9/17 ～10/30	69㎡	発掘	千秋公園整備事業。二の丸堀11号付近に石垣施設と3期の惣地堀を掘削。	秋田市教育委員会2021「久保田城跡・千秋公園整備事業(大坂等縮小工事)発掘調査報告書一」
44	久保田城跡	秋田市千秋久保田町地内	2020/9/2 ～12/11	—	試掘	船・市道文化施設整備事業。近世築地跡・土塁等を確認。	秋田県教育委員会2021「遺跡分布調査報告書」
45	久保田城跡	秋田市千秋久保田町4番173・174・175・47	2021/7/8 ～7/9	58㎡	試掘	マンション建設。土塁を確認。	秋田市教育委員会2022「令和3年度秋田市遺跡確認調査報告書」
46	久保田城跡	秋田市千秋久保田町4番173・174・175・47	2021/9/22 ～11/29	312㎡	発掘	マンション建設。土塁及び基盤跡の状況を確認。	秋田市教育委員会2022「久保田城跡・千秋久保田町マンション建設工事に伴う発掘調査報告書」
47	久保田城跡	秋田市千秋北の丸地内	2021/12/13	—	試掘	ピットを確認	秋田県教育委員会2022「遺跡分布調査報告書」
48	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2021/12/13 ～12/14	28㎡	試掘	千秋公園さくら景観整備事業。御殿間池遺構および惣地堀を確認。	秋田市教育委員会2022「令和3年度秋田市遺跡確認調査報告書」
49	久保田城跡	秋田市千秋公園4	2022/3/25 ～2023/7/24	1580㎡	発掘	佐竹史料館改築。二の丸東面跡の確認等。地目及び計測の範囲を調査。2期の惣地堀と礎石基物跡、掘り柱建物跡・土塁等を確認。	今年度発行予定
50	久保田城跡	秋田市千秋公園地内	2023/9/22	8㎡	試掘	千秋公園給水設備更新。遺跡及び惣地堀を確認	秋田市教育委員会2024「令和5年度秋田市遺跡確認調査報告書」

第3章 発掘調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

発掘調査では、施設仮設や発掘作業員による掘削業務及び安全管理等について「掘削作業管理業務」とし、一括して外部委託した。

調査はグリッド法で行った。グリッドMA50（世界測地系平面直角座標第X系 $X = -30900.000$ 、 $Y = -61000.000$ ）を原点とし、ここから座標北方向の南北線及びこれに直交する東西線により、4m区画の方眼を組んだ。グリッドの表記は、東西方向を表す2組のアルファベットと南北方向を表す数字で示している。2組のアルファベットは左を母単位、右を子単位として、20子単位で1母単位という表記法である。例として、原点からみれば母単位Mの範囲ではMA～MTまで20の子単位で西方に移動するが、MTの次は母単位Nの範囲のためNAになる。数字は北に行くほど増え、南に行くほど減る表記法であるが、0の次は99、98、…と減っていく。グリッドの名称は、各グリッドの南東角に打設されている杭の名前を付けた（第16図）。

調査が県民会館解体工事と同時に進行であったため、工区区分に合わせて便宜的な現地名称を付けた（第8図）。遺構外遺物の出土地点名は、この名称を用いる。特に2区としたジョイナス地下の布基礎間は4m弱四方の房となっていたため、それらに2区1房から31房までの地点を付けた。

調査は、概ね表土除去、包含層の掘り下げ、遺構確認、遺構精査の順で行った。表土除去はバックホーにより、第Ⅱ・Ⅲ層が残存しているところでは第Ⅱ・Ⅲ層上面まで、削平されているところでは第Ⅳ層までの深さでI層を除去した。第Ⅱ・Ⅲ層の粗掘り、遺構精査は移植・スコップ等を使用して全て人力で作業を行った。排土運搬では一輪車を用いて人力で排土を投棄した。排土置き場は、調査区の隣接地を利用した。

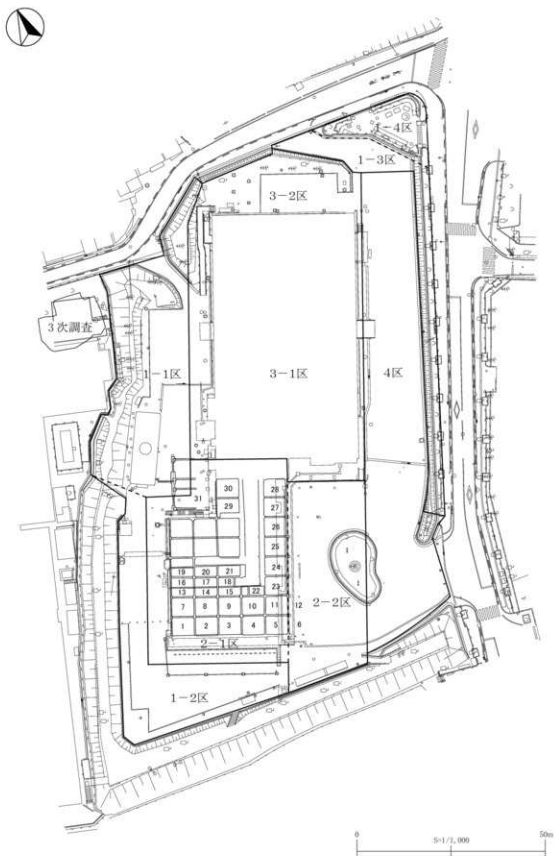
遺構番号は、柱穴様ビット以外は1番から、柱穴様ビットは1001番からの通し番号を付し、遺構の略番号と組み合わせで呼称した。遺物は、全てに調査区名・出土層位・出土年月日、さらに遺構内出土のものには出土遺構名と遺物番号、遺構外出土のものには出土グリッドを記入したチェック付きポリ袋に入れ、コンテナに収納した。

調査の記録は、平面図・断面図及び写真で記録化した。平面図・断面図の縮尺は1/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影には、デジタルカメラを使用した。

2 整理作業

遺構の図面は、発掘作業で作成した図をスキャン、もしくはデータ変換によりデジタルデータ化し、平面図と断面図を組み合わせ、ドローイングソフト（アドビシステムズ社製「Illustrator CS6」）によってトレースを行った。遺構の記述は、遺構調査カードを基に行った。

遺物は、洗浄・注記の後に、土器等の接合・復元作業を行った。その後、報告書に掲載する遺物を選別し、土器は実測図を作成した。遺物の図面もスキャンし、ドローイングソフトによってレイアウトを行った。



第8図 調査区名称

第2節 基本層序

段丘上に形成された遺跡であり、天徳寺層を基盤岩層として段丘堆積物が表層数m覆っている。工事に先立って行われたボーリングデータ（第9～12図 ウスマボーリング2017）によれば、基盤岩が地表下7m以下（標高0～15m）にある。基盤岩は上部が風化シルト岩、下部がシルト岩である（以下泥岩）。上部風化泥岩は、洪江家造成時に盛土材として多く用いられている。

直径10～20cmの泥岩・頁岩・安山岩などの円礫が多く混じる砂礫層（段丘堆積物）の上に、風化帯である黄褐色粘土質シルト・ローム層がある。屋敷造成時に台地上にあって切土された地点は極薄く、低地にあって盛土された地点では強クライ化した粘土層となる（第14図）。

低地部分では縄文時代から江戸時代直前までの自然堆積層が残るが、中世の堆積層ははっきりしない。江戸時代の造成で削平されているのか、土壌生成が遅く平安時代から中世の旧地表が一体化したのかは判断できていない。ただ調査区南東部では江戸時代の盛土直下に畑の畝跡が残っており、造成直前まで耕作されていたことが分かっている。またこれよりも下層に平安時代の畑跡もあるので、標高8m代以下の低地面では、平安時代から連続する中世の地表面が残されていた。

江戸時代になると洪江家の造成に伴い大量に盛土される。江戸時代以後は、全て人工地盤である。近代になって屋敷地が新政府に引き渡された後、江戸時代の生活面を埋めて県民会館・記念館が建設されるため、レンガや砂利、スレートなどの廃材を土砂に混ぜ込み、コンクリート・アスファルトで舗装された生活面が複数面検出される。

大規模な地形変化が行われた結果、同一層相をもって命名される統一層序は存在せず、江戸時代の盛土層やその下にあらわれる旧地表面の黒色土層をそれぞれ「同一層」とし、地点ごとに細分した。盛土層内には地表面となって暴露され土壌生成作用を受けた層順があるが、これらを系統的に扱えなかった。そのため土層の細分名称はその地点の上下関係のみを示し、同一細分名であっても地点が異なれば同時期である事を保証しない。

また江戸時代の造成前の層序については、黒色土を1層位にまとめたが、地点ごとに土壌生成作用の違いから細分できた。従って第14図に提示する「基本層序」は、現場調査の便宜上堆積単位や土壌生成作用による地点別差異を捨象した通称である。なお、旧県立美術館敷地（梅津家屋敷跡）北西隅における電柱移設工事に対して行われた立会調査での観察層位も参考に掲げた。

I層：表土 アスファルトを剥いだ下部から江戸時代旧地表まで。ただし江戸時代の旧地表面と明治時代の旧地表面は連続的である。

II層：江戸盛土層 段丘堆積物層から天徳寺層に由来を持つ黄褐色砂礫土・礫・未固結泥岩の混層、または版築層。調査区東側では層厚4mに達する。地点ごとに細分が可能である。

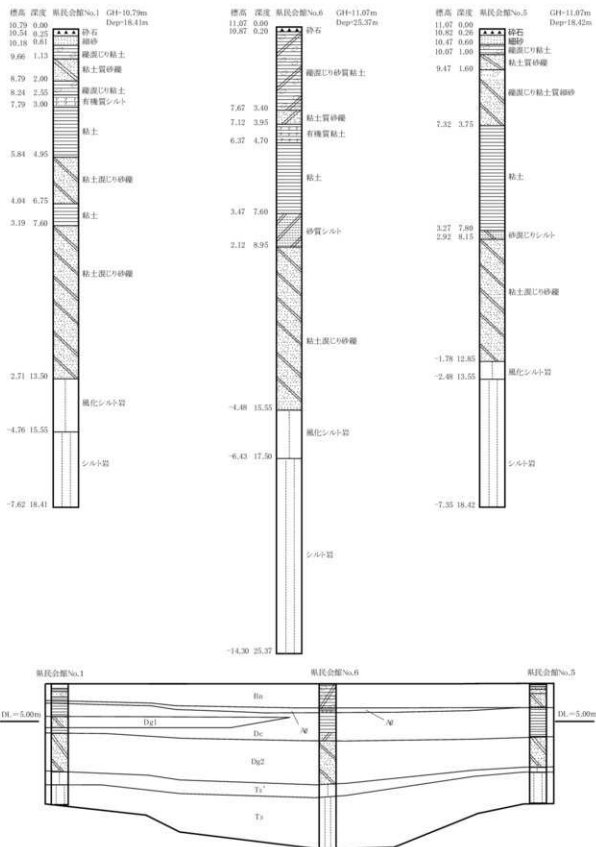
江戸黒1 江戸時代初期の旧地表黒色土。江戸木端層、または最初期盛土層の上に形成される。

江戸黒2 江戸時代初期の旧地表黒色土。江戸黒1層との層界に薄い盛土層を挟む。

江戸木端層 盛土前旧地表土上に敷かれた廃棄木製品、廃材、自然木が敷かれた層。敷業工法によると思われる。調査区東側の低地部で特徴的に検出したが、調査区南西部でも所々見ることが出来る。おそらく地点的な地下水位の高低、または排水不良地点による。

III層：平安黒 江戸時代盛土層の下にある黒色土層。中世遺物が無いため平安時代としたが、江戸時代の造成盛土に直接埋められた畑があり、造成直前まで耕作されていた。平安時代には堅穴建物建設、土師器生産のための粘土採掘など、地山掘削を伴う頻繁な土地変化が行われており、母材の供給に伴って複数面の黒色土層が形成されている。

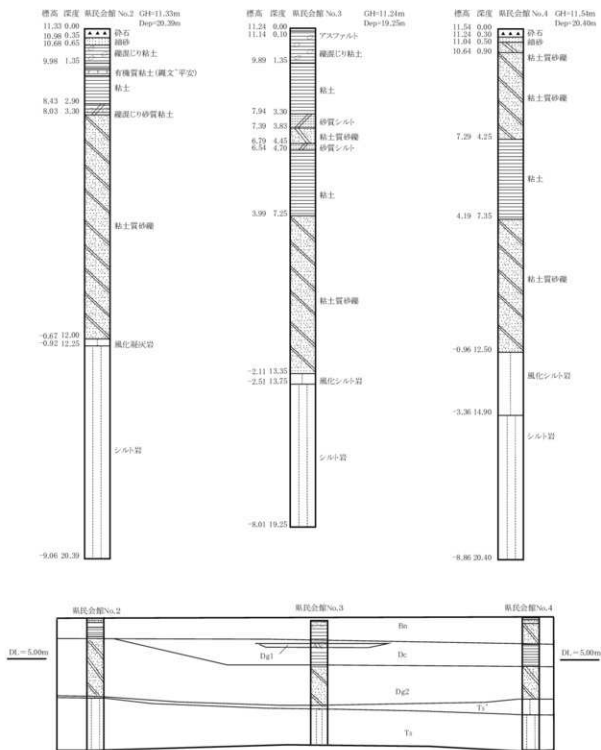
縄文時代旧地表 漸移層直上の黒色土層。平安時代旧地表土と連続する。



(秋田県文化振興課・株式会社ウマノ地域総研2017に調査の知見を加えて一部改変)
 秋田県文化振興課・株式会社ウマノ地域総研(2017)「平成29年度基・市連携文化施設整備事業地質調査業務委託 秋田市千秋町跡地内地下地質調査報告書」(内部資料)

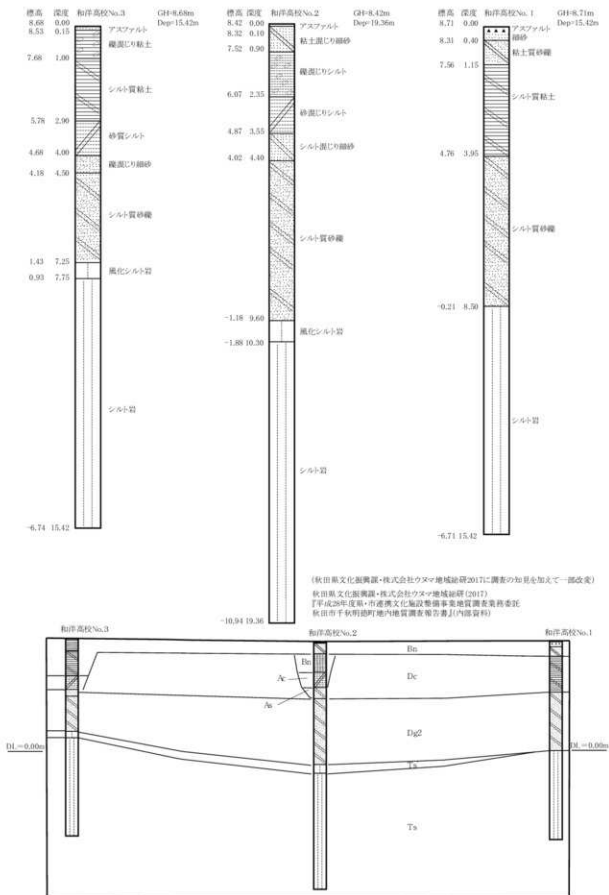
第9図 表層地質柱状図①

第3章 発掘調査の方法と成果



(秋田県文化財調査・株式会社ウツマ地域総研2017に調査の知見を加えて一部改定)
 秋田県文化財調査・株式会社ウツマ地域総研(2017)『平成28年度県・市連携文化施設整備事業地質調査業務委託 秋田市千秋明徳町地内地質調査報告書』(内部資料)

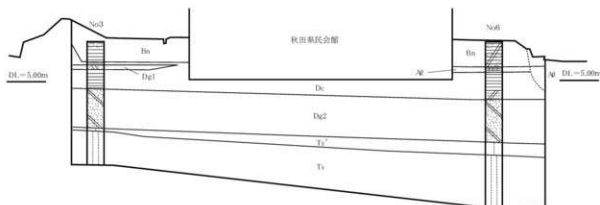
第10図 表層地質柱状図②



(秋田県文化振興課・株式会社ウマノ地域総研2017に調査の知見を加えて一部改変)
 秋田県文化振興課・株式会社ウマノ地域総研(2017)
 『平成28年度県・市産興文化施設整備事業地質調査業務委託
 秋田市千秋町部町地内地質調査報告書』(内部資料)

第 11 図 表層地質柱状図③

第3章 発掘調査の方法と成果



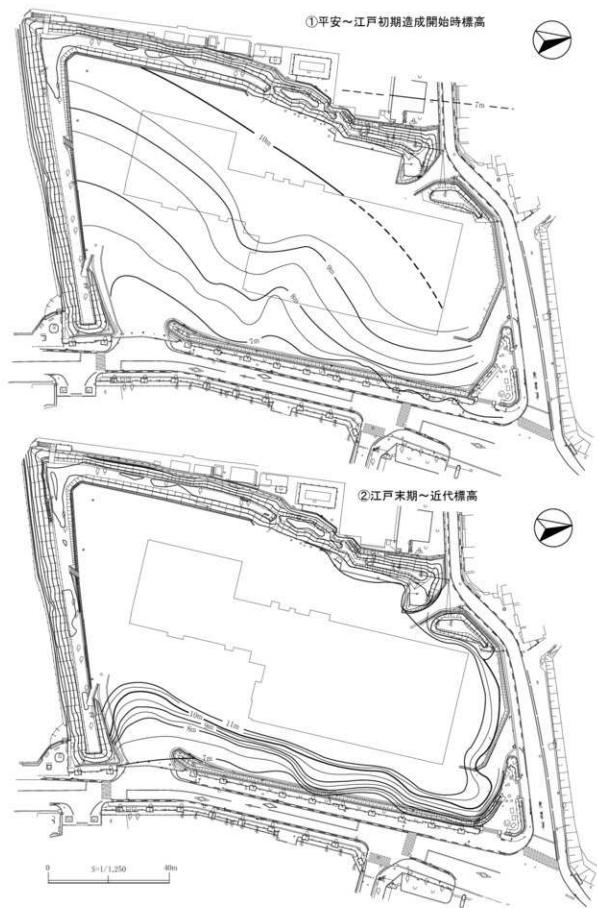
地質区分および記号凡例

(秋田県文化振興課・株式会社ワスマ・地域総研2017に調査の知見を加えて一部改変)
秋田県文化振興課・株式会社ワスマ・地域総研(2017)
『平成29年度第1・2年度文化施設整備事業地質調査委託書委託
秋田市千秋町(徳町)地質調査報告書』(内部資料)

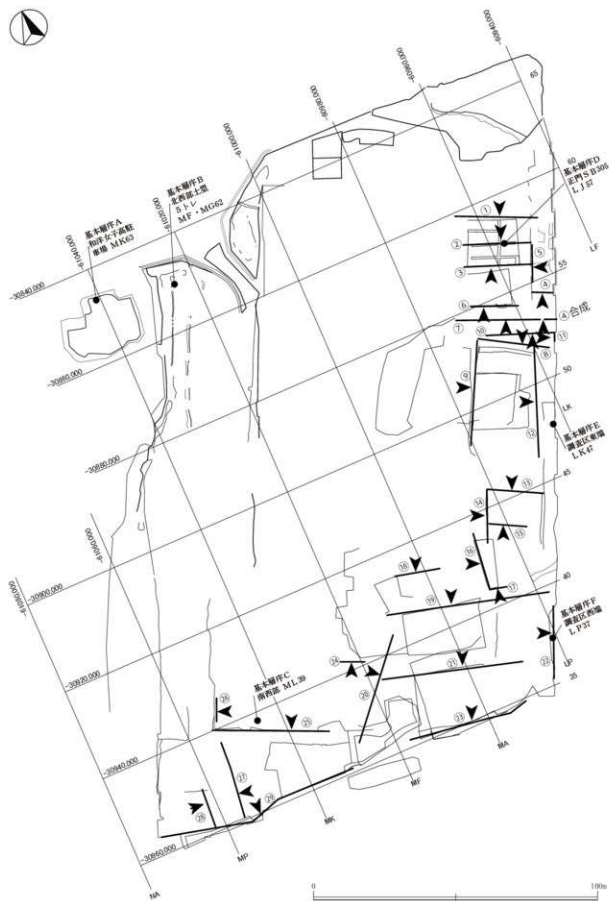
地質時代	地層名	記号	主要土質	N値	
新 第三 紀	沖積層	砂・礫質土層	細砂 粘土質砂礫 礫混じり粘土質細砂	7~18	
		粘性土層	礫混じり粘土 粘土	2~7	
	沖積層	沖積層	有機質シルト 粘土 砂質シルト	—	
		粘性土層	有機質シルト 粘土 砂質シルト	3~12	
	新 第三 紀	礫層	第1礫質土層	粘土混じり砂礫 粘土質砂礫	8~23
			第2礫質土層	粘土混じり砂礫 粘土質砂礫	10~30
新 第三 紀	天徳寺層	風化シルト岩	風化シルト岩 風化凝灰岩	8~27	
	シルト岩	シルト岩 (一部凝灰岩を混在)	30~71		



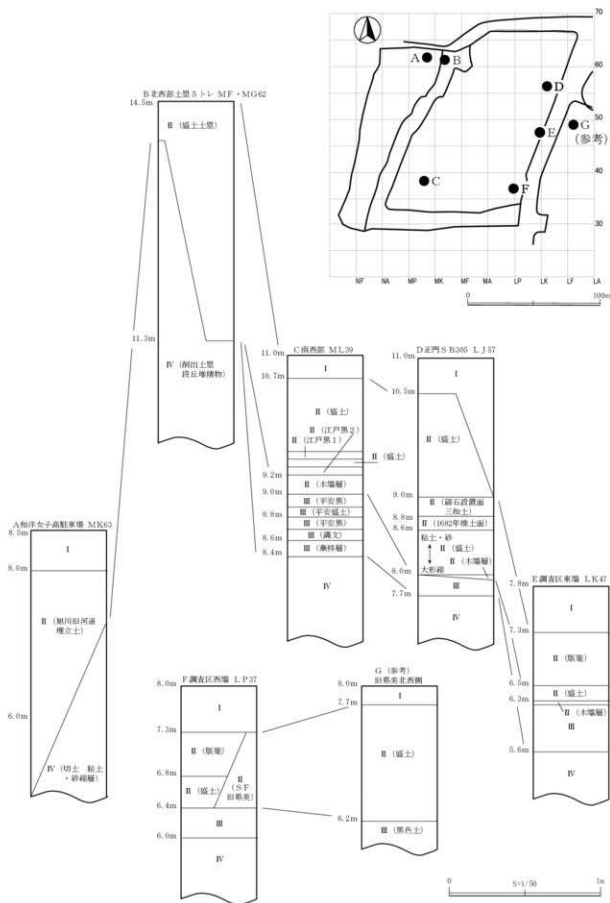
第12図 表層地質と母岩標高



第13圖 平安・江戸・近代標高



第14図 土層断面作成位置と基本層序作成位置



第15図 基本層序

漸移層 地山の風化帯で縄文時代旧地表と連続する。色調は黄色みが強いが、完新世。

IV層：地山層 段丘堆積物による黄褐色から褐色の粘土層や砂礫層。後期更新世。

第3節 遺構と遺物

検出遺構は柱穴を除いて449基、柱穴が2361基の合計2810基検出した（第16～58図、第4表）。全検出遺構の位置と規模は第5～7・11～35表にまとめた。以下、時代ごとに節を分ける。江戸時代については、調査区を4分割した地区ごととする。

1 縄文・統縄文・弥生時代

(1) 遺構

縄文時代の遺構は、11基ある。内訳は陥し穴10基と溝1条である（第59～63図、第5表、第3分冊図版9～13）。調査区南側に分布する。いずれも地山面、または漸移層で検出した。統縄文・弥生時代の遺構は未検出である。

陥し穴の内、SKT277（第61図）は他の陥し穴とは異なり深さ40cm程度と浅く、断面形もU字形である。平面形は長楕円形である事から陥し穴としたが、掘削途中で放棄された未完成遺構であろう。堆積土も旧地表から漸移層由来の様な暗褐色土で自然堆積である。

他の陥し穴は地山ブロックと黒色土の互層で埋まっており、壁面の自然崩落、または不用になって埋め戻されている。SKT258と259は直角に交差して切り合うことから、本地点が等高線の走り方を検討しながら設置方向を変え、反復利用されていたことを示唆する。長軸方向が東西を向くSKT259が、南北を向くSKT258よりも新しいので、南北方向を向く1群（SKT246・257・258・348・353・355）から東西方向を向く1群（SKT259・260）に変化した可能性がある。

また、SD279（第63図）は底面に階段状の小穴が連続している。この様な微地形は水が流れると生じる形態であり、雨水による浸食を受けた自然流路かもしれない。

(2) 遺物

縄文時代遺物は地文のみの土器と石器類が出土した（第4分冊第1表）。土器は小破片で胎土に繊維は含まない。比較的硬く焼成された点から中期以後と思われる。

石器は178点出土した（第4分冊第57表）。石器類には黒曜石製石器・剥片が5点含まれる。蛍光X線による原産地分析を行い、4点が男鹿産、1点は不明である（第5分冊第7章）。

剥片が92点、チップ32点の合計124点あり、RF10点、UF4点が含まれる。被熱したものが16点あり、内11点は破損が著しく背面構成がわからないので残る82点を観察すると、背面に自然面を持つ物36点、捩理面を持つ物が5点あり合計41点50%である。

統縄文土器は後北C2D式と思われる（第2分冊第277図1、第4分冊第1表）。弥生式土器は中期の浅鉢または鉢である（第2分冊第1図1・第277図2・3、第4分冊第1表）。

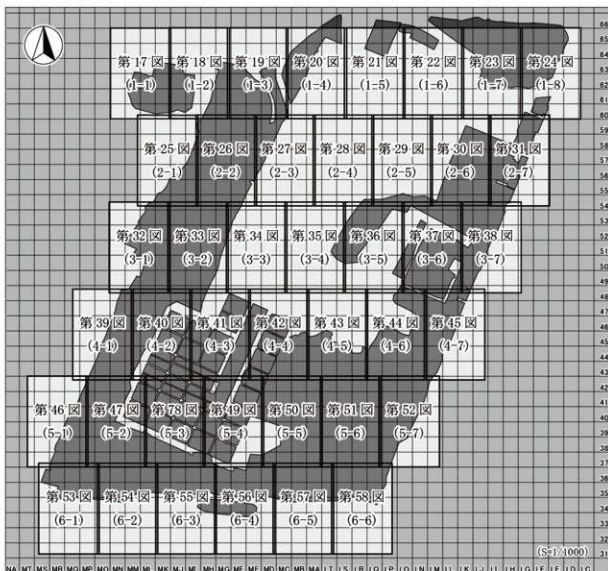
2 平安時代

(1) 遺構

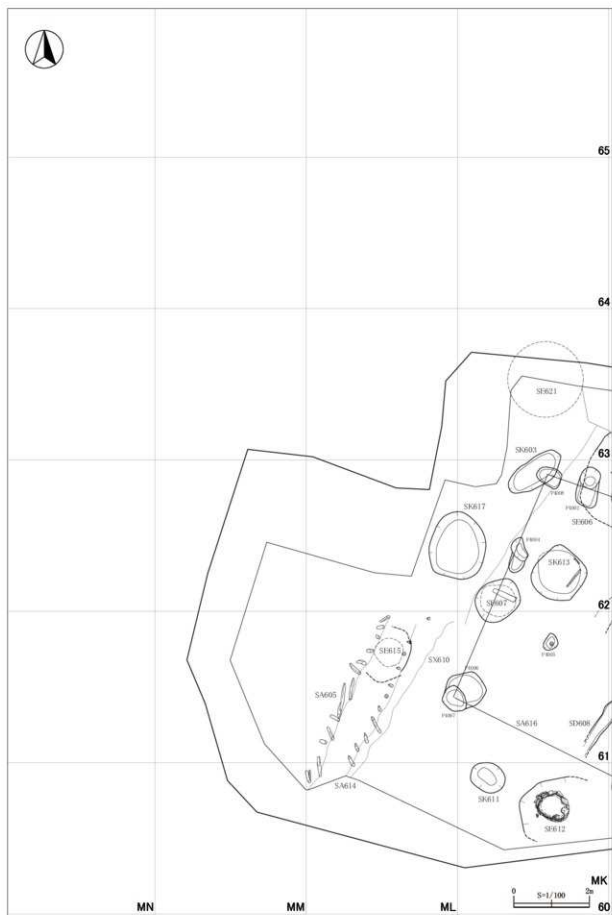
平安時代の遺構は、83基検出された（第64～87図、第6～9表）。内訳は、掘立柱建物跡4棟でその内2基は檜竿支柱と考えた。竪穴建物跡8軒、柱穴列1条、土師器焼成遺構2基、井戸跡2基、焼土遺構13基、土坑39基（粘土採掘坑含む）、土器埋設遺構1基、溝跡12条、畑跡1か所である。以下、主要な遺構について概略する。

第4表 検出遺構集計

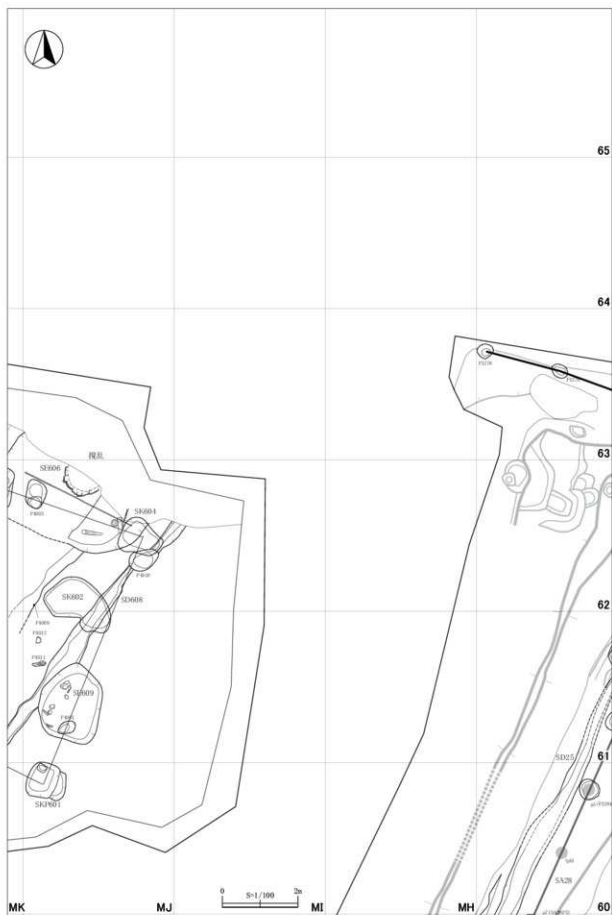
時代 遺構	竪穴建物跡 S I	建物跡 S B	竪穴状遺構 S K I	柱穴列 S A	土塼 S F	溝跡 S D	道路跡 S M	井戸跡 S E	陥し穴 S K T	土坑 S K	焼土遺構 S N	土師器焼成遺構 S N	畑跡 S D	集石遺構 S Q	土器埋設遺構 S R	河川埋立跡 S X	柱穴 S K P	合計
縄文						1			10									11
平安	8	4		1		12		2		39	13		2		1			83
江戸		31	7	23	3	64	2	14		173	22		10	2		1		352
近代			1			1	1											3
小計	8	36	7	24	3	78	3	16	10	212	35	2	11	2	1	1	0	449
平安～江戸																	2361	2361
合計	8	36	7	24	3	78	3	16	10	212	35	2	11	2	1	1	2361	2810



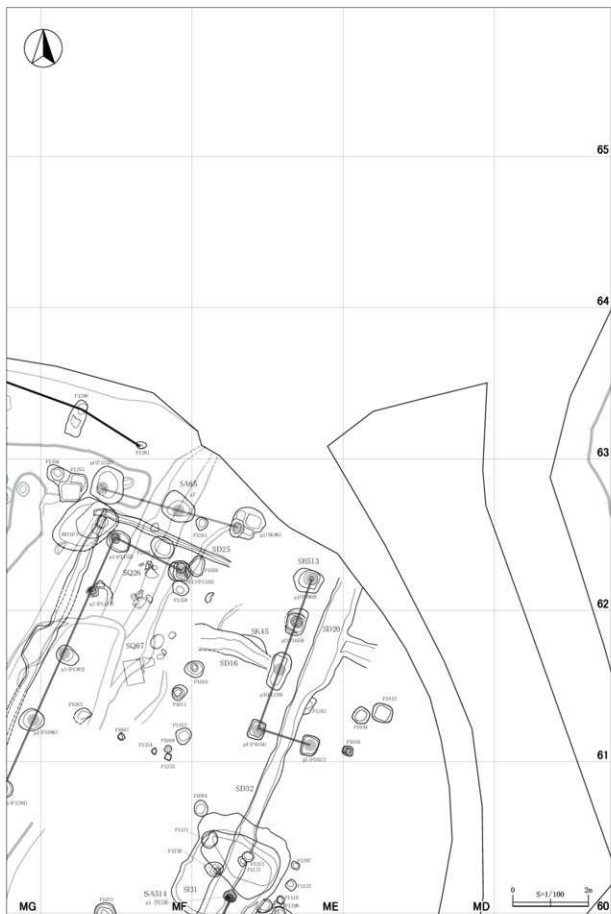
第16図 遺構配置図区分



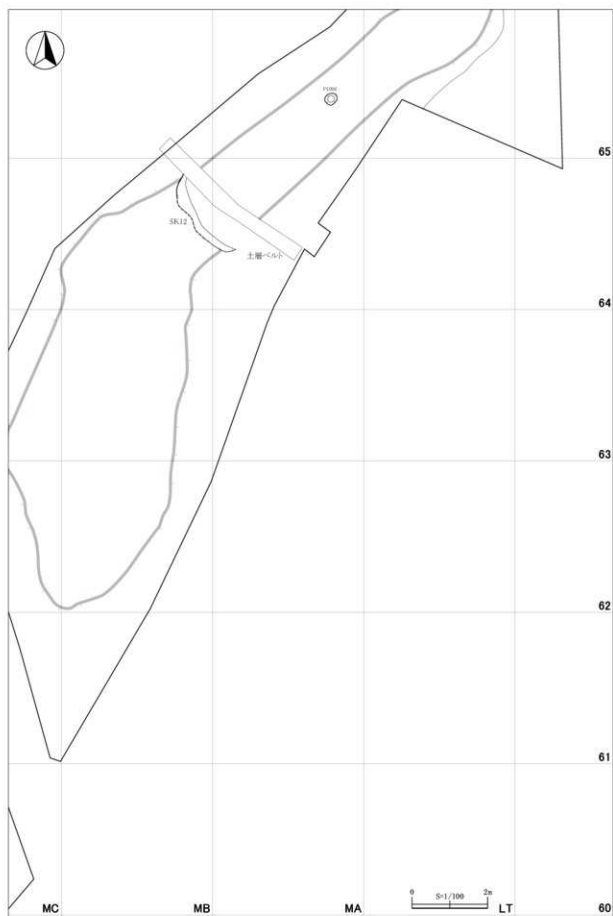
第17図 遺構配置図(1-1)



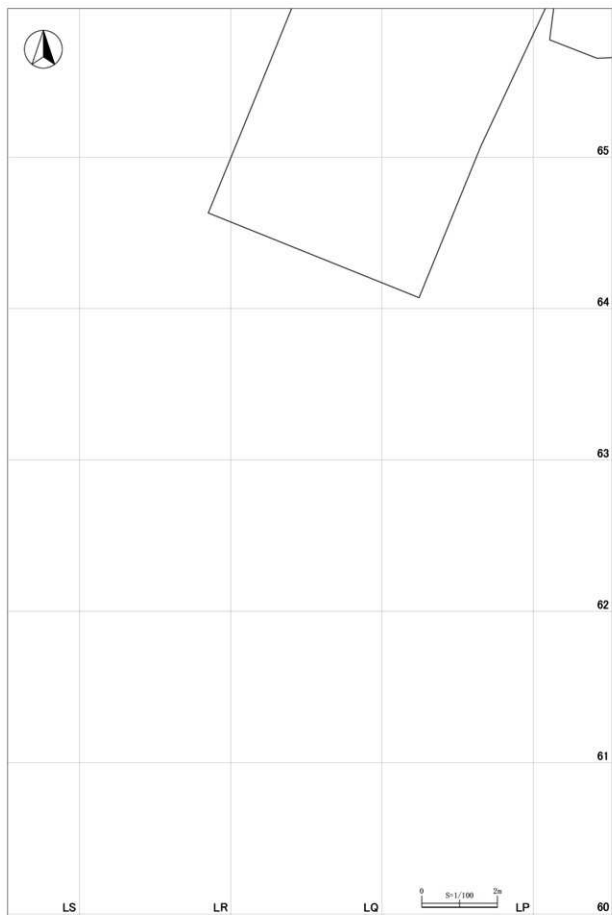
第18図 遺構配置図(1-2)



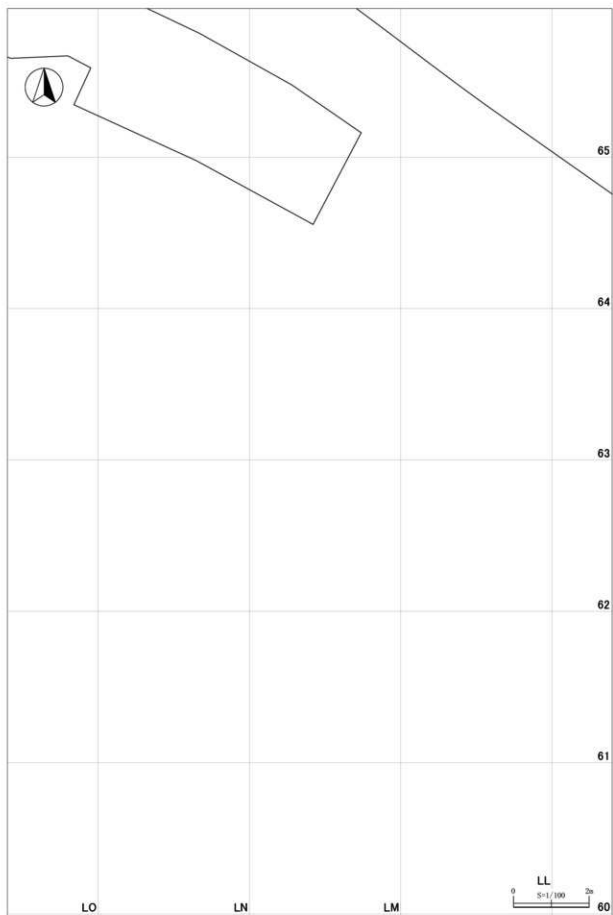
第19図 遺構配置図 (1-3)



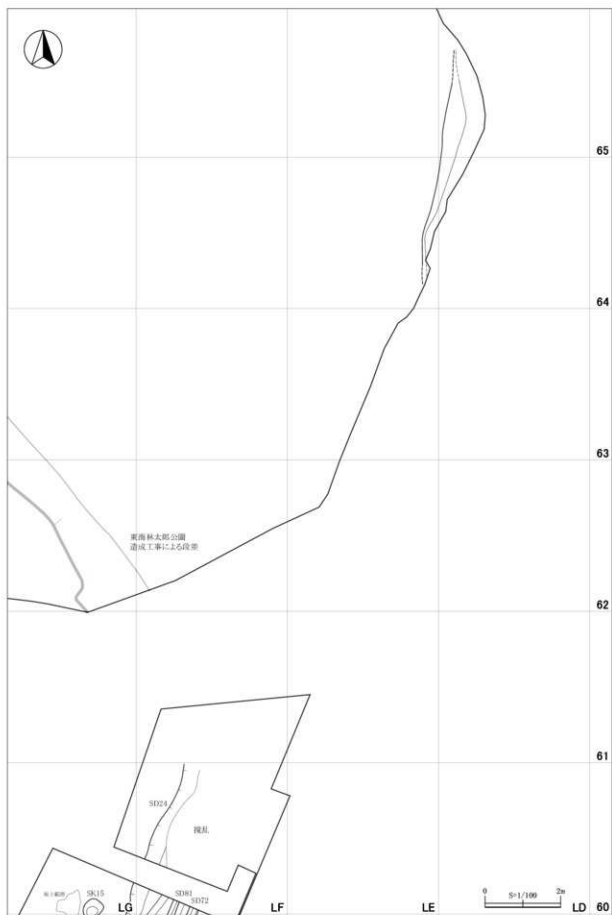
第20図 遺構配置図(1-4)



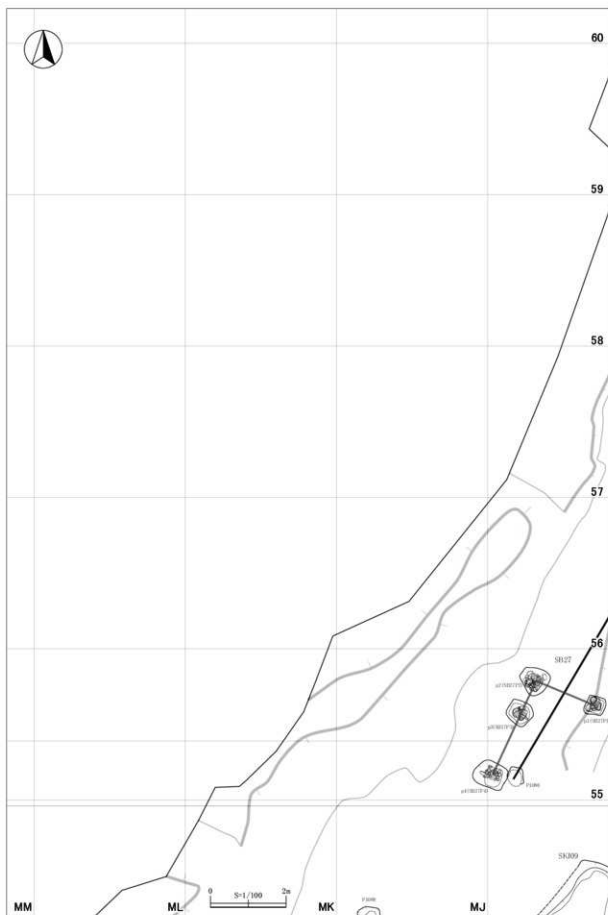
第21図 遺構配置図 (1-5)



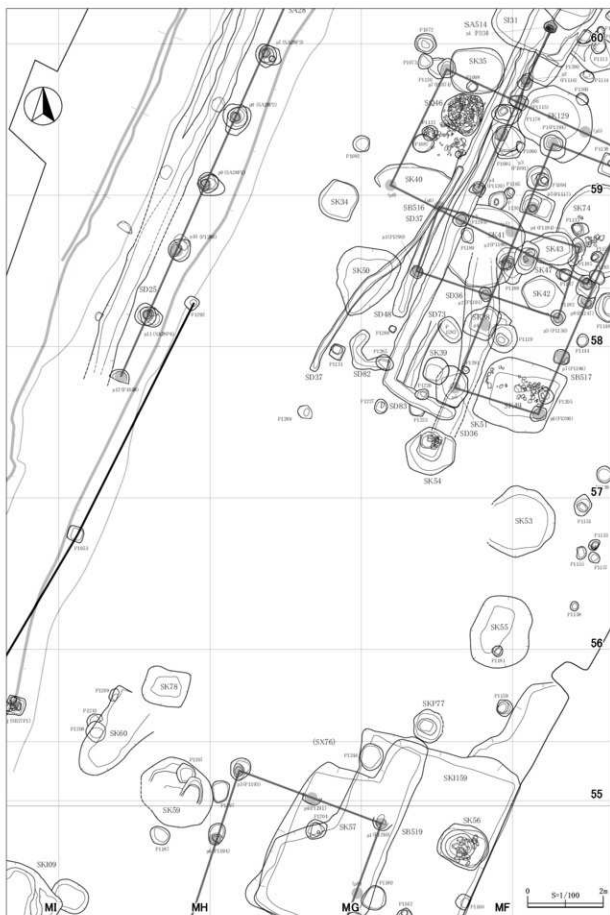
第22図 遺構配置図(1-6)



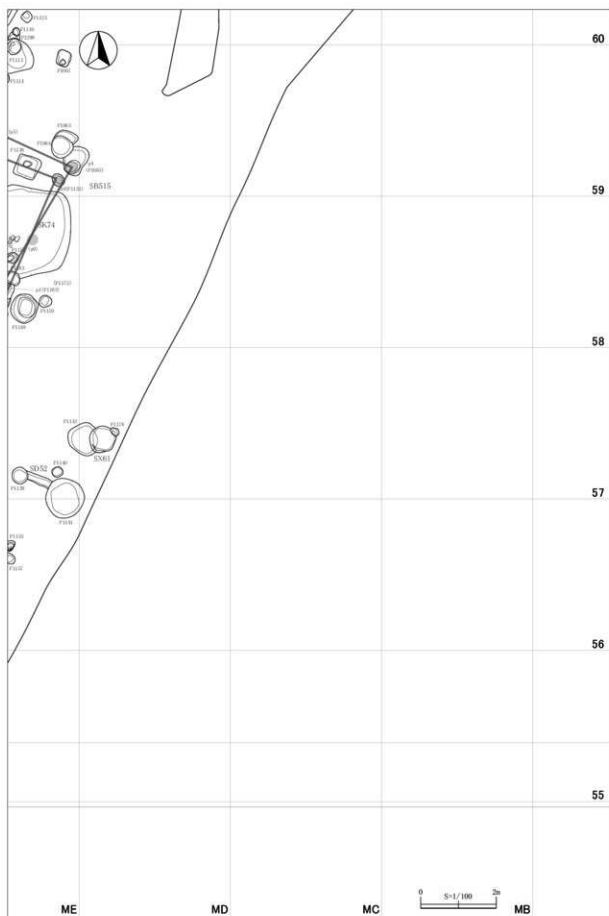
第24図 遺構配置図(1-8)



第25図 遺構配置図(2-1)



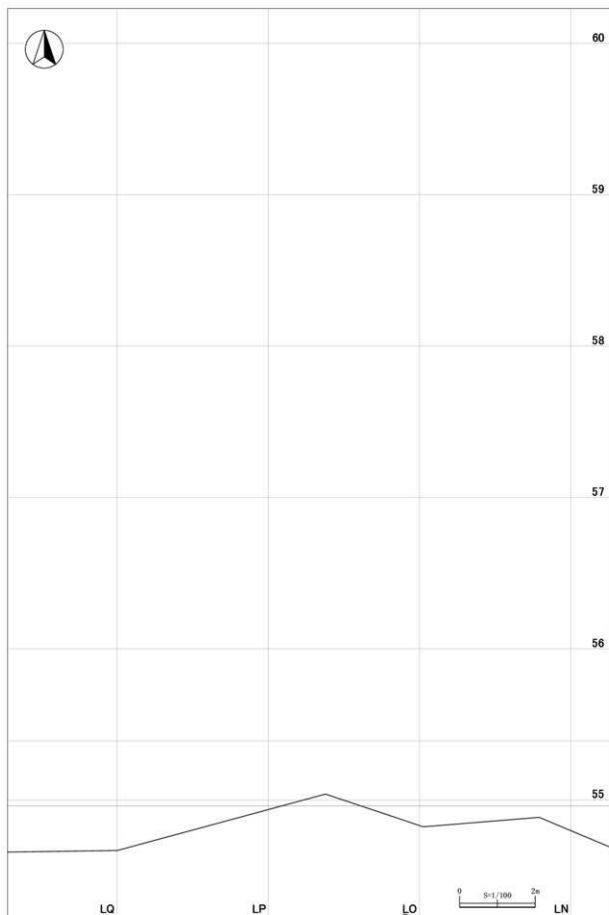
第26図 遺構配置図(2-2)



第27図 遺構配置図 (2-3)



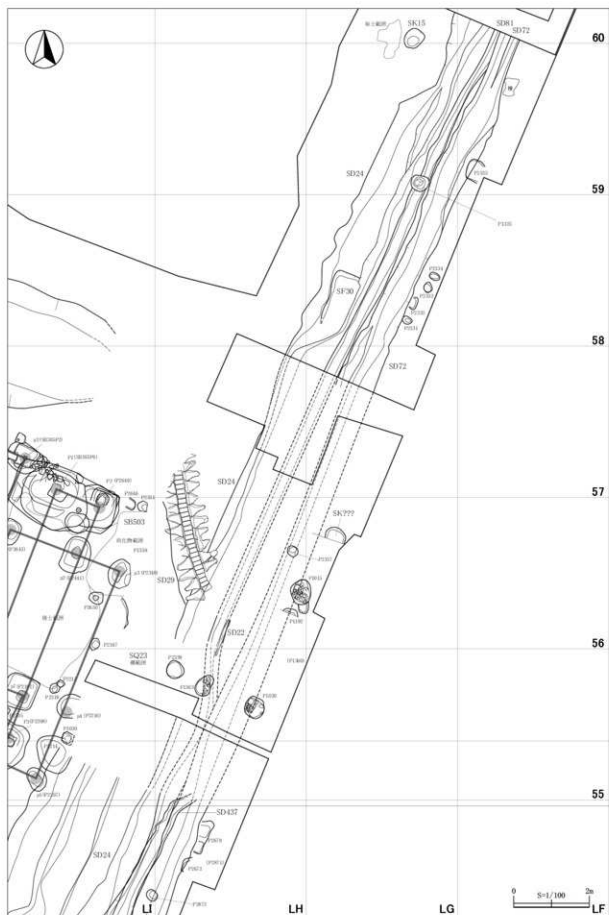
第28図 遺構配置図(2-4)



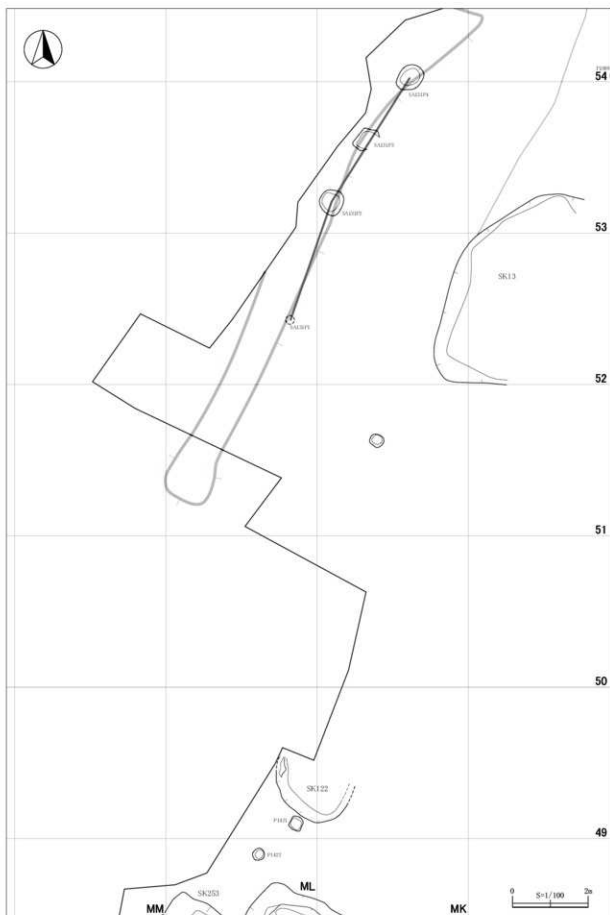
第29図 遺構配置図(2-5)



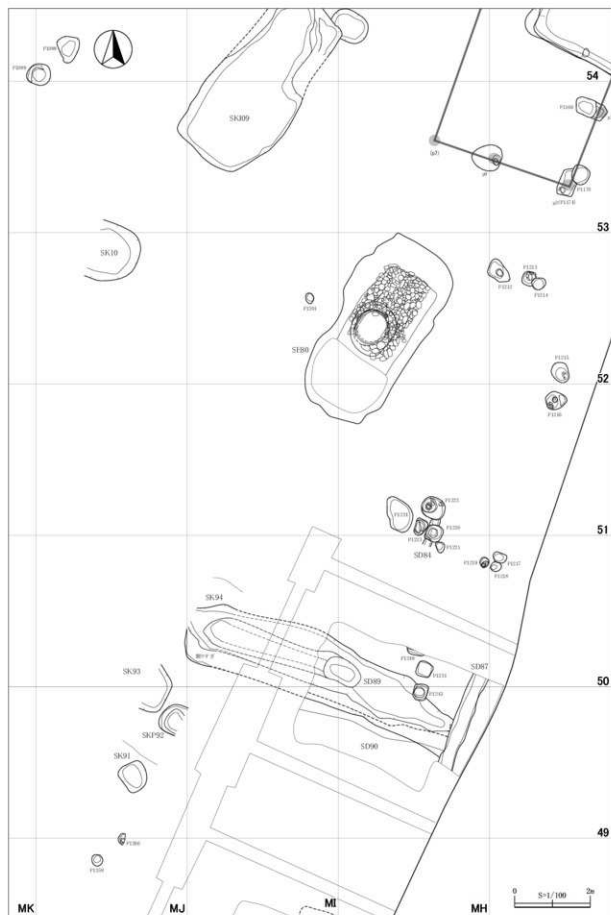
第30図 遺構配置図(2-6)



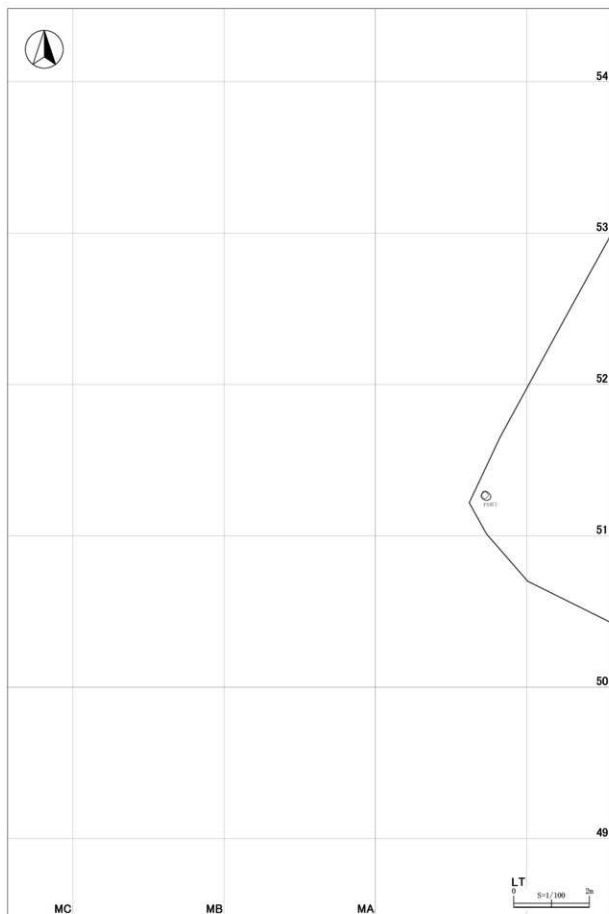
第31図 遺構配置図(2-7)



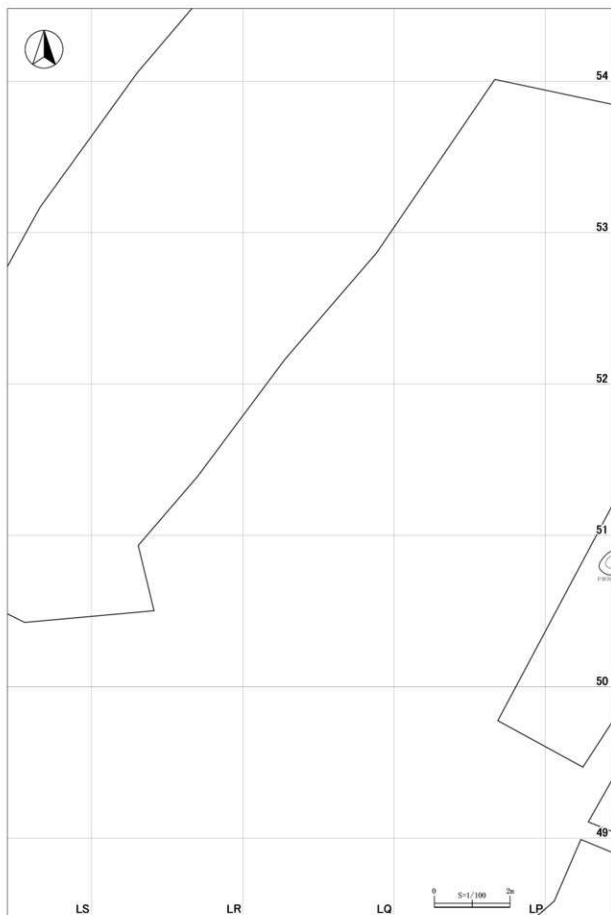
第 32 図 遺構配置図 (3-1)



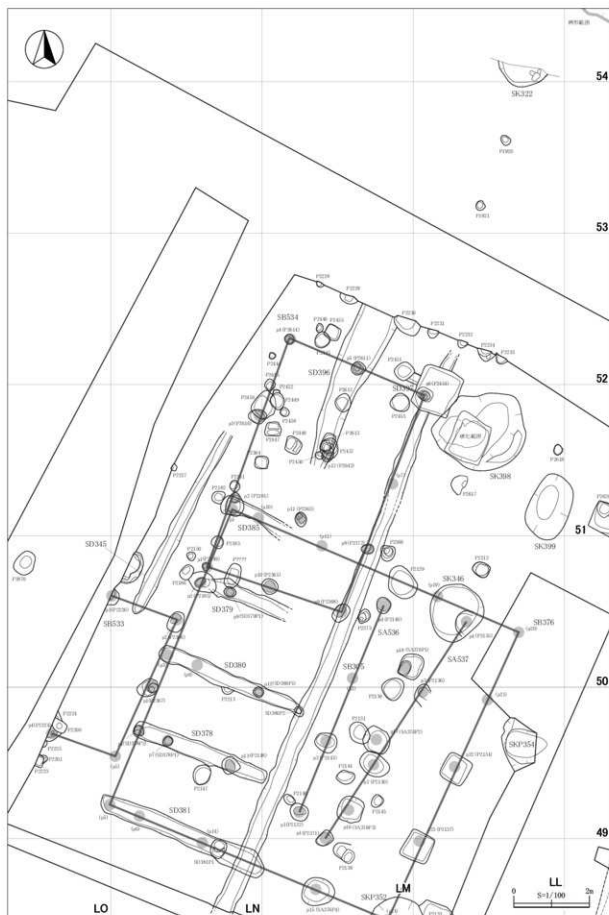
第33図 遺構配置図(3-2)



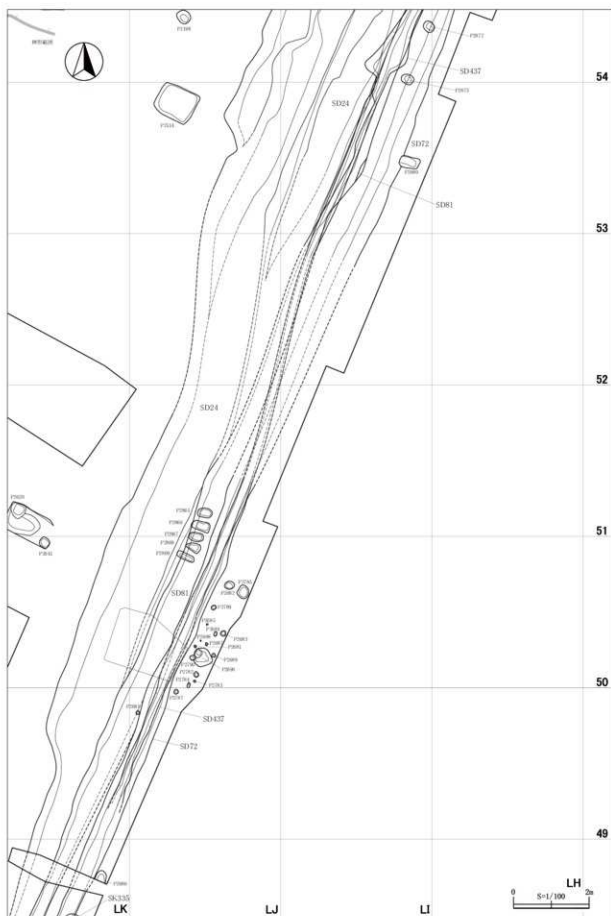
第35図 遺構配置図 (3-4)



第36図 遺構配置図(3-5)



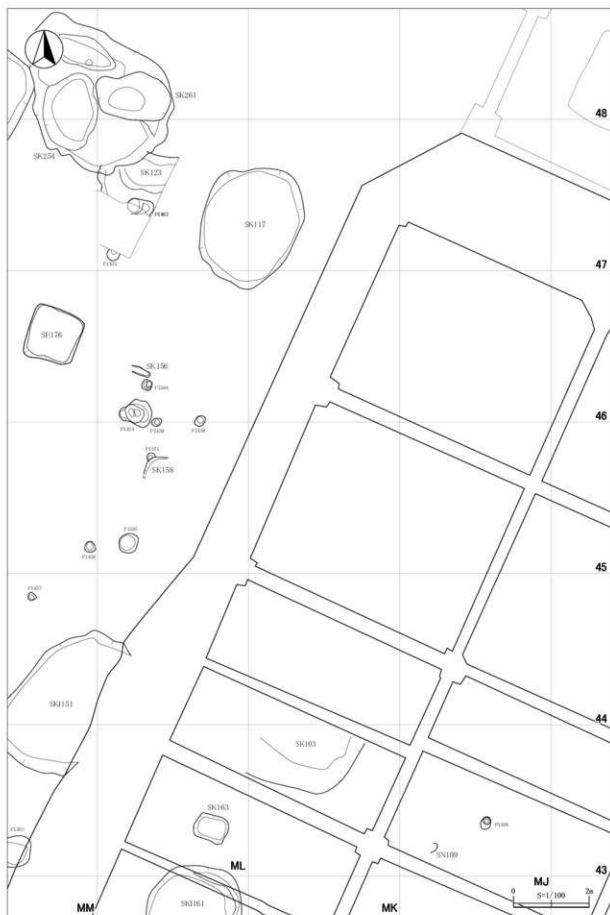
第37図 遺構配置図(3-6)



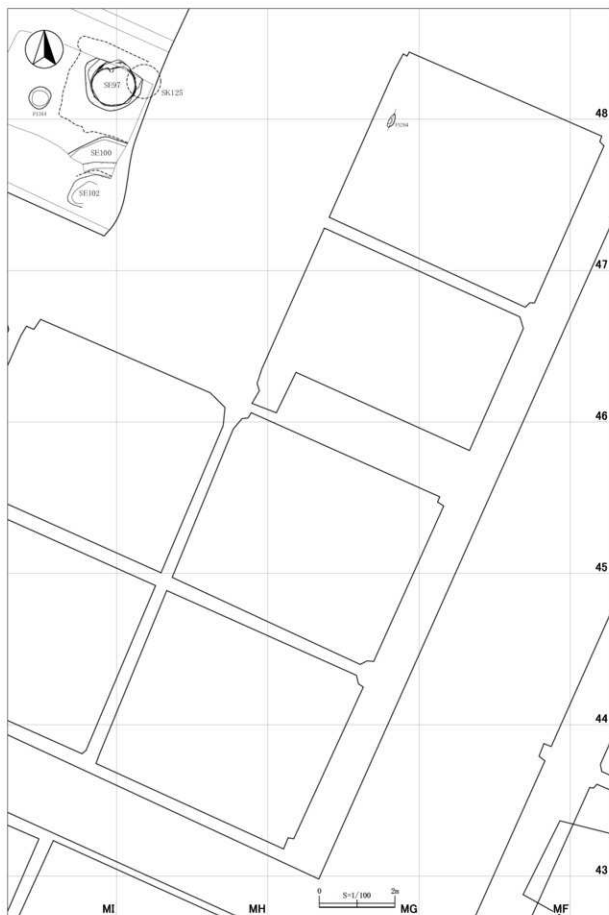
第38図 遺構配置図(3-7)



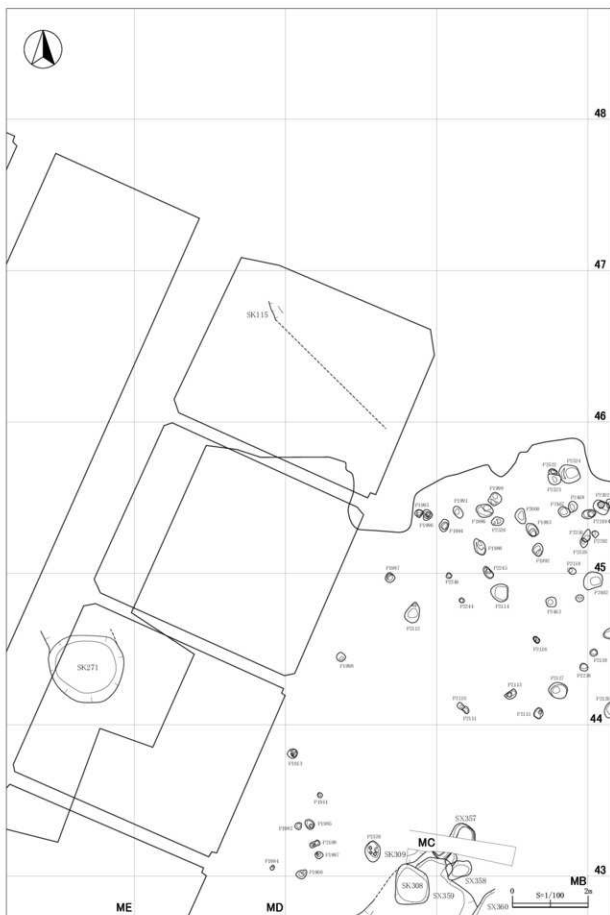
第39図 遺構配置図(4-1)



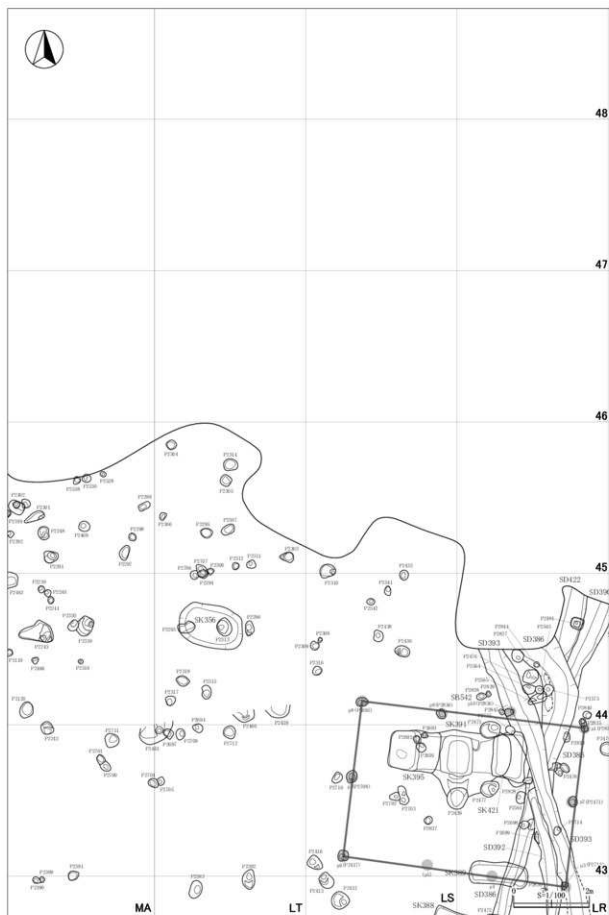
第40図 遺構配置図(4-2)



第41図 遺構配置図(4-3)



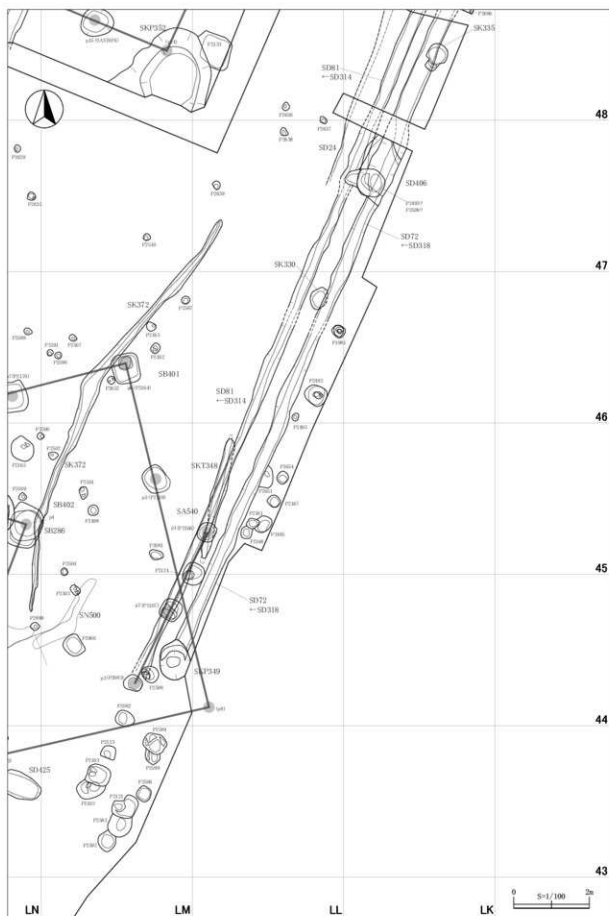
第 42 図 遺構配置図 (4-4)



第43図 遺構配置図(4-5)



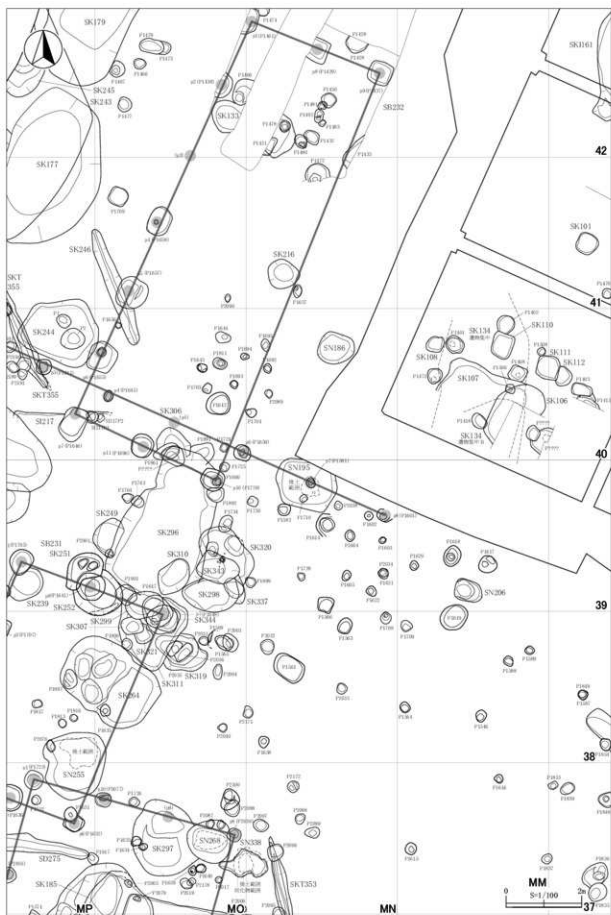
第44図 遺構配置図(4-6)



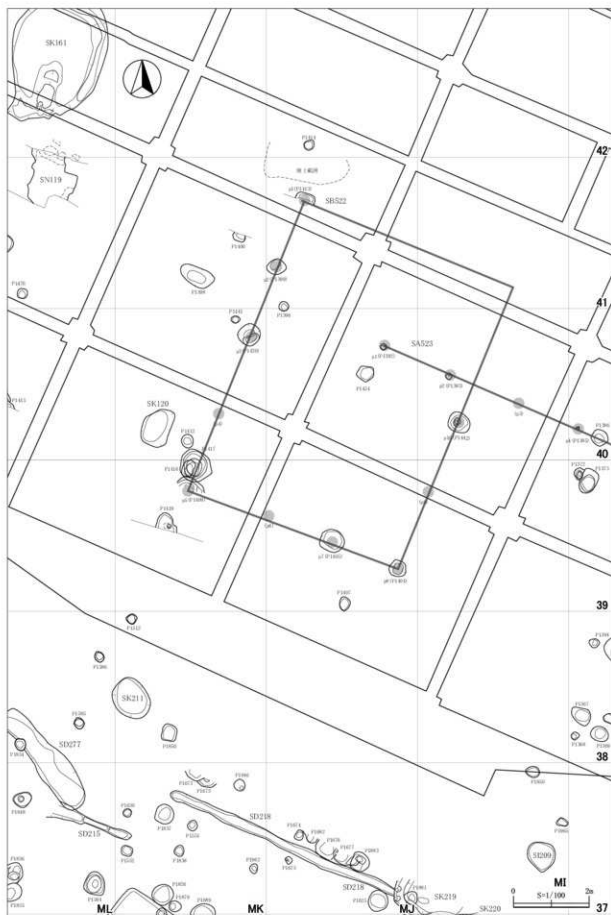
第45図 遺構配置図(4-7)



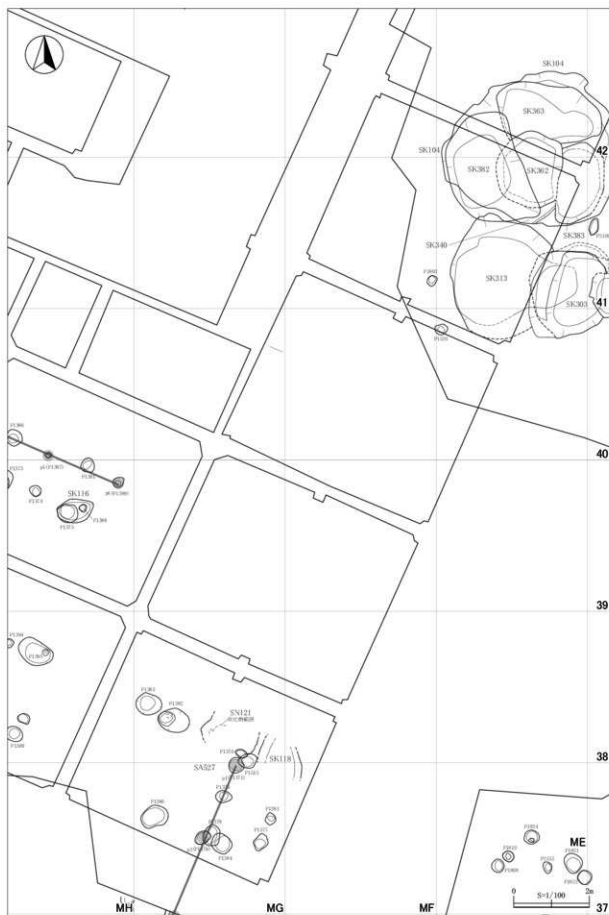
第46図 遺構配置図(5-1)



第47図 遺構配置図(5-2)



第48図 遺構配置図(5-3)



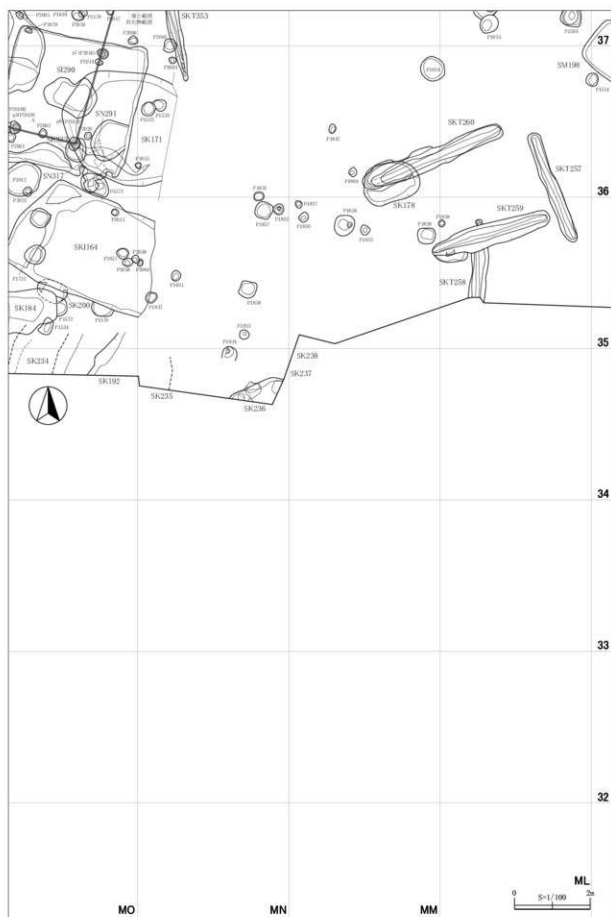
第49図 遺構配置図(5-4)



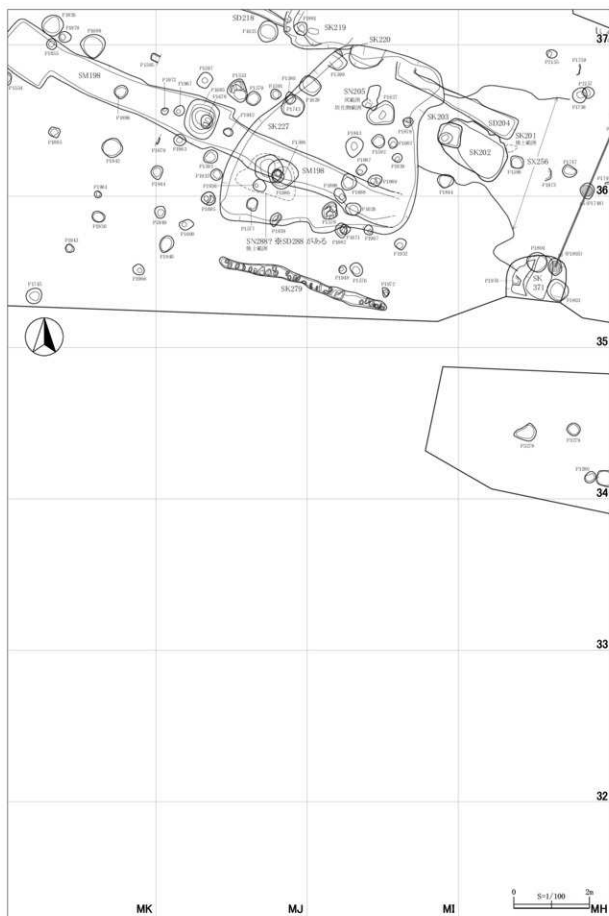
第50図 遺構配置図(5-5)



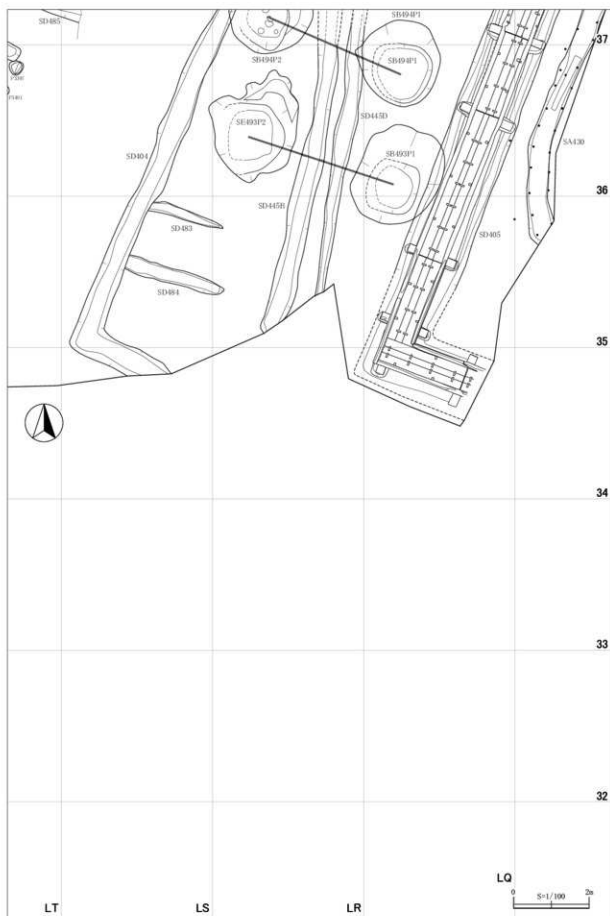
第51図 遺構配置図(5-6)



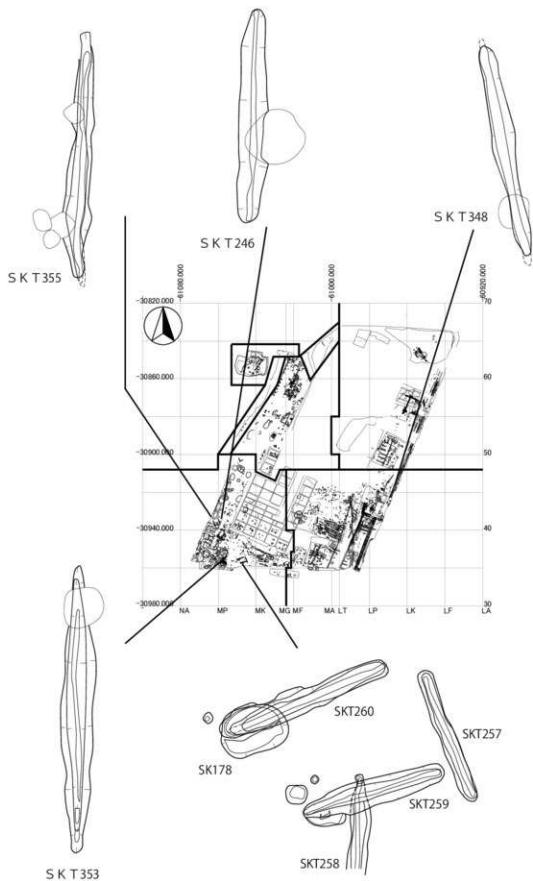
第54図 遺構配置図(6-2)



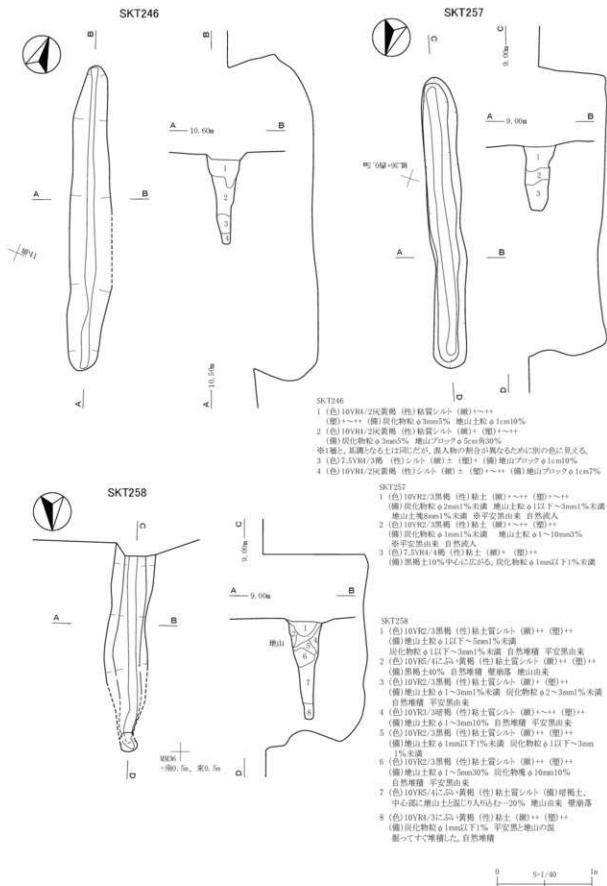
第55図 遺構配置図 (6-3)



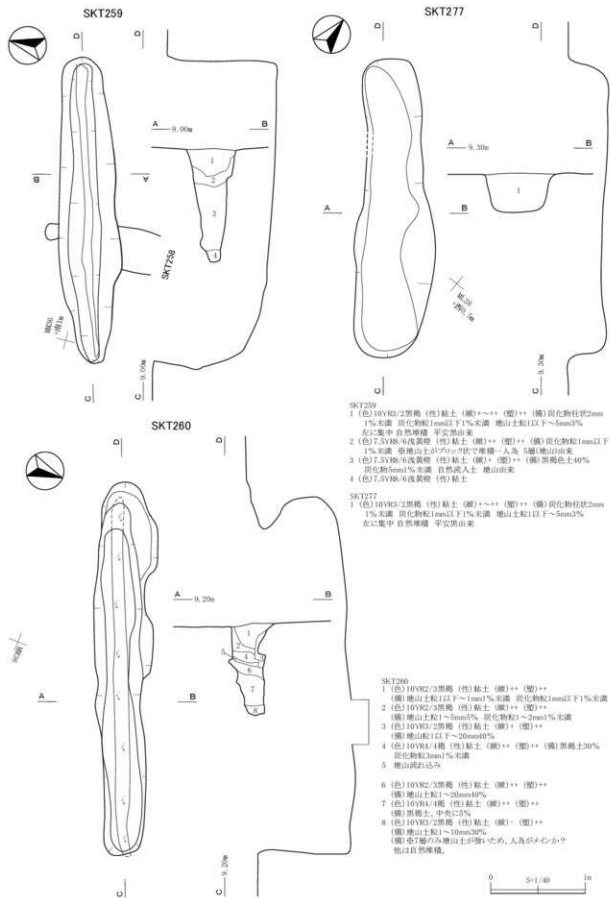
第58図 遺構配置図(6-6)



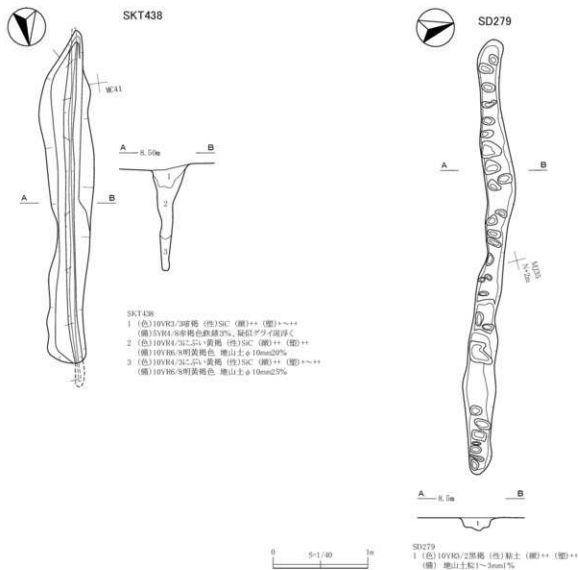
第 59 図 縄文時代遺構配置図（陥し穴）



第60図 縄文時代遺構平面図(陥し穴1、SKT246・257・258)



第61図 縄文時代遺構平面図 (陥し穴2、SKT259・260・277)



第 63 図 縄文時代遺構平面図 (陥し穴SKT438、溝、SD279)

第 5 表 縄文時代遺構一覧

遺構番号	遺構種類	大グリッド	大グリッド	X	Y	Z	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	角度	東西	時代	層位	第3分層四角番号	備考
246	SKT	MO	40	-30936.251	-61039.077	9.38	3.34	0.42	0.92	21	E	縄文	59 60	9 10-1-2	
257	SKT	ML	35	-30956.742	-61044.588	7.95	2.91	0.35	0.80	22	W	縄文	59 60	9 10-3-4	
258	SKT	ML	35	-30958.541	-61046.942	7.69	2.00(埋)	0.44	1.08	35	E	縄文	59 60	9 11-1-3	SKT209より古い
259	SKT	ML	35	-30966.591	-61045.561	7.58	3.23	0.63	1.46	72	E	縄文	59 61	9 11-2-3 12-2	SKT258より新しい
260	SKT	ML	36	-30954.564	-61047.238	7.79	3.83	0.60	1.07	73	E	縄文	59 61	9 12-1	
277	SKT	ML	37	-30948.437	-61045.051	8.73	3.06	0.83	0.40	39	W	縄文	61		途中で放棄
279	SD	MI	35	-30958.789	-61033.938	8.23	4.61	0.25	0.10-0.20			縄文	63		自然の窪み
348	SKT	LI	45	-30919.482	-60967.782	6.29	3.38	0.35	0.68	11	E	縄文	59 62	9 12-3-4 15-1	
353	SKT	MN	37	-30961.147	-61065.107	8.48	2.94	0.33	0.82	13.5	W	縄文	59 62	9 13-1-2	
355	SKT	MP	41	-30935.491	-61062.446	9.29	3.72	0.42	0.84	25.5	W	縄文	59 62	9 13-3-4	
438	SKT	MB	41	-30935.16	-61007.393	7.24	3.48	0.49	1.08	9	E	縄文	63		

掘立柱建物跡S B401(第65図、第7表、第3分冊図版14・15・16)は台地東側末端の微高地で検出した。平面形・規模は梁間2間6.63m、桁行3間9.24mで、柱穴7基を検出した。長軸方向は、 $N-33^{\circ}-W$ である。柱穴p5から灰軸陶器碗(第2分冊第1図3、第4分冊第1表)が出土した。9世紀第4四半期の東濃産である。

中村氏所見は「南北方向を桁行とする身舎梁間三間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。堅穴建物が旧地形では丘陵中腹の標高10m地点に並ぶのに対し、掘立柱建物跡はいずれも標高8m台の低地部かつ地山がグライ化しない微高地にある。遺構種類によって設置地点を分けている。

S B542(第67図、第7表)も台地末端の微高地で検出した。中村氏所見は「東西方向を桁行とする身舎梁間二間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。下記S B391を囲むように柱穴が配置される直屋である。S B391を中央において直接の切り合いが無く、長軸が合致する。S B391を囲み屋根・壁を持たない保護柵のような建物ではないだろうか。S B401に比べて柱穴は小さく、周辺に無数にある柱穴との違いは無い。

S B391(第66・67図、第7表、第3分冊図版3)は4基の柱穴で構成される。柱穴p4は支柱としては小ぶりで浅い。主柱と左右の支柱は1辺60cmを超える大形の柱穴であり、掘方も連結している。柱は抜き取られたと考えている。中央主柱であるp2を東西と南から支えるように柱穴が配置される。またp2は左右支柱より僅かに浅い。しかし、S B439よりも柱穴が大きく深い。上記S B542に囲まれ、同時存在であろう。秋田城跡の三本柱遺構と同様の建物であり、年代は10世紀第2四半期と新しいが、幢竿支柱である可能性が高い。

S B439(第67図、第7表、第3分冊図版3)は4基の柱穴で構成される。柱穴p4は支柱として斜めに掘られており、根固めの礫が柱の傾きに対して力を受ける部分に重点的に積まれている。主柱であるp2を東西と南から支えるように柱穴が配置される。特に斜めになった支柱p4には、支点として潰す力のかかる主柱側上部(p4上部北側)と、作用点として撥ね上げの力がかかる底面主柱反対側(p4下部南側)には念入りに礫を配置している。秋田城跡の三本柱遺構と同様の建物であり、年代は10世紀第2四半期と新しいが、この遺構も幢竿支柱である可能性が高い。

堅穴建物跡は8棟ある。S I175(第68・69図、第6表、第3分冊図版14・22・23・24)は、長さ3.05m、幅3.04m。柱穴はカマド側壁と南壁に3基検出した。東側壁にカマドを設ける。カマドは煙道が長く、煙出穴の下部を深く掘り込む。カマド脇にも焼土が堆積する。またカマド右脇が土間状に凹む。掘方に対して貼床を設けており、中央部が深い。建物の傾きは $N-22^{\circ}-E$ である。カマド内部と床面から土師器杯(第2分冊第1図、第4分冊第1表)が出土した。10世紀第2四半期。

S I209(第70図、第6表)は、上面を削平されており、カマド焼土部分のみを検出した。長さ1.76m、幅1.22m。燃焼部焼土から土師器甕(第2分冊第2図、第4分冊第1表)。9世紀前～中葉か。他の堅穴建物跡とは検出地点が異なり1基だけ離れている。

S I217(第70図、第6表、第3分冊図版24)は、江戸時代の土坑に周辺を攪乱される。残存部の長さ2.39m、残存部の幅0.80m、深さ0.45m。柱穴は北側壁に2基ある。建物の傾きは $N-91^{\circ}-E$ である。10世紀第2四半期。

S I248(第70図、第6表、第3分冊図版25)は、江戸時代の土坑に周辺を攪乱される。長さ2.8m、残存部の幅2.04m。柱穴は東側隅に1基ある。カマドは検出できなかった。堆積途中の凹みが土師器焼成遺構S N295に利用され、焼土と炭化物、土師器破片を大量に含む。10世紀第2四半期。

S I265(第71図、第6表、第3分冊図版26-1)は、江戸時代の土坑に周辺を攪乱される。長さ4.45m、幅3.58m。カマドは検出できなかった。10世紀第2四半期。

S I 266 (第72図、第6表、第3分冊図版26-2)は、長さ2.99m、幅2.88m。隅丸方形、または不整形方形。柱穴は東側隅に1基ある。カマドは検出できなかった。10世紀第2四半期。まとまっていたが、復原・実測には至らなかった。S I 267と重複する。本遺構が新しい。掘り方が直線的ではなく、カマドを持たない小堅穴の可能性が高い。土師器焼成遺構に伴う倉庫や休憩所のような施設かも知れない。

S I 267 (第72図、第6表、第3分冊図版26-3)は、長さ4.19m、幅2.293m。隅丸方形、または不整形方形。柱穴、カマドは検出できなかった。床面から土師器環。10世紀第2四半期。S I 266と重複する。本遺構が古い。S I 266と同様不整形で、カマドを持たない小堅穴の可能性が高い。土師器焼成遺構に伴う倉庫や休憩所のような施設かも知れない。

S I 290 (第73図、第6表、第3分冊図版27~29)は、長さ3.42m、幅3.43m。方形で柱穴は検出できなかった。建物の傾きはN-10°-Eである。床面から土師器環。10世紀第2四半期。

井戸跡は2基検出した。S E 100 (第74図、第6表)は、江戸時代の井戸跡S E 102に切られる黒色土部分として検出した。湧水によって強くグライ化する。土師器環(第2分冊第2図11、第4分冊第1表)が出土した。S E 102と重複していたため、当初江戸時代の同一遺構としていたが、包含する土師器の残りが良く、精査を進める過程で掘り込み面が異なることが分かった。本遺構は県民会館基礎抜き取り工事のため、詳細は不明である。

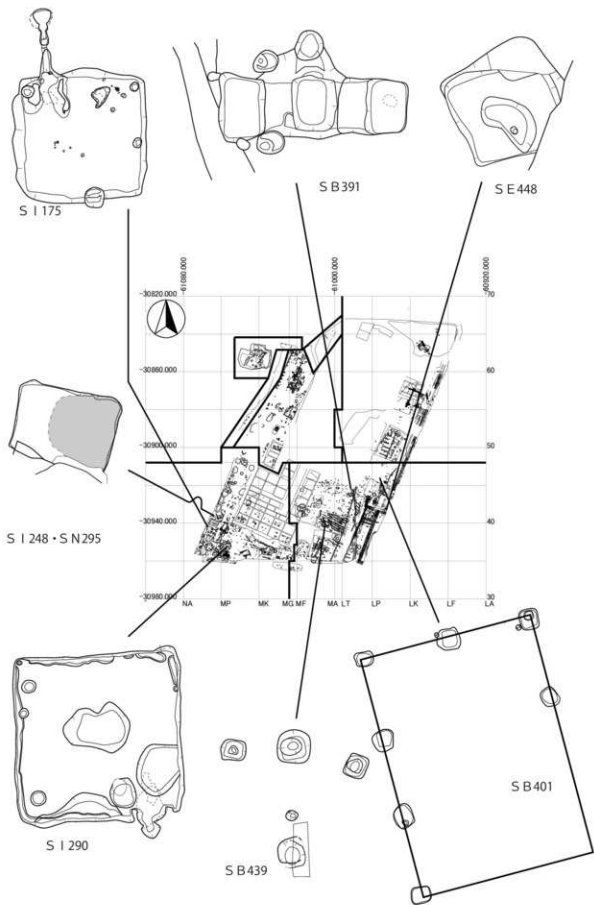
S E 448 (第75図、第7表、第3分冊図版30)は、S D 428の下から検出した。長軸2.30m、短軸1.20m、深さ10cm。湧水によって強くグライ化する。木材を多く含む。土師器環(第2分冊第2図7~10、第4分冊第1表)が出土した。上部を江戸時代の溝S D 428・440が通っており、当初は溝の掘り方と考えていた。上層、周囲とも強くグライ化していたが、堆積土中から残りの良い土師器が多く出土したため精査したところ、平安時代の井戸跡が重複していることが分かった。S B 401と近く、同時存在と考えている。

土師器焼成遺構は2基検出した。ただし、S N 119については祭祀遺構の可能性が高い。S N 119(第83・84図、第6表、第3分冊図版33・34、第4分冊第28表)は不定形に焼土が広がる遺物集積地点として検出した。焼土面上に大量の土師器破片を含む。周囲を含め、灯明皿が多い。平安時代10世紀第2四半期。焼土の分布とその周辺に土師器破片が多く出土することから土師器焼成遺構としたが、明確な掘り込みが検出できず煤やタールが付着した灯明皿が多いため、万灯会のような儀礼の痕跡である可能性もある。2区14房遺物集積地点と隣接するため、一連の遺構であろう。また、S R 440とも同時期であり土師器環の埋設に関わっている可能性もある。

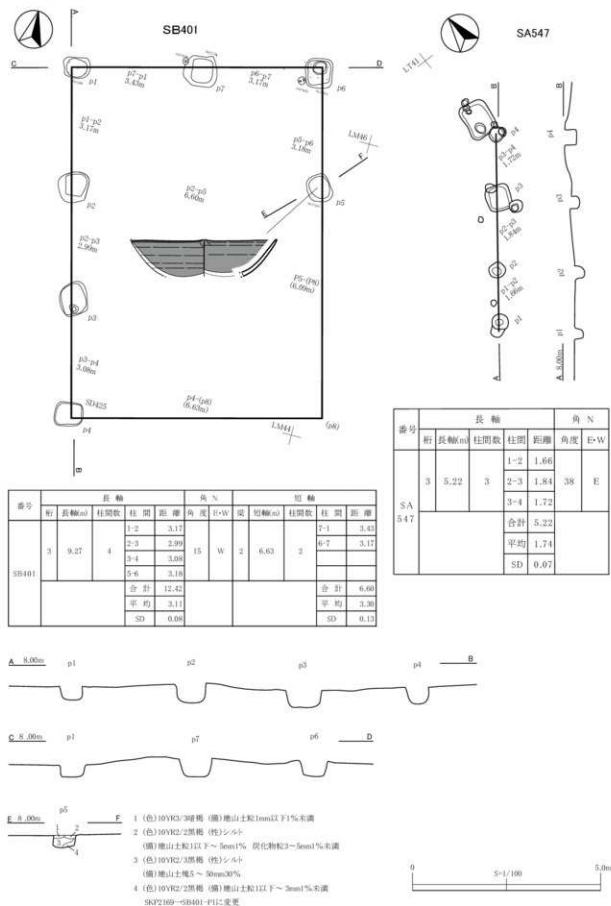
S N 295 (第70図、第6表、第2分冊第3図2、第3分冊図版31・32、第4分冊第28表)は、S I 248の堆積土中から大量の遺物を含む焼土面として検出した。底面は西へ緩く傾斜し焼土、炭化物に大量の土師器破片を含む。S I 248の東側角を焚口とする。S I 248廃絶後、第1堆積土がたまって凹みになりかけた時に焼成施設として利用。

土師器埋設遺構は1基検出した。S R 440(第87図、第7表、第3分冊図版40-4、第4分冊第29表)は、平安時代の旧地表土に土師器環を4個体重ねて正位に置く。掘り込みは見つけられなかった。土師器環4個体(第2分冊第3図3~5、第3分冊図版13、第4分冊第2表)は、いずれも灯明皿である。土師器納を伴う祭祀痕跡とすれば、若干離れているがS N 119と関連するだろう。

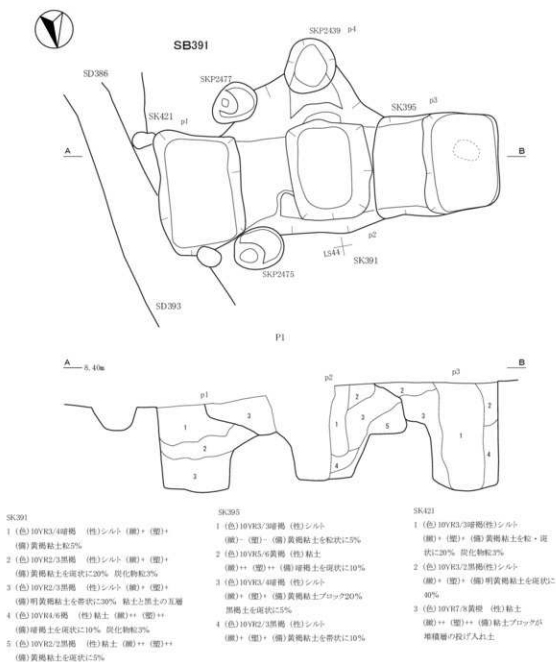
旧県民会館・ジョイナス地下2区11房の土層は、黒色土と地山由来の黄褐色土の互層となる。短期間に地山由来土が供給される時期と植生が復活して腐植が堆積する時期があり、交互に繰り返されることでこの様な黒色土と黄褐色土の互層が形成されたと考えられる。11房の西側は丘陵斜面上方にあ



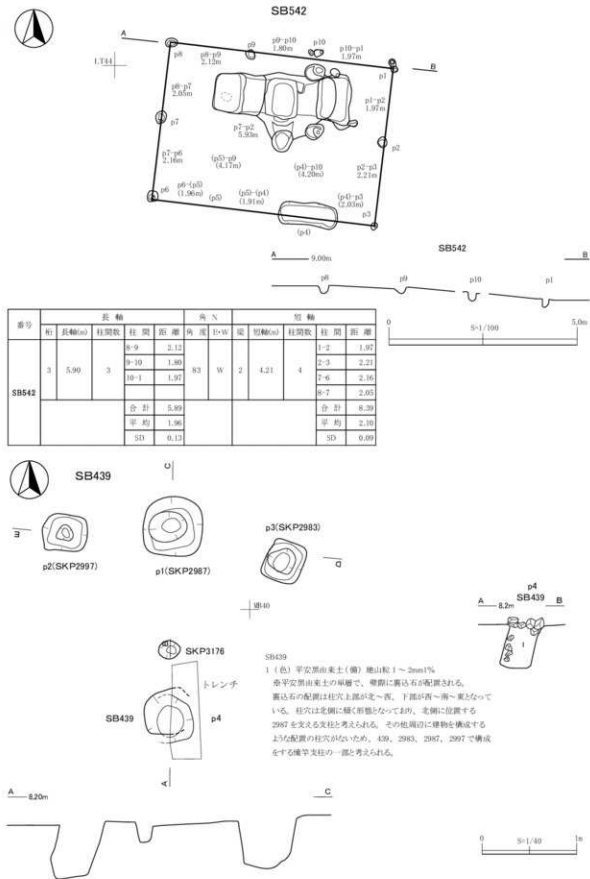
第 64 図 平安時代遺構配置図



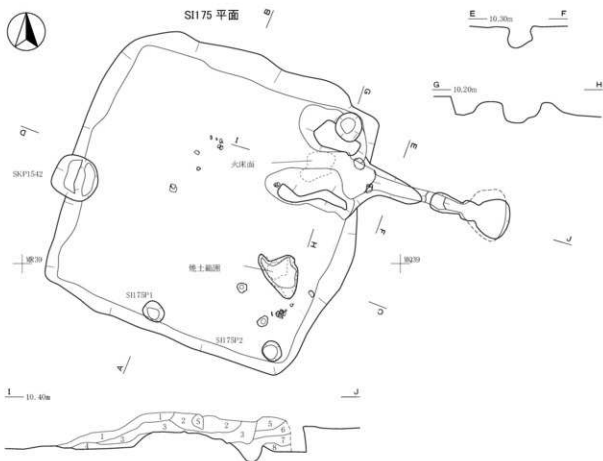
第 65 図 平安時代遺構平面図・断面図 (据立柱建物跡SB401 SA547)



第66図 平安時代遺構平面図・断面図(掘立柱建物跡SB391)

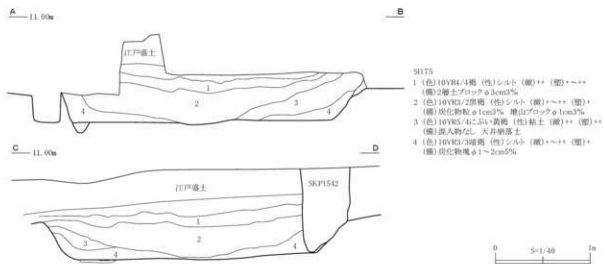


第 67 図 平安時代遺構平面図・断面図 (掘立柱建物跡SB439・542)



SI175カマド 1-7

- 1 (色) 10YR4/4焼 (性) シルト (調) + (型) + (備) 焼土塊5~10mm3%, 焼山ブロック3mm1%, 傘型穴住居の焼土の4層土が由来の埋積土。炭化物が多く、偽層が東西方向に堆積しており、人為堆積と考えられる。なお、1層中には土師器が少量で出土しており、原始縄文の1層と考えられる。
- 2 (色) 10YR4/4焼 (性) シルト (調) + (型) + (備) 焼土塊5~10mm3%, 焼山ブロック1~3mm1%, 4層土、及び焼土、焼山ブロックの混入が認められる。東から西方向への偽線の堆積が認められるため、人為堆積土と考えられる。
- 3 (色) 10YR4/6焼 (性) シルト (調) +--+ (型) ± (備) 焼土塊5~10mm7%, 炭化物粒1mm3%。傘型人物が多く、土層中に混ざり合っており、積層土と考えられる。
- 4 (色) 10YR5/6黄褐 (性) シルト (調) +--+ (型) ± (備) 焼土塊5~10mm10%, 炭化物粒1mm5%。強く焼け堅くなる。
- 5 (色) 10YR4/4焼 (性) シルト (調) + (型) + (備) 天井崩落土
- 6 (色) 10YR4/4焼 (性) シルト (調) + (型) +
- 7 (色) 10YR4/6焼 (性) シルト (調) +--+ (型) ±
- 8 (色) 10YR5/6黄褐 (性) シルト (調) +--+ (型) ±
(備) 幸1, 3, 4層は崩落土, 3層の北側までの竈に内里土師器が出土している。(断面を下に正位の状態で配図されており、原始縄文の一部か?)



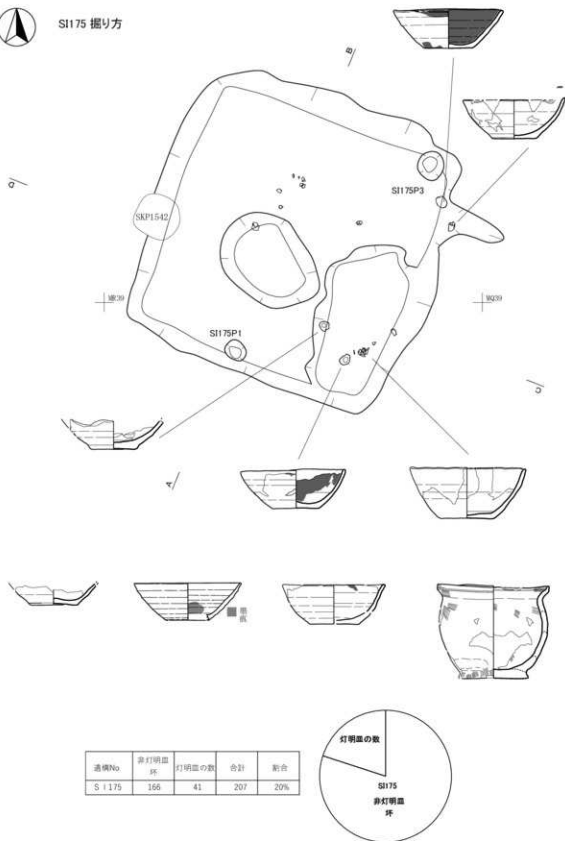
SI175

- 1 (色) 10YR4/4焼 (性) シルト (調) ++ (型) +--+ (備) 2層土ブロックφ3cm3%
- 2 (色) 10YR3/2暗褐 (性) シルト (調) +--+ (型) + (備) 炭化物粒φ1cm3% 焼山ブロックφ1cm3%
- 3 (色) 10YR5/4こい黄褐 (性) 粘土 (調) ++ (型) ++ (備) 混入物なし。天井崩落土
- 4 (色) 10YR3/3暗褐 (性) シルト (調) +--+ (型) + (備) 炭化物塊φ1~2cm5%

第 68 図 平安時代遺構平面図 (竪穴建物跡SI175)

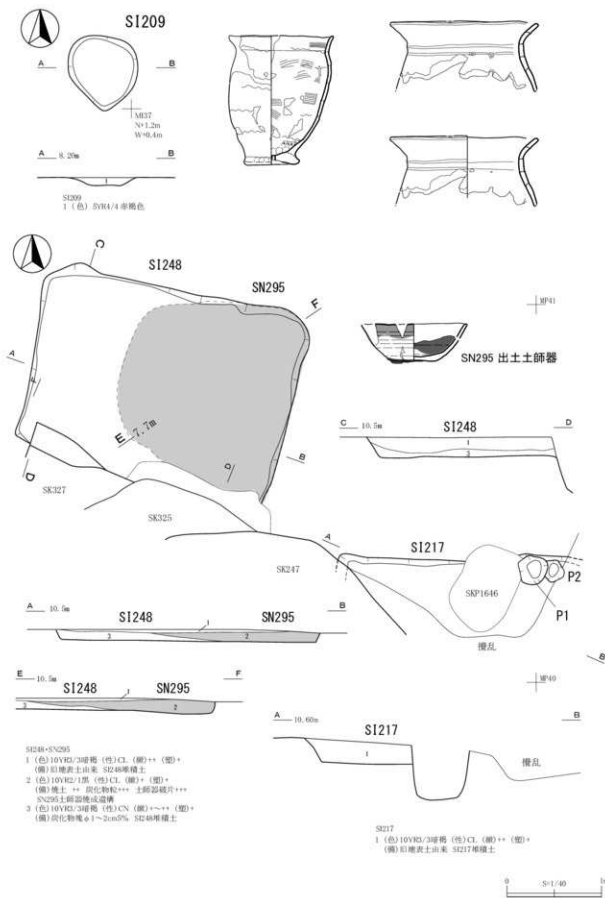


SI175 掘り方

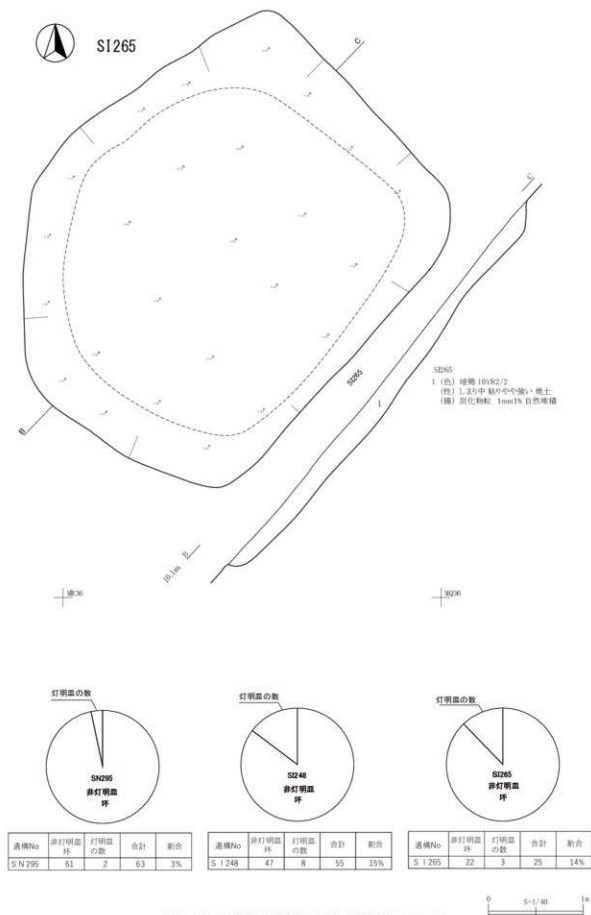


0 5-1/40 1m

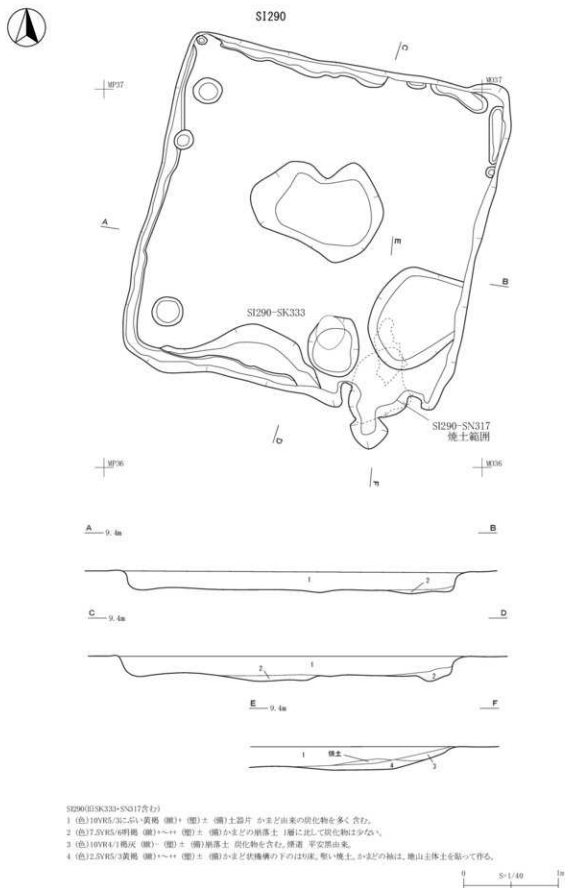
第 69 図 平安時代遺構平面図・遺物図（竪穴住居跡SI175）



第70図 平安時代遺構平面図(竪穴建物跡 S1209・217・248、土師器焼成遺構 SN295)

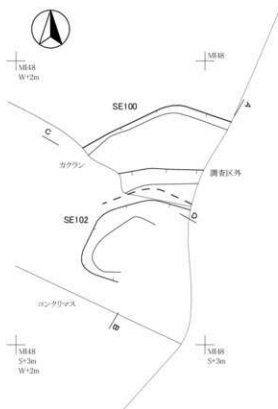


第 71 図 平安時代遺構平面図・断面図 (SI265)

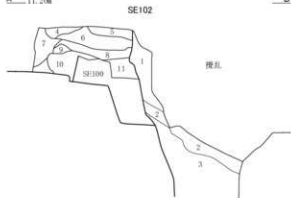


第73図 平安時代遺構平面図・断面図（竪穴建物跡SI290）

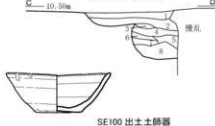
SE100・102



A 11.20m



C 10.50m



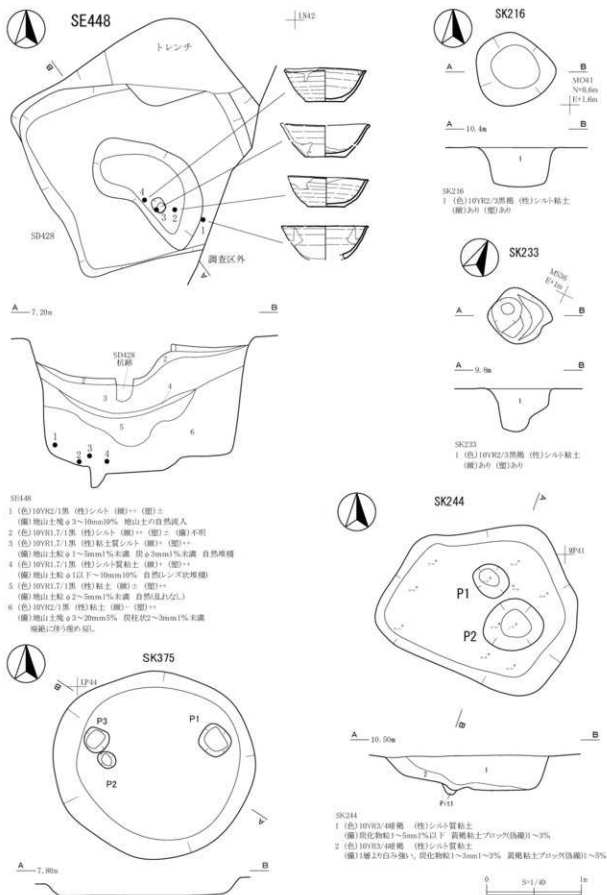
第74図 平安・江戸時代遺構平面図・断面図(井戸跡SE100・102)

SE100(平安時代)

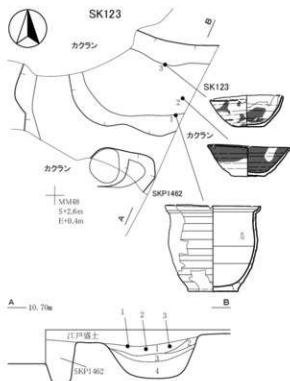
- (色) 7.5YR3/2黒褐色(性)シルト (弱) やや弱 (弱) 中
(弱) 地土 粒1mm以下1% 炭化物粒1mm以下1% 古代生活層土由来の一括埋め戻し土、グライ化や堆山土の混入で分けた
- (色) 7.5YR3/3暗褐色(性)シルト (弱) やや弱 (弱) 強
(弱) 地山土粒1 ~ 5mm1% 炭化物粒2mm1% 古代生活層土由来の一括埋め戻し土、グライ化や堆山土の混入で分けた
- (色) 7.5YR3/3暗褐色(性)シルト (弱) 中 (弱) 強
(弱) 地山土塊5 ~ 10mm20% 炭化物粒2 ~ 3mm1% 古代生活層土由来の一括埋め戻し土、グライ化や堆山土の混入で分けた
- (色) 7.5YR2/1黒色 (性)シルト質粘土 (弱) 強 (弱) 中
(弱) 地山土粒1 ~ 2mm1% 炭化物1以下 ~ 2mm1% 古代生活層土由来の一括埋め戻し土、グライ化や堆山土の混入で分けた
- (色) 7.5YR2/2黒褐色(性)シルト質粘土 (弱) 中 (弱) 中
(弱) 地山土粒1以下 ~ 2mm1% 炭化物粒2mm1% 古代生活層土由来の一括埋め戻し土、グライ化や堆山土の混入で分けた
- (色) 7.5YR2/1黒色(性)シルト質粘土 (弱) やや強 (弱) 中
(弱) 地山土塊5 ~ 10mm3% 炭化物粒1mm以下1% 古代生活層土由来の一括埋め戻し土、グライ化や堆山土の混入で分けた
- (色) 7.5YR2/1黒色(性)シルト質粘土 (弱) 中 (弱) 強
(弱) 地山土粒1以下 ~ 3mm1% 炭化物塊5mm1% 古代生活層土由来の一括埋め戻し土、グライ化や堆山土の混入で分けた。グライ化
- (色) 7.5YR2/1黒色(性)シルト質粘土 (弱) 中 (弱) 強
(弱) 地山土塊5mm1% 粒1以下 ~ 2mm1% 古代生活層土由来の一括埋め戻し土、グライ化や堆山土の混入で分けた。底部グライ化

SE102(江戸時代)

- (色) 2.5GY2/1黒色 (性)シルト (弱) 中 (弱) 強
(弱) 地山土塊10・30・100mm10% 赤1層のグライ化 赤一括埋め戻し
- (色) 10YR4/2黄褐色 (性)シルト (弱) 中 (弱) 強
(弱) 地土塊5mm1% 地山土塊5 ~ 10mm3%
炭化物粒3 ~ 5mm1% 準生活層土由来、人為による埋め戻し
- (色) 5GY2/1オリーブ黒色 (性)シルト (弱) 中 (弱) 強
(弱) 地山土塊5 ~ 30mm3% 赤1層のグライ化
- (色) 7.5YR5/4紅褐色(性)シルト質粘土 (弱) 中 (弱) 強
(弱) 炭化物粒1mm1% 一盛土 堆山土由来 盛土
- (色) 10YR3/3暗褐色(性)シルト (弱) 弱 (弱) 強
(弱) 地山土塊5 ~ 10mm10% 炭化物粒5mm1% 赤一盛土、生活層土由来 盛土
- (色) 10YR3/3暗褐色(性)シルト (弱) 中 (弱) 強
(弱) 地山土板状3 ~ 5mm1% 塊5 ~ 8mm3%
石30mm・100mm0% (4個) 一盛土、生活層土由来 盛土
- (色) 7.5Y/4 10YR4/3に赤・黄褐色(性)シルト (弱) 中 (弱) 強
(弱) 7.5Y/4シルト(層1)と10YR4/3に赤・黄褐色シルト5 ; 堆山土と生活層土の混じり 堆山土53 ~ 20mmのブロック状で混入 盛土
- (色) 10YR2/6明黄褐色(性)シルト (弱) 中 (弱) 強
(弱) 暗褐色土2mm1% 赤一盛土由来 盛土
- (色) 10YR3/3性)シルト (弱) 中 (弱) 強
(弱) 地山土塊5 ~ 30mm5% 炭化物粒1mm1% 赤一生活層土由来 盛土
- (色) 10YR2/2黒褐色(性)シルト (弱) 中 (弱) 強
(弱) 地山土塊5 ~ 10mm5% 堆山土粒1 ~ 3mm1% 同じょうなみの、生活層土由来、遺構の取り込み断面か 盛土
- (色) 10YR2/2黒褐色(性)シルト質粘土 (弱) やや強 (弱) やや強
(弱) 地山土塊5 ~ 15mm15% 炭化物粒1 ~ 3mm1% 同じょうなみの、生活層土由来、遺構の取り込み断面か 盛土

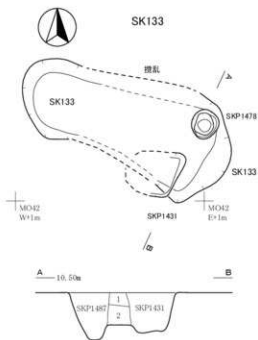


第75図 平安時代遺構平面図(井戸跡 SE448、土坑 SK216・233・244・375)



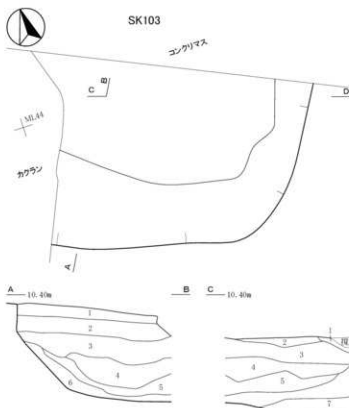
SK123

- 1 (色) 10YR3/3暗褐色 (性)CL (硬)++ (堅) (備) 旧地土山束
- 2 (色) 10YR2/1黒 (性)CL (硬)++ (堅) (備) 地土 ++ 炭化物粒+++ 土師器破片+++
- 3 (色) 10YR4/赤褐色 (性)粘土 (硬)++ (堅) (備) 地土ブロック
- 4 (色) 10YR3/3暗褐色 (性)粘土 (硬)++ (堅)++



SK133

- 1 (色) 10YR3/4暗褐色 (性)シルト (硬)++ (堅) (備) 有機物を多く含む
- 2 (色) 10YR3/2黒褐色 (性)シルト (硬)++ (堅) (備) 炭化物粒約5%

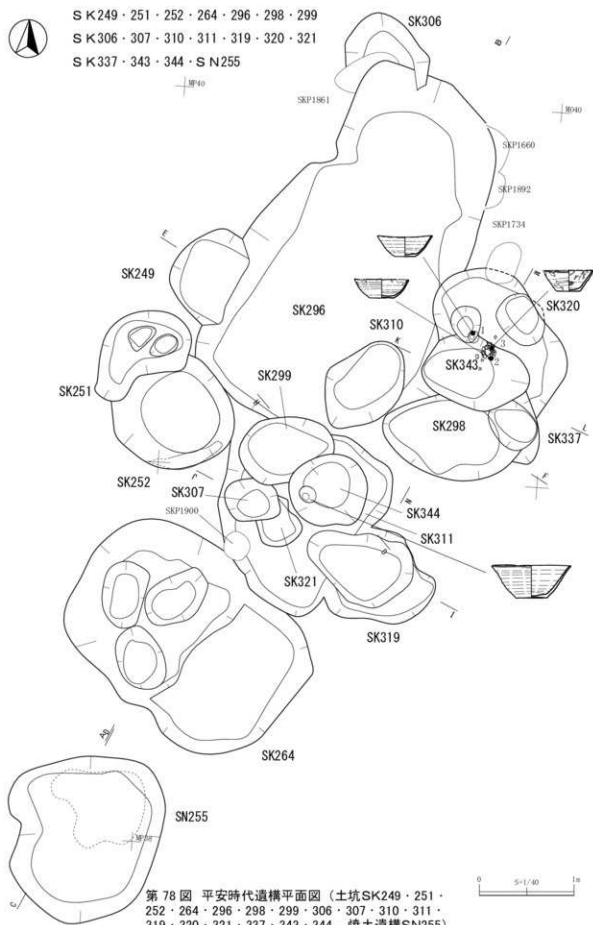


SK103

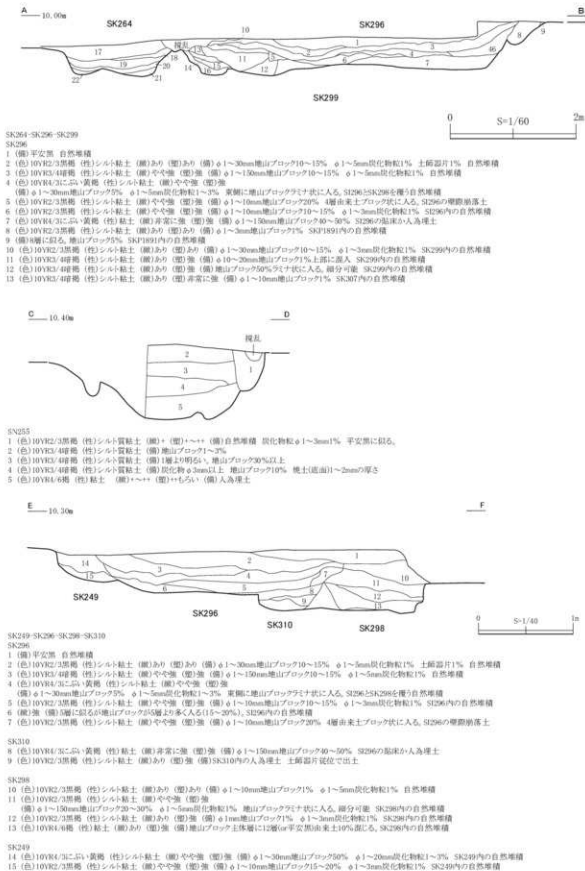
SK103

- 1 (色) 基10YR2/3黒褐色 (表土山束) (備) 垂直角 (性)SCCL (硬)++ (堅) (備) 粘土塊5~10mm5% 5YR3/6暗赤褐色 地山2%も赤い、凝灰グラウ化化石30~50mm2% 土器片数人
- 2 (色) 基10YR3/3暗褐色 (表土山束) (備) 垂直角 (性)SC (硬)++ (堅) (備) 地山山束粘土1~10mm1% 未調査 1層同様の暗赤褐色粘土1~2mm1% 未調査 土器片数人
- 3 (色) 基7.5YR7/4に5%層 (地山山束) 基10YR5/3暗灰 (表土山束)20% (備) 垂直角 (性)SC (硬)++ (備) 炭化物約1~2mm1% 未調査 基質にグラウ化の影響 灰褐色部分あり
- 4 (色) 基7.5YR3/2黒褐色 (表土山束) 基7.5YR7/4に5%層 (地山山束)10% (備) 垂直角 (性)SC (硬)++ (堅)++ (備) グライ化の影響
- 5 (色) 基7.5YR4/2赤褐色 (表土山束) 基7.5YR7/4に5%層 (地山山束)3% (備) 垂直角 (性)SC (硬)++ (堅)++ (備) グライ化の影響
- 6 (色) 基7.5YR7/4に5%層 (地山山束) 基7.5YR4/2赤褐色 (表土山束)25% (備) 垂直角 (性)SC (硬)++ (堅)++ (備) グライ化の影響
- 7 (色) 基7.5YR4/2赤褐色 (表土山束) 基7.5YR7/4に5%層 (地山山束)3% (備) 垂直角 (性)SC (硬)++ (堅)++ (備) グライ化の影響
- 8 (色) 基7.5YR4/2赤褐色 (表土山束) 基7.5YR7/4に5%層 (地山山束)10~20mm1% 未調査 (備) 垂直角 (性)SC (硬)++ (堅)++ (備) グライ化の影響

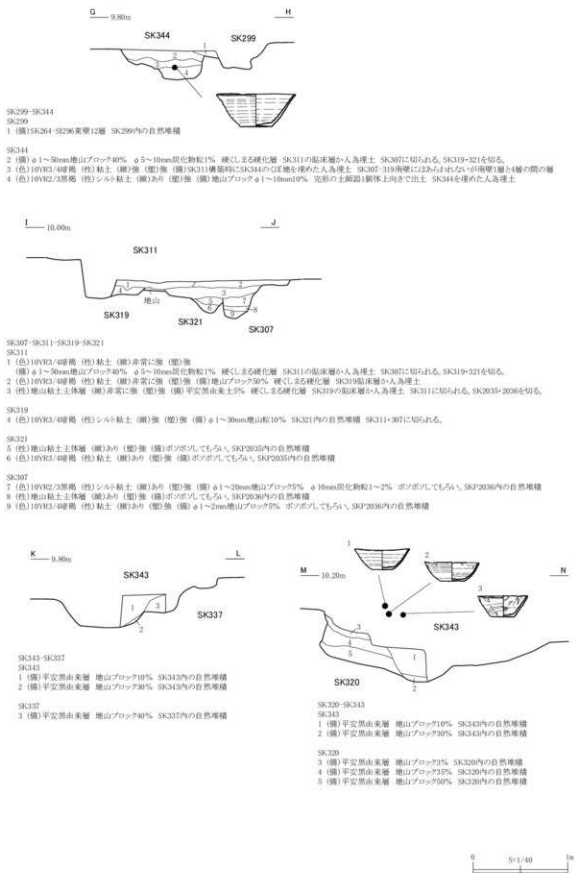
第76図 平安時代遺構平面図 (土坑 SK103・123・133)



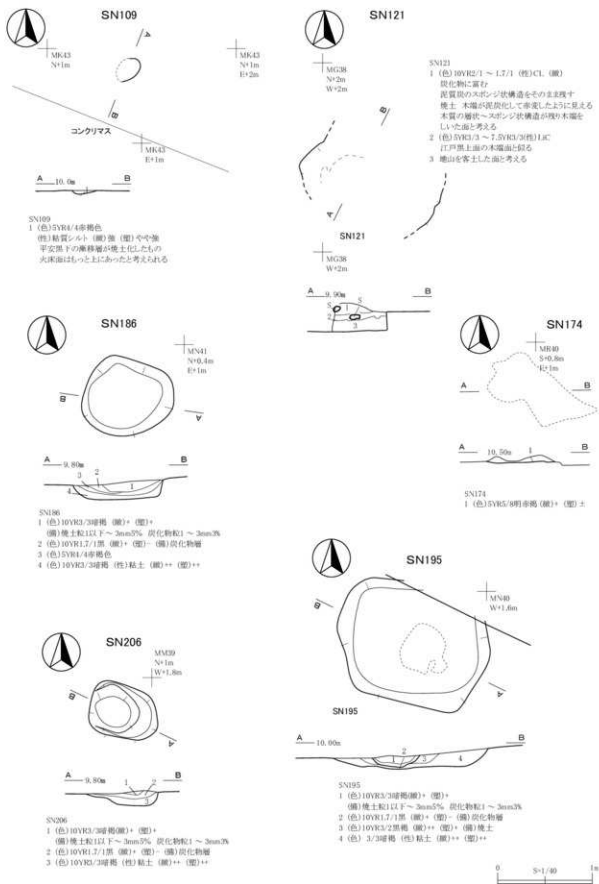
第3章 発掘調査の方法と成果



第 79 図 平安時代遺構断面図 (土坑SK249・264・296・298・299・310)

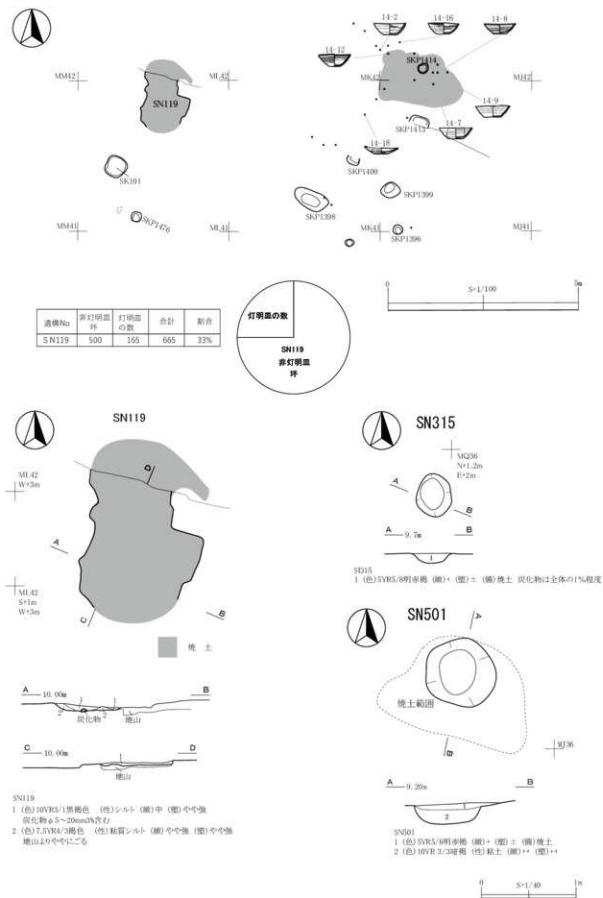


第80図 平安時代遺構断面図(土坑SK299・307・311・319・320・321・337・343・344)

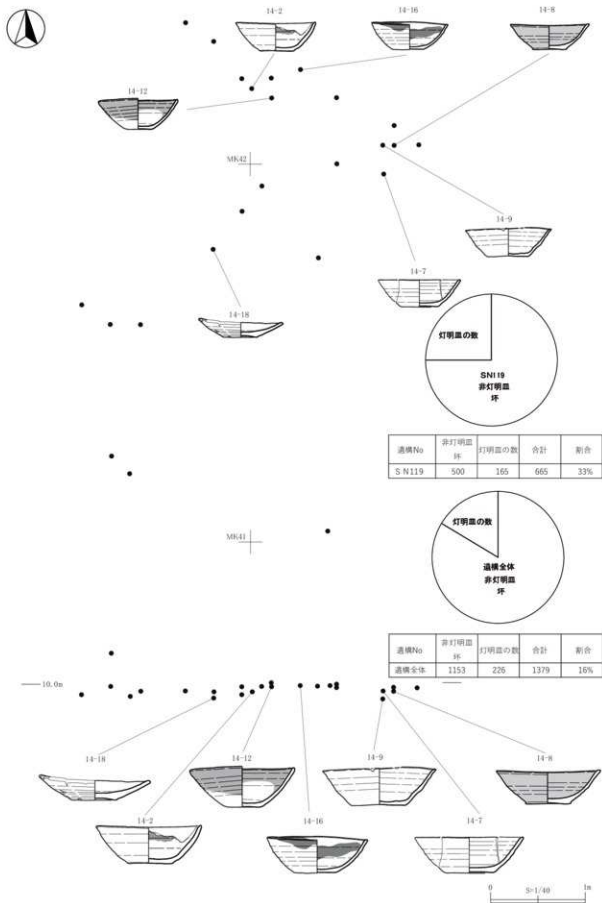


第 82 図 平安時代遺構平面図・断面図 (焼土遺構SN109・121・174・186・195・206)

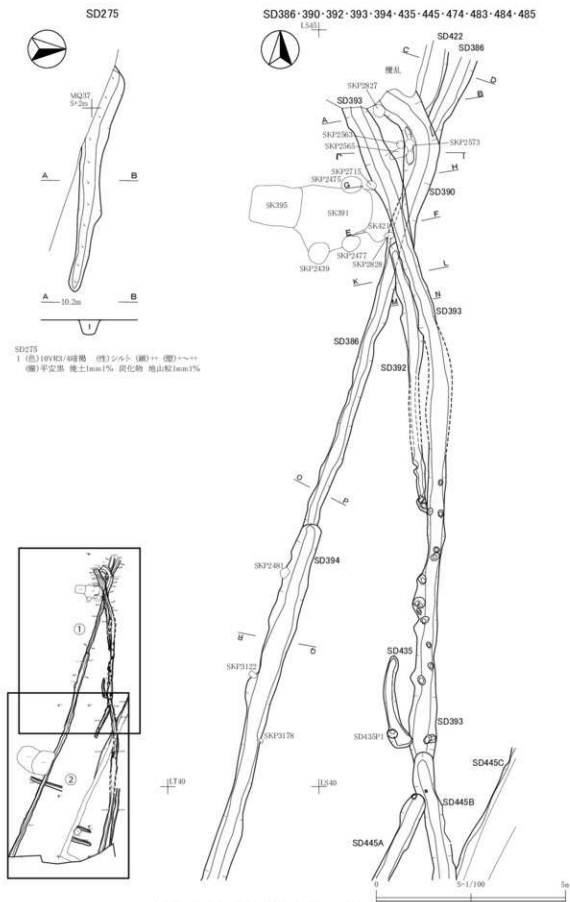
第3章 発掘調査の方法と成果



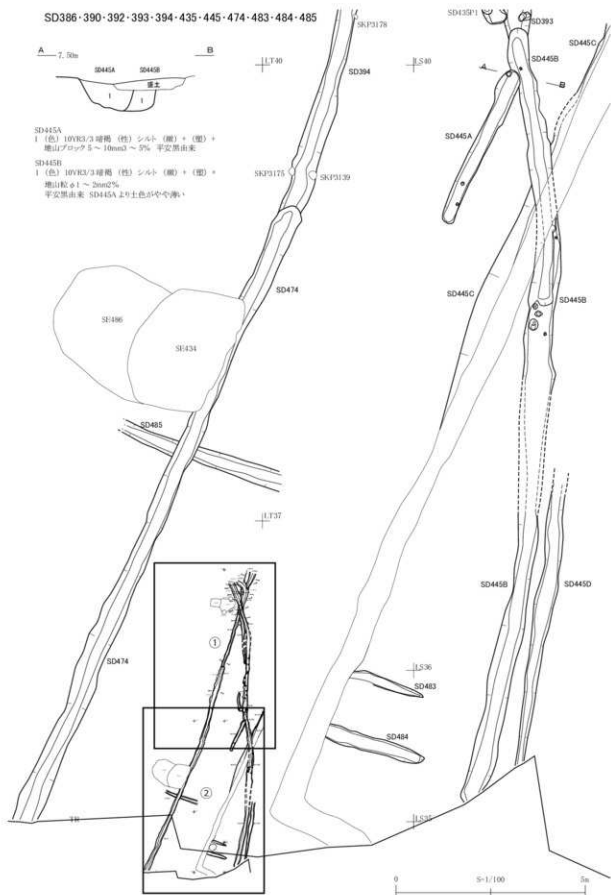
第 83 図 平安時代遺構平面図・断面図 (焼土SN119・315・501)



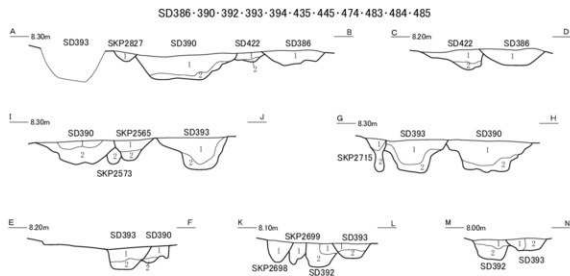
第 84 図 平安時代遺構平面図 (遺物集中図)



第 85 図 平安時代遺構平面図・断面図
 (溝跡 SD275・386・390・392・393・394・435・445・474・483・484・485①)



第 86 図 平安時代遺構平面図・断面図
(溝跡 SD386・390・392・393・394・435・445・474・483・484・485②)



SD386
1 (色)10YR2/3黒褐色(性)シルト(調)+(型)+黄褐色粘土3%

SD390
1 (色)10YR3/4暗褐色(性)粘シルト(調)++(型)++
鹿山由來土を配状に3%
2 (色)10YR3/4暗褐色(性)粘シルト(調)+(型)+(型)+
鹿山由來土を配状に20%

SD392
1 (色)10YR3/4暗褐色(性)シルト(調)+(型)+
鹿山由來土を配状に5%
2 (色)10YR3/4暗褐色(性)シルト(調)+(型)+
鹿山由來土を配状に10%

SD393
1 (色)10YR3/4暗褐色(性)粘シルト(調)++(型)++
鹿山由來土を配状に5%
2 (色)10YR1/6褐色(性)粘シルト(調)++(型)++
10YR6/8明黄褐色粘土を配状に10%、10YR3/3暗褐色シルトを配状に20%

SD422
1 (色)10YR3/4暗褐色(性)粘C(調)++(型)++
鹿山由來土を配状に5%
2 (色)10YR3/4暗褐色(性)粘C(調)++
鹿山由來土を配状に20%、炭化物3%

SKP2565
1 (色)10YR3/4暗褐色(性)シルト(調)+(型)+
黄褐色粘土3%
2 (色)10YR3/3暗褐色(性)シルト(調)+(型)+
黄褐色粘土を配状に40%

SKP2573
2 (色)10YR3/3暗褐色(性)シルト(調)+(型)+

SKP2698
1 (色)10YR3/4暗褐色(性)シルト(調)+(型)+
鹿山由來土を配状に3%

SKP2699
1 (色)10YR3/3暗褐色(性)シルト(調)+(型)+
鹿山由來土を配状に5%

SKP2715
1 (色)10YR3/4暗褐色(性)シルト(調)+(型)+
鹿山由來土を配状に40%
2 (色)10YR3/4暗褐色(性)シルト(調)+(型)+
鹿山由來土を配状に40%

SKP2927
1 (色)10YR2/3黒褐色(性)シルト(調)+(型)+
鹿山由來土を配状に5%

SD386



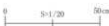
SD386
1 (色)10YR2/3黒褐色(性)粘質シルト(調)+(型)+
黄褐色粘土を配状に20%
2 (色)10YR3/4暗褐色(性)粘土(調)+(型)++
暗褐色土を配状に3%

SD394



SD394
1 (色)10YR2/3黒褐色(性)シルト(調)+(型)+
黄褐色粘土3%
2 (色)10YR3/4暗褐色(性)粘土(調)+(型)++
暗褐色土を配状に3%

SR440



第 87 図 平安時代遺構平面図・断面図
(溝跡 SD386・390・392・393・394・422、土器埋設遺構 SR440)

る1-2区であり、西側20m程の地点に堅穴建物跡S I 175や土取穴S K 296が構築されている。11房断面に見える頻繁な地山土供給は、平安時代人によるこれら遺構の造営や運用によってもたらされたと考えられる。土砂を大きく動かす時期と、土木作業を休止した時期がある。

このような層相の形成に関わる遺構が粘土採掘坑である。この遺構は、S K 249・251・252・264・296・298・299・306・307・310・311・319・320・337・343・344、S N 255で構成される遺構群（第78～80図、第7・8表、第2分冊第2図3～6、第4分冊第29表、第3分冊図版35～40）。最も大形のS K 296をはじめとして、頻繁な掘削と埋め戻しが行われている。地山面から漸移層にかけて著しい土壌の攪乱とS K 343上部における土師器集中、S N 255における焼土を検出した。遺構群の長軸10.6m、短軸4.33m、深さ0.65m。不整円形から不整楕円形の土坑が密集する。底面は鍋底状の凹みが続く。S K 343から3個体以上の坏がまとまって出土。S K 344底部から大形の坏が1個体出土（第2分冊第3図1）。土師器焼成遺構S N 295が北西8mの位置にあり、粘土採取坑と解釈した。平安時代10世紀第1～2四半期。

畑跡S D 344（第81図、第6表、第4分冊第29表、第3分冊図版239-2）は、平安時代の黒色土層から漸移層で確認した。江戸時代初頭の畑跡S D 433他と溝の方向は共通する。堆積土が黒色土であるため、洪江家造成の盛土で直接埋められた江戸時代の畑跡とは異なり造成開始時にはすでに廃絶していた。

溝跡S D 386・390・393・394・445他（第85・86図、第7表、第3分冊図版27～31）は、一連の溝を構成する掘り方の単位である。何回かの掘り直しがされており、少しづつコースがズレている。江戸時代の中土橋通り西側を区画するS D 404と交差する。黒色土で埋まっていることから洪江家造成時には廃絶しており、平安時代とした。江戸時代の溝が直線的であるのに対し、低地から台地緩傾斜を北西に登るように緩い曲線を描く。

（2）遺物

平安時代遺物は、灰軸陶器、須恵器、土師器がある（第2分冊第1～4図、第4分冊第1・2表）。主な遺構の出土遺物を概略する。

S B 401 pから出土した灰軸陶器碗（第2分冊第1図3）は東濃産で生産年代は9世紀後葉におかれる。9世紀代の遺構はS I 209があるものの、他に同時期の遺構・遺物は無いことから、S B 401 pへの埋納は、10世紀中葉に下ると推定した。同じく9世紀の須恵器長頸瓶破片（第2分冊第1図2）の内面には墨が塗られており、払田橋跡に隣接する厨川谷地遺跡で注目されたように、祭祀に伴う墨塗り行為としておく。

比較的まとまった数の土師器が出土した9遺構土師器坏を第9表に抽出した。これらは口縁部残存率4%以上の破片178点と4%未満の破片に分け、4%以上の破片は残存率を合算して最小個体数を25個体と算出した。また口縁径を復原し、重量の平均値154gを1個体の推定重量とした。復原口縁の度数分布は第88図・第8表に示した。直径11.1～14.0cmまでの3cmの間に161点と全178点のほとんどが含まれる。1cmごとに40～62点とほぼ同数となる。大形の個体では直径18.1-19.0cmのものがあ。これに類する資料として、S K 344出土品を第2分冊第3図1に掲げた。口縁に対する底径比、高さに対する高径指数を散布図とした（第89図、第10表）。

残存率4%未満の破片は、遺構ごとの合計重量を量り、先に算出した1個体推定重量で割って重量による最小個体数を29～49と算出した。これは9遺構出土の土師器重量を合計した重量を154gで割って求めた場合は29個体、各遺構ごとにそれぞれ最小個体数を求め合算した場合は49個体となる。

第3章 発掘調査の方法と成果

従って、残存率4%以上の個体を用いた最小個体数25と、残存率4%未満の破片重量から復原した最小個体数の内少ない方を採用して29個体を合計すると54個体が上記9遺構から出土したと言える。

これら9遺構について、出土土師器の破片数に対する灯明皿の組成比を示した。土師器焼成遺構S N119の灯明皿組成比が33%と最も高く、同じ土師器焼成遺構S N295では3%と最も低い。堅穴建物跡ではS I175が207点中41点20%と高い数値を示す。F検定の結果1%の危険率で高度に有意である。

第6表 平安時代遺構一覧(1)

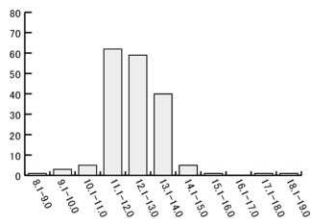
遺構番号	遺構種類	大グリッド	大グリッド	X	Y	Z	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	角度	東西	時代	坪田	第3分層図版番号	備考	
15	SK	LG	39	-30960.057	-60945.272	8.51	0.52	0.42	0.19	30	E	平安			土師器出土	
100	SE	MI	47	-30906.399	-61022.844	9.918	0.56		0.70	27	W	平安	74			
103	SK	MK	43	-30924.588	-61041.406	9.21	3.94	1.82	1.04	25	E	平安	76			
109	SN	MJ	43	-30927.371	-61029.159	9.895	0.16	0.20	0.04			平安	82			
119	SN	ML	41	-30933.227	-61046.165	9.841	1.12	1.11	0.08	6	E	平安	83 84	33-1・2・3・4・5 34-1		
121	SN	MG	38	-30947.776	-61024.197	9.643	1.28	0.55	0.29	45	W	平安	82			
123	SK	ML	47	-30909.294	-61047.295	9.958	1.29	1.68		17	E	平安	76			
133	SK	MO	42	-30930.858	-61056.148	10.081	2.21	0.90		64	W	平安	76			
174	SN	MP	39	-30941.311	-61066.614	10.27						平安	82			
175	SI	MQ	39	-30943.225	-61062.983	9.74	3.05	3.04			22	E	平安	64 69	14 22-3・4・5・6 23-1・2・3・4 24-1・2・3・4	隅丸方形
186	SN	MN	40	-30937.32	-61053.094	9.39	0.91	0.79	0.20			平安	82	34-2・3		
195	SN	MN	39	-30940.969	-61053.578	9.81						平安	82	34-4・5		
206	SN	MM	39	-30943.673	-61049.994	9.38	0.73	0.54	0.16	-	-	平安	82	35-1・2		
209	SI	MI	37	-30950.625	-61032.86	8.02	1.76	1.22		-	-	平安	70			
210	SN	MP	36	-30953.303	-61071.291	9.67	0.45	0.45		-	-	平安		35-3・4		
216	SK	MN	41	-30924.036	-61055.251	9.77	0.76	0.73				平安	75			
217	SI	MO	40	-30928.76	-61059.775	9.92	0.49	0.24				平安	70	24-3・4		
217	SI	MP	40	-30928.755	-61049.986	10.14	2.29(丸)	0.80(丸)	0.45	91	E	平安				
217	SI	MP	40	-30928.84	-61049.772	9.78	0.91	0.66				平安				
223	SK	MR	35	-30964.341	-61071.489	9.08	0.55	0.55				平安	75			
244	SK	MP	40	-30936.226	-61049.709	9.91	0.60	0.54	0.11(床面から)			平安	75	192-1・2		
244	SK	MP	40	-30936.869	-61040.448	9.78	0.46	0.42				平安				
248	SI	MP	40	-30936.518	-61062.8	10.08	2.80	2.04(丸)				平安	64 70	14 25-1・2 32-3		
249	SK	MO	39	-30941.772	-61039.194	9.54	0.98	0.66(丸)				平安	78 79			
251	SK	MP	39	-30942.747	-61040.329	9.5	1.05	0.71	0.24			平安	77 78	193-3		
252	SK	MO	39	-30943.009	-61039.806	9.6	1.07(丸)	1.17	0.22			平安	77 78	193-4		
253	SN	MP	37	-30948.645	-61040.328	9.33	1.72	1.43	-	-	-	平安	78 79	35-5・6		
264	SK	MO	38	-30945.547	-61059.63	9.18	2.52	1.74				平安	78 79	36-7 38 37-1・2・3・4 38-1・2		
265	SI	MR	36	-30953.806	-61068.136	9.51	4.45	3.58		49	E	平安	71	26-1		
266	SI	MQ	37	-30948.265	-61067.928	9.8	2.99	2.88				平安	72	26-2		
266	SI	MQ	37	-30948.789	-61065.693	9.65	0.24	0.23				平安				
267	SI	MR	37	-30949.792	-61068.78	9.79	4.19	2.29				平安	72	26-3		
268	SN	MO	37	-30950.167	-61056.518	9.34	東方1.96 概1.077	東方1.52 概1.044	-	-	-	平安	77	35-7 36-1・2		
269	SK	MP	37	-30951.638	-61061.302	9.27	2.72	2.52				平安				
275	SD	MP	37	-30960.223	-61061.555	9.55	4.31 (総延長)	0.47				平安	85		長い遺構の方位調査は3か所に区切っている	
290	SI	MO	36	-30953.712	-61066.111	9.2	3.42	3.43		10	E	平安	64 73	14 27-1・2・3 28-1・2 29-1・2	建物部分	
291	SN	MO	36	-30954.403	-61058.966	9.31						平安			SD200出土	
292	SK	MQ	36	-30953.233	-61046.763	9.31	0.84	0.49				平安				
293	SK	MR	38	-30947.045	-61070.05	9.48	2.04(第1.44(第					平安	72			
295	SN	MP	40	-30937.771	-61063.313	10.13	2.14	2.34	-	-	-	平安	64 70	14 25-2 31-1・2・3・4 32-1・2・3	SE248床面、SE248より新しい、土師器焼成遺構	
296	SK	MO	39	-30942.893	-61057.365	9.35	3.89	2.20		24.5	E	平安	78 79			
297	SK	MO	37	-30949.789	-61058.015	9.2	1.96	1.62(丸)				平安	77	35-7 36-2		
298	SK	MO	39	-30943.245	-61056.558	9.25	1.44	0.88(丸)				平安	78 79	40-2		
299	SK	MO	39	-30943.495	-61058.667	9.25	0.98	0.67				平安	78 80	39-1・2・3・5		
300	SK	MQ	37	-30961.275	-61065.063	9.54	1.27	1.36				平安				
301	SK	MQ	36	-30954.348	-61065.215	9.55	0.89	0.74				平安				
306	SK	MO	40	-30939.887	-61057.542	9.67	0.89	0.41				平安	78			
307	SK	MO	38	-30944.443	-61058.831	9.26	0.54	0.43				平安	78 80	39-3・5		
310	SK	MO	39	-30942.95	-61058.104	9.22	1.04	0.72				平安	78 79	39-4		
311	SK	MO	39	-30942.882	-61058.613	9.34	1.83	1.70				平安	78 80	39-1・2・5		

第7表 平安時代遺構一覧(2)

遺構番号	遺構類別	大タリッド	大タリッド	X	Y	Z	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	角度	方位	時代	詳細	第3分館図記番号	備考	
315	SN	MP	36	-30955.298	-61062.122	9.46	0.45	0.35	-	-	-	平安	83	36-5-6		
317	SN	MO	36	-30954.519	-61056.979	9.28						平安			S1290	
319	SK	MO	38	-30944.9	-61058.221	9.25	1.09	0.95				平安	78 80	39-5-40-1		
320	SK	MO	39	-30942.435	-61056.839	9.15	1.62	0.97				平安	78 80	40-2		
321	SK	MO	38	-30944.724	-61058.743	9.26	2.01	1.84				平安	78 80	201		
327	SK	MO	39	-30943.34	-61056.442	9.14	0.74(内)	0.35(内)				平安	78 80	40-2		
328	SN	MN	37	-30950.668	-61055.461	9.41	1.26	0.80			85	W	平安	77		
343	SK	MO	39	-30942.891	-61057.22	9.07	1.04	0.71				平安	78 80	40-2		
344	SK	MO	38	-30944.023	-61058.429	9.11	0.80	0.80				平安	78 80	39-1-2 40-3		
367	SK	ME	36	-30954.939	-61016.418	7.23	0.76(内)	0.75			50	E	平安	77		
375	SK	LO	43	-30925.24	-60979.936	7.53	2.05	1.80	0.19	56	W	平安	75			
375	SK	LO	43	-30924.61	-60978.41	7.47	0.32	0.30				平安				
375	SK	LO	43	-30924.829	-60979.649	7.48	0.19	0.16				平安				
375	SK	LO	43	-30924.614	-60979.745	7.5	0.26	0.25				平安				
386	SD	LS	41	-30933.007	-60992.275	7.67	1.23(内)	0.47				平安	85 86	40-4 41-2 112-2		
387	SK	LT	41	-30932.018	-60997.152	7.82	1.40	0.97	-	48.5	W	平安	77			
388	SK	LR	42	-30929.37	-60991.81	7.87	0.90	0.66				72.5	W	平安	77	
389	SK	LR	42	-30928.13	-60990.569	7.81	1.51	0.56	0.19	85	W	平安	81			
390	SD	LR	44	-30922.299	-60990.812	7.82	2.14(内)	0.56				平安	85 86	40-5 41-1-2 42-1		
391	SB	LS	43	-30925.047	-60992.275	7.21	1.65	1.90				平安	64 66	14 17-1-2 18-1-2-3 19-1-2-3-4 20-2 40-5 41-2	横字支柱	
392	SD	LR	41	-30922.654	-60989.177	7.45	6.70	0.38				平安	85 86	41-2-3		
393	SD	LR	40	-30938.891	-60989.168	7.01	68.37(内)	0.71				平安	85 86	40-5 41-1-2-3 42-3		
394	SD	LS	41	-30935.655	-60993.015	7.43	118.25	0.58				平安	85 86	41-2 42-1		
395	SK	LS	43	-30925.136	-60993.224	7.08	1.32	0.99				平安	66		横字支柱	
401	SB	LM	46	-30913.923	-60969.916	7.25	9.27	6.63			15	W	平安	64 65	14 15-1-2-3 16-1-2-3 17-4 18-6 7-8 127	
406	SD	LK	47	-30909.942	-60963.077	6.64	16.80	7.15	-	-	-	平安				
418	SD	LQ	41	-30935.219	-60987.394	7.65	0.37	0.14				平安	81	112-2 230-2		
418	SD	LQ	41	-30932.525	-60987.069	7.79	2.09	0.25				平安				
418	SD	LQ	41	-30933.724	-60987.467	7.76	1.88	0.29				平安				
418	SD	LQ	42	-30931.064	-60986.219	7.86	2.91	0.32				平安				
418	SD	LR	41	-30925.69	-60988.171	7.68	6.77(短軸長)	0.59				平安			長い遺構の 為計測は3 条所に区 切っている	
418	SD	LR	41	-30924.563	-60988.09	7.72	1.71	0.22				平安				
418	SD	LR	41	-30933.027	-60988.705	7.77	1.40	0.16				平安				
421	SKP	LR	43	-30924.957	-60990.957	7.09	1.47	0.88				平安	66		横字支柱 SB429 p	
422	SD	LR	44	-30921.189	-60988.743	7.89	1.93(内)	0.65(内)				平安	85 87	41-2		
429	SK	LN	42	-30930.011	-60974.799	6.99	1.40	1.19			25.5	W	平安	81		
432	SK	LP	40	-30937.441	-60983.638	7.02	0.66	0.34(内)			76	E	平安	81		
435	SD	LR	40	-30938.893	-60989.624	7.29	2.40(短軸長)	0.41				平安	85 86	42-3	長い遺構の 為計測は3 条所に区 切っている	
435	SD	LR	40	-30938.269	-60989.996	7.11	0.24	0.22				平安				
436	SD	LT	38	-30945.981	-60990.648	7.02	7.35	0.54				平安				
439	SB	MB	39	-30941.022	-61004.841	7.37	0.22(内)	0.48	0.53			平安	64 67	14 20-1-2 21-1-2-3 4-5-6 22-1-2	横字支柱	
440	SK	LT	39	-30941.107	-60999.827	7.53	0.20	0.20				平安	67			
445	SD	LR	35	-30968.712	-60990.02	6.21	7.34	0.54				平安	85 86	43-1 44-1-2-3 44-2 86-1 124-4		
445	SD	LR	35	-30968.458	-60989.118	6.25	20.45	0.53				平安				
445	SD	LR	38	-30947.668	-60990.773	6.77	11.50	0.33				平安				
445	SD	LR	39	-30940.304	-60989.436	6.94	4.40	0.40				平安				
448	SE	LN	41	-30933.996	-60973.376	5.35	2.32	2.16(内)			1.54	54.5	E	平安	64 75	14 30-1-2
451	SK	MA	37	-30949.829	-61000.568	7.07	0.56	0.44			54	W	平安	81		
452	SK	MC	35	-30968.821	-61009.502	6.87	0.64	0.32			21	E	平安			
474	SD	MA	35	-30969.094	-61001.811	6.6	10.58	0.60				平安	85 86	42-1-2		
499	SD	MC	35	-30968.998	-61008.464	7.48	0.56	0.39(内)			-	69	W	平安		SN474から 発見
481	SK	LT	35	-30957.615	-60999.283	6.62	1.28	1.08				平安	81	234-4-5		
483	SD	LS	35	-30966.639	-60992.428	6.71	2.42(内) (短軸長)	0.26(内)			73	W	平安	85 86		計測誤差
484	SD	LR	35	-30968.322	-60991.837	6.69	2.10(内)	0.35			73	W	平安	85 86		計測誤差
485	SD	LS	37	-30960.904	-60995.498	6.81	4.2(内)	0.50			71.5	W	平安	85 86		計測誤差
501	SN											平安	83			
542	SB	LR	43	-30924.116	-60988.613	7.88	5.90	4.21			83	W	平安	67		横字支柱 SB20を測り
547	SA	LT	39	-30942.617	-60998.812	9.55	5.22				38	E	平安	65		

第8表 坏口縁直径度数分布

直径(cm)	点数
8.1-9.0	1
9.1-10.0	3
10.1-11.0	5
11.1-12.0	62
12.1-13.0	59
13.1-14.0	40
14.1-15.0	5
15.1-16.0	1
16.1-17.0	0
17.1-18.0	1
18.1-19.0	1



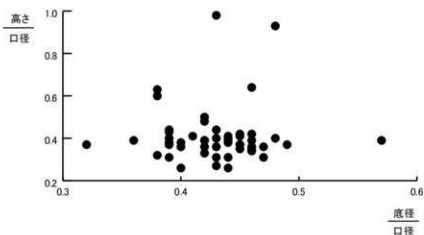
第88図 坏口縁直径

第9表 坏最小個体数

遺構No	残存率合計	残存率計算重量g	残存率計算外重量g(0)	推定個体数
SN119	7.053571429	521.2	2351.12	31.81848207
SN295	0.666666667	157	177.2	0.752441614
SE448	3.472301587	352.4	31.5	0.310378831
SK123	2.946428571	501	72.2	0.424615056
SI290	0.822916667	49.3	394.9	6.591679344
SI266	0.979166667	80.3	378.6	4.616594022
SI248	1.21875	121.1	94.4	0.950041288
SI175	5.619444444	1582.4	903.6	3.208878918
SE448	2.206944444	475.6	60.6	0.281204444
合計	24.98619048	3840.3	4464.12	
	残存率から推定した個数	1個当たりの推定重量g	残存率計算外推定個数①	残存率計算外推定個数②
	25	154	29	49

第10表 坏 底径指数・高径指数

番号	遺構	残存口径	残存底部	高さcm	底径指数	高径指数	番号	遺構	残存口径	残存底部	高さcm	底径指数	高径指数
4	SX119	14	8	5.5	0.6	39.3	SI296	12.8	5.4	4.6	0.4	35.9	
533	SX119	14	5.6	5	0.4	35.7	SI296	12	5.4	5	0.5	41.7	
31	SK123	12	5	4	0.4	33.3	SI296	13	5.5	6.2	0.4	47.7	
42	SK123	13.2	5.2	5	0.4	37.9	SI296	12.8	5	4.7	0.4	36.7	
43	SK123	11.5	4.5	5	0.4	43.5	SE448	12.5	5.5	5.1	0.4	40.8	
27	SI175	14	6	13.7	0.4	97.9	SE448	13.3	6	4.9	0.5	36.8	
166	SI175	13	5.6	3.5	0.4	26.9	SE448	12.2	5.2	4.9	0.4	40.2	
172	SI175	13	5.6	4	0.4	30.8	SK100	13	6	4.7	0.5	36.2	
201	SI175	13	5.8	4.8	0.4	36.9	SK123	13.2	5.2	5.3	0.4	40.2	
203	SI175	12.3	5.9	11.4	0.5	92.7	SK123	11.5	4.5	5.1	0.4	44.3	
204	SI175	12.6	5.6	4.8	0.4	38.1	SK344	18.8	7.6	4.8	0.4	25.5	
207	SI175	13.7	6.3	4.6	0.5	33.6	SN295	12.4	5.4	5	0.4	40.3	
208	SI175	12.3	5.2	6.2	0.4	50.4	SR440	12.8	5.6	5	0.4	39.1	
16	SI248	12	5.5	5	0.5	41.7	SR440	12.8	4.8	8	0.4	62.5	
17	SI248	12	5.5	7.7	0.5	64.2	SR440	13.5	4.8	5.2	0.4	38.5	
95	SI266	13	5	7.8	0.4	60	-	11.6	5	5.1	0.4	44	
1	SK448	13.8	5.4	4.3	0.4	31.2	-	13	6	5.1	0.5	39.2	
2	SK448	14	6.6	4.3	0.5	30.7	-	12	5.4	4.9	0.5	40.8	
3	SK448	13	5	4.2	0.4	32.3	-	13.5	6.3	4.8	0.5	35.6	
5	SK448	12	4.8	4.6	0.4	38.3	-	12.32	5.1	5.1	0.4	41.4	
	SKPJ585	13.2	6.5	4.9	0.5	37.1	-	12.6	4	4.7	0.3	37.3	
	SI175	13	5.8	4.5	0.4	34.6	-	12	5	4.7	0.4	39.2	
	SI175	12.3	5.9	4.9	0.5	39.8	-	12.6	5.4	4.5	0.4	35.7	
	SI175	12.6	5.6	3.3	0.4	26.2	-	12.5	5.5	5	0.4	40	
	SI175	12.3	5.2	4.8	0.4	39	-	13	5.7	4	0.4	30.8	
	SI175	13.7	6.3	4.8	0.5	35							



第89図 坏法量散布図

3 江戸時代

江戸時代の遺構は土塁3基、礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡30棟、柱穴列23基、竪穴状遺構7基、井戸跡14基、溝跡64条、土坑173基、焼土遺構22基、畑跡2か所、道路跡2か所、河川埋立跡1か所、合計352である(第11～16表)。遺構は敷地全体に広がっていることから、地点ごとに分割して記述する。記述の順番は、1土塁、2正門と関連遺構、3脇門・中土橋門と関連遺構、4穴門周辺の遺構、5敷地北西部の遺構、6敷地南西部の遺構、7敷地北東部の遺構、8敷地南東部の遺構とする。

建物の復原は、八戸市博物館・八戸工業大学非常勤講師の中村隼人氏のご教示を基本とし、一部改変したところがある。

1 土塁と関連遺構(第90～105図、第3分冊図版45～66)

ここで扱うのは屋敷地を圍繞する土塁S F01と旧県立美術館から調査区へのびる土塁(S F旧県美と仮称)である。土塁上及び土塁下から検出した遺構もここで扱う。洪江家脇門の東側に設けられたS F408は、「3 脇門・中土橋門と関連遺構」で取り上げる。

(1) 敷地を圍繞する土塁S F01(第90図、第3分冊図版45～66)

調査区西側では洪江家上屋敷と下屋敷を分離し、南側では外堀に面して三の丸の南端を区画する。これらを西側土塁、南側土塁とする。あきた芸術劇場建設工事に伴い西側土塁北西部分MN50からLT66までの約90mを発掘調査した。MN50以南は保存されるはずだったため測量調査のみ行ったが、調査終了後の設計変更で大きく削平されることになり、未調査部分は立会とした。

西側土塁長さ176m、下底幅は削平地点で8m、他はおおよそ12～15mである。上面幅も削平地点では2m、その他は4mある。敷地平坦面からの高さ6mである。この内調査対象となった北西側76m分は削出土塁であり、その後盛土によって大きくなる。残りの130m分は削出土塁の上に盛土を続け、丘陵が南に向かって下がる分、盛土量が増えていると推測される。盛土土塁の底面には布地業が行われている。

南側土塁は東西長103m、下底幅は11～15m、上面幅は4～6mと変動する。高さは、下底面の標高が旧地形の傾斜に沿って標高7～9mと変化するため平均値をとって6mとする。また、南側土塁南面(堀に面した外側)は標高8m付近に傾斜変化点があり、上部では傾斜が若干緩くなる。西側土塁西面(下屋敷に面した外側)裾の標高も8m前後である。この西面と調査区内側では腰巻き状に擁壁が入るため、傾斜の変化は不明である。

西側土塁は丘陵を削り出した初期土塁を芯に大きく盛土する。地山由来の砂礫土、黄褐色土。削出土塁と盛土土塁の境界に黒色土の薄層(層厚5cm程度)が挟在しており、一定期間削出土塁が維持されたことを示す。削出部分は基盤層の段丘堆積物と天徳寺層であり緻密だがもろい砂礫層となっている。盛土部分の底面には布地業が施されている(第95～97・99図)。第5トレンチC断面31～37層、A断面19～26層、第7トレンチA断面35～40層が地業内堆積土である。SD16・25やSA28は、この布地業を掘り込んで構築されるので、これらの遺構を含めて削出土塁と組み合わせとなる施設のための布地業であろう。SD16は布地業から発出するので、施設下部構造の排水を担っていたと考えられている。南側土塁はほぼ盛土であるが未調査であるため、詳細は不明である。調査した掘部分では旧地表黒色土上に直接盛土されており、西側土塁のような布地業は見つけない。

削出土塁と盛土土塁の境界層から肥前産陶器皿(所謂唐津陶器皿)Ⅰ～Ⅱ期が目立って出土し、中国産磁器が共存する。肥前産磁器はほとんど含まれない。また、第2・3・5トレンチでは本層から

手づくねかわらけが多く出土した。この層からは渡来銭が出土し、寛永通宝は上部の盛土層から出土する。表土から上層には近代のスレート瓦が多く含まれる。

調査区MN51以北は、土塁の現存標高・現存幅が南側に比べて低く狭い。これは和洋女子高校建設に伴い、土塁が削平されたことを示す。また、土塁頂上に植樹された樹種も調査区MN51以南ではケヤキ、以北では松、LT65以東では桜である。ケヤキが江戸時代から続く秋田市保存樹木であるのに対し、削平された部分に再植樹された樹種は松・桜である。明治期に削平されたMI56周辺は、破損部分を丁寧に修復されて土塁の形状が復原されている（第98図）が、その後削平されたLR64以東はそのまま桜を植えたようである。

削出土塁を露出した調査中、砂礫層の壁面がバラバラと崩落していくのが目に見えてわかるほどであり、屋敷地を造成した江戸時代初期も削出土塁のままでは持たないことが分かっていたのだろう。それでも黒色土が数cm堆積する程度の期間は削出のままであり、盛土造成を始めたのは肥前陶器Ⅲ期（1630年頃）以後、または寛永通宝が流通する1636年以後である。

南側土塁は東西103mあり、南西隅は中土橋門の枘形を形成する。先述の通り南側は保存範囲であったため発掘調査の対象から外れ測量のみ行ったが、調査後工事範囲が拡大し、立会対応となった。掘削部分は土塁外側に幅0.6～1m程度の版築を行っており、内面は盛土である。

また南側土塁は、南西隅の底部旧地形標高が6.9mと低い。南東部隅の標高は8mである。盛土下からは、竈状遺構SN492（第3分冊図版240-4）が検出された。

測量時の表面観察では、南面掘削（堀に面した外側）の標高8m等高線付近から上部で傾斜度が緩くなる。北面側（調査区隅）の旧地形標高がほぼ同様の位置にあることから、南面側に現れた傾斜変化点より上部が盛土造成された部分と想定している。

（2）敷地外から連続する土塁と杭列

SF旧泉美（SA430・SA430SDを含む。第100～102図、第3分冊図版84・85）は、土塁本体ではなく、旧泉立美術館から伸びる土塁の末端土留柵SA430と区画溝SA430SDを検出し、土塁末端とした。SD405を調査中に調査区際から杭列SA430を検出して土塁末端の位置が特定できた。中土橋通り造成土由来の版築土上に構築される。本調査終了後の工事立会で、瀬戸美濃系陶磁器碗が1点出土した。現道下に土塁基底部が残り、旧泉立美術館側と連続する。土留柵SA430、SD405の続きが現中土橋通りの地下で土塁裾を区画すると推測する。SA430の杭同士はツタで連結されている。区画溝SA430SDは排水は担わず、SA430の木杭を打ち込み後埋めているかも知れない。

（3）土塁に伴う礎石列・柱穴列

SA2（第13図、第3分冊図版47）は、SF01北端上部で直径20～30cmの扁平な円礫の分布を認め、土塁上の建物跡と考えた。検出面が浅く江戸時代から近現代の陶磁器が出土した。柱筋の通りが悪いのは、土塁の屈曲形状に合致させるためと解釈し、板塼と控柱の可能性を考えた。SB21から10m程南に位置する。中間が欠けているが連続する構造物だった可能性がある。

SA21・SQ26（第103図、第3分冊図版48）は、SF01北端上部で直径10～20cmの扁平な円礫が集積されているのを認め、土塁上の建物跡と考えた。当初検出した2基を終えた後、別の礫集積を検出してSQ26としたが、配置と検出面を検討して同一遺構を構成すると考えた。この遺構も、現地表下で検出したため浅く、江戸時代から近現代の陶磁器を含む。ただし、柱穴p1は60cm近い掘り込みがあり、柱抜き取り後にφ10～20cm程の礫が埋められている。建物跡としては柱筋の通りが

悪く、板塀と控柱の可能性が高い。S B02から10m程北に位置する。中間が欠けているが連続する構造物だった可能性がある。

盛土土塁を除去した布地業上面で検出したのがS A28（第104図、第3分冊図版58～61）である。S D25を伴う。中村氏所見では「南北方向を桁行とする十一間の塀ないし柵。北端で東に1間ある」。遺物は柱穴からは出土していないが、本遺構を埋めるS F01盛土直下の黒色土は、肥前産陶器皿（唐津陶器小皿）I-2～II期のみが出土するため、1610～1630年の遺構である。削り出しの初期S F01に沿う建物の一部である可能性がある。なお、S F01に沿って断続的に同規模の柱穴があり、調査区南西側のS A520に連続するかも知れないが、本遺構南端とS A520北端の距離が47mあるため別遺構とした。本遺構はS F01が盛土で規模を増大させたときに廃絶するが、S A520は盛土土塁裾際に並列することから、時期差の可能性が高い。並行するS D25は北端で東へ直角に曲がるため、本遺構と組み合わせになる。

S A85（第105図、第3分冊図版65）も、S F01の盛土下から検出した。検出時はS K85・86と土坑としていた。中村氏所見は「東西方向を桁行とする二間の塀ないし柵」。S A28・S D25と同時期に佐竹小路に面して設置された柱穴列。S A135p4と食い違いを作る様に見える。

S A131（第105図、第3分冊図版49）は、S F01上面に柱穴が4基並ぶのを検出した。現地表下で浅い。土塁頂部に設置された板塀列の柱穴と考えた。

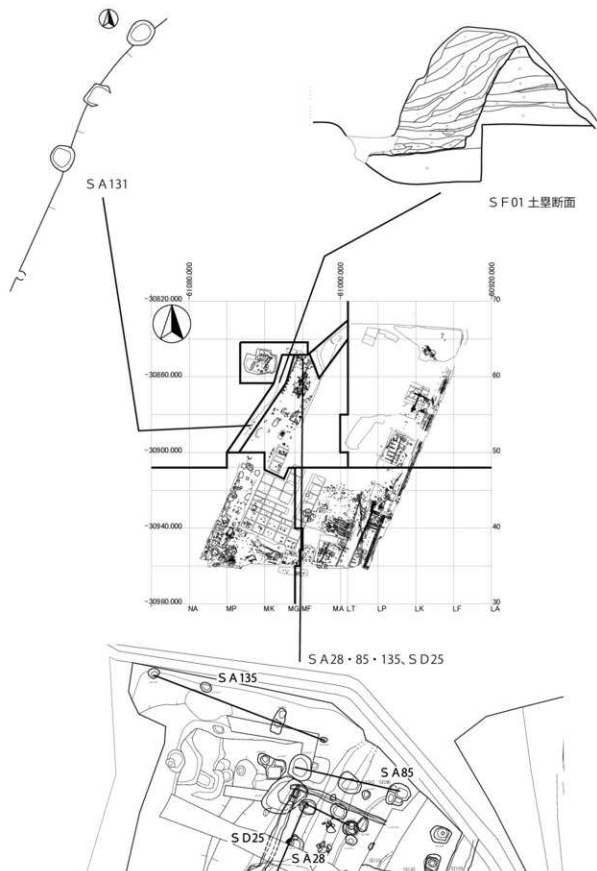
S A135（第105図、第3分冊図版130）は、佐竹小路に面したS F01北端斜面で柱穴を4基並んで検出した。穴門の後側には他に遺構がないため、これら4基が関連すると判断した。S F01由来の砂礫土で埋まり、江戸時代から近現代の陶磁器を含む。柱筋の通りは悪いが、佐竹小路に面しており穴門後側と洪江家土塁の隙間を塞ぐ柵列と解釈した。S A85と組み合わせとなるかも知れない。

（4）土塁に伴う溝跡

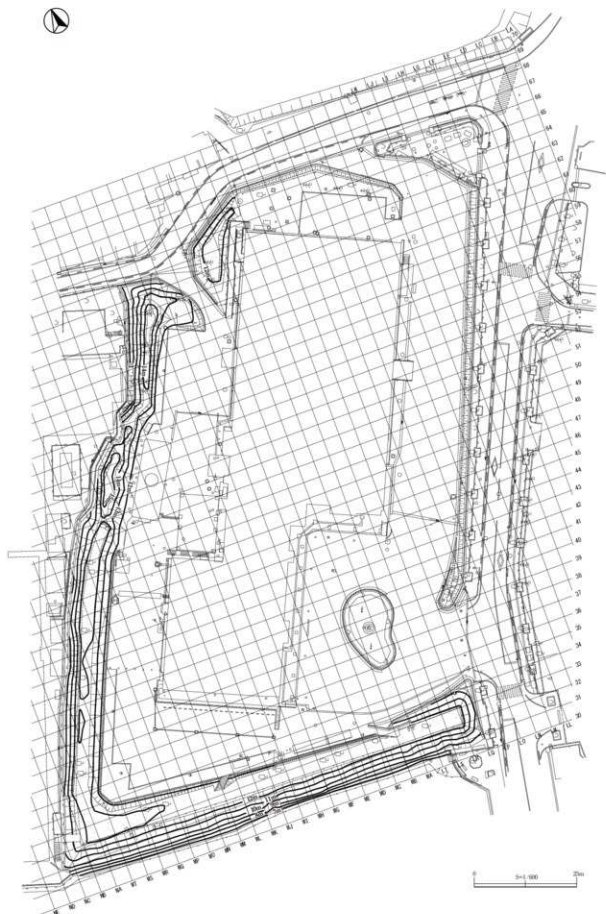
S D16・25（第99・104図、図版52）は、先述のS A28に伴う。S F01東側盛土を除去したところ、S A28と共に検出した。北端では幅・深さともに増大し、東から来るS D16と連結する。本遺構を埋めるS F01盛土直下の黒色土から、肥前産陶器皿（唐津陶器小皿）I-2～II期のみが出土するため、1610～1630年の遺構である。S F01が盛土で規模を増大させたときに廃絶する。北端部は佐竹小路に開口する。また、北端部でS D16が東から傾斜を持ってほぼ直角に連結する。S D16の東端は削平されていて不明だが、素掘りの溝であっても幅・深さとも30cmを超える太い溝に傾斜を持って東から連結する形態は、後述するS D20末端部に構築された石造U字溝と同じ構成である。

S D25は、S A28と並行して南から北上し北端で東に直角に折れる。布地業上面に設けられており、幅20～30cm、深さ10～20cmと細く浅いが明確である。

S D16・25は土塁が削り出しだった1600年代前葉から排水を担い、1630年代以後に盛土化した後廃絶し、S D20（後述）に切り替えられたと考える。素掘りの溝であるため、初期は開放したまま佐竹小路に排水していたと思われる。S D20への切り替えが盛土土塁化と同時なのか、盛土化した後も継続し、別なきっかけ（排水路の石造化）で切り替えられたのかは不明である。どちらにしても盛土土塁化した時点で暗渠化したかすれば、石造化したか木樋が埋設されたことになる。開放溝のままだとすれば迂回路を作って通用口のような入口（未検出）へ切り回したはずが検出できなかった。堆積土の傾斜も西へ下る印象を持っているので、何らかの方法で暗渠化が計られたのではないだろうか。S D20での使用される石造U字溝が元々はS D16・25で使われていたものの再利用なのか、新しく調達されたもののかなど、不明点が多い。1600年代第1四半期を中心に機能したと思われる。

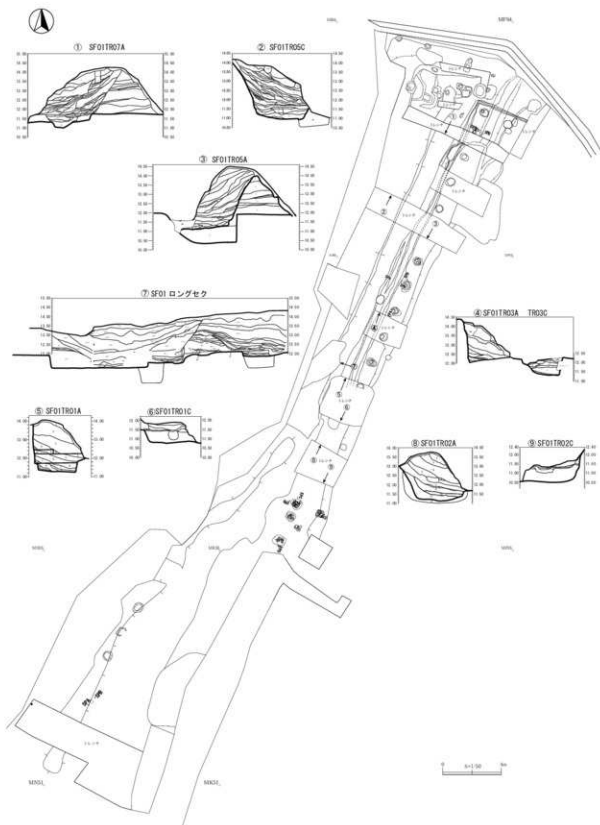


第90図 江戸時代（土壘関連）遺構配置図

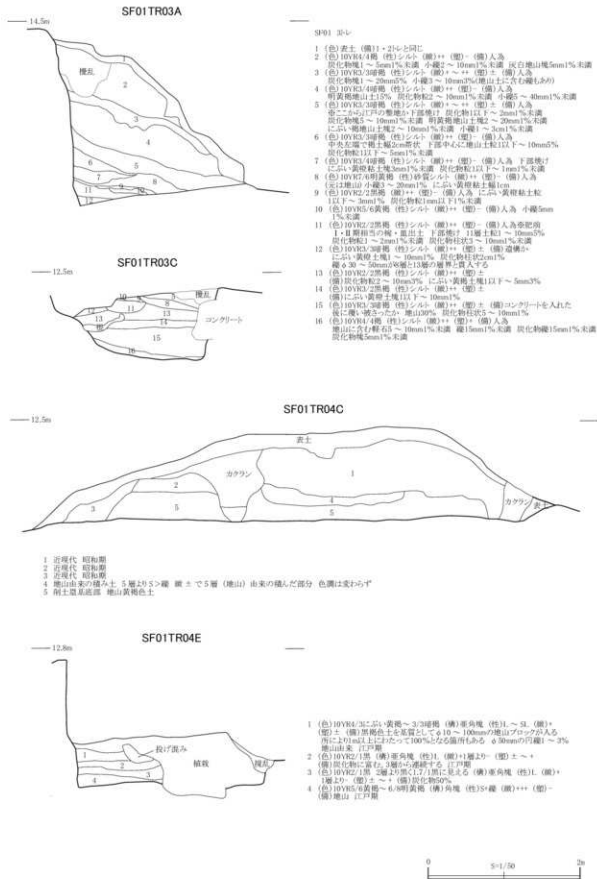


第91図 土壘平面図

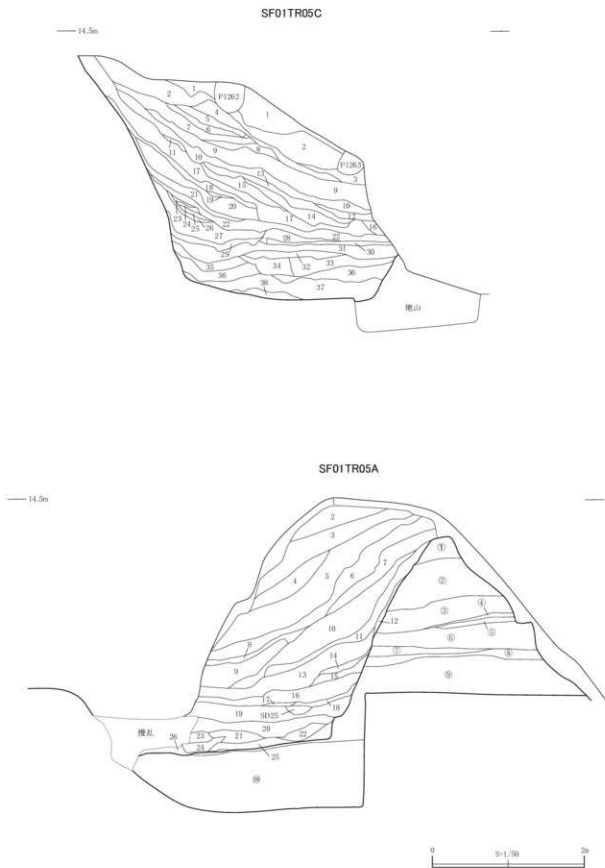
SF01 SA27 SB28 SA131



第 92 図 江戸時代土壘SF01 断面位置



第94図 江戸時代土塁SF01 断面図(2)



第95図 江戸時代土壘SF01断面図(3)

SF01 5トレ北側

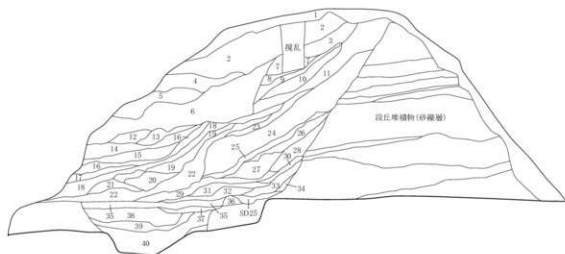
- 1 (色)5トレ北側相当
- 2 (色)10YR4/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)5トレ北3層相当か 小礫5～70m10% 地山土塊5m30%
- 3 (色)10YR4/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)小礫5～10m30%
- 4 (色)10YR3/4暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)小礫5～10m30% 地山土塊5m1% 未調
- 5 (色)10YR3/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)小礫20～30m(数個)1% 地山土塊5～20m5% 炭化物5～10m1% 炭化物粒2m1% 未調
- 6 (色)10YR3/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)5トレ北2層相当か 礫5～40m10%(10m以上は数個) 炭化物塊20m1% 未調
- 7 (色)10YR3/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)石5～40m3%(20m以上は数個) 炭化物5～20m1% 未調 地山土塊5～5m1%
- 8 (色)10YR3/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)礫5～20m5%
- 9 (色)10YR4/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)石5～10m3% 炭化物土9% 上部層部集中
- 10 (色)10YR2/2赤褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)5トレ北5層相当 地山土粒0～5m1% 未調 炭化物粒1～3m1% 未調
- 11 (色)10YR4/4暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)地山土粒2～3m1%
- 12 (色)10YR4/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)ブロック状の堆積 地山土塊5～8m3% 小礫5～8m1%
- 13 (色)10YR4/4暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)ブロック状の堆積 地山土塊5～20m20% 石5～20m5%(20mは数個) 赤12・13(注)江湾?
- 14 (色)10YR4/4暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)ブロック状の堆積 地山土塊5～10m1% 未調 地山土粒以下～3m1% 石10～30m3%
- 15 (色)10YR3/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)ブロック状の堆積 埋蔵土塊8～10m30% 石5～10・10m3%(50m12個) 炭化物粒2m1% 未調
- 16 (色)10YR4/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)埋蔵土 上部に30% 石5・20・40m(数個)2%
- 17 (色)10YR3/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)5トレ北6層相当か 地山土塊5～20m3% 石5・20・30m1% 炭化物塊5m1% 未調
- 18 (色)10YR2/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)5トレ北10層相当部相当 地山土粒以下～1m1% 未調 礫5～50m1% 未調 炭化物粒3m1%
- 19 (色)10YR4/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)埋蔵土山土塊 小石5～10m10%
- 20 (色)7.5YR4/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)地山土山土 礫5～50m15%
- 21 (色)10YR2/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)地山土塊5～8m1% 未調 炭化物塊2～5m1% 未調 炭化物粒5m1% 未調 (底部に集中)
- 22 (色)10YR3/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)礫10m2個(20%)
- 23 (色)10YR3/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)5トレ北5層土の混入土 古代堆物包含層
- 24 (色)20層土
- 25 (色)24層土
- 26 (色)20層土
- 27 (色)10YR3/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)含炭化物 礫10～20m3%
- 28 (色)10YR3/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)5トレ北5層土に相当 上部には23層土 地山粒1m10%
- 29 (色)10YR4/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)20層土の混入土 小礫5～10m
- 30 (色)10YR4/4暗褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)礫8～20・50m3%
- 31 (色)7.5YR4/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)小礫5～15m30%
- 32 (色)10YR3/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)礫8～15m40%
- 33 (色)7.5YR4/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)礫100～200m/礫60%以上は10～20mの小礫で構成
- 34 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂 (調)++ (調)- (調)石10～20m3%
- 35 (色)10YR4/6黄褐色 (性)砂 (調)++ (調)- (調)礫5～10m1% 未調
- 36 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂 (調)++ (調)- (調)石10～20m3%
- 37 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂 (調)++ (調)- (調)石10～20m3%
- 38 (色)10YR3/3～4/4黄褐色 (性)砂 (調)++ (調)- (調)埋蔵土か

SF01 5F4

- 1 (調)3トレンチ層に相当部上
- 2 (色)10YR4/4暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)土 (調)明治時代の残土 埋山土粒3m1% 未調 礫5～30m1%
- 3 (色)10YR4/4暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)土 (調)江戸期の残土か 埋山土粒3m1% 未調 地山土塊5～10m1% 未調
- 4 炭化物粒3m1% 未調
- 5 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)3トレンチ層以下江戸期 埋山土塊5m以上 上部～30m3%
- 6 (色)10YR4/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)3トレンチ層に相当 埋山土塊5～6m土 埋蔵土粒及石5以下に集中? 礫10～100m30%
- 7 (色)10YR2/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)3トレンチ層相当 江戸期の初期遺物出土 埋山土塊5～10m1% 未調 炭質埋蔵土土塊5～10m1%
- 8 炭化物粒2～3mm1% 未調 炭化物塊5～10m1% 未調
- 9 (色)10YR2/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)3トレンチ4・5層に相当か 風食地山土塊30～50m20% 浅黄埋蔵土土塊40m1%
- 10 (色)10YR2/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)埋蔵土風食土塊5～30m10% 礫5～60m1% 炭化物粒1～2mm1% 未調
- 11 (色)10YR4/4暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)石5個(小礫 礫5～30m3%)
- 12 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)土 (調)土 上部に埋物の層のメイン層 風食地山土粒1～2mm1% 未調 風食埋蔵土土粒1～2mm1% 未調 礫10～100m1% 地山土粒以下～3mm1% 未調 埋山土粒10m1% 未調 炭化物粒3～20mm1% 未調 炭化物塊3～20m1% 未調 炭化物粒3～20m1% 未調
- 13 (色)10YR3/6黄褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)埋蔵土の埋山土ヶらへ土を以てした土 礫5～300m5% 上部は小礫、土下(注)大きめが目立つ
- 14 (色)10YR3/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)風食埋蔵土粒以下～2mm1% 未調
- 15 (色)10YR3/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)礫、土 上部に埋物の層のメイン層 風食地山土粒10～20mm1% 中央土粒、左下部部層 礫5～20m土塊 炭化物塊10m1% 未調 炭化物粒5mm1% 未調
- 16 (色)10YR4/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)埋山土山土塊粒以下埋蔵? 礫3～30m30%
- 17 (色)10YR4/4暗褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)礫3～10m1% 未調 風色土塊10m3%
- 18 (色)10YR4/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)埋山土山土塊 礫5～15m3%
- 19 (色)10YR3/2暗褐色 (性)シルト (調)++ (調)- (調)江戸期の生活層 埋山土塊5m 地山土粒1～2mm1% 未調 礫5・30mm(礫の70%)
- 20 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)礫5～10m10% 灰白土塊5～15m5%(底部層中層15cm)
- 21 (色)10層相当
- 22 (色)19層相当 (性)砂質シルト
- 23 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)石10m・30m1・20m3%
- 24 (色)10YR3/4黄褐色 (性)砂 (調)++ (調)- (調)石10mm1個1% 未調
- 25 (色)20層土
- 26 (色)10YR3/4黄褐色 (性)砂 (性)砂 (調)- (調)- (調)地山土塊10～15m1% 未調 石5～25m3%
- 27 (色)7.5YR3/6暗褐色 (性)砂 (調)++ (調)- (調)埋山土 礫10～15m3%(砂が相方互層)
- 28 (色)7.5YR3/6暗褐色 (性)砂 (調)++ (調)- (調)埋山土 礫10～15m3%(砂が相方互層)
- 29 (色)7.5YR4/4暗褐色 (性)礫質砂質土 (調)++ (調)- (調)埋山土 石5～80m60% 赤12・13(注)赤い
- 30 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂(赤)赤い砂 (調)++ (調)- (調)埋山土 互層?堆積
- 31 (色)7.5YR3/6暗褐色 (性)赤い赤い砂 (調)++ (調)- (調)埋山土 互層?堆積
- 32 (性)礫質土 (調)埋山土 礫3～60m
- 33 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)埋山土 10YR3/8～10YR3/8の互層で一土と砂、その中に5m位の層が互層?
- 34 (性)赤土に礫層 (性)礫層 (調)++ (調)- (調)埋山土
- 35 (色)10YR3/6黄褐色 (性)砂質シルト (調)++ (調)- (調)埋山土 20mm(礫)で相互に打つて堆積
- 36 (色)7.5YR3/6暗褐色 (性)10YR3/4黄褐色 (性)砂 (調)埋山土 7.5YR3/6～10YR3/6赤土?赤土3～10mで互層状に堆積、上下は礫化、(性)礫化した礫層 (埋山土 5～90m)

第96図 江戸時代土塁SF01断面図(4)

SF01TR07A



SF01 71-1

1 (色) 表土・J1247J209・J307

2 (色) 51-北2層土と同じ

3 (色) 10VR3/4堆積 (性) シルト (層) + (型) - (備) 基本的には2層と同じ 地山土 全体に30% 小礫5~10mm%

4 (備) 2層土と同じ由来 礫10~40mm5% 地山土和2~3mm1%未満

5 (色) 10VR4/6堆 (性) 砂質シルト (層) + (型) - (備) 地山土由来 堆積土底層板状20mm10% 石10~40mm1%

6 (色) 51-北2層土と同じ

7 (色) 10VR3/3堆積 (性) シルト (層) - (型) - (備) 地山土塊20mm1% 地山土和3mm1%

8 (色) 7層土と同じ (備) 地山土塊3~3mm1%未満 石5~20mm3%

9 (色) 10VR4/6堆 (性) 砂質シルト (層) + (型) - (備) 石5~20mm1%

10 (色) 51-北2層土と同じ (備) 地山土塊10~40mm1%未満 炭化物塊10mm1%未満 石5・10・50mm1%未満

11 (色) 10層土と同じ (備) 地山土塊5~10mm1%未満 石3・10~30mm1%

12 (色) 10VR4/6堆 (性) 砂質シルト (層) + (型) - (備) 地山土塊 5~10・20mm10%

13 (色) 12層と同じ (備) 堆積土 全体に30% 炭化物粒10~5mm1%未満 石5~15mm10%

14 (色) 51-北2層土と同じ (備) 堆積土 全体に30% 炭化物粒10~5mm1%未満 石5~20mm15% 地山土塊10~15mm1% 地山土和2~5mm1%未満

15 (色) 10VR4/6堆 (性) 砂質シルト (層) + (型) - (備) 地山土由来 石5~20・30mm20%

16 (色) 51-北10層土と同じ 10VR3/4堆積 (性) シルト (層) + (型) + (備) 地山土塊5~20mm1% 地山土和1~3mm1%未満 炭化物塊5~15mm1%未満

17 (色) 10VR4/6堆 (性) シルト (層) + (型) - (備) 地山土由来 炭化物土塊20mm1% 石5~15mm1% 石5~20mmのブロック状で基本土層堆積

18 (色) 17層と由来は同じ (備) 地山土由来 地山土塊5~30mm1% 地山土和1~5mm1%

19 (色) 10VR4/4堆~4/6堆 (性) シルト (層) (備) 地山土由来 石5・10・20mm3%

20 (色) 10VR4/6堆 (性) シルト (層) + (型) + (備) 地山土由来 ブロック5・10~150mm単位で堆積 石10mm1%未満

21 (色) 18層土 (備) 地山土由来 地山土塊5~30mm10%

22 (色) 51-北22層土と同じ

23 (色) 51-北18層土と同じ

24 (色) 51-北20層土と同じ (備) 地山土由来

25 (色) 22層土と同じ

26 (色) 7.0VR4/6堆 (性) 砂質シルト (層) + (型) - (備) 地山土由来 石5~30mm10%未満

27 (備) 地山土由来 20層に18層土が20~30mmで上・中・下と堆積し、その中に基本土と同じ厚さで堆積10%

28 (備) 地山土由来 26層土に石5~50mm3%ラミナ状に堆積

29 (色) 13層と同じ (備) 地山土由来 石5~70mm20%

30 (備) 地山土由来 20層中に炭化物・炭白地土層5~5mm(仮説)に入り込む

31 (色) 7.5VR4/4堆 (性) シルト (層) + (型) + (備) 古代生活土層由来

32 (色) 10VR3/3堆積 (性) シルト (層) + (型) - (備) 地山土塊5mm1%未満 石3・10・30mm3%

33 (色) 10VR5/6黄褐色~5/8黄褐色 (性) 砂質シルト (層) + (型) - (備) 地山土由来

34 (色) 10VR5/6黄褐色 (性) 砂 (層) (備) 地山土由来 小石5~20mm3%

35 (色) 10VR4/6堆 (性) 砂質シルト (層) + (型) - (備) 地山土由来 炭化した面 石5~40mm20%

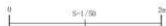
36 (色) 10VR5/6黄褐色 (性) 砂質シルト (層) (備) 地山土由来 石5~15mm10%

37 (色) 10VR4/6堆 (性) 砂質シルト~砂 (層) + (型) - (備) 石5~20mm10%

38 (色) 10VR4/4堆 (性) シルト (層) + (型) - (備) 石5・15・50mm15%

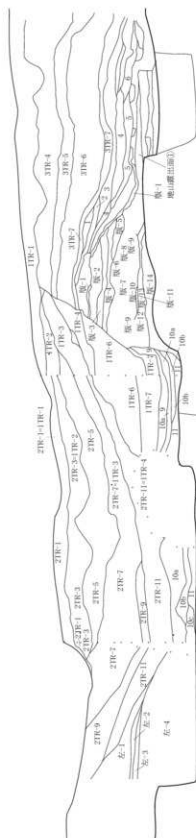
39 (色) 38層と同じ (備) 石5~15mm1%

40 (色) 38層と同じ (備) 石5~30mm30%



第 97 図 江戸時代土塁SF01 断面図 (5)

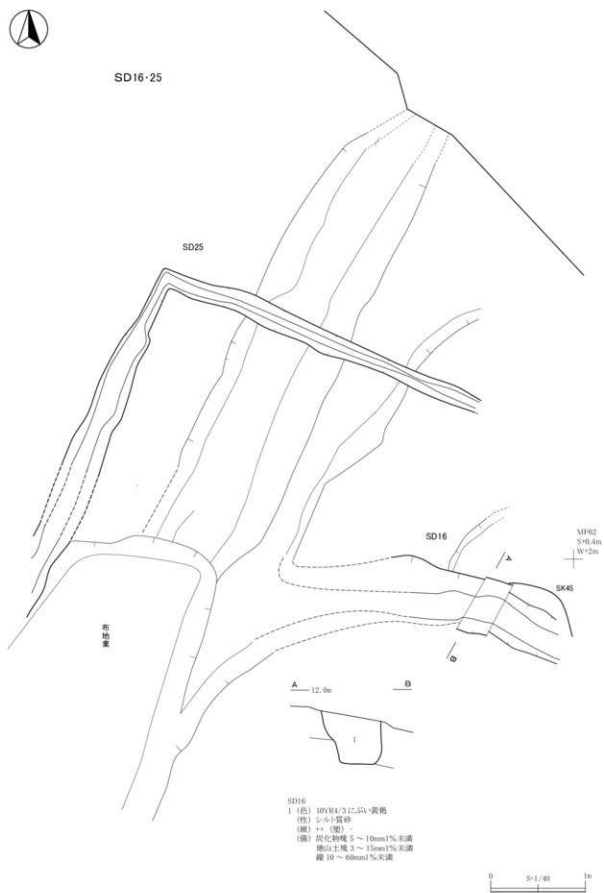
SF01 ロングセクション



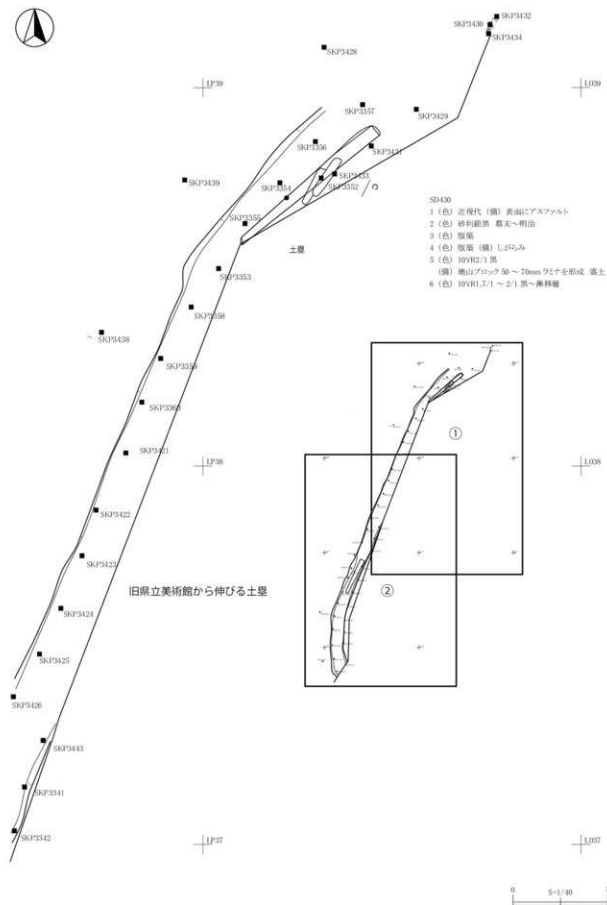
第98図 江戸時代土塁SF01断面図(6)

- 1TR-1 (色)10YR4/4褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)表土(壤土) 母礫土30%
母礫土10%
粒径<15mm%未満
- 1TR-2 (色)10YR3/3暗褐 (性)シルト (調)+ (調)土 (備)礫土 炭化物粒2~5mm
%未満 炭質堆積土堆土10~15mm%未満 炭質母堆積土堆土<5mm%未満
堆積土10%未満
粒径<15mm%未満
- 1TR-3 (色)7.5YR4/4褐 (性)砂質シルト (調)++ (調)土 (備)堆積土山由表
再堆積(壤土) 母礫土帯状に幅<10cm(母砂と相互に入っていく)20%
炭化物粒1~5mm%未満 粒径<20mm%未満
- 1TR-4 (色)10YR5/6黄褐 (性)砂 (調)++ (調)土 (備)堆積土山由表
再堆積(壤土) 粒径10~150mm%
炭化物粒1~5mm%未満 (性)砂質シルト (調)++ (調)土 (備)基本的に4層と同質
粒径10~150mm%
炭化物粒1~5mm%未満
- 1TR-7 (色)10YR3/3暗褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)近代遺物が出土
している。堆積土堆土<5mm%未満 粒径<20mm%未満
- 2TR-1 (色)10YR3/3暗褐・2.2原層(傾の褐色)シルト (調)土 (調)土 (備)表土人為的であら表土(化) 明黄褐色土堆土1以下~2mm%未満
明黄褐色土堆土3~5mm%未満
- 2TR-3 (色)10YR4/6褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)母礫土 右土中に2%
小礫5~20mm% 赤土質人土
- 2TR-5 (色)10YR4/6褐 (性)砂質シルト (調)++ (調)土 (備)成人(人)為堆積土山由表
炭化物粒5~10mm%未満 小礫5~20mm%未満
下部に粒径30~70mmの母礫土帯状
- 2TR-7 (色)7.5YR4/4褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)成人(人)為堆積土山由表
母礫土堆土3~50mm%未満 炭化物粒2~5mm%未満 黄褐色土堆土2~20mm%
粒径<20mm%未満
- 2TR-9 (色)10YR5/6黄褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)堆積土堆土3~10mm%母礫土1以下~5mm%4で変じる
人土 炭化物粒1~5mm%未満 小礫5~10mm, 30~50mm%
2TR-11 (色)7.5YR4/4褐 (性)砂 (調)++ (調)土 (備)堆積土山由表
下にスレッド石があるので人為 スレッド石1層 粒径3~30mm%
炭化物粒2~5mm%未満 小礫5~10mm%未満
- 3TR-4 (色)10YR3/3暗褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 明黄褐色土堆土1%
炭化物粒2~10mm%未満 小礫5~10mm%未満
- 3TR-5 (色)10YR3/3暗褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 堆積土山由表
炭化物粒5~10mm%未満 明黄褐色土堆土2~20mm%未満
下部に堆積土山由表<10mm%未満 小礫1~3cm%未満
- 3TR-6 (色)10YR3/3暗褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 堆積土山由表
中央左端で礫土2cm帯状 下部中心に堆積土山由表1以下~10mm%
炭化物粒1以下~2mm%未満
- 3TR-7 (色)10YR3/3暗褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 下部堆積
土山由表<5mm%未満 炭化物粒1以下~1mm%未満
- 4TR-1 (色)10YR2/1黒 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 印表土か土
母礫土1~20mm%
4TR-2 (色)10YR3/3暗褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 堆土
粒2~5mm% 炭化物粒1以下~2mm%未満 堆積土堆土1mm以下%未満
4TR-3 (色)10YR4/6褐 (性)砂質シルト (調)++ (調)土 (備)人為 堆積土山由表
粒径10~150mm%
4TR-4 (色)10YR4/6褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 堆積土山由表
母礫土堆土3~10mm上部中部10%未満 小礫1~3mm% 粒径<20mm%未満
4TR-5 (色)10YR4/6褐(性)3/3暗褐2が、3で変じる (性)シルト (調)++ (調)土
(備)人為 堆積土山由表 粒径5~20mm%未満
4TR-6 (色)10YR4/6褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 堆積土山由表
粒径10~60mm%
4TR-7 (色)10YR4/6褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)母礫土20%
母礫土1以下~20mm%未満
4TR-8 (色)10YR4/6褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)母礫土20%
炭化物粒1mm%未満 堆積土堆土3mm%未満
4TR-9 (色)10YR5/6黄褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)堆積土山由表
粒径<10mm%未満
4TR-10 (色)10YR3/3暗褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)母礫土3~5mm%
4TR-11 (色)10YR5/6黄褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 部分的な入り込み
母礫土表1以下~2mm%未満
4TR-12 (色)10Y5/5白
4TR-13 (色)10YR4/6褐 (性)砂質 (調)++ (調)土 (備)堆積土山由表 小礫<10mm10%
4TR-14 (色)10YR4/6褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)母礫土表1<10mm%
堆積土堆土5mm% 白色礫1以下~10mm%未満 堆積土
- 1 (色)10YR5/6黄褐 (性)砂質シルト (調)++ (調)土 (備)人為 堆積土山由表
小礫3~15mm%未満
2 (色)10YR4/6褐 (性)砂質シルト (調)++ (調)土 (備)人為 堆積土山由表
小礫1以下~20mm%未満
3 (色)10YR4/6褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為
粒径<3mmの5%程度の大きさ-緩の成人 小礫<40mm%
4 (色)13.5の1層(赤) (性)シルト (備)人為 堆積土山由表
5 (色)10YR3/2原層 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 粒径30~30mm%未満
炭化物粒2mm%未満 堆積土堆土5~10mm%未満 堆積土堆土2~3mm%未満
母土1以下~4mm%未満
6 (色)10YR6/6明黄褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)人為 堆積土山由表
小礫3~15mm%未満
10a (色)10YR4/4褐 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)近代遺土 粒径<20mm%
炭化物粒2~3mm%未満
10b (色)10c-2土 (備)近代遺土
10c (色)10YR5/6黄褐 (性)砂 (調)++ (調)土 (備)近代遺土 粒径<30mm%
11 (色)10YR3/2原層 (性)シルト (調)++ (調)土 (備)近代遺土
堆積土堆土2~5mm%未満 堆積土堆土20mm%未満 炭化物粒1~2mm%未満
炭化物粒10mm%未満 粒径<50mm%未満

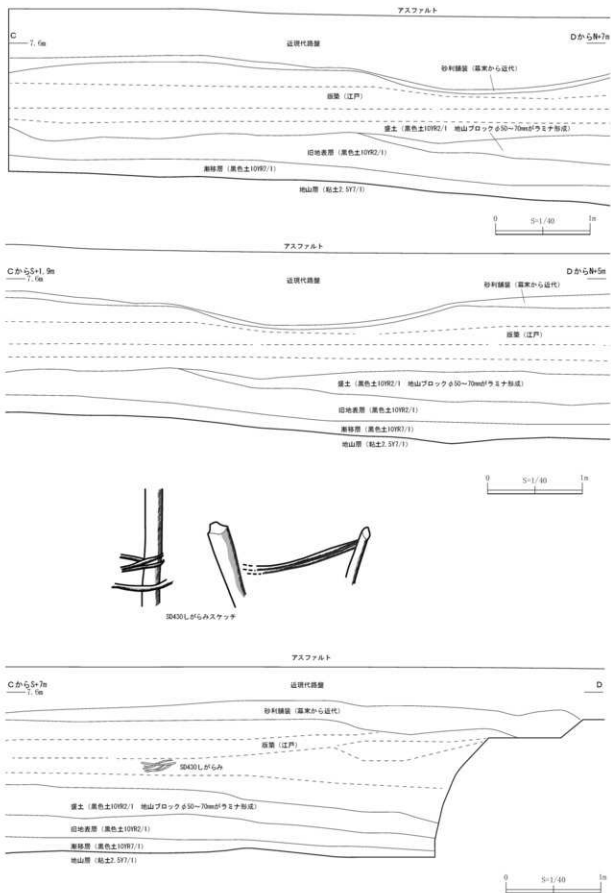




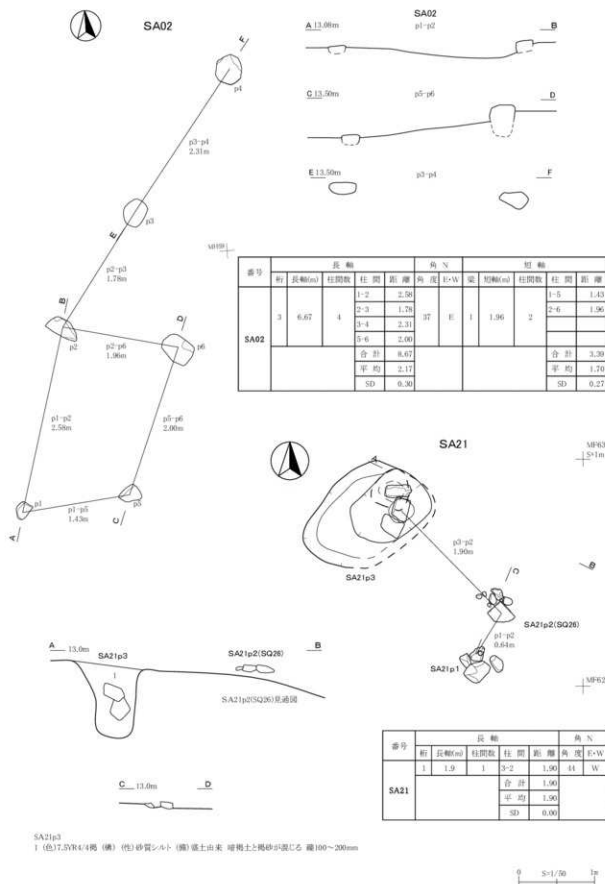
第99図 江戸時代(土壘関連)遺構平面図・断面図(溝跡SD16・25)



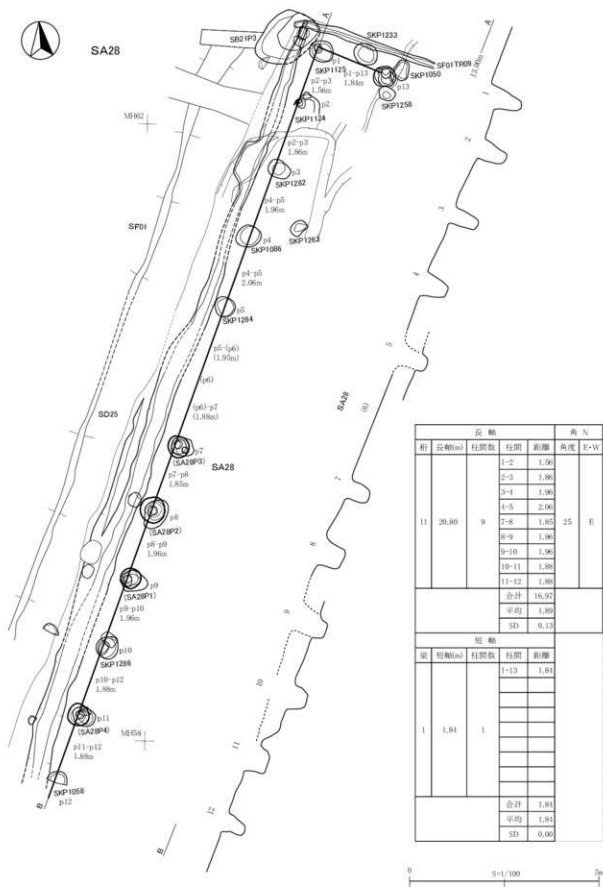
第 100 図 江戸時代 (土壘関連) 遺構平面図 (土留柵と溝跡SA430・SD1①)



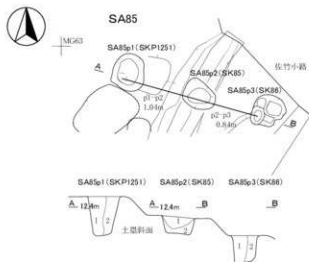
第102図 江戸時代遺構断面図 (土留柵SA430を取り除いた旧黒土壘末端見通し)



第 103 図 江戸時代 (土壘関連) 遺構平面・断面図 (柱穴列 SA02・21)



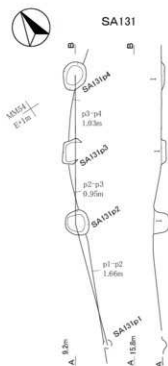
第104図 江戸時代(土壘関連)遺構平面・断面図(柱穴列SA28)



番号	長軸			角 N		
	桁長軸(m)	柱間数	柱間距離	角度	E-W	
SA85	2	1.88	1-2	1.04	76	W
			2-3	0.84		
			合計	1.88		
	平均	0.94				
		SD	0.10			

SA85

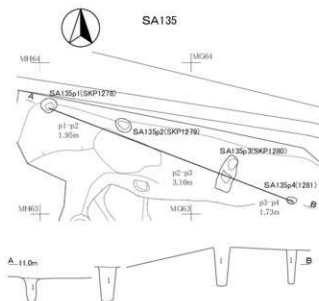
- 1 (色) 10YR3/2 基質 (構) 垂直壁 (性) SL (層) + (型) +
 (備) 地山由来の土塊: 10φ ~ 20φ 10% 混入 雜: φ5 ~ 20mm
- 2 (色) 10YR5/4 基質 (構) (性) SCL (層) + (型) **
 (備) 雜多<入る



SA131

- 1 (色) 7.5YR4/4 構 (性) 砂質土 (層) ** (型) -
 (備) 土量盛土由来 埴粉土と焼砂が混じる 雜3~30mm

番号	長軸			角 N		
	桁長軸(m)	柱間数	柱間距離	角度	E-W	
SA131	3	3.64	1-2	1.66	32	E
			2-3	0.95		
			3-4	1.03		
			合計	3.64		
			平均	1.21		
			SD	0.32		



SA135

- 1 (色) 7.5YR4/4 構 (性) 砂質シルト (層) ** (型) -
 (備) 土量盛土由来 埴粉土と焼砂が混じる 雜3~30mm

番号	長軸			角 N		
	桁長軸(m)	柱間数	柱間距離	角度	E-W	
SA135	3	8.73	1-2	1.95	68	W
			2-3	3.10		
			3-4	1.73		
			合計	6.78		
			平均	2.26		
		SD	0.60			

0 S=1/100 2m

第105図 江戸時代(土壘関連)遺構平面・断面図(柱穴列SA85・131・135)

2 正門と関連遺構

(1) 正門建物跡（第106～119図、第3分冊図版67～82）

S B305（第106～111図、第3分冊図版67～78）は、礎石建建物である。中村氏所見は「近世ならば表門に付随した礎石の袖塀。近代ならば門と考えたい」。礎石は3基残り、1基は礎石の掘穴のみを検出した。柱p1・p3（桁行柱筋）の西側には、石製U字溝を直線に並べた排水溝SD1が付随する。礎石接地面よりも下に焼土面がある。東西方向の断面図（第110図、第3分冊図版72）では9層上部に焼土層が形成され、焼土層を覆う4層がある。4層は緻密な砂利を多く含む三和土となっている。礎石は三和土層の上に置かれる。石造排水溝上端と同一面が緻密な三和土である。

石造排水溝下から「宝暦九年卯十一月二十七日」と線刻された硯（第107図、第2分冊第268図1）と、北側に隣接する地点から青銅製の鋸と釘が出土している（第2分冊第246図3・5、第4分冊第48表）。正門の扉に関わる遺物である。

礎石の設置に当たっては、先に土坑状の下部構造を掘り、それを埋め戻した後、栗石や砂利で根固めをした上に礎石を置いている。下部構造は坪地業といってもよいが、版築と言うほど固められていない。礎石は3基しか検出されていないが、P1とP2の間は直方体の地覆石と根固め石で連結されており、P2の東側へもさらに根固めの礫が延びているのは、本来この位置には地覆石が置かれ礎石が設えられていた事を示唆する。

本遺構から東に数m離れた地点で検出した9層（三和土層下焼土層）と同一面の焼土層下から内野山産の陶器皿が出土したことから、この焼土面を1682年の洪江家火事によるものと推定した。

礎石p1・3の柱筋西側に石製U字溝を直線に並べた付属排水溝SD1についてもここで記述する（第109図）。検出できた南端のU字溝は長さ1m、幅60cm、深さ69cmと大形である。南側のU字溝が北側末端のU字溝より大きいのは、屋敷地南側の排水も担うからであろう。南側は2基のU字溝がかなり急角度で礎石p3に併設された集水弁に連結する。p3よりも南側ではU字溝の標高が11m近くとなり礎石設置面よりも1m弱高いため、U字溝は強く傾斜して集水弁へ向かう。集水弁から下流は失われているが、正門内であるので水平だったはずである。北から正門内を横断して集水弁に連結するU字溝は水平である。そのため、南側U字溝が集水弁に連結する傾斜変化点で排水が溢水しないように急傾斜部分に蓋石がかかる。このように急傾斜から水平への変化点上方側にあるU字溝に蓋石をかけるのは、敷地北西側のSD20、洪江家脇門のSD288と共通する。

SD1北側側ではU字溝は南側のみを開口し、北側はふさがれている。またU字溝の底面自体が開口部へ向かって傾斜を付けて造られている。U字溝の内法は幅・深さが20cm程度と南側のU字溝に比べて小さく、従って北側はほぼ本建物周囲の排水のみを集めたと言える。水は、北から南に流れ、p3脇の集水弁に流れ込む。集水弁よりも東側は近代の造成によって失われているが、本来はSB305南側梁行の礎石・地覆石に併走して、東へ流下する石造排水溝が設えられていたはずである。集水弁は直方体の石材を4本組み合わせで構築される。外側60cm×60cm、内法50cm×50cmである。石材は礎石と似た安山岩を用いる。

S Q336（第115図）とした栗石を集積した遺構も、関連する可能性がある。検出標高が9.8m前後、栗石下面の標高が9.7m前後とSB305SD1よりも20cm以上高いが、SB305の西側は西から東へ向かって傾斜しているので西側が高く、同一面に乗っていたと考えることが可能である。1基だけ宙に浮いており、柱筋は通らない。SB502と関連するかも知れない。

本建物跡の北側に溝跡SD342（第30・31図、長さ6～7m、上面幅の最大4m）がある。近代遺物が出土したため江戸時代から外したが、小規模な土砂崩れか雨水の浸食痕跡であろう。SB305周

(2) 前門

中土橋通りから切岸斜面を登り正門に到達する前に置かれた掘立柱建物跡を前門と考えた。S B509は、正門S B305の東側、切岸中腹から裾にかけて建てられる掘立柱建物跡である(第118図、第3分冊図版80)。柱材は1辺9cmの角材である(第3分冊80-4)。柱穴には裏込めの礫が充填される。S B305・503・504とは桁行方向は合致するが、平入りの建物中心軸が合致しない。切岸裾から中腹にかけて設置された建物であるため、正門に到達するまでの数mを直線路とせず斜めに道を付けて登りやすくしたと推定した。切岸端を固める版築のため、切岸全体が版築の造成単位を示す階段状に造られているが、登り路や踊り場を遺構としては検出できなかった。明治時代に一時期住宅地として払い下げられたときに本地点は敷地内への進入路として使われており、その後記念館となったときに馬車道の斜路が造られたことで江戸時代の登り口が削平された事による。

S B510は、S B509に重なる北側、切岸裾に建てられる掘立柱建物跡である(第118図、第3分冊80-81)。調査区際で検出したため、柱穴の西側半分のみ調査し東側は現道下に残した。柱穴には裏込めの礫が充填される(第3分冊81-2)。S B509よりもさらに北側に位置しており、S B305の平入りの建物中心軸とは完全にズレてしまう。柱穴は2本検出したのでS B509に先行する冠木門を想定したが、切岸裾に建てられた大形の欄柵かも知れない。柱穴の特徴は裏込めに円礫を入れるなどS B509とよく似ており、冠木門から薬居門への変遷を想定したためS B509に先行すると考えたが、積極的な根拠に乏しい。中土橋通りを造成した版築土を切り込んでおり、現道下に柱穴の東側半分が残る。他にもSKP1192などしっかりした掘り方を持ちながら、建物復原に使うことの出来なかった柱穴が複数ある。発掘調査と県民会館解体工事の工程が同時進行となったために坪掘りを繰り返すような調査となったのが悔やまれる。

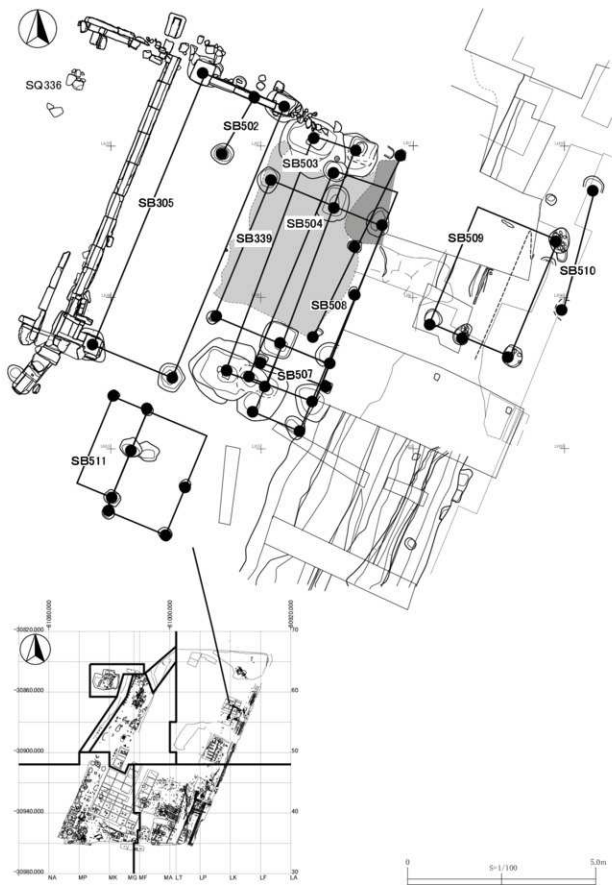
(3) 正門に附属する建物

S B511はS B305に隣接する小形建物跡である(第119図、第3分冊図版81)。S B503・504他と同様S B305に先行する建物跡を精査中に柱穴を検出した。中村氏所見は「南北方向を桁行とする身舎梁間一間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。ただ、p1・4の残存状態が良いため、西庇が1間取り付く形態とした。敷地内側を向く、正門に付属する控屋のような建物と考えた。焼土面との新旧関係は不明である。

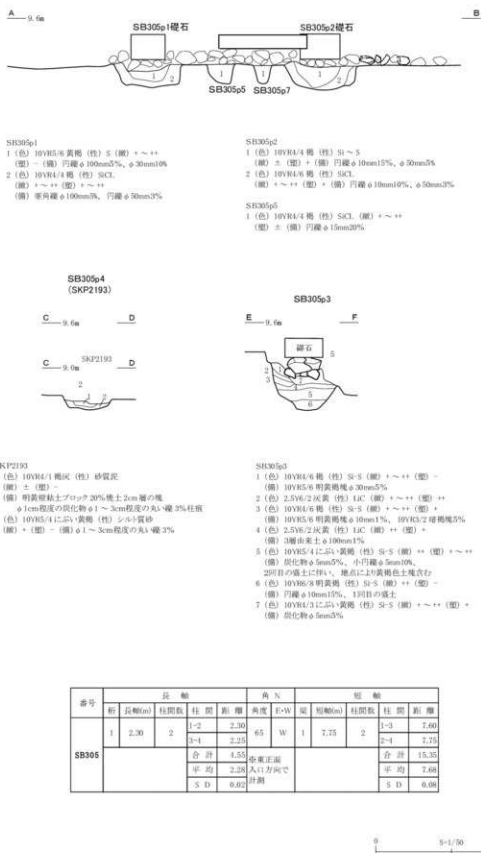
(4) 土地造成痕跡

盛土と版築によって造成される洪江家では、切り岸際がその痕跡を最も良く残している。S B305西側に南北に走る敷地盛土をS X304とした(第30図)。造成の痕跡は遺跡内で複数認められ、S X盛土痕跡としている。敷地東側に版築によって高さ30~60cm程度の低い土手を設け、その内側を盛土で埋め一杯になったら新たな版築土手を設ける(第111図、第3分冊図版82、付図)。その繰り返しで敷地東側切岸は造成されているため、断面は階段状に版築痕跡が連続する。おおよそ高さ・奥行き30~60cmを1単位とする。長軸方向の長さははっきりしなかったが、3~4mごとに版築単位が明瞭不明瞭を繰り返している。盛土痕跡・版築は検出地点ごとに遺構名を付けたものの系統的に記録を取ることが出来ず、その都度の断面図のみとなった。

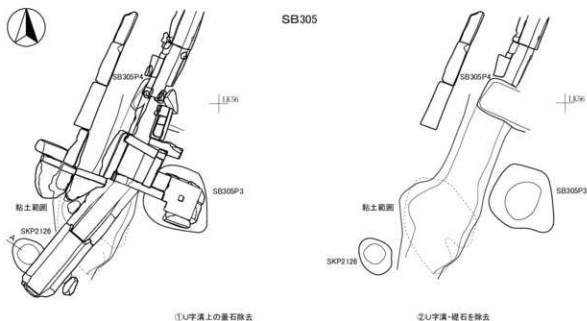
中土橋通りの造成も、調査区東側の現道下に続く。SF旧泉美でも述べた通り、中土橋通りの路盤下には版築によって造成された江戸時代の道路が残る(第3分冊図版80)。この遺構についても調査区東側の連続断面図は作成できず、その都度の断面図のみとなった。



第106図 正門関連建物配置図

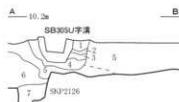


第 108 図 江戸時代 (正門) 遺構断面図 (掘立柱建物跡SB305)



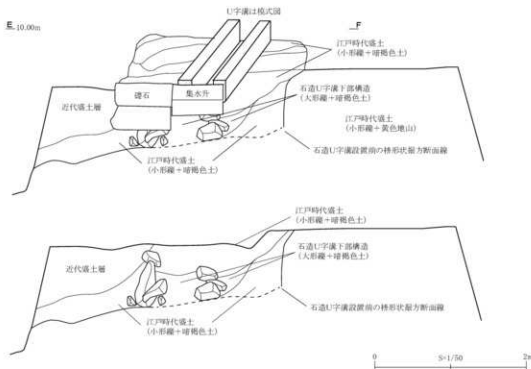
①U字溝上の礎石除去

②U字溝・礎石を除去

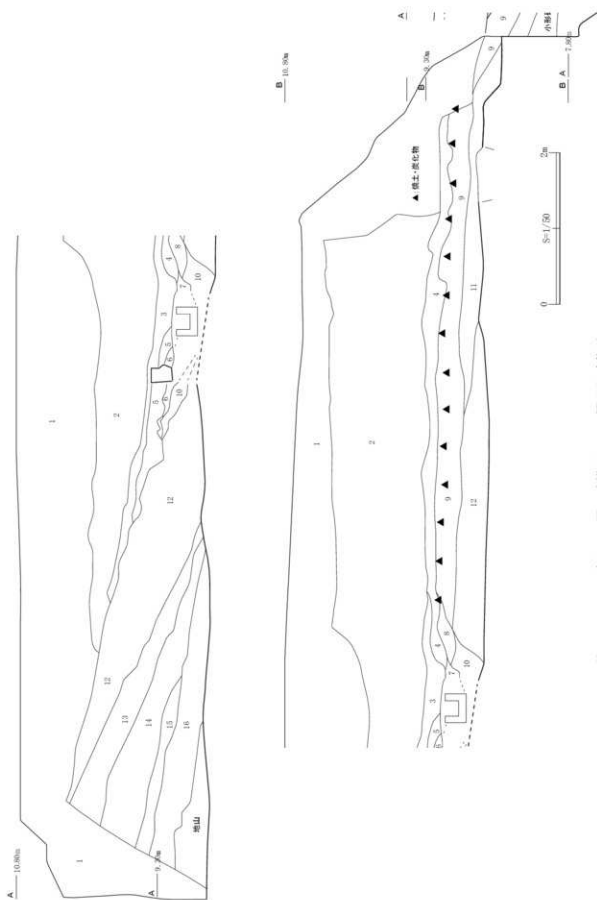


SB305 SKP2442 2136

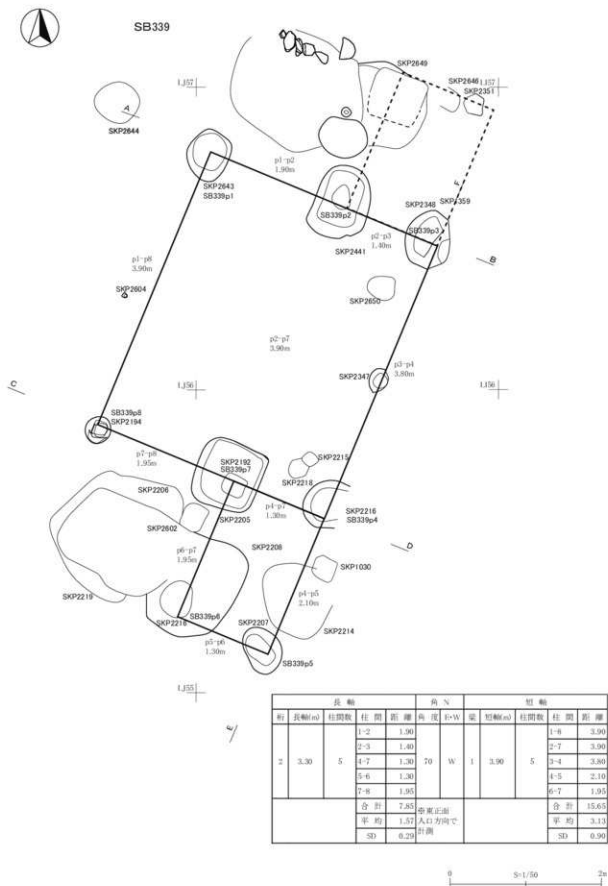
- 1 (色) 10YR4/6 褐 (性) S-S (硬) + ~ ++ (堅) - (備) 10YR5/6 明黄褐色 ϕ 30mm 5%
- 2 (色) 2.5Y6/2 灰黄 (性) L-C (硬) + ~ ++ (堅) ++ (備)
- 3 (色) 10YR4/6 褐 (性) S-S (硬) + ~ ++ (堅) ++ (備) 10YR5/6 明黄褐色 ϕ 10mm 1%、10YR3/2 暗褐色 5%
- 4 (色) 2.5Y6/2 灰黄 (性) L-C (硬) ++ (堅) + (備) 3層由支土 ϕ 100mm 1%
- 5 (色) 10YR5/4 に近い黄褐色 (性) S-S (硬) ++ (堅) + ~ ++ (備) 炭化物 ϕ 5mm 5%、小円礫 ϕ 5mm 10%、
2回目の盛土に伴い、地点により黄褐色土塊含む
- 6 (色) 10YR6/8 明黄褐色 (性) S-S (硬) ++ (堅) - (備) 円礫 ϕ 10mm 13%、1回目の盛土
- 7 (色) 10YR4/3 に近い黄褐色 (性) S-S (硬) + ~ ++ (堅) + (備) 炭化物 ϕ 5mm 5%



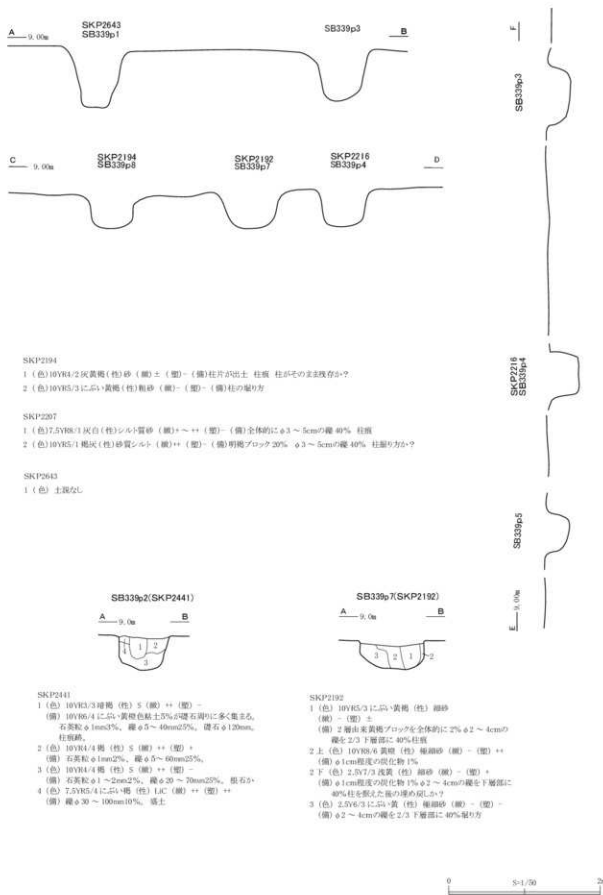
第109図 江戸時代(正門)遺構平面図・断面図(掘立柱建物跡SB305)



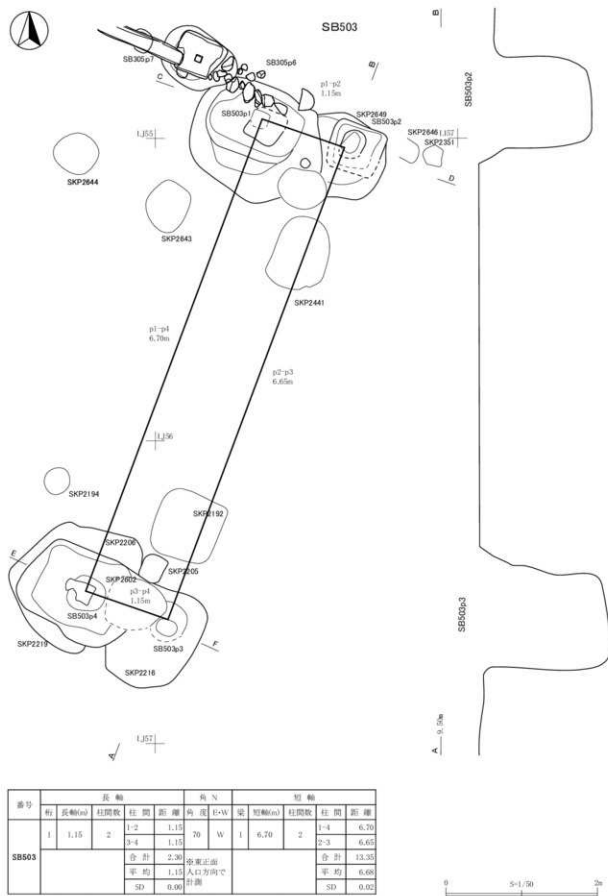
第110図 江戸時代（正門）遺構断面図（掘立柱建物跡SB305）



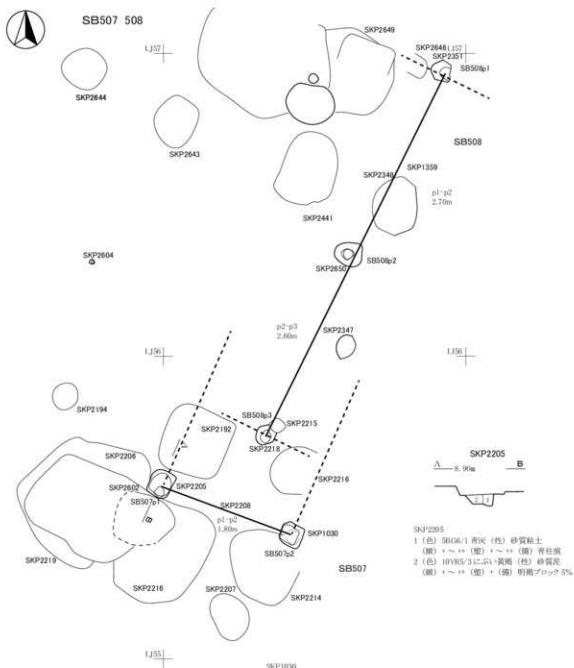
第 112 図 江戸時代（正門）遺構平面図（掘立柱建物跡SB339）



第113図 江戸時代(正門)遺構断面図(掘立柱建物跡SB339)



第 114 図 江戸時代（正門）遺構平面図・断面図（掘立柱建物跡SB503）

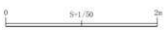


SKP2205
 1 (色) 81G6/1 青灰 (性) 砂質粘土
 (層) + ~ ++ (堅) + ~ ++ (硬) 青柱礎
 2 (色) 10YR5/3 に近い黄褐色 (性) 砂質泥
 (層) + ~ ++ (堅) + (硬) 明礬ブロック 0%

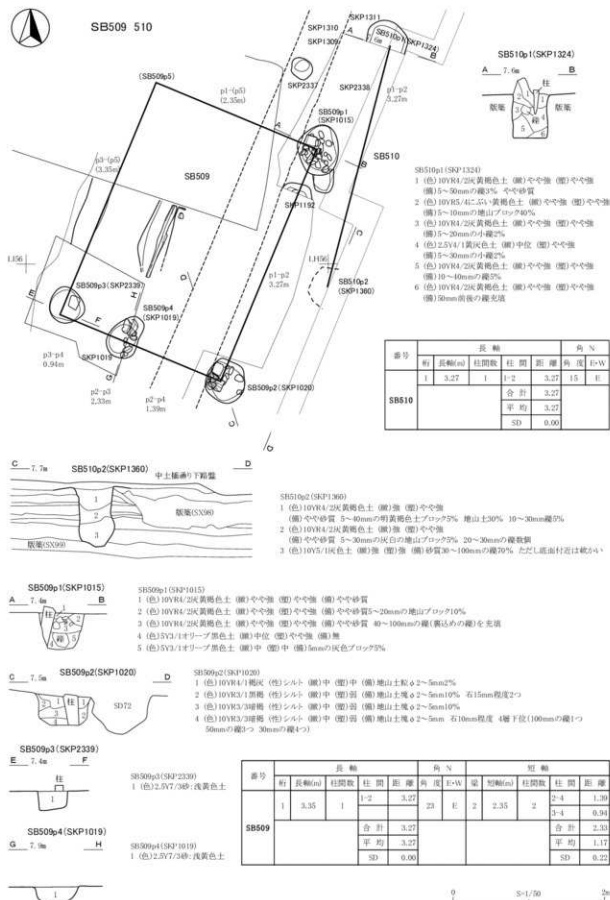
SKP1830
 1 (色) 10YR3/2 黒褐色 (性) 無 (層) 弱 (堅) 中 (硬) 炭: 3 ~ 5mm 20%
 2 (色) 10YR3/3 に近い黄褐色 (性) 無 (層) やや強 (堅) やや強 (硬) 炭: 2 ~ 3mm 5%

番号	長軸				角 N	
	桁	長軸(m)	柱間数	柱間距離	角度	E-W
SB507	1	1.80	1	1.2	1.80	60° W
				合計	1.80	
				平均	1.80	
				SD	0.00	

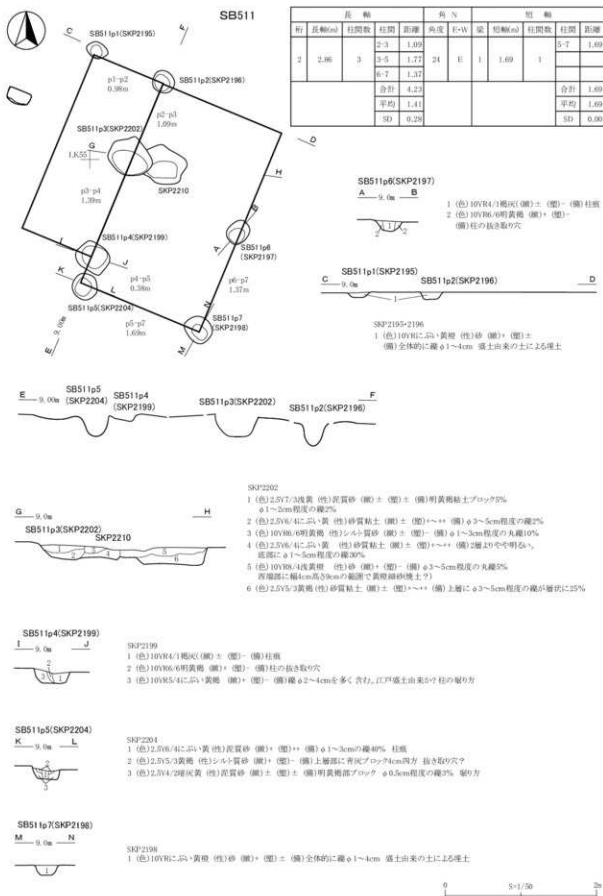
番号	長軸				角 N	
	桁	長軸(m)	柱間数	柱間距離	角度	E-W
SB508	2	5.3	2	1.2	2.70	26.5° E
				2-3	2.60	
				合計	5.30	
				平均	2.65	
			SD	0.05		



第 117 図 江戸時代（正門）遺構平面図・断面図（掘立柱建物跡SB507・508）



第118図 江戸時代(正門)遺構平面図・断面図(掘立柱建物跡SB509・510)



第119図 江戸時代(正門)遺構平面図・断面図(掘立柱建物跡SB511)

3 洪江家脇門と中土橋門、関連遺構

(1) 洪江家脇門の土塁 S F 408 (第128・129図、第3分冊図版93・94)

S F 408は長さ13m、幅4.3m、高さ1mで横断面は台形を呈する。敷地造成土を削り出して形成する。上面北側に焼土面 S N 278・500が形成される。S M 368斜路と S D 366に西側裾を区画される。東側は S D 428に区画されて中土橋通りに面し低い切岸となる。上面西側肩部に直径10~15cmの小穴が4基並ぶ。これを S A 410 (第3分冊図版93-1)とした。

東に開口する S B 402が脇門として使われていた時期には敷地東側の切岸の一部だった。脇門が S B 402から S B 2888に建て直され、門の開口部が東面から南面に変更されるにあたり、屋敷地と S F 旧県美が作る屈曲部に S M 368斜路を掘り込んで造った事で、本土塁が形成されたと想定した。土塁西側の小さな切岸と斜路 S M 368を区画するため S D 366が伴い、上面西側肩部に S A 410欄列を持つ。本土塁北側に S N 278・500焼土面が形成され、脇門 S B 402の柱穴上面にも広がる。この焼土面を1682年の火事痕跡とすれば、S F 408上面北側にも広がるので、火事は S F 408形成後に起きたことになる。従って、脇門が当初の東向きから南向きへ変わったのは、1682年の火事に先行すると推定した。

(2) 脇門・中土橋門

初期の中土橋門と思われる建物跡が S B 493・494である (第120図、第3分冊図版86・87)。2基とも対になる2本の柱穴で構成される。これらは、直接の切り合いが無いため新旧関係は不明である。S F 01・S F 旧県美・S D 404・S D 405と共に中土橋門を構成する門建物本体である。道路跡 S M 368と S D 404・405を精査中に柱穴を検出した。S M 386のかさ上げ堆積物に埋められる。柱穴は直径・深さ共に1mを超える。壁面が崩落したため、断面図は作成できなかった。

正保国絵図をはじめとして中土橋門はいずれも樓門として描かれている。これらは土塁の食い違い部を塞いだ様子が描かれており、S B 493・494とは位置・形式が異なる。門の形式が簡素であることから、S B 493・494は久保田城創建期に建てられた門と考える。

洪江家脇門を構成する建物の内、初期脇門建物が S B 402 (第121図、第3分冊図版92)である。門跡精査中に柱穴を検出した。柱穴 p 1 底面には長さ50cm、幅30cm、p 2 には30cm四方の大形礎石が据えられる。柱は抜き取りと考えた。

中村氏所見は「平面形から考えると東正面の門である。敷地の状況から考えると東側の柱穴が本柱・西側を柱穴が控柱に比定できる。単純に考えると一間一戸の門だが、本柱間の芯々寸法が大きい(約5,500mm、三間)ため、単純に板扉が入っていたとは考えがたい。扉が入っていなかったか、あるいは本遺構に付随する浅い柱穴ないし礎石があった可能性も考えられる」。

東に向かって開口するが、中土橋通りからの進入形式は不明。中土橋通りと敷地面(柱穴の検出面)の高低差が60cm以上あり S D 72他の排水溝を跨ぐ必要があるため、小さな橋をかけ階段かスロープとなっていたはずであるが、遺構としては検出できなかった。

S F 408でも記述した通り、S N 278・500焼土面が形成され、脇門 S B 402柱穴上面にも広がる。この焼土面が1682年の火事によって形成されたならば、この時点で本建物は焼絶していたことになる。

南に開口した新段階の脇門が、S B 2888 (第122・123図、第3分冊図版89~91)である。S M 368斜路を登り切った肩部にある。柱穴 p 1 底面には長さ50cm、幅30cmを超える直方体の大形礎石が据えられる。p 2 は礎石ごと抜き取られており栗石が残る。柱は抜き取りと考えた。中村氏の所見では「南正面。一間一戸。柱穴径と敷地の状況から考えると南側の前列を本柱・北側の後列を控柱とする」。形態は S B 402と同じだが、柱間の本建物の方が狭い。付随する S D 288と盛土単位 S X 285から青銅

製の飯が出土した（第2分冊第246図4・6～9）。

（3）脇門に付属する掘立柱建物跡

S B2888に先行する建物がS B543（第124図）である。中村氏所見は「桁行方向は不明。庇・下屋は無い」。柱は抜き取りと考えた。1間四方で他に組み合わせることの出来る柱穴がないため形式不明の門、または建物とする。S B402・2888を構成する柱穴が大形なので本遺構が小さく見えるが、掘り方もしっかりしている。S B2888との新旧関係は、本遺構の柱穴p 3がS B2888 p 4と重複して検出できなかったため、本遺構が古い。従って本遺構は門ではなくS B402に付随する建物と考えた。

以下の建物跡は洪江家脇門建物ではなく、中土橋通りにおいて洪江家進入路を塞ぐように建てられている。S B544（第124図）は、S E373上面、中土橋通りS M368中央に建てられる。中村氏の所見は「南北方向を桁行とする掘立柱建物で身舎梁間一間半の掘立柱建物である。東面に半間の下屋なし庇を持つ」。柱間を小溝S D424（第136図）・447がつなぐことから板壁が建っていた可能性が高い。S E373を覆い、洪江家脇門S B2888と斜路S M368を塞ぐように置かれることから、本遺構が建っていた段階では洪江家脇門はS B402を用い東側へ開口していたと判断した。S E373が機能していたら覆屋、廃絶していれば洪江家の番屋のような建物かも知れない。

S B545（第125図）もS E373上面、中土橋通りS M386中央に建てられる。中村氏所見は「南北方向を桁行とする身舎梁間二間の掘立柱建物である。庇・下屋は無い」。S B544よりも柱間半間南にずらして建てられる。S E373に一部差し掛かり、S B544と同様、洪江家脇門S B2888と斜路S M368を塞ぐように置かれることから、本遺構が建っていた段階では洪江家脇門はS B402を用い東側へ開口していたと判断した。これもS E373の覆屋、または洪江家の番屋のような建物かも知れない。S A546（後述）と連続しており、中土橋通りの通行人、洪江家への訪問者どちらへも対応できる。

（4）脇門に付属する欄柵

S A410（図版93-1）は、S F408上面西縁に小さな柱穴が4基並ぶことから欄柵とした。長さ2.7mである。脇門を区画するS F408の付属施設である。

S A546（第125図）は、S M386の道路幅を東1：西2に分けるように建てられる。北から2番目の柱がトレンチで削平され失われており、本来は5本あったと思われる。中村氏所見では「南北方向を桁行とする四間の扉なし欄柵」。S F旧県美の西側末端と並行するように設置されており、中土橋通りを歩く通行人を二の丸側と洪江家脇門側へ分離する欄柵に見える。S B544・545と設置方向が合致し、どちらかと同時に使われていたと推定。

（5）脇門を構成する溝跡

S D288（第125・126図、第3分冊図版95～98）は、S D366と共にS M386の脇門内斜路部分両脇を区画する石造の溝として検出。新旧2段階ある。新段階は石造で長さ6m、幅1m、深さ0.3m。底面には長さ50～60cm厚さ3cm程の長方形に整形された板石を敷き、その上に側石を配置する。古段階は側板を木杭で固定していたと思われるが、新段階に切られてはつきりしない。石造化した時の掘り方裏込めには直径5～10cmの礫が充填される。排水溝S D403、S D404と同時に石造化した。本遺構の側石南末端がS D404新段階北末端の地覆石の上に組み合せてS D403へ連続する集水升を形成する。本遺構の排水は集水升を介してS D403からS D405へ出る。

堆積層下部はグライ化した砂礫層で水成堆積の可能性がある。上部は脇門全体を埋める客土だが、中央部（第3分冊図版95）に大量の礫が堆積しており、この部分のみ側石が砕けている（第3分冊図版98-4）。土圧で砕けた可能性も考えたが、フレイク状に粉砕したような割れ方は不自然であるし、側石1つ下流側で雪平鍋の蓋（19世紀、第2分冊第110図4、第3分冊図版95、第4分冊第26表）がほぼ完形のまま出土している。上部への集中的な礫堆積と合わせて、新政府への引き渡し時に城割りに類似した行為があったと推定する。本遺構内及び周辺の盛土単位S X 285から青銅製の鉾が5点出土した（第2分冊第246図4・6～9）。

S D 366（第136図、第3分冊図版93・94）は、S D 288に対してS M 386の脇門内斜路部分東側を区画する溝として検出した。石造化されず素掘りのままである。浪江家脇門小土塁S F 408の裾を区画する以上の機能を持たなかったため、石造化されなかったと推定。敷地切岸（西側）からの排水はS D 288が担うため、本遺構が対応するのはS M 386斜路9.3m分とS F 08の西側面を下る雨水のみ（S F 408上面の水は東側へ直接排水）であるから、素掘りで十分対応できたと思われる。本遺構北側端にも焼土面が広がっており、1682年の火事の前から1868年の廃絶まで長期にわたって使われた遺構である。他にS D 409はS F 408上面北側を東西に横断している。短く浅いがS B 402に伴う排水溝かS F 408北側で排水を止め、S M 368斜路へ流さないための工夫だろう。

S D 403（第126・127図、第3分冊図版88～90・99～104）は、S D 288・404と共にS M 386を区画する石造の溝として検出した。新旧2段階ある。新段階は側石を長さ4.1m、幅1.3m分並べる。底面は素掘りのままである。深さは石造部分で0.3mだが古段階の底部がそのまま機能してるので溝全体の深さは0.4～0.5mある。西側末端は集水弁となってS D 288からの排水を受ける。東側は中央部でS D 405と連結し、排水をS D 405へ流す。S D 405連結部までは石造、連結部よりも東側は木製側板を杭で固定する形式のままで調査区外に出る。新段階の側石を除去すると、下部に古段階の木製側板と固定用の杭が検出される。これらは西側の集水弁下部まで連続する。

（6）中土橋通りを区画する溝跡

S D 404（第131図、第3分冊図版104～111）は、S D 405と共に中土橋通りS M 386両脇を区画する溝として検出した。長さ32.4m、幅0.48m、深さは新段階0.23m、古段階0.67mである。新旧2時期あり、古段階は側板を杭によって固定する。新段階は裏込めの栗石を埋めた上に直方体の地覆石を直線に並べる。古段階は排水溝、新段階は切岸とS M 386の境界表示の性格が強い。古段階は、強くグライ化した粘土で水成堆積層の上を埋める。S M 386のかさ上げに伴って人為的に埋め戻される。新段階は新たなS M 386路面を掘り込んで栗石を敷きその上に地覆石を据える。西側は切岸裾で埋められる。新段階の地覆石北側末端は脇門を構成するS D 403の側石南側を支える構造をとる。江戸時代中は維持されたが、中土橋通りが現在位置に移動した明治時代に埋められる。

新段階の地覆石は1辺10cm、長さ50～60cmの角柱で、北側末端の1点のみ安山岩、他は凝灰岩である。凝灰岩は2種類あり、緑色で相対的に緻密な個体と軽石が溶結した軟質白色の個体が混在する。

浪江家脇門回りの排水溝S D 403が石造化すると同時に新段階の地覆石を据える。地覆石北端がS D 288新段階南端の側石を支えS D 403と共に集水弁の一部をなす構造となるので、S M 386の嵩上げを含む中土橋門周辺の整備の一環として実施されたと判断。正確な時期は不明だが、正門の礎石化が宝暦九年（1759年）以後であるから、それより後と推定する。S D 288南端を支え集水弁の構造体を担う事から地覆石北端の1点のみは軟質な凝灰岩ではなく、頑丈な黒色安山岩を用いる。

浪江家切岸の裾を区画する排水溝の機能は古段階、新段階とも変わらないが、古段階が深さ30cm以

上あるしっかりした排水溝であったのに対し、新段階は現代のL字形排水溝に似た形態を取る。地覆石で留めた水を、栗石を充填して暗渠化した地下式排水溝に流す工夫で見た目は良いが、排水能力は下がったのではないだろうか。S D405が幅1mの大形排水溝であるから、排水機能の主体はそちらが担っただろうが、洪江家切岸から出る排水を受け切れたのだろうか。

新段階・旧段階とも溝南端はそのまま調査区際につづいており、先端の始末が不明である。古代の溝S D445A-Cと重複するS D445Dが土塁S F01前で直角に折れ西へ向かうことから、本遺構も西へ折れS D405と接続すると考えていたが、そうはなっていない。従ってS F01地下を暗渠として貫き、直接堀に開口している可能性が高い。

S D405（第131～135図、第3分冊図版115～124）は、S D404と共にS M386両脇を区画する溝として検出した。直線部分の長さ29.3mに直角に曲がった部分の検出長が2.4m以上ある。掘り方幅1.8m、木樋内法幅0.63mである。木樋内側堆積物は砂礫層で水成堆積物、または廃絶に伴う人為埋め戻し土である。掘り方は、底面に砂利を5cm程敷き枕木・木樋を設置した後、粘土と砂礫の混合土で表詰めする。遊離した犬釘が目立って出土し、側板が腐朽後に残ったと解釈した。木樋・枕木は全てクリ材である（第5分冊第2章工藤・沈・大山原稿）。

調査範囲で検出したのは約30m分であるが、調査区外にあっても中土橋通り側溝として二の丸からの排水を含めて、排水機能を担ったはずである。先述の正門S B305SD1は東側末端が削平されて連結先が不明だが、中土橋通りに向かっている以上、洪江家東側切岸階を南北に通る排水溝S D24・72等を介して本遺構に排水しているだろう。また、脇溝排水溝S D403が本遺構に連結しているので、洪江家敷地の脇溝以南の排水はS D405が担っていたことになる。

木樋は長さ2～3mを1単位（スパン）として連結され12スパン検出した。各スパン長は同一ではなく1番長い4.12mから短い2.11mまで異なる。10スパンまで直線でS F01裾に到達し、11スパンが直角に折れてS F01に沿って西へ向かう。現場では12スパンの一部を確認したが、S F01の擁壁下から現道下へ潜り込んでおり、引き抜くことが出来ずそのまま埋め戻した。

各スパンは、幅15～20cm、厚さ10cmのクリ材を3枚接ぎ合わせて外側幅0.9m、内法幅0.63mとする。側板は厚さ10cmの材を鋸と犬釘で連結する。底板同士、底板と側板の接着面には60～90cmごとに長さ5cm、幅1cm、深さ3cm程の納穴が切られ、長方形の木製契が嵌められて位置決めされている。

各スパンの連結部分はチリトリ形の受け口（第3分冊図版120・121）となっており、上流側が上、下流側が下になって接合する。連結に際して切釘を2～3本打ち込んで固定する。ほぼ全ての部材が芯材であり、大形のクリ材が確保できた事を示している。

木樋据え付けには枕木が用いられる。枕木は1辺20cm、長さ1m程の角材でS D405掘り方底面に楕円形の据え付け穴をあらかじめ準備し、その上を覆って溝の掘方底全体に厚さ5cm程砂利を敷いた上に枕木を据えている。枕木上面と砂利上面が面一となるように調整した上で木樋を据え、両脇から裏詰め土を充填して固定している。枕木は全て芯材である。

最も上流側のスパン1下部掘方底面標高が6.65m、最も下流側のスパン11枕木上面標高が6.25mである。計測位置間の直線距離28mで標高差0.4mであるから、勾配は1mに対して1.4cmとなり1.4%。およそ3尺に対して5分（半寸）の勾配を保つ。本遺構末端はS F01に沿って西へ進み現道下に潜る。その先は不明であるが、堀に開口するはずである。

（7）井戸跡

S E373（第137図、第3分冊図版125・126）は、洪江家脇溝へ向かう斜路の前面、中土橋通りが

桁形を形成してクランクする角に設置されている。中土橋通りの砂利舗装面を除去している過程で検出した。正保の国絵図（第3分冊図版6・7・125 1644年頃 国立公文書館蔵）には「井」として示されており、地図の記載と一致した。掘り方は不整形形で、井戸枠には直径1m程の桶を4段重ねる。SM386造成土で埋められ、検出時は遺構上部数10cmが空洞だった。埋没後、内部堆積物が沈んだと思われる。底面から宇瓦（第2分冊第143図1、第4分冊第35表）が出土した。瓦当文様は唐草文である。遺跡内から出土した他の黒色瓦や赤色瓦と異なり、この1点のみ焼成や瓦当文様に中世瓦の様相を強く残すため、搬入品である可能性が高い。陶磁器は1600年代のものが集中する。

また、SE373周辺から脇門SB402周辺にかけて断続的に、焼土面SN287（第3分冊図版112-2）と炭化物が広く分布している。焼土は現地性である。前述した正門SB502の上面、SB305・339の下面で検出された焼土・炭化物分布面とよく似ている。SE373出土陶磁器が17世紀第4四半期までのものがほとんどである事と合わせると、記録に残る1682年の火災の痕跡である可能性が高い。

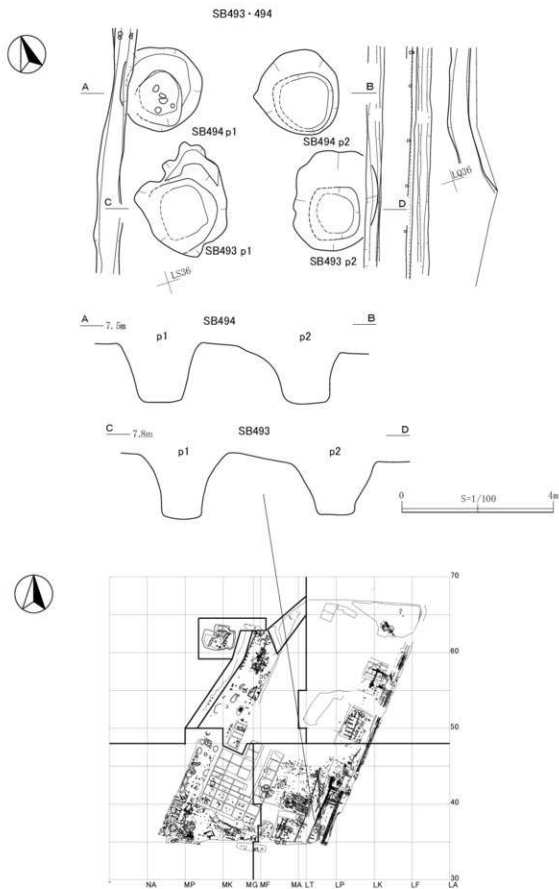
（8）道路跡（中土橋通りと洪江家脇門進入路、第3分冊図版84・89）

洪江家脇門SB288前面からSD288・366・403とSF408で区画される斜路部分及び、中土橋門からSD404・405で区画される中土橋通りを含めてSM368とした。洪江家脇門前には井戸跡SE373が設けられる。この井戸は正保国絵図に描かれている（第3分冊図版125）。中土橋通り部分は路盤の幅（SD405とSD366の肩から肩）が6m、検出長は約30mである。洪江家脇門SBに向かう斜路は路盤の幅（SD288・366の肩から肩）が4.3m、検出長は9.2mである。

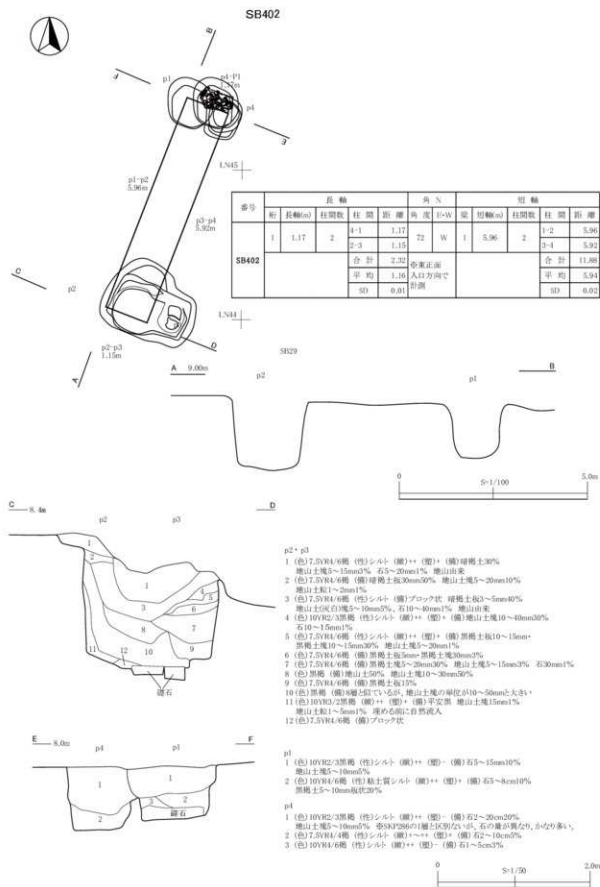
中土橋通りは新旧2面ある。古段階は平安時代から連続する造成初期の旧地表面がそのまま路面となっている。洪江家脇門の近くでは、地山面が露出している。この面に初期中土橋門であるSB493・494が建てられた。SD404古段階もこの面に掘り込まれている。古段階面の上に地山由来の黄褐色土、砂礫土を10cmから厚いところでは30cm以上積んで新段階の路面とする。上面には白砂が堆積している地点が広くある。調査開始時には、現道路盤下に古い舗装道路がそのまま埋まっていたため、本遺構の検出当初は近代舗装道路の路盤を疑っていたが明治と幕末の陶磁器が目立つことから、江戸時代の道路面が明治時代にも継続されたと判断した。何度も盛土されており、層界に焼土面SN287（第3分冊図版112-2）が形成される段階がある。焼土面は洪江家脇門のSF408からSB2888の構築面にもあるので、1682年の火災に伴う焼土面と考え同一面と判断した。

SF01とSF旧泉美が食い違い、洪江家切岸と合わせて桁形となる。食い違い部分では道路幅が3m程度の狭隘部となるが、それ以外は道路幅6m、検出部分の長さ30mの道路である。狭隘部には幅1m程のSD405が流れているから、通行のためにも蓋を被せていたはずである。道路面は大きく2面形成されている。古段階は北側10m程は路面が地山で状態が良いが、南側は湿気を帯びた黒色粘土である。創建期の中土橋門が建てられ、正保国絵図に描かれた井戸SE373が洪江家脇門前に掘られていた。この井戸が機能していた1600年代中葉までは洪江家脇門SB402はSF408の東側に開口していた。その後SE373を廃絶して埋め、洪江家脇門SB2888が南側を向く。切り替わりの年代は不明であるが、焼土面は東に開口する脇門SB402の柱穴上にも、南開口への変更に伴って削り出されたSF408基部上面にも広がる。従って、脇門の位置移動や井戸廃絶が1682年の火事に先行する。

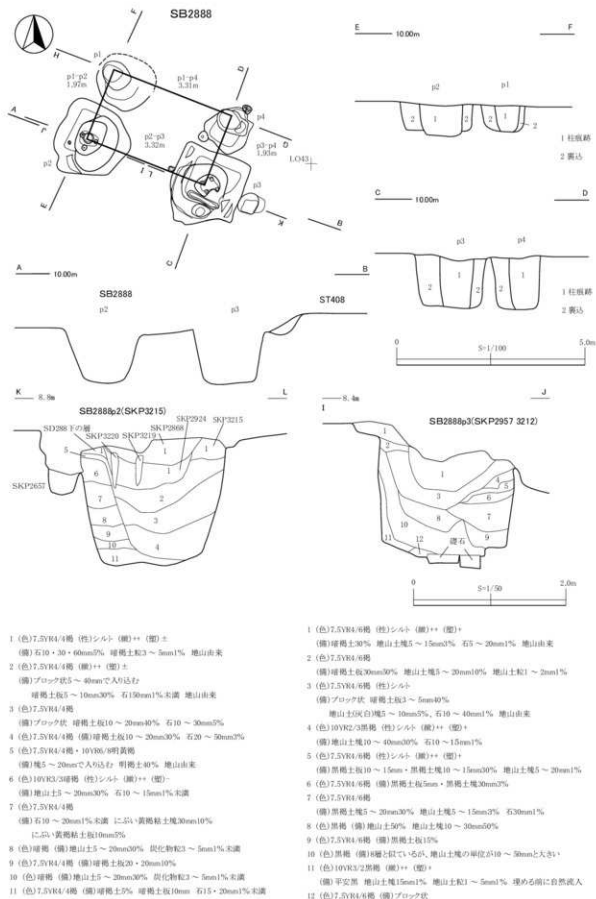
新段階は、路盤部分には砂礫を客土して維持に努めている。細かい維持補修をしている期間に1682年の火災がおきたと推定している。その後大きく盛土されるのは、SD404の本体が暗渠化して上面に地覆石を乗せた段階で、洪江家脇門も同時に排水溝を石造化する。SD404で先述したように宝暦九年（1759）より後と推定する。



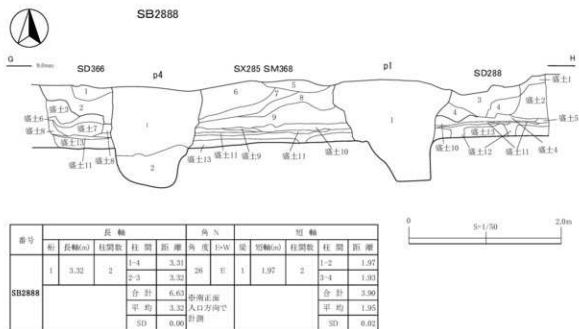
第120図 江戸時代（中土橋門・脇門）遺構配置図・平面図（脇門SB493・494）



第 121 図 江戸時代（中土橋門・脇門）遺構平面図・断面図（掘立柱建物跡SB402）



第122図 江戸時代(中土橋門・脇門)遺構平面図・断面図(掘立柱建物跡SB288)



p(SK)1970

1 (色)10YR4/2R黄褐色(性)シルト(層)++(型)-(備)石1~5cm1% 地山土塊5~10mm1%未満

p(RSK)1970

1 (色)10YR4/2R黄褐色(性)砂質シルト(層)++(型)-(備)石2~5cm1%未満 地山土塊5~20mm1%

2 (色)10YR4/3に赤い黄褐色(層)(性)シルト(層)++(型)土(備)石2cm1%未満 地山土塊5~20mm10% 黒炭土塊10~30mm10%

SX285

1 (色)10YR4/3に赤い黄褐色(性)砂質(層)++(型)-

(備)石5~15mm1%未満 炭化物粒1以下~2mm1%未満 炭化物塊5~10mm1%未満 地山土塊10~20mm1%未満

2 (色)10YR4/3に赤い黄褐色(性)シルト(層)++(型)-

(備)石10~20mm1%未満 炭化物粒1~2mm1%未満 炭化物塊2~3mm1%未満 地山土塊1以下~5mm1%未満

3 (色)10YR3/3暗褐色(性)シルト(層)++(型)-(備)石10~30mm1% 炭化物粒1~2mm1%未満 地山土塊5~20mm1%

4 (色)10YR3/3暗褐色(性)シルト(層)++(型)-

(備)石10~30mm1% 地山土塊1~5mm1% 地山土塊10~50mm(割合)10% 地山土板状20mm(割合)10%

5 (色)7.5YR6/8橙(性)砂(層)++(型)+(備)石10~20mm5% 暗褐色土塊5~20mm20% 地山土塊

6 (色)10YR4/3に赤い黄褐色(性)シルト(層)++(型)+(備)石10~20mm1% 地山土塊5~20mm3% 炭化物塊5~15mm1%未満

7 (色)10YR3/3暗褐色(性)砂質シルト(層)++(型)-

(備)石10~20~30mm1%未満 地山土塊3~5mm1%未満 炭化物粒2mm1%未満 炭化物塊10mm1%未満

8 (色)10YR4/4橙(性)シルト(層)++(型)+(備)石15~30mm1%未満 地山土塊5~20mm10% 地山土塊1~5mm1%

9 (色)10YR4/3に赤い黄褐色(性)砂質シルト(層)++(型)-

(備)石8~30mm3% 地山土塊10~30mm1% 地山土塊1~5mm1%未満 炭化物塊5~10mm1%未満 塊土塊5mm1%未満

盛土

盛土1 (色)10YR3/4暗褐色(性)シルト

盛土2 (色)10YR7/3に赤い黄褐色(性)粘土

盛土3 (色)10YR4/6暗褐色(性)シルト

盛土4 (色)10YR4/4橙(性)シルト(備)地山土塊1~5mm20%

盛土5 (色)10YR5/6黄褐色(性)粘土

盛土6 (色)10YR4/2R黄褐色~4/4黄褐色(備)灰黄褐色土は上5cm、浅黄褐色土は下2cm

盛土7 (色)2.5YR4/6赤褐色(性)凝層

盛土8 (色)10YR4/6暗褐色(性)シルト

盛土9 (色)平安黒(備)平安黒山来の土ベースに地山土塊30mm混入

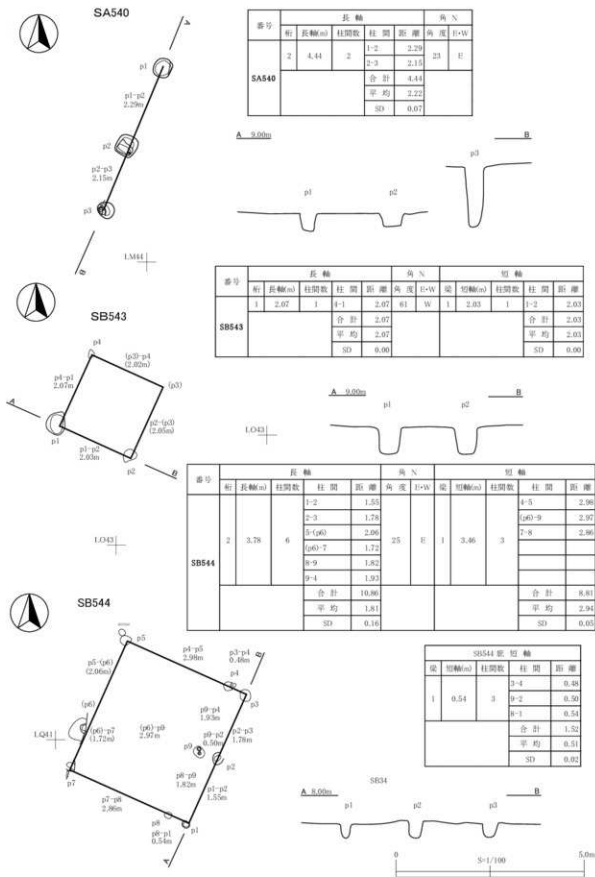
盛土10 (色)10YR7/3に赤い黄褐色(性)シルト

盛土11 (色)平安黒(備)平安黒山来の土、下に薄く板状地山土混入

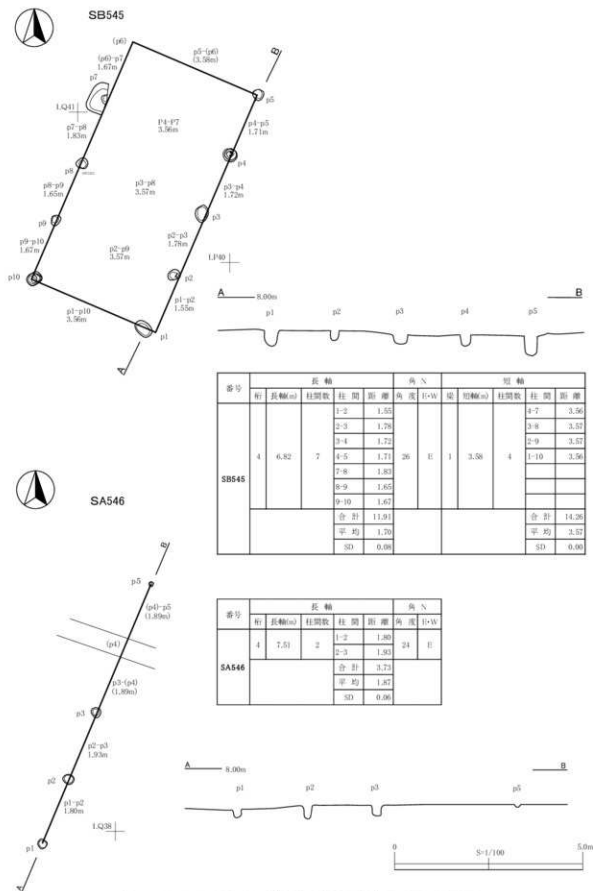
盛土12 (色)平安黒(備)平安黒山来

盛土13 (色)平安黒(備)南移層

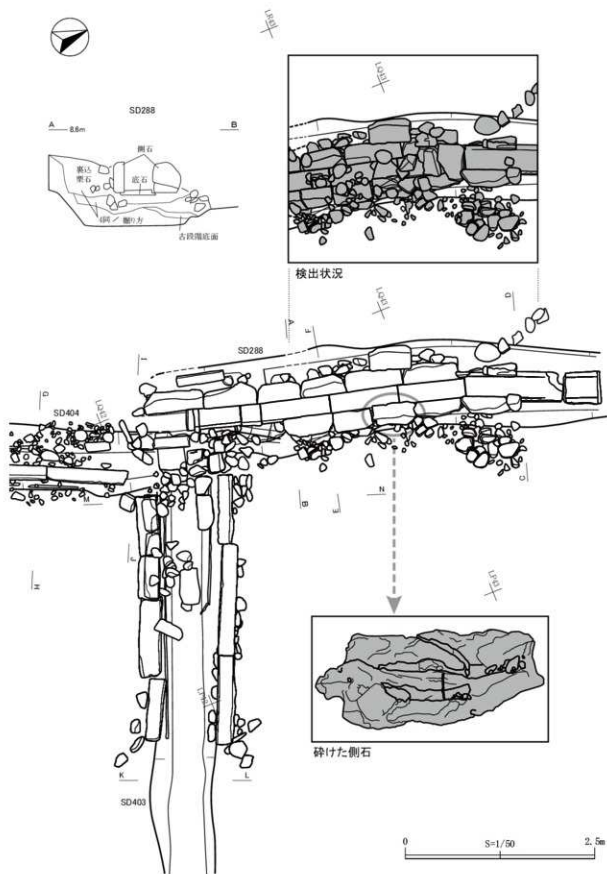
第123図 江戸時代(中土橋門・脇門)遺構断面図(掘立柱建物跡SB2888)



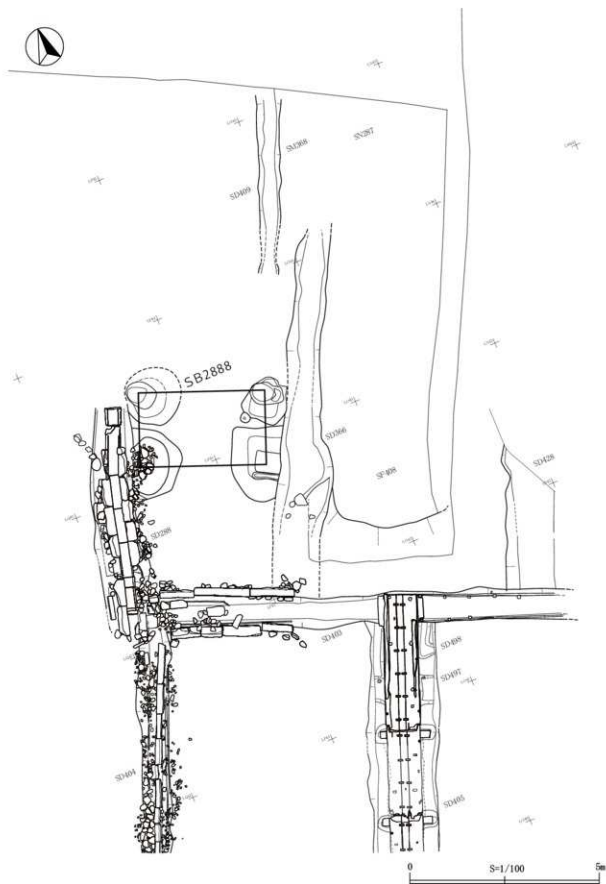
第 124 図 江戸時代(中土橋門・脇門)遺構平面図・断面図
(柱穴列SA540、碓立柱建物跡SB543・544)



第125図 江戸時代(中土橋門・脇門)遺構平面図・断面図
(掘立柱建物跡SB545、柱穴跡SA546)

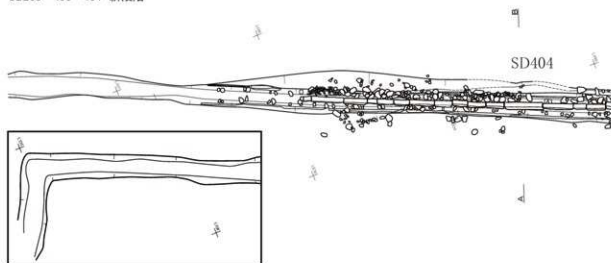


第126図 江戸時代（中土橋門）遺構平面図・断面図（溝跡SD288・403・404）

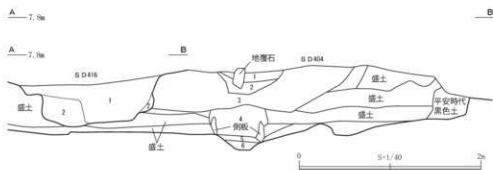
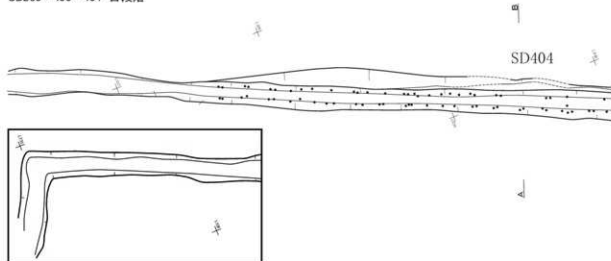


第128図 門新段階

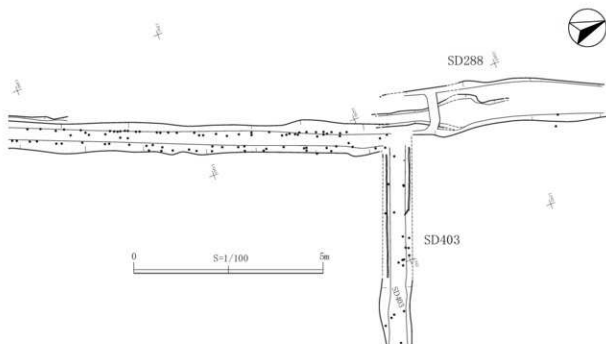
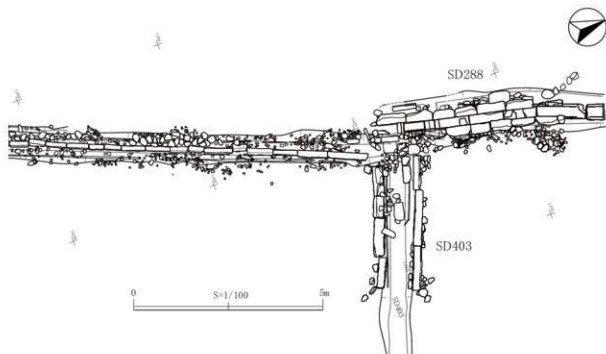
SD288・403・404 新段階



SD288・403・404 古段階



第129図 江戸時代（中土橋門・脇門）



SD404

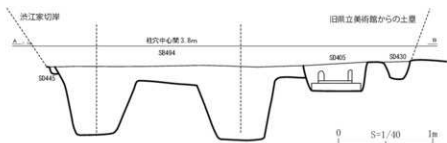
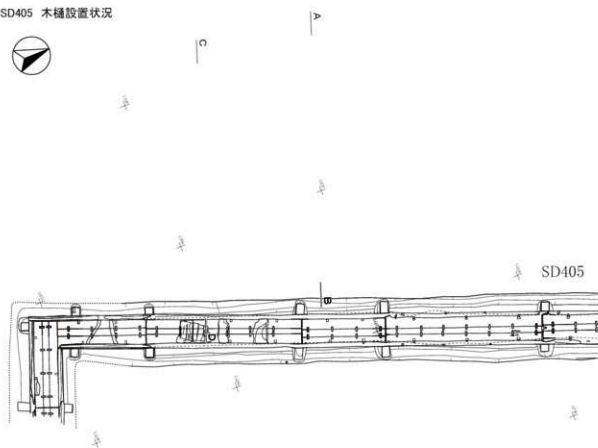
- 1 (色) 10VR5/2灰黄褐色 (性)シルト (硬)++ (型) (備)砂利φ1mm2%
- 2 (色) 10VR6/4に濃い黄褐色 (性)粘土 (硬)++ (型)++ (備)小礫φ5~10mm20%
- 3 (色) 10VR3/2灰黄褐色 (性)砂質シルト (硬)++ (備)細い砂を全体に 地山粒φ1mm3%
- 3' (色) 10VR5/4に濃い黄褐色 (性)砂質シルト (硬)++ (備) (備)細かい砂を全体に 地山粒φ0.5mm3%
- 4 (色) 10VR3/4暗褐色 (性)シルト (硬)++ (備) (備)赤黒色面赤の土を縁の内側に敷き付け
- 5 (色) 10VR4/3に濃い黄褐色 (性)砂質シルト (硬)++ (備) (備)細い砂を全体に 木枠の構築材
- 6 (色) 10VR4/2灰黄褐色 (性)シルト (硬)++ (型)++ (備)地山粒φ1mm3% 木枠の構築材
 (備) SM404の船倉工場地を設け34層で囲める(3層で取り込み)2層の粘土を張り付け
 ※緑色の波線21層が埋設

SD416

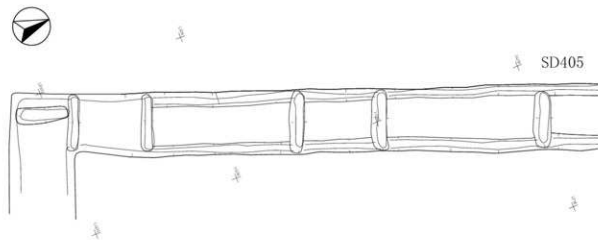
- 1 (色) 10VR3/3に濃い黄褐色 (性)シルト (硬)++ (備)小礫φ5~10mm3%
- 2 (色) 10VR5/2灰黄褐色 (性)砂質シルト (硬)++ (備) (備)細い砂を全体に

遺構平面図 (溝跡 SD288・403・404)

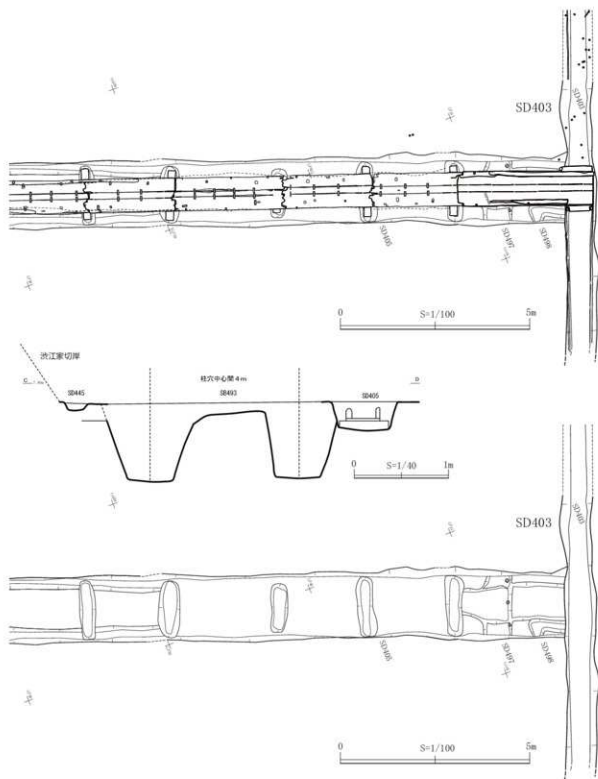
SD405 木樋設置状況



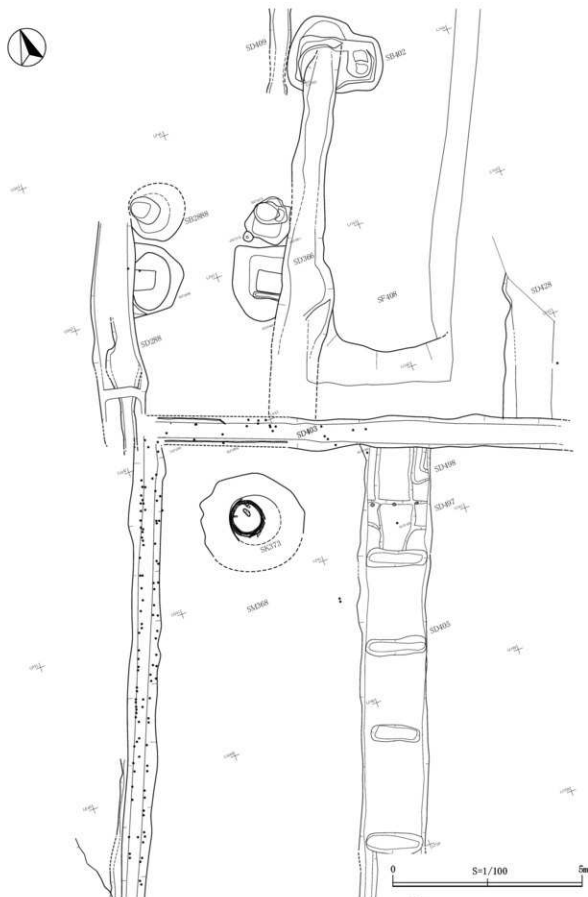
SD405 掘り方



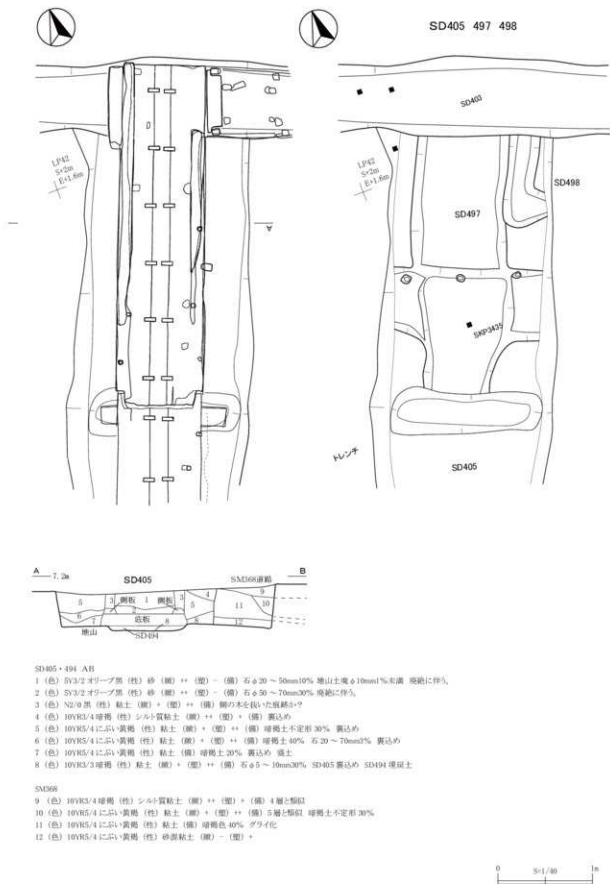
第130図 江戸時代（中土橋門・脇門）



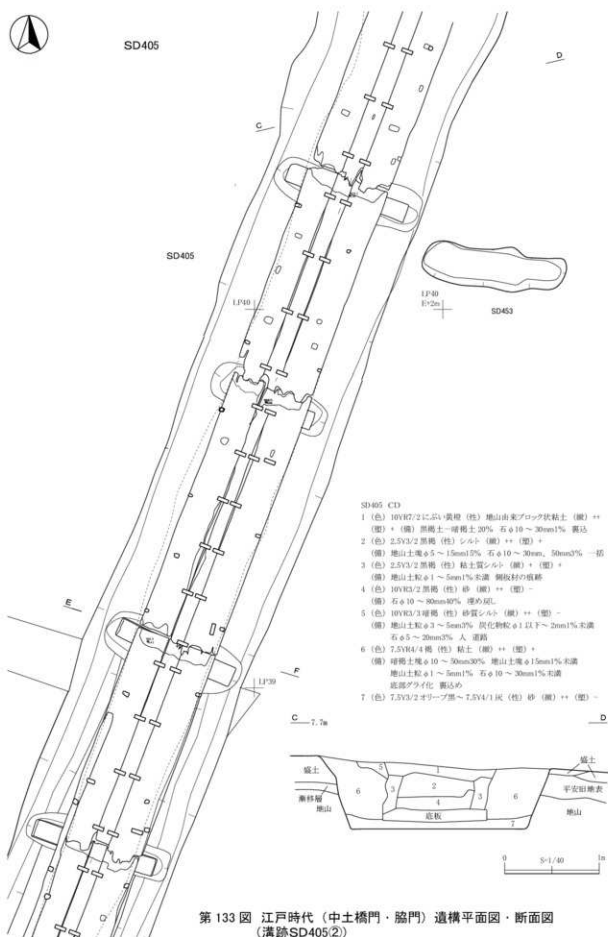
遺構平面図（溝跡 SD403・405）



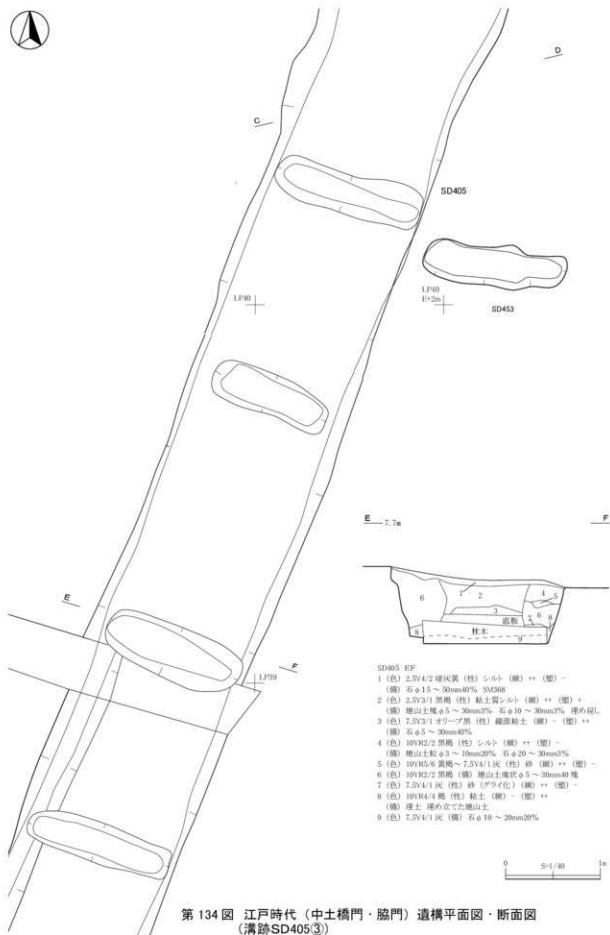
第131図 脇門（中段階）



第132図 江戸時代(中土橋門・脇門)遺構平面図・断面図(溝跡SD405①・497・498)



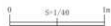
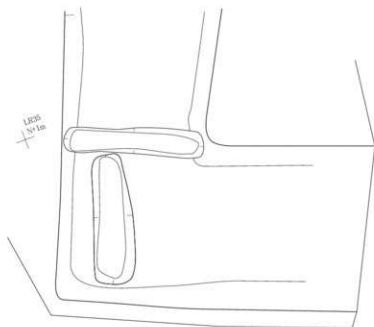
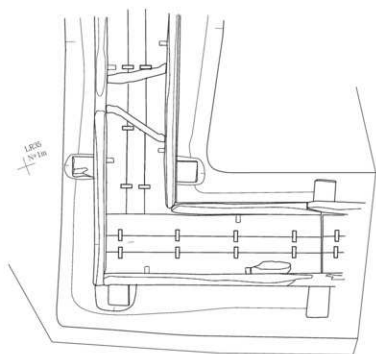
第133図 江戸時代(中土橋門・脇門)遺構平面図・断面図
(溝跡SD405(2))



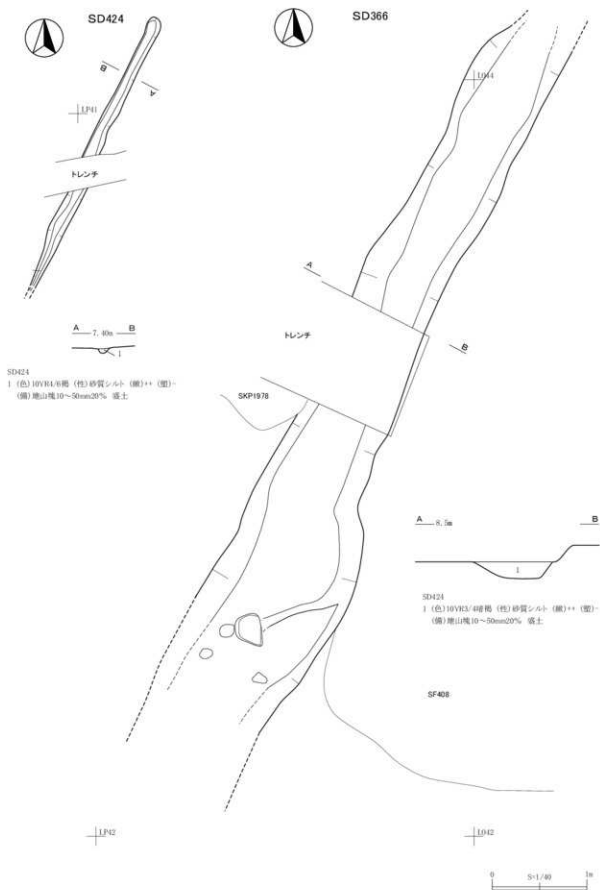
第134図 江戸時代(中土橋門・脇門)遺構平面図・断面図
(溝跡SD405③)



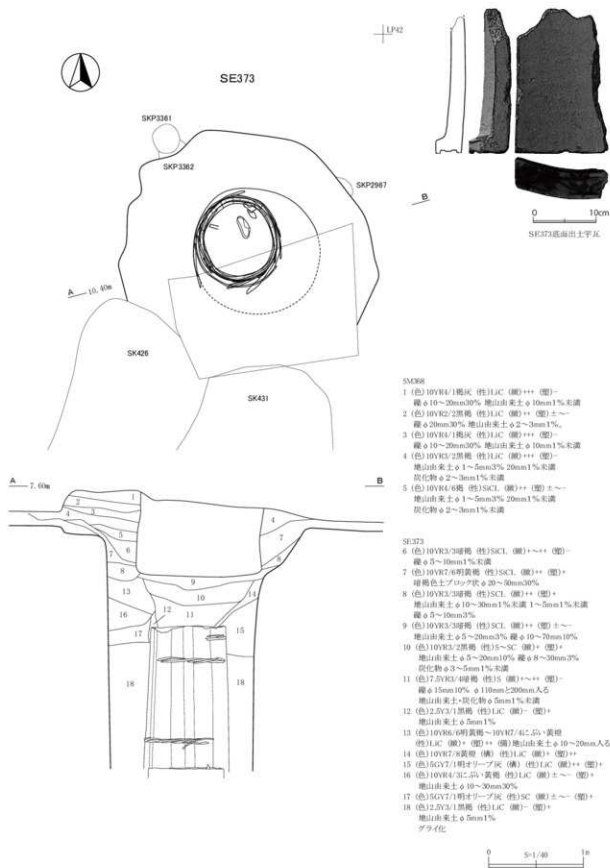
SD405



第135図 江戸時代（中土橋門・脇門）遺構平面図（溝跡SD405㉔㉕）



第136図 江戸時代（中土橋門・脇門）遺構平面図・断面図（溝跡SD366・424）



第137図 江戸時代(中土橋門・脇門)遺構平面図・断面図(井戸跡SE373)

4 穴門周辺の遺構

和洋女子高校の駐車場跡地400㎡が本地点である（第138～144図、第3分冊図版127～144）。正保国絵図で穴門西側から穴門堀までの道路として描かれた部分である。洪江家下屋敷は校舎部分であり、文化財保護室の試掘と立会のみとなった。

検出遺構は合計15基。その内訳は、柱列跡1基、井戸跡6基、土坑2基、杭列3条、溝跡1条、埋め立て跡1か所、柱穴1基である。文化層は2面に分かれる。上部文化層には柱列跡1基と柱穴1基、井戸跡1基、土坑1基、杭列1条があり、下部文化層には井戸跡5基、土坑1基、溝跡1条、埋め立て跡1か所である。

(1) 上部文化層

客土中に含まれる陶磁器から九州陶磁編年Ⅲ期（1650～1690年）以後に造成され、Ⅳb期（1740～1780年）からⅤ期（1780～1868年）には機能していた面である。

S A616（第142図）は、S F01の裾から連続する斜面に並行して建てられたため、柱の並びが悪いが、他に柱穴も無いため2条の柱列を組み合わせた構造物と考えた。斜面上部の東側柱列と下部の西側西柱列の高低差が50cm以上ある。柱は掘り方を持たず打ち込まれている。S E606に隣接する柱列で穴門外の道路脇に建てられた。下屋敷の正確な位置が不明のままであるが、S A135と同様S F01と洪江家下屋敷を連結する構造物と考えた。

S A616東側柱列と並んでS D608がある。地山面を切土した切岸の等高線に沿って、北東～南西に走る。斜面を流れ下る雨水を止める排水溝として機能したものか。

なお、S K P611は下部文化層の地山面で底面を検出した。堆積土はグライ化した地山ブロックであり、S A616の柱穴と共通することから上部文化層に帰属すると考えた。本来はS A616と関連する施設を構成する柱跡だと思われるが、脈絡づけることが出来なかった。

S K609（第143図、第3分冊図版142）は、S A616より古い。グライ化した黒色粘土や青灰色粘土のブロックで埋められ、S A616の部材が打ち込まれていることから、当初は井戸跡と考えていた。断ち割ったところ床面が見つかったため土坑とし、S A616を構列として分離した。

S E615（第141図、第3分冊図版133-3）は、S A605・614を調査中に断面に垂直の掘り方があらわれた。グライ化した黒色粘土層で埋められる。下部文化層の杭列S A605とS A614に挟まれたごく狭い間に掘り込まれている。含水率の高い埋立土にあるため、掘削するそばから崩落してしまい、底面の確認を断念した。構築当時も同様の状況だったはずで、掘削途中で中止したのではないだろうか。

6基の井戸跡で本井戸と後述するS E621の2基は、地山ではなく旧河道埋立土を掘り込んでいることから、当該地点における埋立位置の記憶が定かでは無くなった時点で設置を試みた可能性が高い。

(2) 下部文化層

S E606（第139図、第3分冊図版134-137）は、方形掘方に柱と桁を組み、その内側に井戸桶を積んで本体とする。井戸桶は3段以上積む。陶磁器の年代は1600年代の後葉から1700年代の前葉（九州陶磁編年Ⅲ～Ⅳa期）が多い。下部文化層に構築された井戸5基中最も新しい。本地点は狭い範囲に井戸が集中しているが、S E373や434と同様に大形の方形掘方に柱と桁で側を組み、その上で井戸桶を埋設している。S E373と同一工法である事から、正保国絵図に描かれた穴門側の井戸に該当すると判断した。ただし、出土陶磁器の年代は1600年代後葉から1700年代前葉であり、正保国絵図が描かれた1644年頃よりも新しい。遺構北側半分は調査区際にかかっており調査を断念した。佐竹小路

現道下に北側が残る。

S E 607 (第140図、第3分冊図版138)は素掘りである。堆積土中層から柄杓(第2分冊第183図1・2)が出土した。底面は湧水層を貫く。湧水層が断面南北で20cm程異なり、奇妙なことに傾斜の下位にある南側の方が湧水面が高い。またS E 612(第140図、第3分冊図版139・140)は、井戸桶を4段以上積んでいるが、底面まで到達できなかった。1600年代中葉の唐津陶器大皿破片が出土した(第3分冊193-3)。

S E 621(第139図、第3分冊図版141-1)はS E 606の西側、S X 610埋立痕跡を切って調査区北側壁面に現れた。堆積土は上部文化層を埋める盛土で、S E 606土を埋める盛土よりも緻密度が高いため、S E 606よりは古いと考えた。底面まで到達できていない。

(3) 土地造成痕跡と土留杭列

穴門周辺の土地造成痕跡であるS X 610(第141図、第3分冊図版131-134)は、地山面を追って盛土面を除去している時に調査区を北東-南西方向へ走る黒色土のラミナとして検出した。ラミナから西側が盛土、東側が地山であり旧旭川流路を整形した上で埋め立てを行った痕跡であると判断した。下部文化層の調査進捗に伴って埋立部分を掘り下げる過程で、土留杭列S A 605・614が2条並行して打ち込まれていた。地山/盛土境界線は急角度で地下へ潜るため、その法面に土留杭列S A 605とS A 614を平行に打ち込んで土砂を投入している。本来旭川の川岸であるが、植生を含めて表土は削られ人工的な台形斜辺状に整形されている。埋立法としては依に土砂を詰めて投入したはずだが、漆黒のグライ化土で痕跡を見分けることは出来なかった。また、秋田中央地下道建設工事に伴う中土橋の調査時に検出された蕨痕跡や蕨を固定した申も出土しなかった。青灰色粘土の地山上に堆積した漆黒土壌のラミナが、あるいは法面に貼られた蕨の土壌化したものだろうか。S A 605・614の杭をC 14年代測定したところ、それぞれ1642-1682・1761-1800calAD、1637-1672・1778-1798calADとでた。この年代は、正保国絵図が描かれた年代とほぼ同年代かより新しく、本地点から出土する陶磁器が1600年代後半から1700年代前葉にさしかかるものが多いことと共通する。

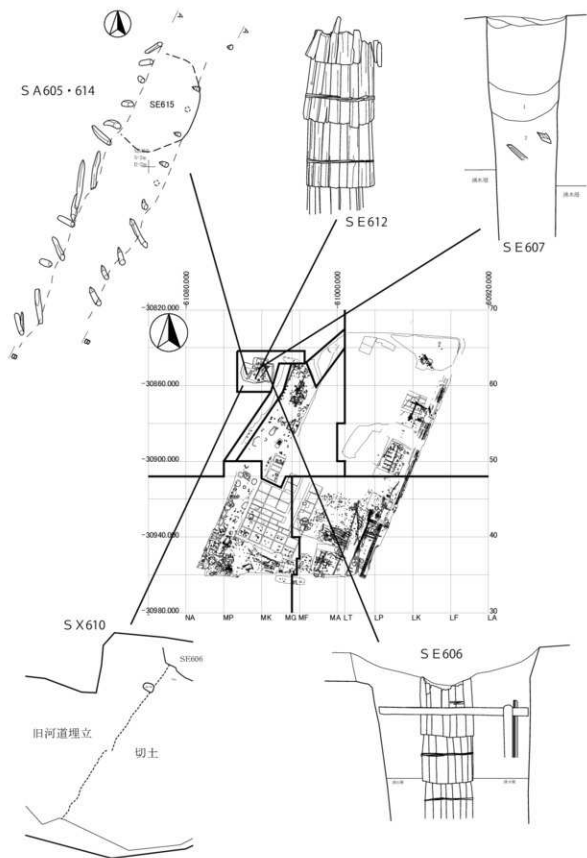
5 敷地北西部の遺構

先に述べたS F 01に伴う遺構と関連する遺構も多い。特にS D 20やS D 32は、S F 01の盛土部分に埋められたS A 28・S D 25と平行しており、同一機能を担っていると考えられる。本地区では本来掘立柱建物跡の柱穴だったと思われる土坑が多い。南西部ではゴミ穴として使われた大形土坑が目立つのと対照的である。また本地区は旧地形を切土して造成したことにより、江戸時代よりも前の遺構は残っておらず、江戸時代遺構は地山の上に直接作られている。南西部との境界域では盛土による土地造成痕跡が出現する。

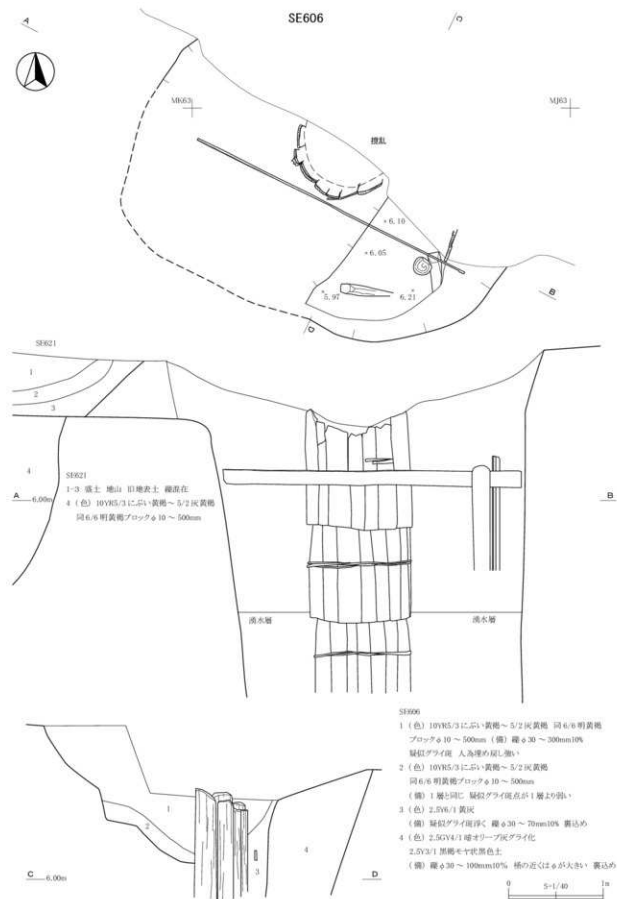
(1) 掘立柱建物跡

S B 27(第146図、第3分冊図版146・147)は、S F 01裾に連続する削り出し平坦面で栗石を充填した柱穴を4基検出し、建物跡とした。未固結砂岩に近い緻密な砂層層にある。中村氏所見は「南北方向を桁行とする身舎梁間一間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。S F 01に並行して建てられる。地盤が堅固で柱間が0.95-1.9mと通常の建物より狭く、重量物に対応した礎石建ちの床持建物とする、米倉のような機能を想定する。

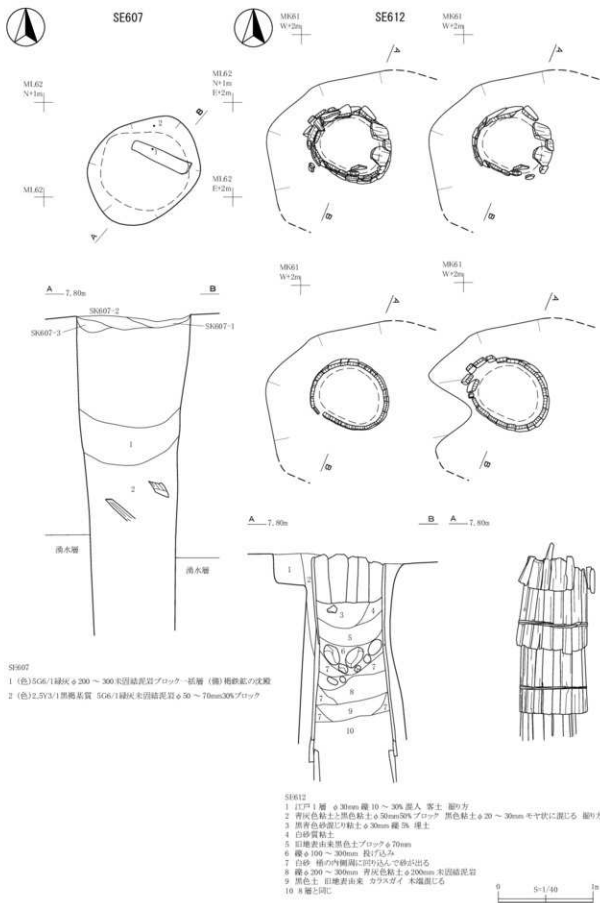
S B 513(第146図)は、S A 28・S D 20に平行する柱列を建物跡とした。中村氏所見は「南北方向を桁行とする身舎梁間一間半の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。中村氏は、本建物のp 2がS A 28



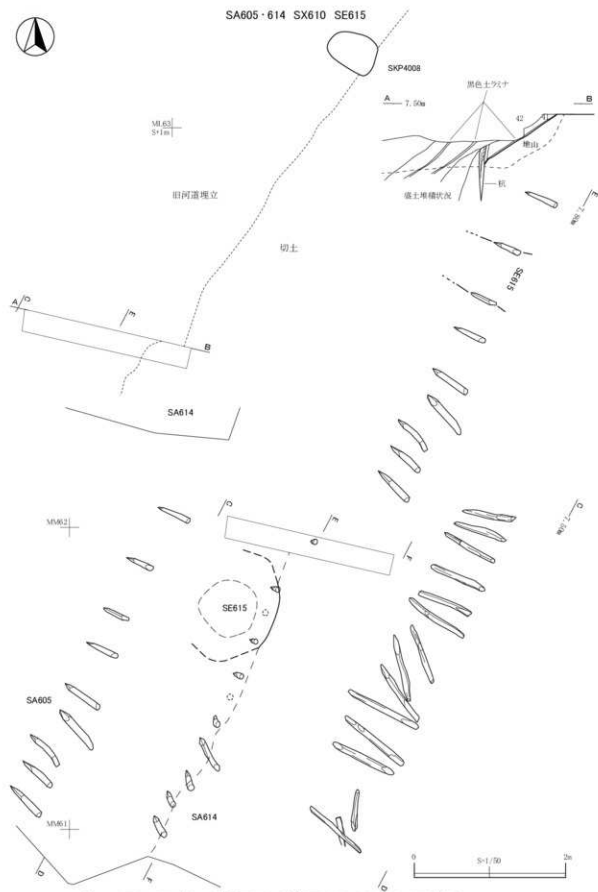
第138図 江戸時代（穴門周辺）遺構配置図



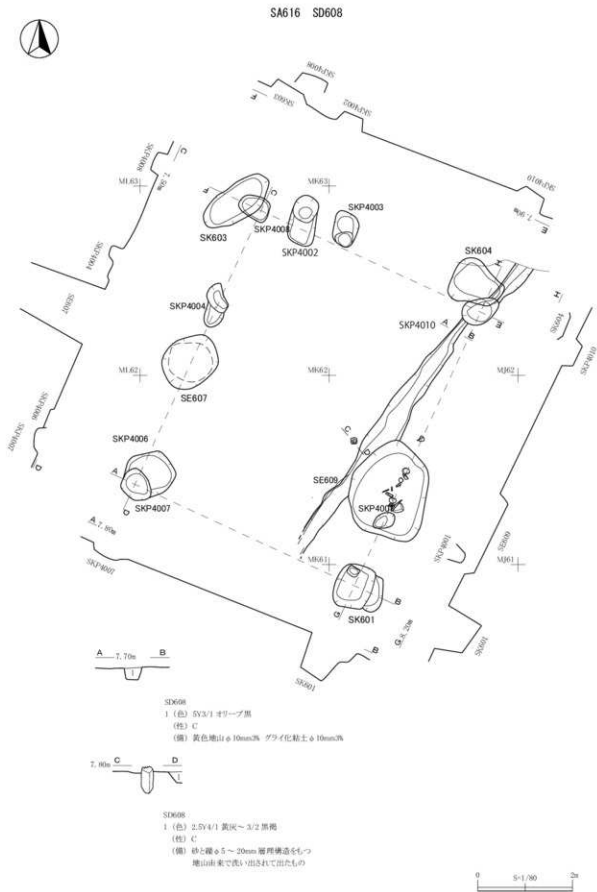
第139図 江戸時代(六門周辺)遺構平面図・断面図(井戸跡SE606・612)



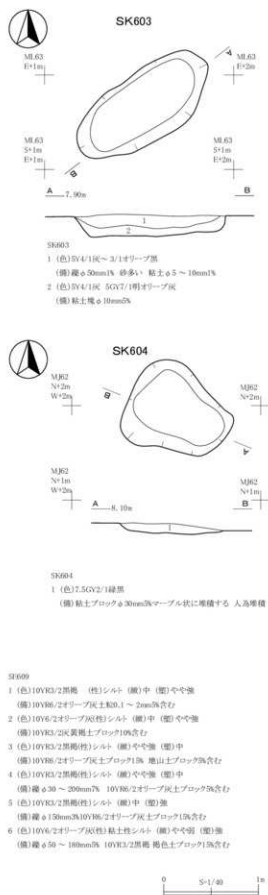
第140図 江戸時代(六門周辺)遺構平面図・断面図(井戸跡SE607・615)



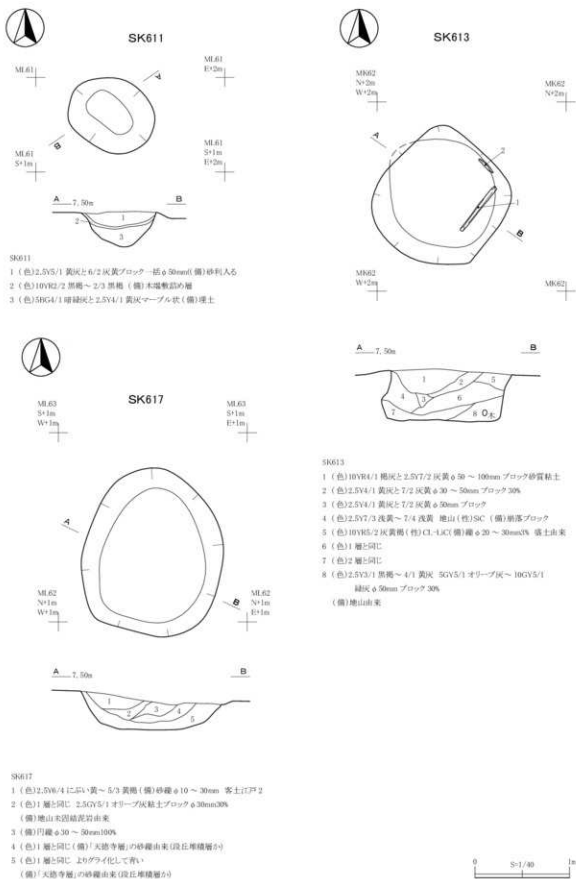
第141図 江戸時代（穴門周辺）遺構平面図・断面図（河道埋立SX610
井戸跡SE615 杭列SA605・614）



第142図 江戸時代(穴門周辺)遺構平面図・断面図(溝跡SA616 SD608)



第143図 江戸時代(六門周辺)遺構平面図・断面図(土坑SK602・603・604・609)



第144図 江戸時代(穴門周辺)遺構平面図・断面図(土坑SK611・613・617)

のp1・13柱列に乗ることから同一建物の可能性と近隣に佐竹小路への入口があり、それに合わせた配置であることも想定していたが、軸が僅かにズレることもあり最終的には別建物と判断された。S D20を跨ぐが柱穴と溝跡は直接重複せず、新旧関係は不明である。本建物はS F01が盛土土塁を造成する前の建物跡である可能性が高く、S D20が暗渠化された排水溝であることから本遺構が古いと推定した。

S B515 (第147図)には、竪穴部(S K I 31、後述)が取り付く可能性が高い。中村氏所見は「東西方向を桁行とする身舎梁間二間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。掘立柱部はS D20に直交するが新旧関係は不明。竪穴部S K I 31はS D20より古い。S B516・517とも重複するが柱穴の直接の切り合いが無く、新旧は不明である。ただし、S D20・83との関係からS B517よりも本遺構が古いと考えている。北東北地方の古代から中世に一般的な建物形式である。江戸時代に常陸から移転してきた渋江家でも採用したとすれば興味深い。

S B516 (第146図)は西側短辺がS D48と重なる。中村氏所見は「東西方向を桁行とする身舎梁間一間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。S B515・517と重なる。柱穴が重複しないため新旧関係は不明だが、S B515と同様長軸方向を東西に向けておりS D32とも位置が重なるため、S D32より古いと思われる。

S B517 (第148図)は長軸方向を南北に向け、S A514・S D20・32・83と並行する。中村氏所見は「南北方向を桁行とする身舎梁間一間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。S D32・83は本建物西辺に並行した後、南辺を回り込んで直角に曲がる。S A04も含めて互いの位置を考慮しながら建てられた可能性が高い。

S B519 (第149図)は、地業痕跡または大形の土坑S K57・76・159を切る。中村氏所見は「南北方向を桁行とする身舎梁間二間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。柱筋の北側延長線上にS K77、南側にS K P1213、東側にS K56があるが脈絡を付けられなかった。

(2) 柱穴列

S A514 (第148図)はS B517・S D32と並行する。中村氏所見は「南北方向を桁行とする三間の塀ないし欄」。S B515と重複する。柱穴に直接の切り合いはないが、S K I 31を切るのでS B515よりも新しい。長軸が合致するS B517・S D32と同時存在したと推定。

(3) 竪穴状遺構

S K I 09 (第150図、第3分冊図版149・150)は、S F01の裾近くで検出した。入口を北に向けた長方形の建物。小形の手鏡(第2分冊第245図7)が出土した。

S K I 31 (第147・151図、第3分冊図版147・148)もS F01の裾近くで検出した。床面に炭化物が集積しているため、下層は炭化物を多く含む。先述した様にS B515を構成する竪穴部分である。南向きの入口はS B05との連絡口となることから、建物自体の入口はS B515側にあると推測する。本遺構周囲には同規模の円形土坑S K40・41・74が集中してある。いずれも深さ20~30cmで中華鍋状の底部を持つ。S K40・49も堆積土中に炭化物を多く含む、本遺構と似ている。S B516・517とも重複するので、これらの土坑も掘立柱建物跡と関連する可能性が高い。

(4) 井戸跡

S E80 (第152図、第3分冊図版152~155)は、検出面下1.36mまで素掘りで長方形の竪穴部

とし、底面に直径20cmの礫を敷き詰めて床面とする。この床面からさらに1.56m掘り下げ井戸桶を3段設置して井戸本体とする。3段目の井戸桶は上部2段のものよりも長く1mある。井戸底部にも直径20cm程の礫を敷いている。堅穴部分の床面に柱穴は見当たらないが、床面の丁寧な礫敷きから考えて壁面がむき出しの土壁とは思えない。おそらく四隅に柱を置いて壁板を組んでいたと想定している。使用時は階段で礫敷面まで下りてから水を汲んだか、覆屋と一体となった釣瓶などの揚水装置を外部に持っていたかであろう。しかし、覆屋を復原できるような柱穴は検出できなかった。

S E 97 (第153図、第3分冊図版156) は、検出面下1.48mで底面に到達する。底面は素掘りのまま地山の粘土である。中層以下に井戸桶の篋が残るが井戸桶材は残っていない。

S E 102 (第74図、第3分冊図版161) は、県民会館の壁際で検出した。建物基礎を除去した後、重機で再度掘削したところ地表下4mで底面に到達したが、図化できなかった。井戸桶は2段目まで確認した。底面は素掘りのまま地山の粘土である。平安時代の井戸S E 100と重複する。

(5) 溝跡

S D 20 (第163図、第3分冊図版55~57) は土塁S F 01の盛土に埋められており、北側末端が佐竹小路に開口する。S D 16・25と同様、佐竹小路屈曲部に合わせて東側から支線が合流する。緑色凝灰岩製の石製U字溝が設けられており蓋石も被せられていたことから、当初は盛土土塁の下を通す暗渠と考えた。しかし、東から合流する支線部分は25度の傾斜を持つ。支線が傾斜を持って本線に合流する形状はS B 305 S D 1と同じである。蓋石が暗渠化のためではなく、排水溝の傾斜変換地点で起きる溢水防止の対策だとすると、中村氏が推測していたようにS A 28・S B 153とも関連して、佐竹小路への通用口が設けられていた可能性がある。S D 20の石造化は、S B 305やS D 288・403・404と同時期とすれば、1759年よりも後であろう。それまでは素掘りの排水溝であり未発見の通用口を通して佐竹小路に排水していたことになる。

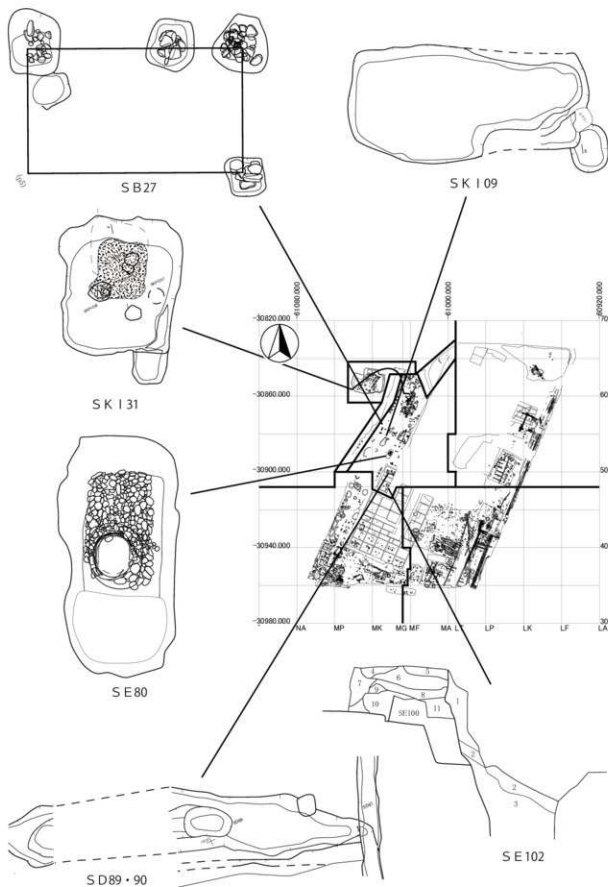
本遺構よりも2m上部でS Q 07を検出している。S Q 07を構成する礫の中に凝灰岩製の蓋石があり、この蓋石を含めてS D 20に由来する可能性が高い。この地点はS F 01が大きく攪乱を受けており、その時にS D 20は廃絶したと推測する。S D 288で行われた廃絶行為と類似する。

S D 20の南に連続してS D 32・48がある(第164図)。また、断絶するがS D 37・73も関連する排水溝であろう。S D 73はごく浅い凹面状の底面を持ち、白色粘土が貼られて防水しており、S D 404新段階の底面加工によく似ている。これらは、南から北上して最終的にS D 20に集約される。

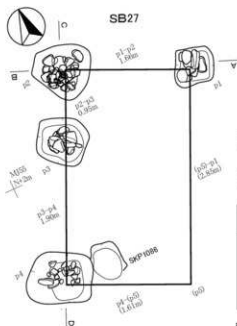
S D 87・89・90(第165図、第3分冊図版162) は東西方向へ走る。末端は建物基礎で壊されていたため、不明だがおそらく西へ延びた後北へ折れ、S D 20に合流したのではないだろうか。

(6) 土坑

S K 56・57・76・159(第159図、第3分冊図版151) は、堅穴状遺構のような大形方形の掘り方を持つ。おそらく地業痕跡であろう。他に、井戸跡とよく似た素掘りの土坑がS K 78である(第161図、第3分冊図版152)。雨水溜の可能性もある。調査地区北西部では、本来掘立柱建物跡を構成する柱穴の土坑S K 56・59(第3分冊図版160)が多い。南西部ではゴミ穴として使われた大形土坑が目立つのと対照的である。



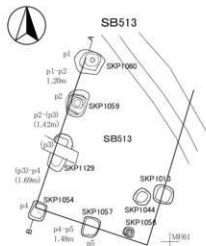
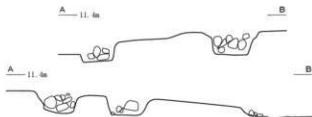
第145図 江戸時代（西北部）遺構配置図



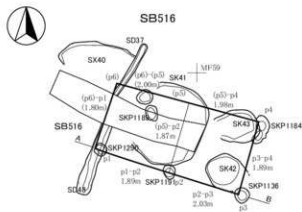
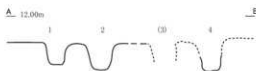
SB27(p1-p4)

- (色) 10VR2(2層黒 性)シルト (層)++ (層) (層) 廃棄物、寸法3~5mm以下 大量25cm54個以上 中部分的に土がつかへていた。
- (色) 10VR4(3c) 赤黄黒 性)シルト (層)++ (層) (層) 廃棄物、寸法20~250mm多々、
- (色) 10VR4(3c) 赤黄黒 性)シルト (層)++ (層) (層) 廃棄物、寸法60~250mm多々、

番号	長軸			角 N	短軸					
	桁 長軸(m)	柱間数	柱間距離		角度	I-W	壁	短軸(m)	柱間数	柱間距離
SB27	2	2.85	2	26	E	1	1.66	1		
		合計 2.85							合計 1.66	
		平均 1.43							平均 1.66	
			SD	0.48					SD	0.00



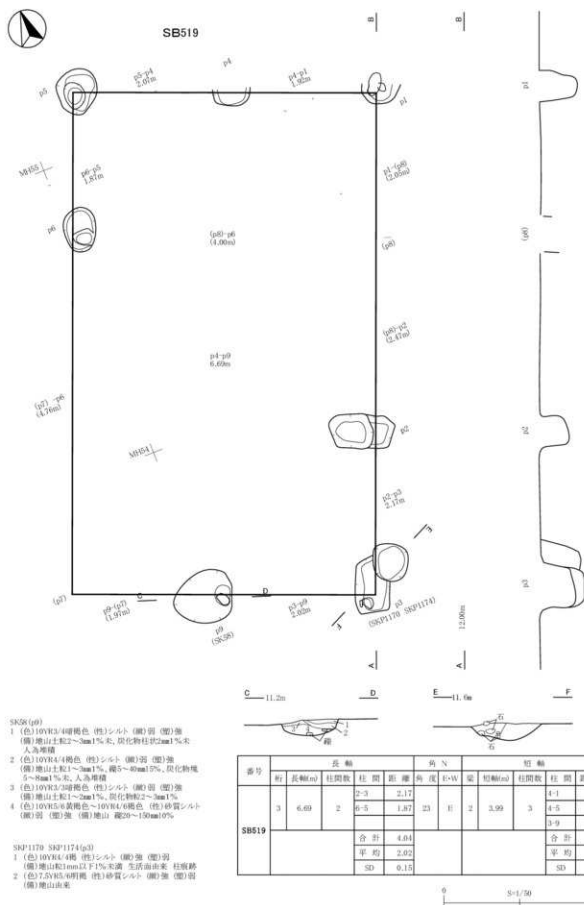
番号	長軸			角 N	短軸					
	桁 長軸(m)	柱間数	柱間距離		角度	I-W	壁	短軸(m)	柱間数	柱間距離
SB513	3	4.31	3	20	E	1	1.48	1	1-2 1.48	
		合計 4.31							合計 1.48	
		平均 1.44							平均 1.48	
			SD	0.20					SD	0.00



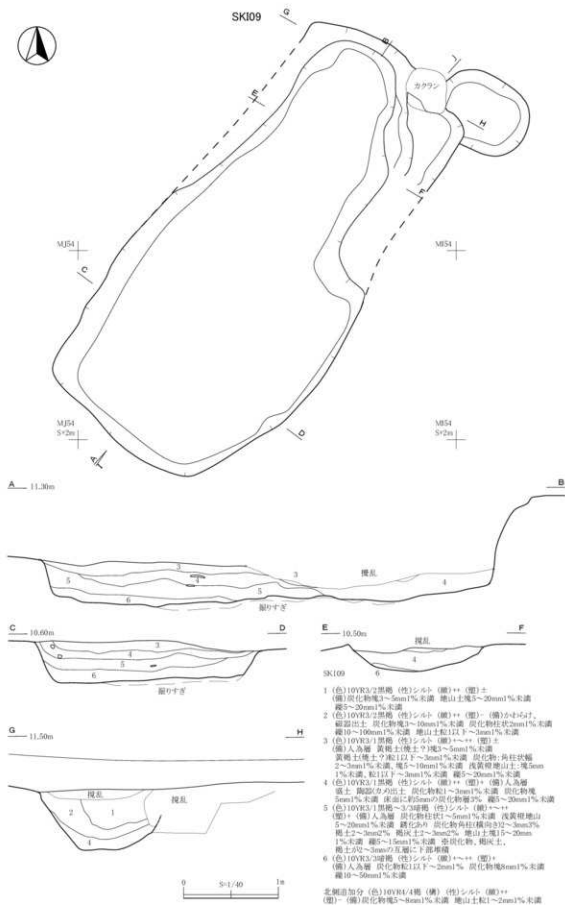
番号	長軸			角 N	短軸					
	桁 長軸(m)	柱間数	柱間距離		角度	I-W	壁	短軸(m)	柱間数	柱間距離
SB516	2	1.89	2	72	W	1	1.89	1	1-2 1.89	
		合計 3.92							合計 1.89	
		平均 1.96							平均 1.89	
			SD	0.07					SD	0.00



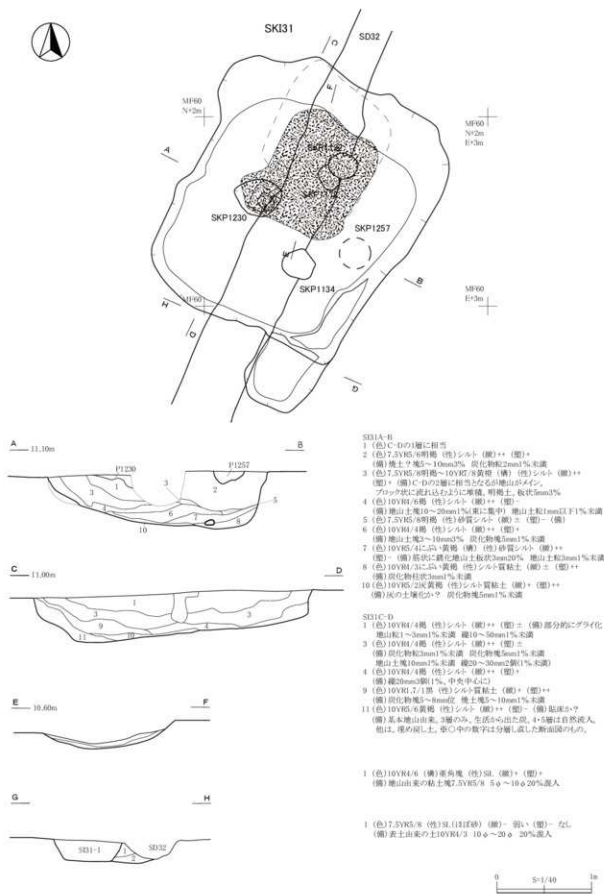
第146図 江戸時代(北西部)遺構平面・断面図(掘立柱建物跡SB27・513・516)



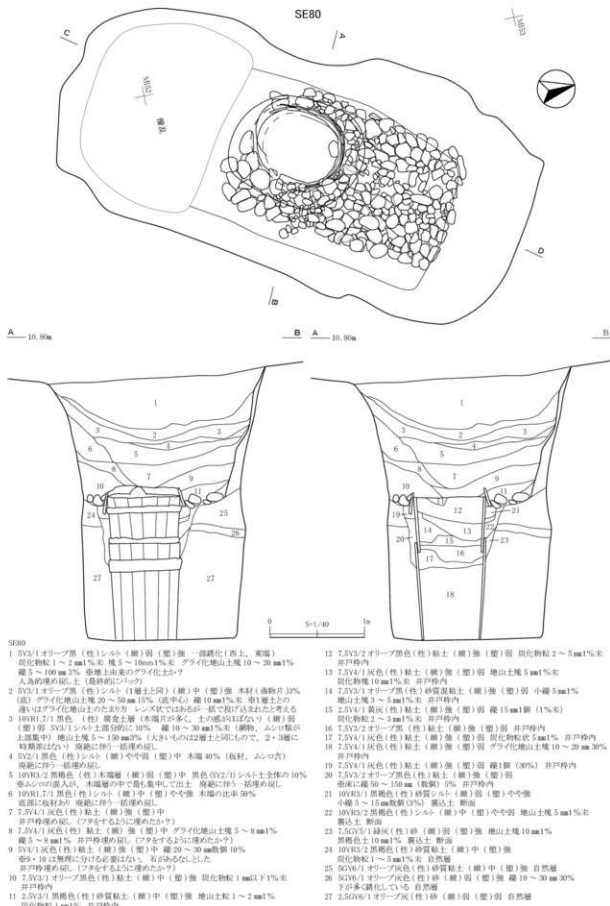
第 149 図 江戸時代（北西部）遺構平面・断面図（掘立柱建物跡SB519）



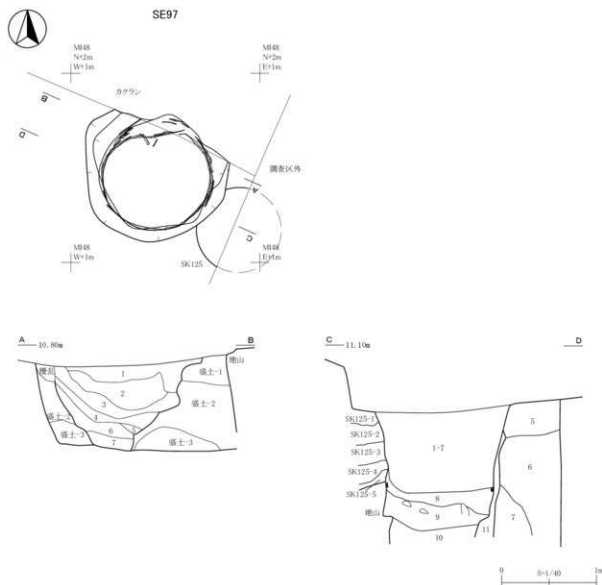
第150図 江戸時代(西北部)遺構平面図・断面図(竪穴状遺構SK109)



第151図 江戸時代(北西部)遺構平面図・断面図(竪穴状遺構SKI31)



第 152 図 江戸時代 (北西部) 遺構平面図・断面図 (井戸跡 SE80)



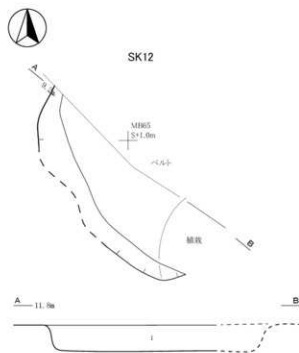
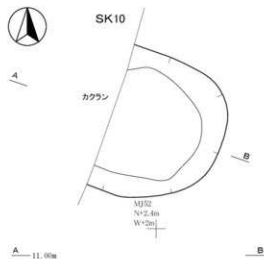
SE97

- 1 (色) 10VY4/6褐色 (性) シルト (調) 中 (強) (備) 黒褐色土40%粒状20~60mm, 炭化物粒1mm~2mm1%米
雑山土由来がブロック状で堆積, 雑山土→黒色土→雑山土→原色土の順で堆積, 人為
- 2 (色) 10VY3/2暗褐色 (性) シルト (調) 中 (強) (備) 雑山土塊5~20mm1%米, 雑山土粒1mm以下1%米,
炭化物粒3~5mm1%米, 小礫5mm1%米 生活層土由来, 雑山土がブロック状のため, 人為により埋め戻し
- 3 (色) 10VY3/2暗褐色 (性) シルト (調) 中 (強) (備) 雑山土塊5~10mm20%, 炭化物粒5~10mm1%米
生活層土由来, 人為による埋め戻し
- 4 (色) 10VY2/1灰色 (性) 粘土質シルト (調) 中 (強) (備) 雑山土粒1~2mm1%米, 雑山土塊5~15mm1%米
生活層土由来, 人為による埋め戻し
- 5 (色) 10VY2/1灰色 (性) 粘土質シルト (調) 強 (備) 今や弱 (備) 雑山土塊10mm1%米 生活層土由来, 人為による埋め戻し
- 6 (色) 10VY2/1灰色 (性) 粘土質シルト (調) 強 (備) 今 (備) 雑山土塊5~10mm1%米 生活層土由来, 人為による埋め戻し
- 7 (色) 10VY2/2暗褐色 (性) シルト質粘土 (調) 強 (備) 強 (備) 雑山土塊5~10mm1%, 木材片出土
生活層土由来, 人為による埋め戻し
- 8 (色) 2.5Y2/2灰色 (性) シルト質粘土 (調) 中 (強) 今や弱 (備) 雑山土塊5mm1%米, 木材片出土
- 9 (色) 2.5Y2/2灰色 (性) シルト質粘土 (調) 中 (強) 今や弱 (備) グライ化雑山土塊10~20mm1%米
塊30~50mm(3割)2% (①)の塊4は, グライ化雑山土塊のみ
- 10 (色) 5GY7/1明緑灰色 (性) 粘土 (調) 強 (備) 今や弱 (備) タガ行差の裏込(厚さ2cm)
- 11 (色) 10GY7/1明緑灰色 (性) 粘土 (調) 強 (備) 弱 (備) 黒色土粒状1~5mm10%(裏込)

SK125

- 1 (色) 7.5YR5/4に灰褐色 (性) シルト質粘土 (調) 中 (強) (備) 暗褐色土20%
- 2 (色) 10VY3/2暗褐色 (性) シルト質粘土 (調) 中 (強) (備) 雑山土塊5~20mm20%, 炭化物粒1mm以下1%米
- 3 (色) 10VY3/2暗褐色 (性) シルト質粘土 (調) 中 (強) (備) 雑山土塊5~15mm2%, 小礫10mm1%米, 炭化物粒3mm1%米
- 4 (色) 10VY4/1暗灰色 (性) 砂質粘土 (調) 中 (強) 今や強 (備) 強 (備) 礫10~20mm1%米, 雑山土塊5~10mm1%米
- 5 (色) 10GY6/1緑灰色 (性) 粘土 (調) 強 (備) 今や弱 (備) 雑山土塊5~20mm20%, 炭化物粒1mm以下1%米

第153図 江戸時代(北西部)遺構平面図(井戸跡SE97 土坑SK125)

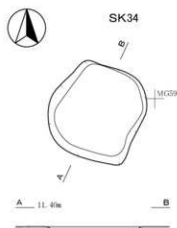


- 1 (色) 10YR4/3に黄褐色～3/20層構(横)南向地(性)L～SL(質)・(型)±
(備)黒褐色土を基質としてφ10～100mmの地山ブロックが入る。
φ50mmの円籠1～3%

SK10

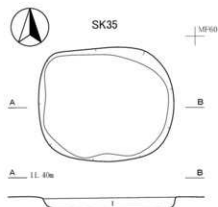
- 1 (色) 10YK3/3暗褐色(性)シルト(質)++(型)-
(備)人為層 地山土粒3～5mm1%未満 地山土粒1mm以下1%未満
酸化土粒1mm1%未満 炭10～15mm1%未満
2 (色) 10YK3/4暗褐色(性)シルト(質)++(型)-
(備)人為層 炭化物:粒1～3mm2%、塊5mm1%未満、底部に集中
炭10～15mm1% 炭屑化物は3層上で火を焚き残ったものか。
3 (色) 7.5YR5/4に黄褐色(性)粘質シルト(横土)(質)++(型)・(備)
4 (色) 10YR4/4褐色(性)シルト(質)++(型)-
(備)人為層 炭化物粒1～10mm1%未満 塊土粒5mm1%未満
塊土粒1以下～1mm1%未満

4層は、3層以前に火を焚いたりまたは埋地中で焚いた際の塊土及び炭化物を含んでいるため人為的であり、4層の上に3層上で火を焚き、その燃残した層が3層である。2層は、3層上で火を焚いた際に残った炭化物を主に多く含む。1層は、腐葉のための堆積物と思われる。



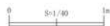
SK34

- 1 (色) 10YR4/4褐色(性)シルト(質)++(型)±
(備)一括埋の戻し、地山土粒2mm1%未満 地山土粒5mm1%未満

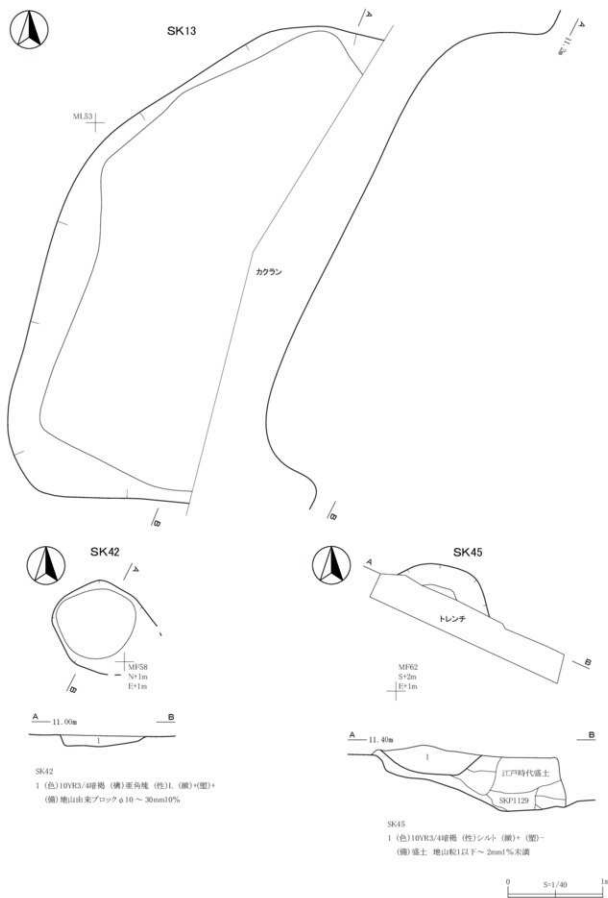


SK35

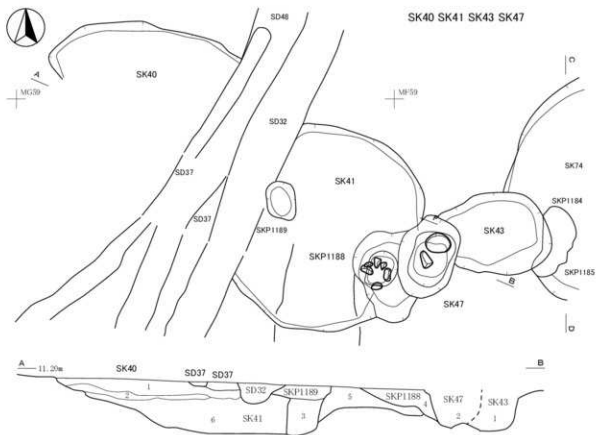
- 1 (色) 10YR4/4褐色(性)シルト(質)++(型)-
(備)炭化物粒2～3mm1%未満
地山土粒1mm以下1%未満



第154図 江戸時代(北西部)遺構平面図・断面図(土坑SK10・12・34・35)



第155図 江戸時代（北西部）遺構平面図・断面図（土坑SK13・42・45）



SD32 SD37 SK41

1 (色) 10YR4/3に灰・黄褐色～4/8褐色 (横) 垂直焼
 (性) L ～ CL (調) ++ (堅) + (質) 地山由来ブロック 弱くグライ化

2 (色) 10YR5/6黄褐色 (横) 垂直焼 (性) L (調) + (堅) ± ～ +
 (質) 地山黄色土が薄く入る。

SKP1189

3 (色) 10YR4/2灰黄褐色～3/4暗褐色 (横) 垂直焼 (性) L (調) + (堅) +
 (質) 地山由来ブロックφ10 ～ 30mm10%

SKP1188

4 (色) 10YR4/4褐色 (横) 垂直焼 (性) SL (調) ++ (堅) ±
 (質) 地山土の再堆積層

SK41

5 (色) 10YR5/6黄褐色 (横) 垂直焼 (性) L (調) + (堅) ± ～ +
 (質) 地山黄色土が薄く入る。

6 (色) 10YR4/2灰黄褐色～3/4暗褐色 (横) 垂直焼 (性) L (調) + (堅) +
 (質) 地山由来ブロックφ10 ～ 30mm10%

SK43 SK47

1 (色) 10YR4/2照褐色系質 10YR5/4に灰・黄褐色～5/6黄褐色ブロック (横) 垂直焼
 (性) L ～ CL (調) ++ (堅) + (質) 地山ブロックφ10mm1%

炭化物φ10mm含む 人為堆積 斜交変理が発達 堆積の単位で分層

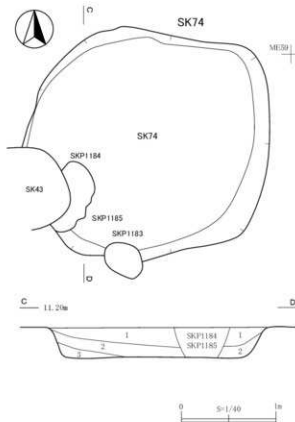
2 (色) 10YR4/2灰黄褐色～3/2照褐色系質 (横) 垂直焼 (性) L ～ CL
 (調) ++ (堅) + (質) 地山ブロックφ5 ～ 10mm1% 炭化物φ10mm含む
 (調) φ30mm含む 人為堆積 斜交変理が発達 堆積の単位で分層した。

SK74

1 (色) 10YR4/2灰黄褐色 (横) 無 (性) シルト (調) 強 (堅) 弱
 (質) 地山土塊5 ～ 10mm1%未満 粒以下F～1mm1%未満
 縦20 ～ 30mm1%未満 炭化物粒3mm1%未満 グライ化 人為堆積

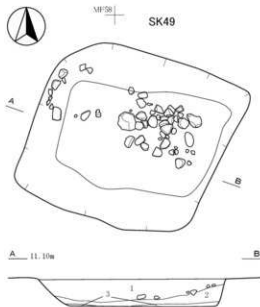
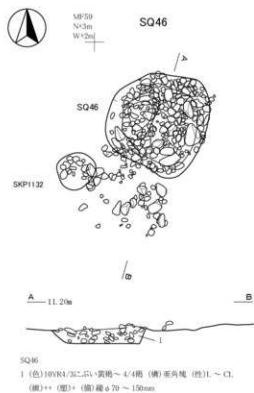
2 (色) 10YR4/2灰黄褐色 (横) 無 (性) シルト (調) 強 (堅) 弱
 (質) 地山土塊5 ～ 20mm1% 縦20mm1%未満 グライ化 人為堆積

3 (色) 10YR3/2照褐色 (横) 無 (性) シルト (調) 強 (堅) やや弱
 (質) 地山土塊5 ～ 10mm1% 人為堆積

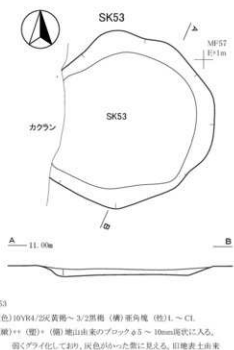
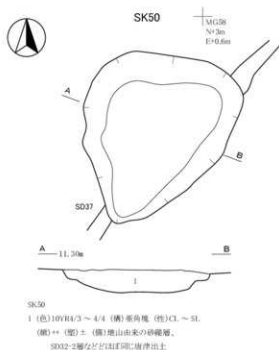


第156図 江戸時代(北西部)遺構平面図・断面図(土坑SK40・41・43・47・74)

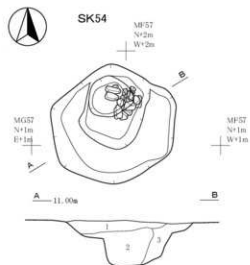
第3章 発掘調査の方法と成果



- SK49
- (色)NLS/0赤 (硬)± (備)炭化物 堆積層
 - (色)10YR4/1暗灰～3/1黒褐色 (黄)垂直地 (性)IL～SL
(硬)++ (硬)++ (備)3層全基質として炭化物φ10mm10%
1層との層界にφ100～200mmの縦を敷く。特に地けていない。
 - (色)10YR4/1暗灰～4/3に広い黄褐色 (黄)垂直地 (性)IL～SL
(硬)++ (硬)++ (備)粘土層 砂線を感じる。凹地底面に起っている。

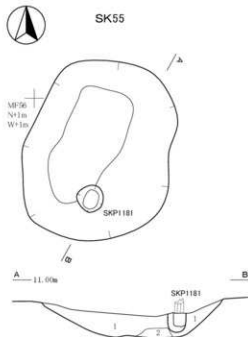


第157図 江戸時代(北西部)遺構平面図・断面図(集石SQ46、土坑SK49・50・53)



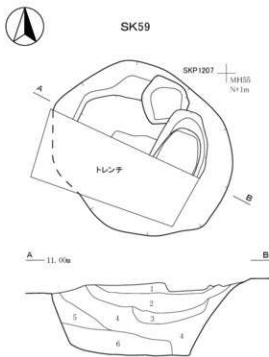
SK54

- (色)10VR4/3底質5%ブロック (構)東角境 (性)L (層)** (型)
(備)地山由来ブロックφ10mm2% 小籠φ10～30mm1%入る 弱クグライ化
- (色)10VR4/2 (構)東角境 (性)L～CL (層)* (型)
(備)1層との層界に黄色砂のラヒナ入る。層相は1層と同じで堆積方向は北から南に向かって弱ク積する 1層より意味が強い。
- (色)10VR4/2 (構)東角境 (性)CL (層)** (型)
(備)2層より弱クグライ化する。2層下位にもブロック状に入り込む。層相は1層と似るが、グライ化しておりより粘土を感じる。



SK55

- (色)10VR4/3底質5%ブロック (構)東角境 (性)L (層)** (型)
(備)地山由来ブロックφ10mm2% 小籠φ10～30mm1%入る 弱クグライ化
- (色)10VR4/2 (構)東角境 (性)L～CL (層)* (型)
(備)層相は1層と同じ



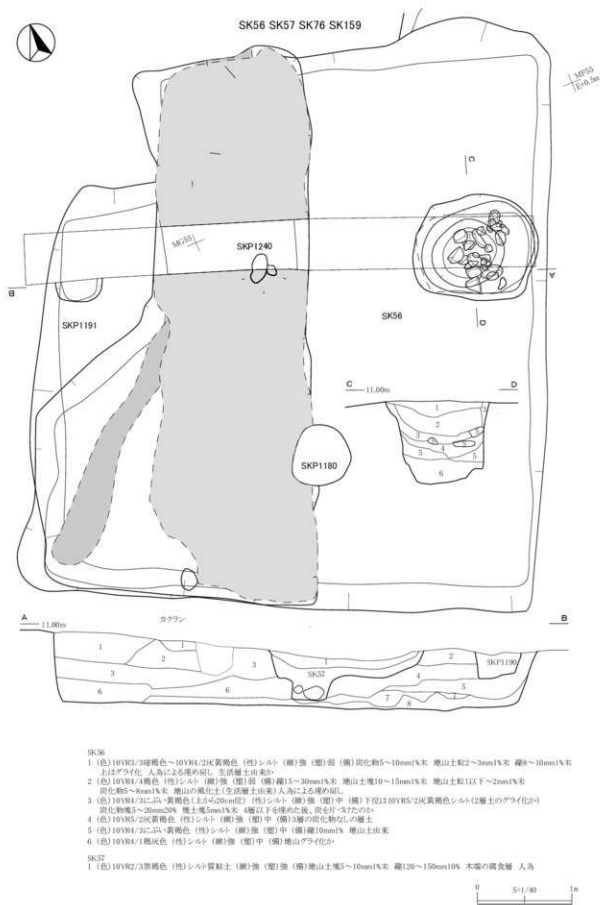
SK59

SK59

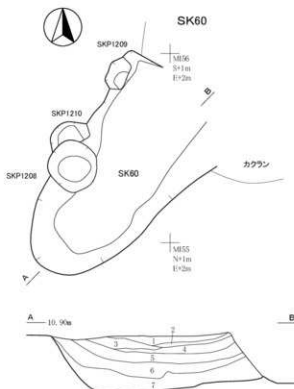
- (色)10VK3/3堆積 (性)シルト
(備)強 (型)弱
(備)地山粒2～3mm1%未満 人為による埋め戻し
- (色)10VK3/1黒腐 (性)シルト
(備)強 (型)やや弱
(備)地山土粒10～20mm1%未満 人為堆積
- (色)10VK3/2堆積 (性)シルト
(備)強 (型)弱
(備)地山土粒5～10mm10% 人為堆積
- (色)10VK3/4堆積 (性)シルト
(備)強 (型)弱
(備)地山土粒3～10mm10% 雑10mm1% 人為堆積
- (色)10VK5/6黄腐 (性)シルト
(備)強 (型)中
(備)雑20～30mm1% 人為堆積 地山由来
- (色)10VK5/6黄腐 (性)シルト
(備)強 (型)中
(備)雑20～30mm1% 人為堆積 地山由来



第158図 江戸時代(北西部)遺構平面図・断面図(土坑SK54・55・59)

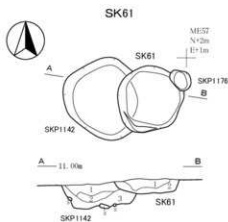


第159図 江戸時代（北西部）遺構平面図・断面図（土坑SK56・57・76・159）



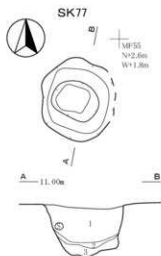
SK60

- (色)10YR3/2暗褐 (性)シルト (質)強 (堅)弱
(備)地山配2～3mm1%未満 地山土配1～2mm1%未満
人為による埋め崩し、グライ化しているため由来は不明
生活面由来か?
- (性)無 (質)強 (堅)弱
(備)炭化物粒80%に10YR4/6褐シルト土30%が混入 焼土粒
1mm1%未満 焼5mm1%未満 地山土がブロック状のため人為
による埋め崩しと推測 5層は火化いた後埋戻した可能性あり
- (色)10YR3/2暗褐 (質)無 (性)シルト (質)強 (堅)弱
(備)地山土焼5～10mm10% 炭化物粒3～5mm1%未満
地山土がブロック状であり人為堆積 由来は地山土か?
- (色)10YR3/4暗褐 (質)無 (性)シルト (質)強 (堅)弱
(備)地山土粒3～10mm10% 粒10mm1%未満
炭化物粒2mm1%未満 人為堆積
- (色)10YR3/2暗褐 (質)無 (性)シルト (質)強 (堅)やや弱
(備)炭化物粒3～5mm15% 焼5～10mm5%
地山土焼10～20mm1%未満 粒1mm以下1%未満
焼土焼5～10mm1%未満 人為堆積
5層は火化いた後埋戻した可能性あり
- (色)10YR3/2暗褐 (質)無 (性)粘土質シルト (質)強 (堅)中
(備)地山土焼5～8mm1%未満 炭5～15mm1%未満
炭化物粒5mm1%未満 人為堆積
- (色)10YR5/6黄褐 (質)無 (性)シルト (質)強 (堅)中
(備)粒20～30mm1% 人為堆積 地山由来



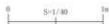
SK61

- (色)10YR4/6褐 (性)シルト (質)無 (堅)弱
(備)炭化物粒φ1mm以下～2mm1%
- (色)10YR3/4暗褐 (性)シルト (質)強 (堅)弱
(備)炭化物粒φ5～30mm5% 炭5mm1%未満
- (色)10YR4/2黄褐～4/3にぶい黄褐 (質)重角塊
(性)SCL (質)++ (堅)++
(備)地山由来の黄褐色層 ややグライ化して灰色がかる。

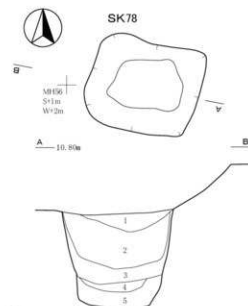


SK77

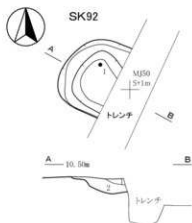
- (色)N1.5/0黒 (質)重角塊 (性)JL (質)++ (堅)±
(備)炭化物100%
- (色)10YR4/2黄褐～4/3にぶい黄褐 (質)重角塊
(性)SCL (質)++ (堅)++
(備)地山由来の黄褐色層 ややグライ化して灰色がかる。
- (色)10YR3/2暗褐 (質)重角塊
(性)JLC～CL (質)++ (堅)++
(備)炭φ50～100mm1%入る 基層は田植表土由来
ややグライ化して灰色がかる。



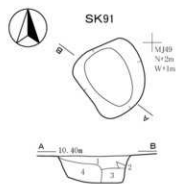
第160図 江戸時代（北西部）遺構平面図・断面図（土坑SK60・61・77）



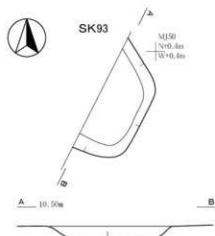
- SK78
- (色)10YR4/4 灰黄褐色～10YR4/1 褐色 (性)砂質シルト (調)弱 (堅)中 (備)縦10～20cm¹尺 地山粘10～20cm¹尺
 - (色)10YR 4/2 灰黄褐色～10YR4/1 褐色 (性)砂質シルト(グライ化地山由来が主)(調)中 (堅)弱 (備)地山土塊5cm¹尺、縦5～70cm¹尺 腐食土板状10cm¹尺
 - (色)10YR 10YR4/1 褐色 (性)砂質シルト(産の灰)グライ化地山由来が主(調)中 (堅)弱 (備)地山土塊5cm¹尺、縦5～70cm¹尺 地山由来が主
 - (色)N/1 暗灰色 (性)粘土質シルト (調)やや弱 (堅)弱 (備)植物遺体 植物遺体層 自然堆積
 - (色)2.5Y5/2 暗黄色 (性)砂質シルト (調)やや弱 (堅)やや弱 (備)縦20～80cm¹尺 自然流土



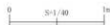
- SK92
- (色)10YR5/4 基質 (調)重角塊 (性)SCL (調)+(堅)++ (備)1φ～5φ¹尺¹尺溝 雨後に調査
 - (色)10YR4/3 基質 (調)重角塊 (性)SCL (調)+(堅)++ (備)炭化物3φ～20φ¹尺¹尺溝 地山由来の粘土5φ～10φ¹尺¹尺溝 雨後に調査



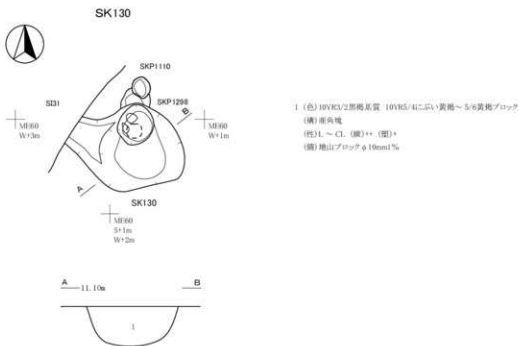
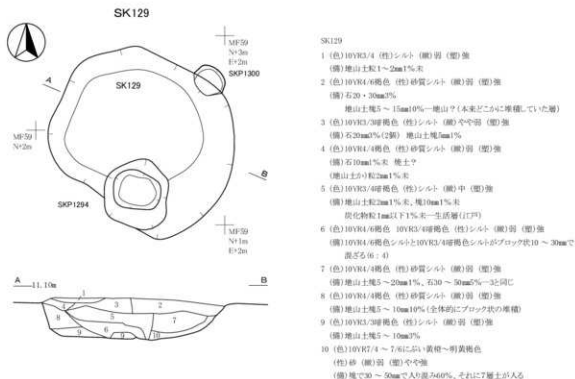
- SK91
- (色)10YR3/2 基質 (調)重角塊 (性)SL (調)+(堅)+ (備)地山由来の土塊:10φ～20φ¹尺¹尺混入 炭化物:5φ～15φ¹尺¹尺 縦:5φ～20φ¹尺¹尺溝 生活層土
 - (色)10YR5/4 基質 (調)性)SCL (調)+(堅)++ (備)生活層土 地山土由来
 - (色)10YR5/3 基質 (調)重角塊 (性)SL (調)+(堅)++ (備)水分多し 地山由来の土塊:10φ～30φ¹尺¹尺混入 炭化物:5φ～10φ¹尺¹尺混入 縦:15φ～40φ¹尺¹尺混入 生活層土 柱穴本体
 - (色)10YR5/4 基質 (調)性)SCL (調)+(堅)++ (備)表土由来の土塊:10φ～40φ¹尺¹尺混入 炭化物:3φ～5φ¹尺¹尺溝 地山土由来 縦:10φ～15φ¹尺¹尺溝 地山土由来



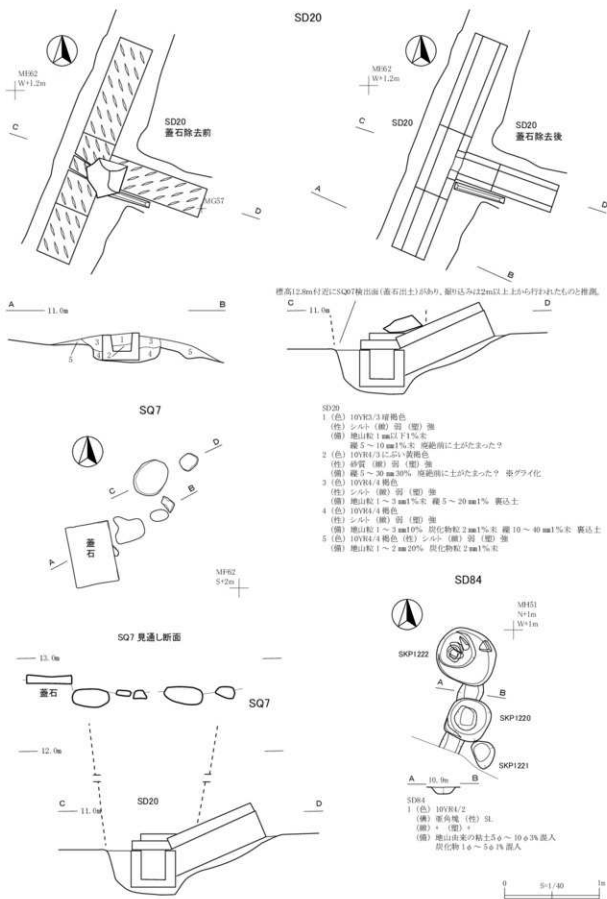
- SK93
- (色)10YR3/2 基質 (調)重角塊 (性)SL (調)+(堅)+ (備)地山由来の土塊:10φ～20φ¹尺¹尺混入 縦:φ5～20cm



第161図 江戸時代(北西部)遺構平面図・断面図(土坑SK78・91・92・93)

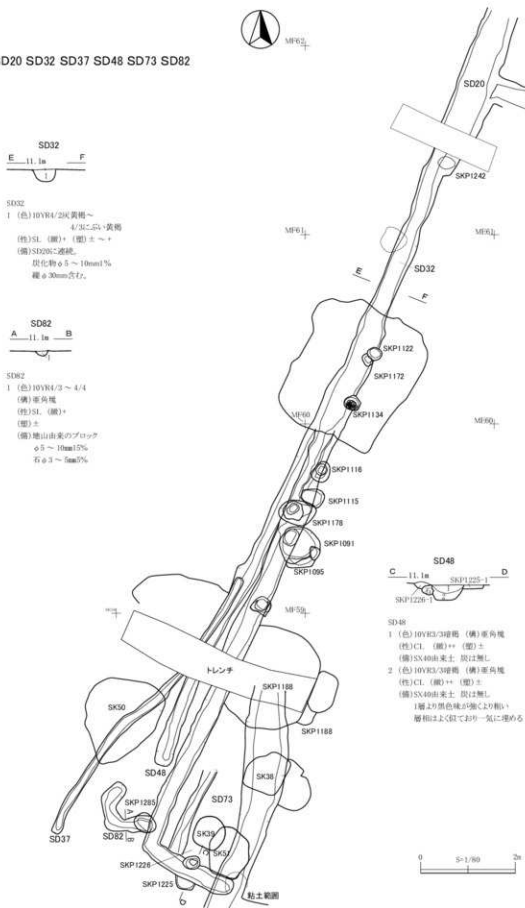


第162図 江戸時代(西北部)遺構平面図・断面図(土坑SK129・130)

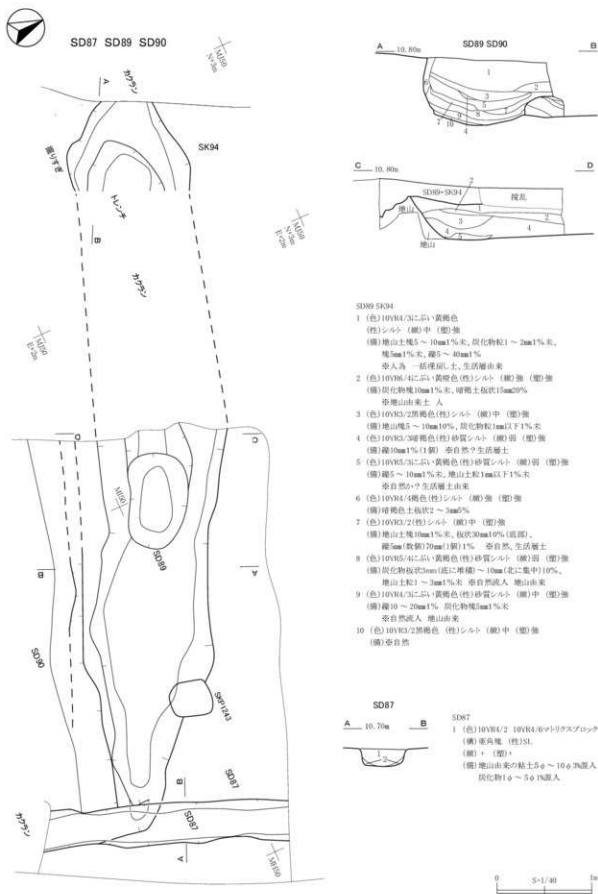


第163図 江戸時代(北西部)遺構平面図・断面図(溝跡SD16・20・84)

SD20 SD32 SD37 SD48 SD73 SD82



第164図 江戸時代(北西部)遺構平面図・断面図(溝跡SD20・32・37・48・73・82)



6 敷地南西部の遺構

盛土によって造成されており、平安時代遺構が盛土下に残る。S F01の裾に大形のゴミ穴が集中する地区である。北西部との境界域には井戸がまとまる。

(1) 掘立柱建物跡

S B231(第167図、第3分冊図版166)は敷地南西隅に近い地点にある。中村氏所見は「南北方向を桁行とする身舎梁間二間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。後述のS B232と「一体になる可能性も考えたが、両者の間尺が異なるため、別の遺構と判断した」。盛土造成前の旧地表上で検出した。柱穴の堆積土は地山由来の黄褐色土である。盛土の厚さが30cm程度と調査区東側に比べて薄い地点であるので、造成初期の建物跡かどうかは分からなかった。

S B232(第167図、第3分冊図版167)はS B231北側にあり、長軸を南北方向に取っている。中村氏所見は「柱穴列の可能性もある。いずれの場合もS B231と一体になる可能性も考えたが、両者の間尺が異なるため別の遺構であると判断した。柱穴列の場合は、南北を桁行方向とする長辺六間の塀ないし柵。掘立柱建物跡の場合は、南北を桁行方向とする身舎梁間二間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。本遺構も、盛土造成前の旧地表上で検出した。柱穴の堆積土は地山由来の黄褐色土である。

S B522(第168図)は、旧県民会館・ジョイナス建物下の布基礎間から検出した柱穴から復原した。中村氏所見は「南北方向を桁行とする身舎梁間三間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。しっかりした柱穴であり、他にも同様の柱穴があったはずだが検出しきれなかった。

S B526(第169図)も敷地南西隅に近い地点にある。中村氏所見は「東西方向を桁行とする身舎梁間三間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。本遺構も、盛土造成前の旧地表上で検出した。柱穴の堆積土は地山由来の黄褐色土である。S B231と重なるが新旧関係は不明である。

S B528(第168図)は本地区東寄りの切岸肩に近い地点で検出した。中村氏所見は「桁行方向は不明。庇・下屋は無い」。道路跡SM198の東側にあるが、S A527で西側を遮られる。切り岸肩に近い設置場所であって、西側奥向きへの視線を遮られることから、作業小屋などの格の低い建物だろうか。

(2) 柱列跡

S A520(第169図)は、S F01裾際に並ぶ柱穴列として検出した。中村氏所見は「屋敷西境の柱穴列。S A28と連続する可能性もある。図では南北を桁行とする五間の塀ないし柵」。S F01に関連する施設としてS A28と同様の性格を持つ可能性が高い。S A28がS F01の盛土土壌化に伴って1600年代第2四半期末には廃絶するので、本遺構が新しい可能性がある。S A28と時期差があるとなれば、本遺構に連続する未発見の柱穴列が存在したはずである。

S A523(第170図)はS B522と直交するように検出された。中村氏所見は「東西を桁行とする五間の塀ないし柵」。S B522との新旧は不明である。また、S A527とも延長線上で直交する。屋敷内の分割線だとすれば、S A527とは同時に機能していた可能性がある。

S A524(第170図)は、S B232と直交するように検出された。中村氏所見は「東西を桁行とする七間の塀ないし柵」。本遺構はS A523と並行、S A527と延長線で直交する。これも屋敷内の分割線だとすれば、S A523・527とは同時に機能していた可能性がある。

S A527(第170図)は、S A523・524と同時に屋敷内を分割していた可能性がある。中村氏所見は「南北方向を桁行とする五間の塀ないし柵」。S B528の西側を遮る目隠塀かも知れない。

(3) 堅穴状遺構

S K I 151 (第171図、第3分冊図版168)、S K I 154 (第172図、第3分冊図版168)、S K I 161 (第171図、第3分冊図版169)、S K I 164 (第173図、第3分冊図版170)は、平面方形または楕円形の堅穴状遺構である。最初からゴミ穴として掘られた大形土坑と異なり、S F 01堀から数m離れた所に作られる。床面は平坦で、S K I 154・161のように南側短辺に階段状の段差を作り出すものがある。廃絶後はゴミ穴に転用されており、大量の木製品が出土した。S K I 161は釘の出土が目立ち、特に巻頭釘は遺跡内出土313点中114点36%がまとまっている。不思議なことに、建築部材は20点10%と目立たない。かえって木筒が5点(第2分冊162~167)あり注目される。S K I 164は廃絶後直径5~20cmの礫で埋められている。S K 177(後述)や北西部S Q 46(第157図、第3分冊図版158)と同様の廃絶状況を示す。S B 27やS E 80といった大量の礫を用いる遺構を構築した後、余材を埋納したのだろうか。

(4) 井戸跡

本地区北側は小ぶりな方形掘方の井戸が3基、それぞれ5~6mの距離を置いてまとまる。隣接する北西地区南側でも溜井の可能性のあるS K 78があり、関連すると思われる。

S E 160(第174図、第3分冊図版171~174)、S E 181(第175図、第3分冊図版175)は、4隅に柱を建てて貫で連結し、側板を立て並べて井戸枠とする。

S E 176(第174図、第3分冊図版174)は素掘りの井戸であるが、掘方の形態がS E 160とよく似るため、廃絶時に井戸枠を抜いている可能性がある。

(5) 土坑(第175~190図、第3分冊図版175~196)

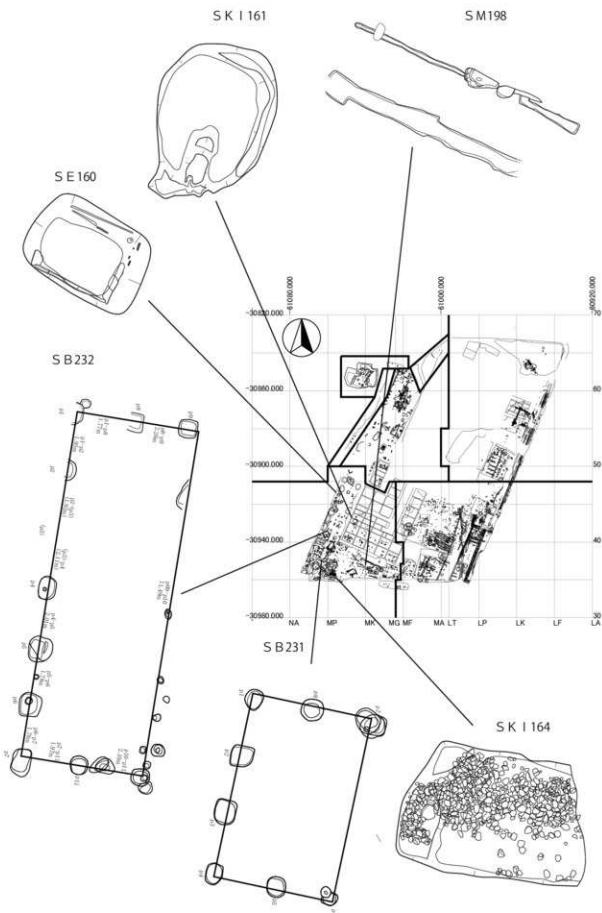
本地区の土坑はゴミ穴として用いられ、掘削と埋め戻しを何度も繰り返している。その過程で平面形が広がり大形化している。ゴミの廃棄層が漆黒土壌、埋め戻し層が地山由来の黄褐色土で互層となる。埋め戻しは一気に行われ、大量の黄褐色土が堆積している。灰や炭化物層が所々挟まるのは、ゴミ穴に火をかけて生活害虫の発生を抑えるためかも知れない。土坑下半部では、地下水位が高くグライ化して木製品の保存状態がよい。漆黒土の下層部では植物質遺物が泥炭化する。

S K 134(第175図、第3分冊図版178)の底面から箕や笊のような編組品が出土した(第2分冊第124図4、第3分冊図版178-4)。材種分析の結果、カエデ科カエデ属である事が判明した(第5分冊第2章第2節第7表)。製作技術が重要無形民俗文化財となっている民俗資料「オエダラ箕」は、材料にイタヤカエデを用いる。民俗技術に関連する出土資料である。また、鯨裂包丁と思われる鉄製工具が出土した(第2分冊第248図2、第257図8)。

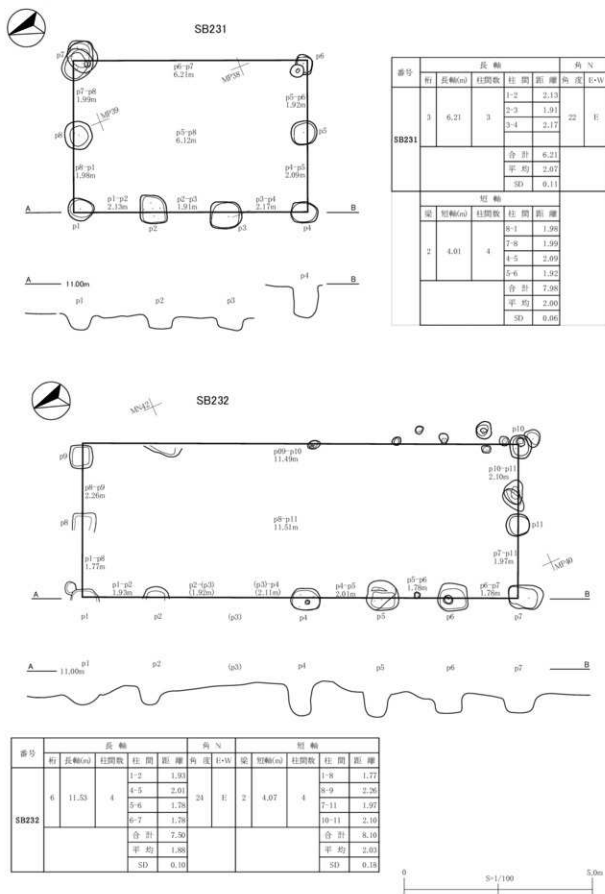
S K 177の底面近くには、直径20~30cmの大形礫が大量に捨てられていた(第182~185図、図版187-2)。先に述べたS K I 164やS Q 46における礫堆積状況と共通するが、直径がずっと大きい。不用になった建設資材であろうか。

(6) 道路跡・溝跡

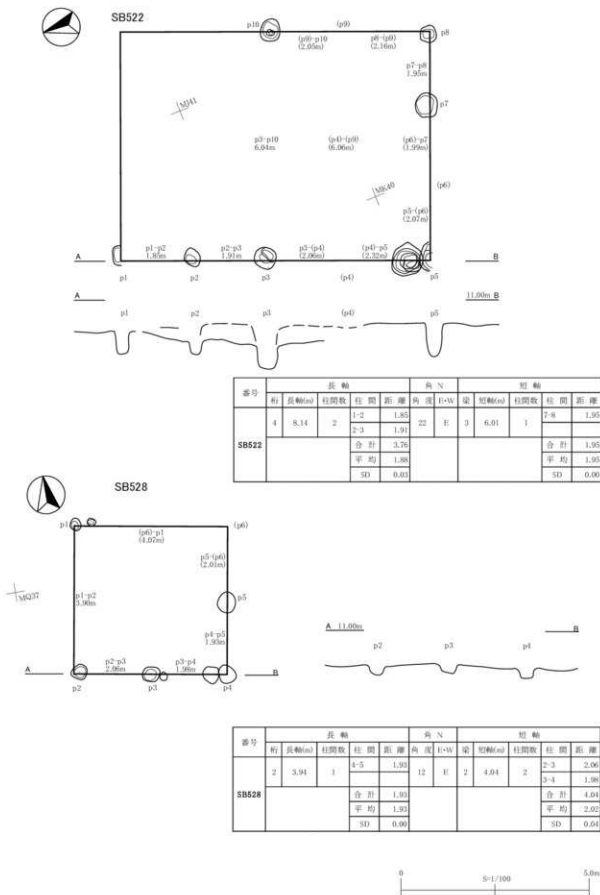
調査区南側、南東地区との境界域に道路跡S M 198(第196・197図、第3分冊198)がある。両側を土側溝S D 196・197・218で区画されており、東側はS A 527で遮られる。他に、南西隅では旧地表に設けられたS D 250がある(第3分冊図版199-1~3)。造成時の盛土で直接埋められており、江戸時代初期の溝である。



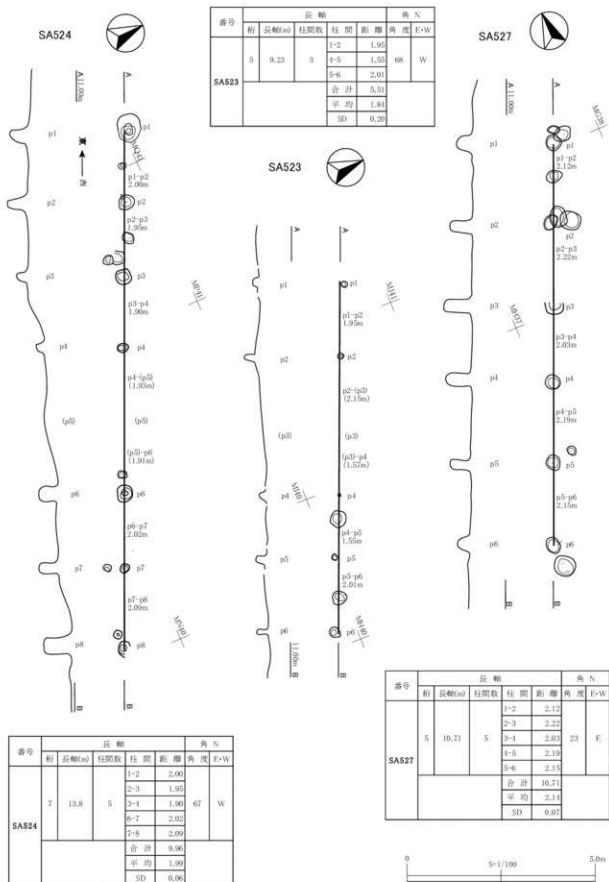
第 166 図 江戸時代（南西部）遺構配置図



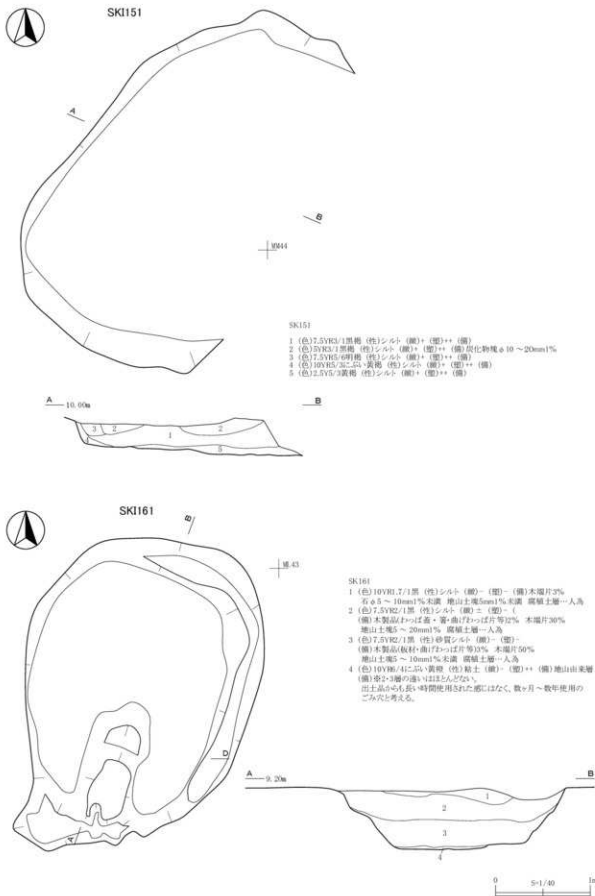
第 167 図 江戸時代（南西部）遺構平面図・断面図（据立柱建物跡SB231・232）



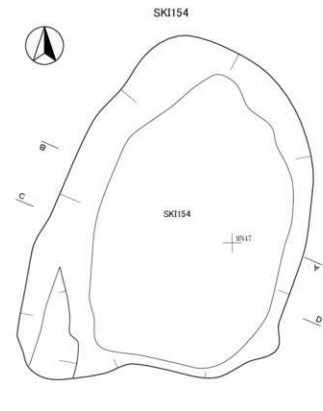
第168図 江戸時代（南西部）遺構平面図・断面図（掘立柱建物跡SB522・528）



第170図 江戸時代(南西部)遺構平面図・断面図(柱穴列SA523・524・527)



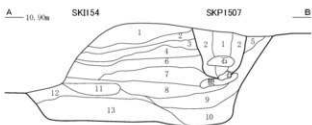
第171図 江戸時代(南西部)遺構平面図・断面図(竪穴状遺構SKI151・161)



SKI154北壁

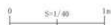
- 1 (色) 10VR1/3に5%黄褐色 (性) 粘質シルト (層)++ (層)++
(備) 明黄褐色粘土全形状に20% 炭化物約5%
- 2 (色) 10VR2/4暗褐色 (性) シルト (層)++ (層)++
(備) 浅黄褐色土全形状・形状に20%
- 3 (色) 10VR3/3暗褐色 (性) 粘質シルト (層)++ (層)++
(備) 浅黄褐色土約10%
- 4 (色) 10VR6/6明黄褐色 (性) 砂 (層)- (層)-
(備) 一部鉄分で赤褐色化
- 5 (色) 10VR7/6明黄褐色 (性) 粘土 (層)++ (層)++ (備) 暗褐色土40%
- 6 (色) 10VR14/3に5%黄褐色 (性) 粘質シルト (層)++ (層)++
(備) 明黄褐色粘土約5% 炭化物約5% 砂利φ1mm20%
- 7 (色) 10VR15/4に5%黄褐色 (性) シルト (層)++ (層)++
(備) 炭化物約5% 砂利φ1~3mm・小礫φ1~3cm約30%
- 8 (色) 10VR15/2浅黄褐色 (性) 砂利層 (層)- (層)-
(備) 砂利φ1mm・小礫φ1mmφ全体に50%
- 9 (色) 10VR15/1褐色 (性) 粘土 (層)++ (層)++
(備) 砂利φ1mm2% 炭化物約5%
- 10 (色) 10VR1/3に5%黄褐色 (性) 粘質シルト (層)- (層)-
(備) 砂利φ1mmの中に小礫φ1~3cm約20%
- 11 (色) 10VR16/3に5%黄褐色 (性) 粘土 (層)++ (層)++
(備) 粘土をサンドする上に炭化物が形状に堆積する。縦石含む。
- 12 (色) 10VR3/3暗褐色 (性) 粘土 (層)- (層)++
(備) 多量の細か〜有礫物
- 13 (色) 10VR2/3暗褐色 (性) スクマ層 (層)- (層)-
(備) 木の皮などの有機物が堆積した層
下層はグライ化し、青灰色を呈す。

SKI154北壁

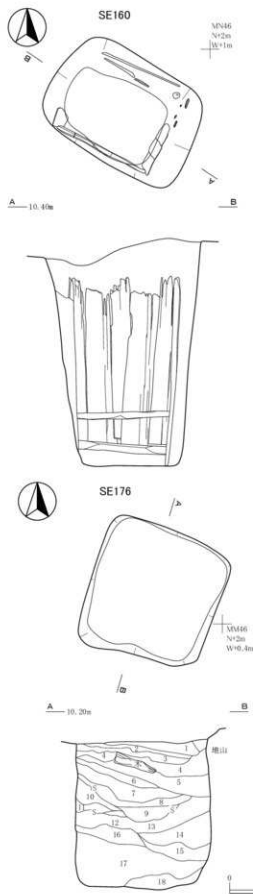


SKI154南壁-1

- 1 (色) 10VR14/3に5%黄褐色 (性) 粘質シルト (層)++ (層)++
(備) 北壁1層に対応 明黄褐色粘土20% 炭化物約5%
- 2 (色) 10VR12/2暗褐色 (性) シルト (層)++ (層)++ (備) 北壁2層に対応
浅黄褐色土全形状・形状に20%
- 3 (色) 10VR6/6明黄褐色 (性) 砂 (層)- (層)- (備) 北壁4層に対応
浅黄褐色土約10% 一部鉄分で赤褐色化
- 4 (色) 10VR14/3に5%黄褐色 (性) 粘質シルト (層)++ (層)++
(備) 北壁6層に対応 明黄褐色土全形状に5% 炭化物約5%
砂利φ1mm20%
- 5 (色) 10VR15/4に5%黄褐色 (性) シルト (層)++ (層)++
(備) 北壁7層に対応 炭化物約5%
砂利φ1~3mm・小礫φ1~3cm約30%
- 6 (色) 10VR7/6明黄褐色 (性) 粘土 (層)++ (層)++ (備) 北壁5層に対応
暗褐色土全形状に20%
- 7 (色) 10VR3/3暗褐色 (性) シルト (層)++ (層)++ (備) 北壁5層に対応
に5%黄褐色土全形状・形状に10%
- 8 (色) 10VR15/3に5%黄褐色 (性) 粘質シルト (層)++ (層)++
(備) 北壁7層下層に対応 炭化物約5%
- 9 (色) 10VR15/2浅黄褐色 (性) 砂利層 (層)- (層)- (備) 北壁8層に対応
砂利φ1mm・小礫φ1mmφ全体に50%
- 10 (色) 10VR15/1褐色 (性) 粘土 (層)++ (層)++ (備) 北壁9層に対応
砂利φ1mm2% 炭化物約5%
- 11 (色) 10VR14/3に5%黄褐色 (性) 粘質シルト (層)++ (層)++
(備) 北壁10層に対応 砂利φ1mmの中に小礫φ1~3cm約20%
- 12 (色) 10VR1/7/1黒 (性) 炭化物層 (層)++ (層)++
(備) 北壁11層に対応 炭化物約9%
- 13 (色) 10VR14/3に5%黄褐色 (性) 粘土 (層)++ (層)++
(備) 北壁11層に対応 明黄褐色土全形状・形状に5%
- 14 (色) 10VR3/3暗褐色 (性) 粘土 (層)- (層)++ (備) 北壁12層に対応
多量の細か〜有礫物
- 15 (色) 10VR3/2暗褐色 (性) シルト (層)++ (層)++ (備) 北壁12層に対応なし
明黄褐色土約5% に5%黄褐色粘土か? プラック約9%
炭化物を全体的に10%
- 16 (色) 10VR2/3暗褐色 (性) スクマ層 (層)++ (層)++
(備) 北壁13層に対応 木の皮などの有機物が堆積した層
下層はグライ化し、青灰色を呈す。



第172図 江戸時代(南西部)遺構平面図・断面図(竅穴状遺構SKI154)



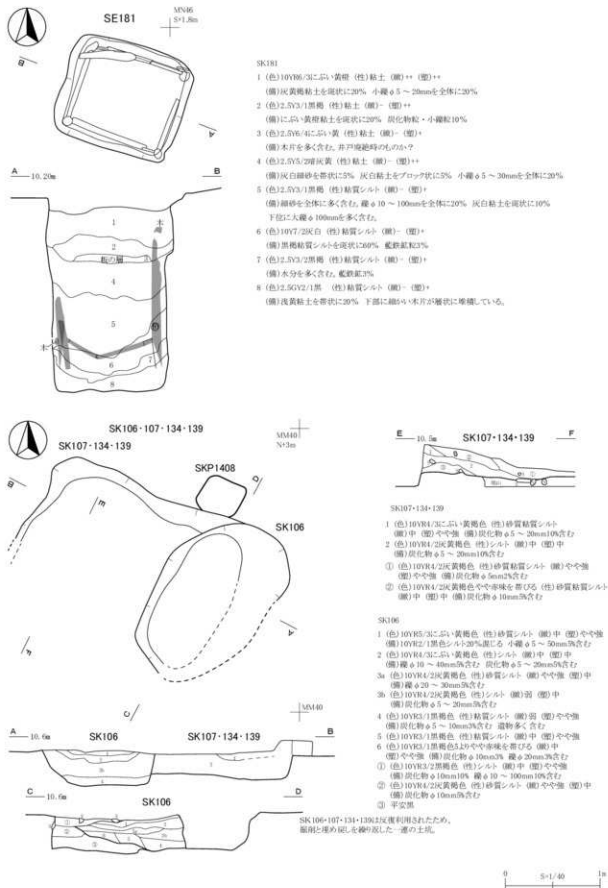
SE160

- 1 (色) 10V81.7/1黒 (性) 砂質シルト (調)・(型)・(備) 黒褐色粘土を帯状に30%
灰白粘土ブロック3% 炭化物等を全体に多く含む、小礫φ50mm2%
- 2 (色) 10V82/1黒 (性) 粘質シルト (調)・(型)・
(備) 上部が同色砂層、下部が粘性を伴った層を呈す。
- 3 (色) 2.5V2/1黒 (性) 砂質シルト (調)・(型)・
(備) オリーブ黒粘土を帯状に30% に灰白黄粘土を10% 細礫φ5～10mmを全体に多く
含む、炭化物をわずかに含む。
- 4 (色) 10V82/1黒 (性) 粘質シルト (調)・(型)・(備) 有機物(植物繊維など)
を多く含む。
- 5 (色) 7.5V2/1緑黒 (性) シルト (調)・(型)・(備) 有機物、炭化物を極めて多く含む。
- 6 (色) 10V88/4黄黄緑 (性) 粘土 (調) (型)
(備) 黒褐色粘土を帯状に30% 炭化物を3% (層り方)

SE176

- 1 (色) 10V83/3暗褐 (性) 粘質シルト (調)・(型)・(備)
(備) 砂質シルト、黄黄緑粘土を帯状に10% 炭化物を3%
- 2 (色) 10V83/1黒褐色 (性) 粘質シルト (調)・(型)・(備) 木片等の有機物を多く含む。
- 3 (色) 10V86/2に灰白・黄緑(性) 粘土 (調)・(型)・(備) 細礫φ5～10mm10%
- 4 (色) 10V83/1黒褐色 (性) 粘土 (調)・(型)・(備)
(備) 黄黄緑粘土を帯状に40% 炭化物を3%
- 5 (色) 2.5V8/3に灰白・黄(性) 粘土 (調)・(型)・(備) 黒褐色砂質シルトを帯状に30%
細礫φ1～10mm10% 木片を多く含む。
- 6 (色) 2.5V7/3黄黄 (性) 粘土 (調)・(型)・(備) 黄色厚層状カルシウムをわずかに
含む 黒土を帯状に2%
- 7 (色) 2.5V7/4黄黄 (性) 粘土 (調)・(型)・(備) 黒土を帯状に20%
- 8 (色) 2.5V2/1黒(性) 砂 (調)・(型)・(備) に灰白黄粘土を帯状に30%
- 9 (色) 2.5V5/3黄褐 (性) 粘質シルト (調)・(型)・(備) 黒砂を帯・帯状に10%
炭化物を3%
- 10 (色) 2.5V3/2黒褐 (性) 粘質シルト (調)・(型)・(備) 黄黄緑粘土を帯状に20%
- 11 (色) 2.5V黄黄 (性) 粘土 (調)・(型)・(備) 炭化物2%。
- 12 (色) 2.5V3/1黒褐 (性) 砂 (調)・(型)・(備) 木片を多く含む。
- 13 (色) 2.5V3/1黒褐 (性) 粘土 (調)・(型)・(備) 全体に微細な砂粒、黄褐色粘土を
帯状に20% 炭化物を多い。
- 14 (色) 2.5V3/3暗オリーブ褐 (性) 粘質シルト (調)・(型)・(備) 黄黄緑粘土を帯状に
20% 細砂粒・炭化物を20% 灰白粘土を帯状に10%。
- 15 (色) 2.5V6/4に灰白・黄 (性) 粘土 (調)・(型)・(備) 全体的に小礫φ3～10mm10%
- 16 (色) 2.5V3/1黒褐 (性) シルト (調)・(型)・(備) 黄黄緑粘土を帯状に30% 有機物を極めて
多く含む。
- 17 (色) 2.5V3/2黒褐 (性) 粘土 (調)・(型)・(備) 木片等の有機物を極めて多く含む。
- 18 (色) 2.5V6/4に灰白・黄 (性) 粘土 (調)・(型)・(備) 木片等の有機物を帯状に
10%含む。炭化物をわずかに含む。

第174図 江戸時代(南西部)遺構平面図・断面図(井戸跡SE160・176)



第175図 江戸時代（南西部）遺構平面図・断面図
（井戸跡SE181、土坑SK106・107・134・139）

SK181

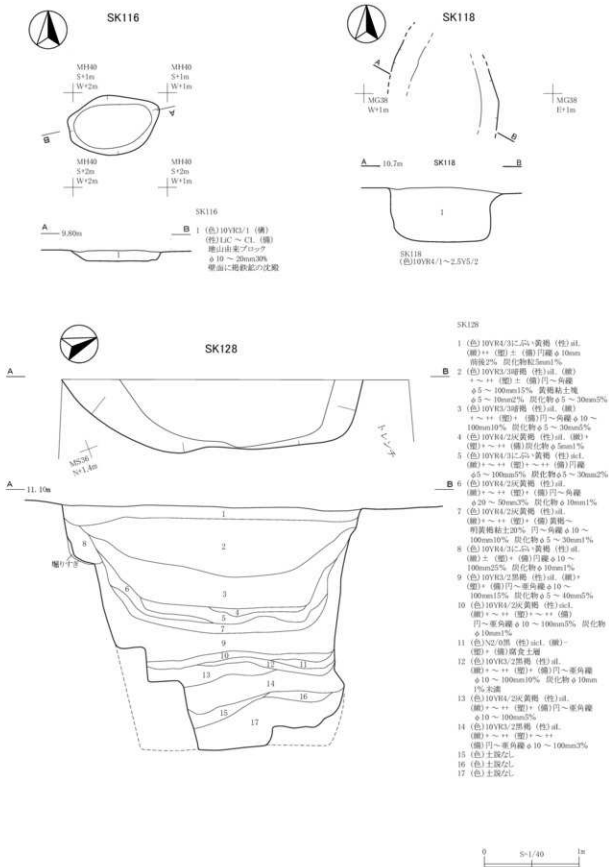
- 1 (色)10YR6/3にぶい・黄褐色 (性)粘土 (調)++ (堅)++
(備)灰黄褐色粘土を帯状に20%、小礫φ5～20mmを全体に20%
- 2 (色)2.5Y3/1黒褐色 (性)粘土 (調)- (堅)++
(備)にぶい・黄褐色粘土を帯状に20% 炭化植物・小礫粒10%
- 3 (色)2.5Y6/4にぶい・黄 (性)粘土 (調)- (堅)+
(備)本片を多く含む、井戸掘削時のものか？
- 4 (色)2.5Y3/2黄褐色 (性)粘土 (調)- (堅)++
(備)灰白細砂を帯状に5% 灰白粘土をブロック状に5% 小礫φ5～30mmを全体に20%
- 5 (色)2.5Y3/1黒褐色 (性)粘質シルト (調)- (堅)+
(備)細砂を全体に多く含む、礫φ10～100mmを全体に20% 灰白粘土を帯状に10%
下部に大礫φ100mmを多く含む。
- 6 (色)10Y7/2灰白 (性)粘質シルト (調)- (堅)+
(備)黒褐色粘質シルトを帯状に20%、炭粒炭3%
- 7 (色)2.5Y3/2黒褐色 (性)粘質シルト (調)- (堅)+
(備)水分を多く含む、炭粒炭3%
- 8 (色)2.5Y2/1黒 (性)粘質シルト (調)- (堅)+
(備)浅黄褐色を帯状に20% 下部に細砂・米汗が層状に堆積している。

SK107-134-139

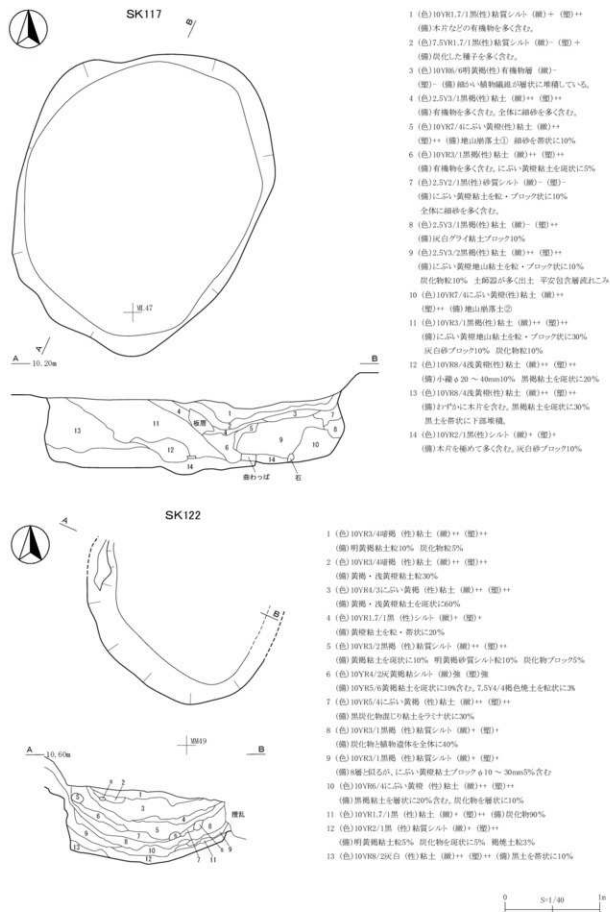
- 1 (色)10YR4/3にぶい・黄褐色 (性)砂質粘質シルト (調)中 (堅)やや強 (備)炭化物φ5～20mm10%含む
- 2 (色)10YR4/2灰黄褐色 (性)シルト (調)中 (堅)中 (備)炭化物φ5～20mm10%含む
- ① (色)10YR4/2灰黄褐色 (性)砂質粘質シルト (調)やや強 (堅)やや強 (備)炭化物φ5mm2%含む
- ② (色)10YR4/2灰黄褐色やや赤味を帯びる (性)砂質粘質シルト (調)中 (堅)中 (備)炭化物φ10mm5%含む

SK106

- 1 (色)10YR5/3にぶい・黄褐色 (性)砂質シルト (調)中 (堅)やや強 (備)10YR2/1黒色シルト20%混じる 小礫φ5～50mm5%含む
- 2 (色)10YR4/3にぶい・黄褐色 (性)シルト (調)中 (堅)中 (備)礫φ10～40mm5%含む 炭化物φ5～20mm5%含む
- 3a (色)10YR4/2灰黄褐色 (性)砂質シルト (調)やや強 (堅)中 (備)礫φ20～30mm5%含む
- 3b (色)10YR4/2灰黄褐色 (性)シルト (調)弱 (堅)中 (備)炭化物φ5～20mm5%含む
- 4 (色)10YR3/1黒褐色 (性)粘質シルト (調)弱 (堅)やや強 (備)炭化物φ5～10mm5%含む 遺物多く含む
- 5 (色)10YR3/1黒褐色 (性)粘質シルト (調)中 (堅)やや強 (備)炭化物φ10mm3% 礫φ20mm5%含む
- 6 (色)10YR3/1黒褐色5.0以下やや赤味を帯びる (調)中 (堅)やや強 (備)炭化物φ10mm3% 礫φ20mm5%含む
- ① (色)10YR3/2黒褐色 (性)シルト (調)中 (堅)やや強 (備)炭化物φ10mm10% 礫φ10～100mm10%含む
- ② (色)10YR4/2灰黄褐色 (性)砂質シルト (調)やや強 (堅)中 (備)炭化物φ10mm5%含む
- ③ 平安窯

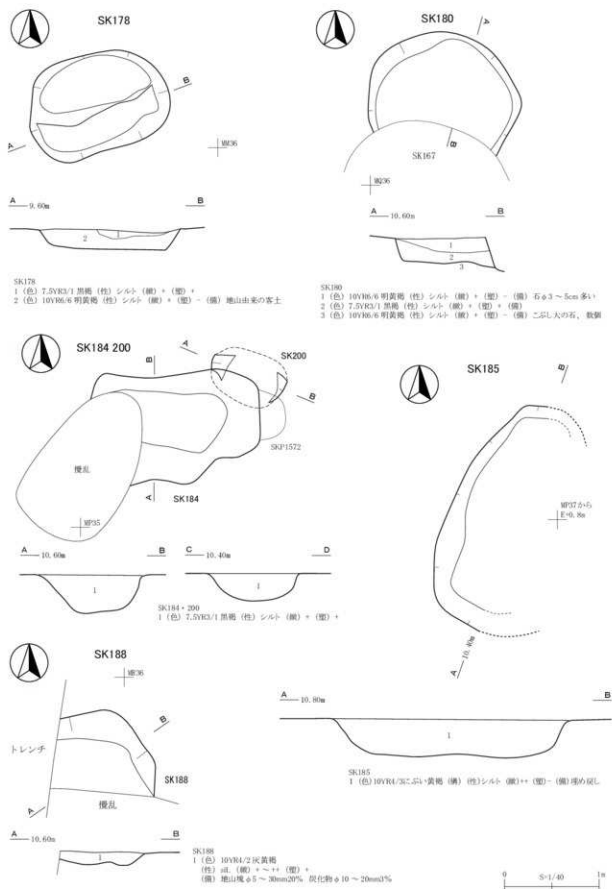


第176図 江戸時代(南西部)遺構平面・断面図(土坑SK116・118・128)

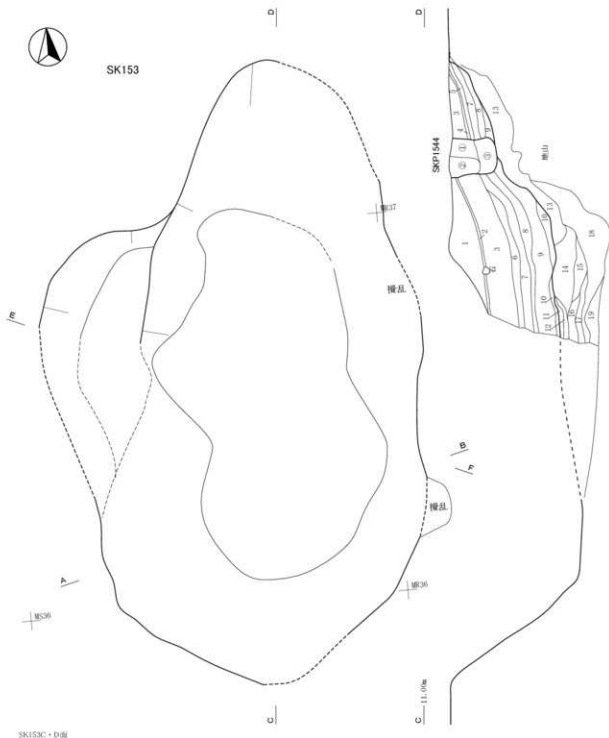


第177図 江戸時代(南西部)遺構平面図・断面図(土坑SK117・122)

第3章 発掘調査の方法と成果



第179図 江戸時代(南西部)遺構平面・断面図(土坑SK178・180・184・185・188・200)

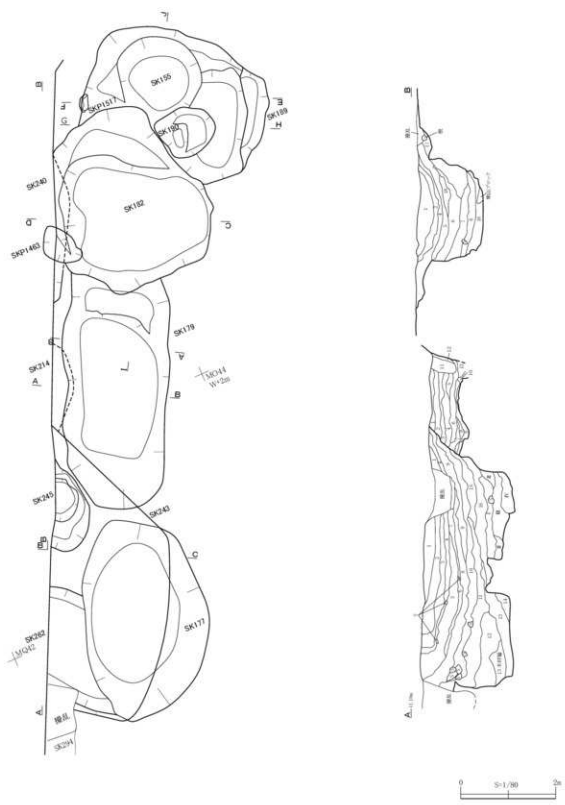


SK153C・D面

- 1 (色)10VR4/2灰黄褐色 (性)cl. (硬)± (堅)± (備)埋山粘土残φ5～10mm10%F位に多し。円～準角礫φ10～50mm5% 炭化物φ5mm1%
- 2 (色)10VR3/1黒褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)
- 3 (色)埋山粘土地の集合体のすき間に、10VR4/2に多い黄褐色30%入の込む。(性)sl. (硬)± (堅)± (備)円～準角礫φ10～100mm5%上位に多し。
- 4 (色)7.5VR4/2灰褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)
- 5 (色)7.5VR4/2灰褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)埋山粘土を混状に50%
- 6 (色)7.5VR3/2黒褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)炭化物φ10mm2% 円～準角礫φ10～30mm3%
- 7 (色)10VR3/2黒褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)埋山粘土を混状に2% 炭化物φ10～20mm5%
- 8 (色)10VR3/2黒褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)炭化物φ30mm1%
- 9 (色)10VR4/2灰黄褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)埋山土を混状に20% 炭化物φ20～30mm15%
- 10 (色)10VR5/2灰黄褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)
- 11 (色)10VR4/2灰黄褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)黒砂・地山赤黄土、各20% (備)上面10層との間に炭化物φ10mm集中 幸1層の上面がSK153の底面。
- 12 (色)
- 13 (色)10VR4/2灰黄褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)埋山粘土残φ10～100mm30%
- 14 (色)10VR4/2灰黄褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)埋山土残φ10～30mm20%
- 15 (色)10VR3/2黒褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)埋山土残φ10～20mm5%
- 16 (色)10VR4/2灰黄褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)円礫φ10～100mm30%
- 17 (色)10VR3/2灰黄褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)埋山赤黄土に灰黄褐色2%
- 18 (色)10VR3/2黒褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)埋山土残φ10～30mm20%
- 19 (色)10VR4/2灰黄褐色 (性)sl. (硬)± (堅)± (備)埋山赤黄土に灰黄褐色20%

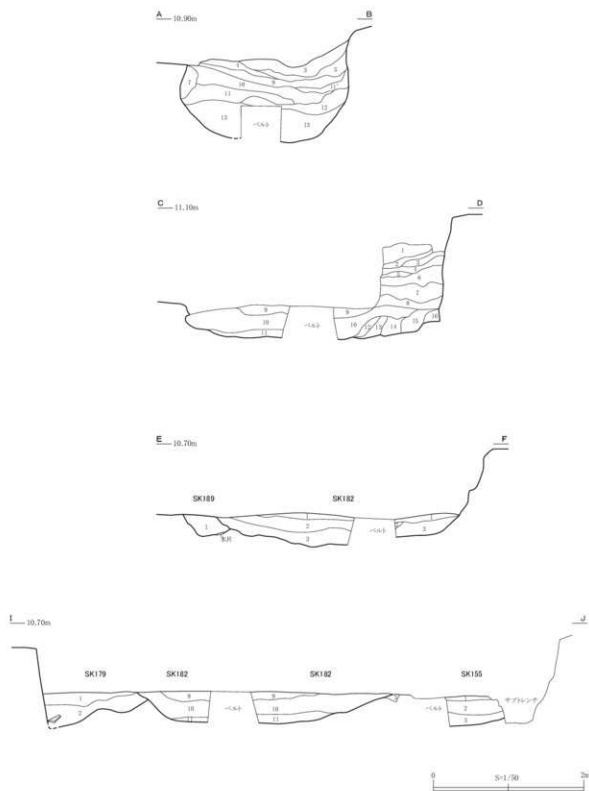
第180図 江戸時代(南西部)遺構平面・断面図(土坑SK153)

SK155 177 179 182 189 190 214 243 245 262



第182図 江戸時代(南西部)遺構平面図・断面図
(土坑SK155・177・179・182・189・190・214・243・245・262)

SK155 177 179 182 189 190 214 243 245 262



第183図 江戸時代(西南部)遺構断面図
(土坑SK155・177・179・182・189・190・214・243・245・262)

SK155

1 (色)SK182H・Fと同シ

SK182H・F面(SK155)

- 1 (色)10YR17/1黒 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 土に黄砂細砂ブロック5%、多量の有機物
 2 (色)10YR17/1黒 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 多量の有機物、土に黄砂粘土を帯状に2%、炭化物約3%
 3 (色)10YR17/1黒 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 極めて多量の有機物、土に黄砂粘土を帯状に5%、最下層に黒褐色土が層状に堆積

SK189

1 (色)SK182H・Fと同シ

SK182H・F面(SK189)

- 1 (色)10YR2/1黒 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 木片などの有機物を多く含む、炭化物ブロック3%

SK177

- 1 (色)10YR4/3に黄・黄褐色 (性)砂質シルト (調) + (堅) + (備) 細粒と粗粒砂砂を全体に多く含む、炭化物ブロック15%、粘粘土を帯状に3%
 2 (色)10YR5/6黄褐色 (性)砂 (調) + (堅) + (備) 粗粒砂砂を全体に多く含む、炭化物約5%、黄褐色粘土を帯状に1～5%
 3 (色)10YR5/6黄褐色 (性)砂 (調) + (堅) + (備) 中粒φ20～60mm10%
 4 (色)10YR5/6黄褐色 (性)砂質シルト (調) + (堅) + (備) 中粒φ30～70mm30%、炭化物ブロック3%
 5 (色)10YR4/3に黄・黄褐色 (性)砂 (調) + (堅) + (備) 大粒φ60～100mm50%、炭化物約15%
 6 (色)10YR2/2灰黄褐色 (性)砂 (調) + (堅) + (備) 中粒φ30～30mm15%、炭化物約2%
 7 (色)10YR4/4褐 (性)砂質シルト (調) + (堅) + (備) 中粒φ10～20mm5%、炭化物約5%、灰黄褐色を帯状に5%
 8 (色)10YR4/3に黄・黄褐色 (性)砂 (調) + (堅) + (備) 大粒φ60～200mm、中粒φ10～20mm50%、炭化物約15%
 9 (色)10YR5/1黒褐色 (性)砂 (調) + (堅) + (備) 中粒φ20～60mm30%、粗粒砂を帯状に15%、炭化物約3%
 10 (色)10YR1/1黒 (性)砂 (調) + (堅) + (備) 大粒φ70～200mm60%、炭化物約20%、黄褐色粘質シルトを帯状に10%
 11 (色)10YR5/2灰黄褐色 (性)砂質シルト (調) + (堅) + (備) 大粒φ70～100mm5・中粒φ10～60mm20%、炭化物約5%
 12 (色)2.5Y7.5/2黄オリーブ褐色 (性)粘土 (調) + (堅) + (備) 粗粒粘土を帯状に20%、炭化物約20%、炭化物約2%
 13 (色)10YR1/1黒 (性)粘土 (調) + (堅) + (備) 黒砂を帯状に40%、明黄褐色土ブロック15%、炭化物約5%
 14 (色)10YR1/1黒 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 灰白粘土ブロック40%、中粒φ10～20mm10%
 15 (色)10YR2/2灰黄褐色 (性)粘土 (調) + (堅) + (備) 中粒φ10～30mm20%、明黄褐色ブロック5%、粗粒砂ブロック10%、黄褐色粘土を帯状に5%、炭化物約10%、明赤褐色粘土3%
 16 (色)10YR2/2黄褐色 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 黄褐色粘土を帯状に40%、灰白粘土約5%、炭化物約5%、赤褐色粘土5%、鉄屑約3%
 中粒φ30～50mm
 (備)SK192Lに含まれる?

SK245

- I (色)10YR3/3暗褐色 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 灰黄粘土ブロック5%、炭化物約3%、明赤褐色粘土3%
 II (色)10YR4/3に黄・黄褐色 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) + (備) 灰白粘土ブロック10%、炭化物約3%
 III (色)10YR4/1黒 (性)粘土 (調) + (堅) + (備) + (備) 灰白粘土を帯状に10%、中粒φ10～60mm5%、炭化物約3%、鉄屑約3%、赤褐色土約2%
 IV (色)10YR2/1黒 (性)粘土 (調) + (堅) + (備) + (備) 灰白粘土を帯状に10%

SK190

- 1 (色)10YR3/2黄褐色 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 黒土の有機物堆積層を帯状に30%
 2 (色)10YR17/1黒 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 木片などの有機物を大量に含む、下層グライ化し、黒褐色粘質シルトを呈す、黒砂約3%

SK179

- 1 (色)10YR6/2灰黄褐色 (性)砂質シルト (調) + (堅) + (備) 土に黄・黄褐色砂質シルトを帯状に30%
 2 (色)10YR3/2灰黄褐色 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 黄砂質シルトを帯状に20%、全体的に小粒φ2～10mm10%
 3 (色)10YR5/2灰黄褐色 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 黄砂砂をブロック状に5%、炭化物約5%
 4 (色)2.5Y7.2/黄 (性)砂質シルト (調) + (堅) + (備) 炭化物約3%
 5 (色)2.5Y7.5/2黄オリーブ褐色 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 明黄褐色粘土を帯状に10%
 6 (色)10YR3/3暗褐色 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 黄褐色粘土、炭化物約5%、ブロック状に10%
 7 (色)10YR7/4に黄・黄褐色 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 全体に細砂を多く含む、暗褐色土を帯状に3%
 8 (色)10YR2/2灰黄褐色 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 炭化物約5%
 9 (色)10YR2/1黒褐色 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 明黄褐色粘質シルトを帯状に20%、炭化物約10%
 10 (色)2.5Y4/1黄灰 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 黄褐色粘土を帯状に5%、炭化物約4%、帯状に30%
 11 (色)10YR1/1黒 (性)粘土 (調) + (堅) + (備) 土に黄砂粘土を帯状に20%、炭化物約10%
 12 (色)5Y6.2/2黄オリーブ (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 土に黄砂粘土を帯状に10%、木片を多く含む、灰白粘土ブロック10%
 13 (色)10YR2/1黒 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 木片を極めて多く含む、下部に暗黄灰グライ化粘土が層状に堆積

SK179

- 1 (色)2.5Y3/1黒褐色 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 小粒φ2～6mm、細砂10%、炭化物約5%、有機物を多く含む、炭黄粘土約2%
 2 (色)2.5Y2/1黒 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 有機物を極めて多く含む、灰オリーブ細砂を帯状に5%、炭黄粘土を帯状に5%

SK182

- 5 (色)SK182C・D面と対シ
 7 (色)SK182C・D面と対シ
 8 (色)SK182C・D面と対シ
 9 (色)SK182C・D面と対シ
 10 (色)SK182C・D面と対シ
 11 (色)SK182C・D面と対シ
 12 (色)SK182C・D面と対シ
 13 (色)SK182C・D面と対シ
 14 (色)SK182C・D面と対シ
 15 (色)SK182C・D面と対シ
 16 (色)SK182C・D面と対シ
 17 (色)10YR6/2灰黄褐色 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 炭化物約3%、鉄屑が層状に散入
 18 (色)10YR3/3暗褐色 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 黄褐色粘土約30%

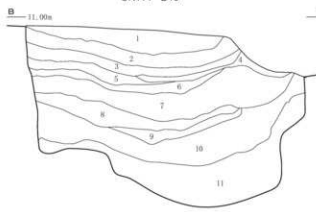
SK182

- 9 (色)2.5Y7.5/1黒 (性)粘質シルト (調) + (堅) + (備) 灰黄粘土を帯状に10%、炭化物約3%、有機物を多く含む
 10 (色)10YR17/1黒 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 土に黄砂粘土を帯状に5%、灰オリーブ褐色を呈す、カルシウム由来の還元物約1%を含む、硬骨埋蔵あり、有機物を多量に含む
 11 (色)10YR2/1黒 (性)シルト (調) + (堅) + (備) 土に黄砂粘土を帯状に10%、有機物を多く含む、木片が層状に堆積する

第184図 江戸時代(南西部)遺構平面図

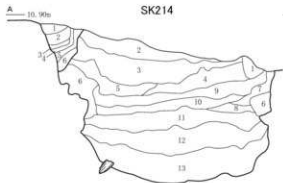
(土坑SK155・177・182・189・190・214・243)

SK177 243



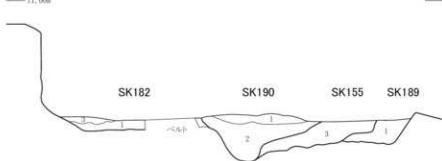
- c SK177
- 1 (色)10VR1/2に赤い黄褐色 (性)砂質シルト (層) + (層) + (層) 細粒と極細粒砂を全体に多く含む, 炭化物ブロック15%
腐植土を帯状に2%
 - 2 (色)10VR5/6黄褐色 (性)砂 (層) + (層) + (層) 極細粒砂を全体に多く含む,
炭化物粒5% 黄褐色粘土を帯状に1 ~ 5%
 - 3 (色)10VR5/6黄褐色 (性)砂 (層) + (層) + (層) 中粒φ20 ~ 60mm10%
 - 4 (色)10VR5/6黄褐色 (性)砂質シルト (層) + (層) + (層)
中粒φ30 ~ 70mm30% 炭化物ブロック3%
 - 5 (色)10VR5/2に赤い黄褐色 (性)砂 (層) + (層) + (層)
大粒φ60 ~ 150mm50% 炭化物粒15%
 - 6 (色)10VR5/2に黄褐色 (性)砂 (層) + (層) + (層) 中粒φ20 ~ 50mm15%
炭化物粒3%
 - 7 (色)10VR1/4褐色 (性)砂質シルト (層) + (層) + (層) 中粒φ10 ~ 20mm3%
炭化物粒25% 黄褐色粘土を帯状に25%
 - 8 (色)10VR1/2に赤い黄褐色 (性)砂 (層) + (層) + (層) 大粒φ60 ~ 200mm,
中粒φ10 ~ 20mm50% 炭化物粒15%
 - 9 (色)10VR5/6黄褐色 (性)砂質シルト (層) + (層) + (層)
中粒φ20 ~ 60mm30% 細粒砂を帯状に15% 炭化物粒3%
 - 10 (色)10VR1/1黒褐色 (性)砂 (層) + (層) + (層) 大粒φ70 ~ 250mm,
中粒φ10 ~ 70mm60% 炭化物粒20% 黄褐色粘土を帯状に10%
 - 11 (色)10VR5/2に黄褐色 (性)砂質シルト (層) + (層) + (層)
大粒φ70 ~ 100mm2中粒φ10 ~ 60mm20% 炭化物粒5%

SK214



- B SK214
- 1 (色)2.3V1/3暗オリーブ褐色 (性)砂質シルト (層) + (層) + (層) 明黄褐色土ブロック10% 炭化物を帯状に20%
 - 2 (色)10VR5/6黄褐色 (性)粘土 (層) + (層) + (層)
(層)に赤い黄褐色粘土を帯状に30% 炭化物粒10%
 - 3 (色)2.3V1/3黒褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層)
赤黄粘土を帯状に20% 炭化物粒5%
 - 4 (色)10VR1/2に赤い黄褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 黄褐色粘土10%
黄粘土粒10%
 - 5 (色)10VR1/4褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 黄粘土粒10%
 - 6 (色)10VR1/4褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 黒土・黒粘質
シルトを帯状に20% 黄褐色粘土を帯状に10% 炭化物粒・炭状に20%
 - 7 (色)10VR2/2黒褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 黄褐色粘土粒3%
小粒φ5 ~ 40mm5% 炭化物粒3%
 - 8 (色)10VR2/2黒褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 黄褐色粘土を帯状に30%
 - 9 (色)10VR2/2黒褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 平安系
シルトを帯状に20% 炭化物粒2%
 - 10 (色)10VR2/2黒褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 平安系に鉄分が帯状に40%
 - 11 (色)10VR5/2に赤い黄褐色 (性)粘質シルト (層) + (層) + (層)
(層)明黄褐色粘土を帯状に20% 炭化物粒2%
 - 12 (色)10VR3/2黒褐色 (性)粘質シルト (層) + (層) + (層)
(層)明黄褐色粘土を帯状に20% 炭化物粒3%
 - 13 (色)10VR2/1黒褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 暗砂質シルトを帯状に20%
炭化物粒3%

G H



SK182

- 1 (色)10VR1.7/1黒褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層)に赤い黄褐色土ブロック5% 多量の有機物
- 2 (色)10VR1.7/1黒褐色 (性)粘質シルト (層) + (層) + (層)に赤い黄褐色粘土を帯状に5% 最下層に黒褐色粘土が帯状に堆積。

SK190

- 1 (色)10VR2/2黒褐色 (性)粘質シルト (層) + (層) + (層) 黒土の有機物多量層を帯状に30%。
- 2 (色)10VR1.7/1黒褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 本片花などの有機物を大量に含む。下層アイ化し, 黒粘質シルトを呈す。炭化物粒3%。

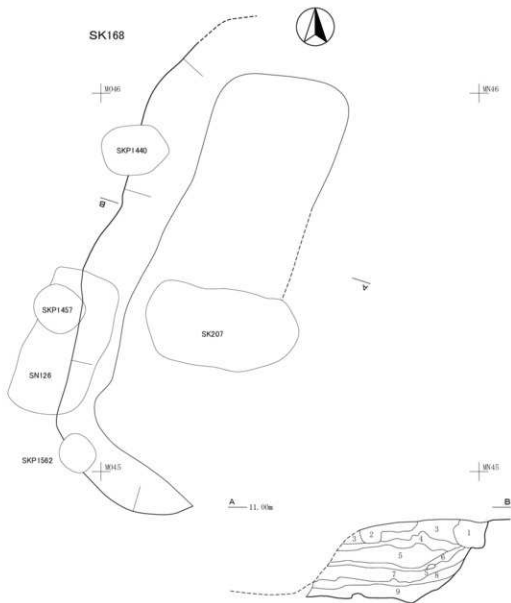
SK155

- 3 (色)10VR1.7/1黒褐色 (性)粘質シルト (層) + (層) + (層)に赤い黄褐色粘土を帯状に5% 最下層に黒褐色粘土が帯状に堆積。

SK189

- 1 (色)10VR2/1黒褐色 (性)シルト (層) + (層) + (層) 本片などの有機物を多く含む 炭化物ブロック5%。

第185図 江戸時代(南西部)遺構平面図・断面図
(土坑SK155・177・182・189・190・214・243)

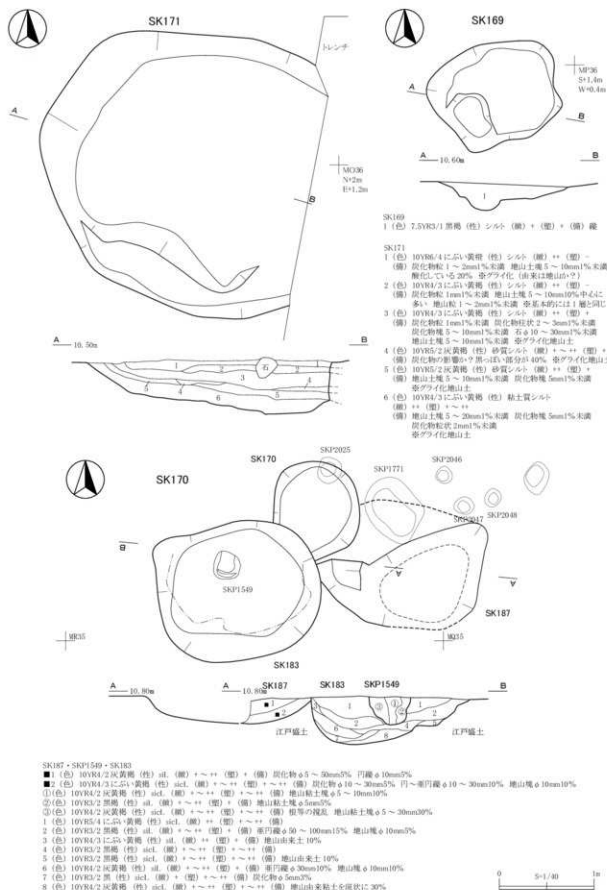


SK168 北面

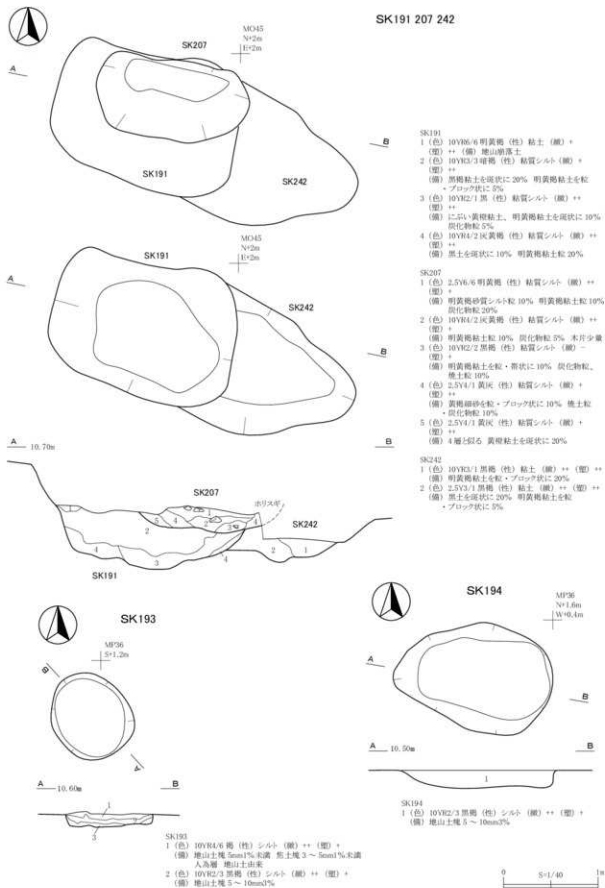
- 1 (色) 10VR4/4 褐色シルト (層) + (型) + (備) 赤褐色土、黄褐色土の大ブロックと、粒状に5% 炭化物を混状に3%
- 2 (色) 10VR4/4 褐色シルト (層) - (型) - (備) 小径φ1~2cmを全体的に60%
- 3 (色) 10VR3/4 暗褐色シルト (層) ++ (型) + (備) 黄褐色粘質シルトを混状に20%
- 4 (色) 10VR4/4 褐色粘質シルト (層) ++ (型) + (備) に近い黄褐色土を混状に40% 炭化物粒3%
- 5 (色) 10VR4/4 褐色粘質シルト (層) ++ (型) ++ (備) 浅黄褐色土を帯・粒状に10% 炭化物粒5%
- 6 (色) 10VR3/3 暗褐色粘土 (層) ++ (型) ++ (備) 数部で赤褐色 (一部)
- 7 (色) 10VR4/2 灰黄褐色粘質シルト (層) + (型) + (備) 明褐色土、炭化物を混状に5% 浅黄褐色土粒10%
- 8 (色) 10VR6/6 明黄褐色粘土 (層) ++ (型) ++ (備) 数部5% 暗褐色シルトを混状に10%
- 9 (色) 10VR4/4 褐色シルト (層) + (型) + (備) 黒褐色土を混状に10% 明褐色粘土粒5%

0 5-1/40 1m

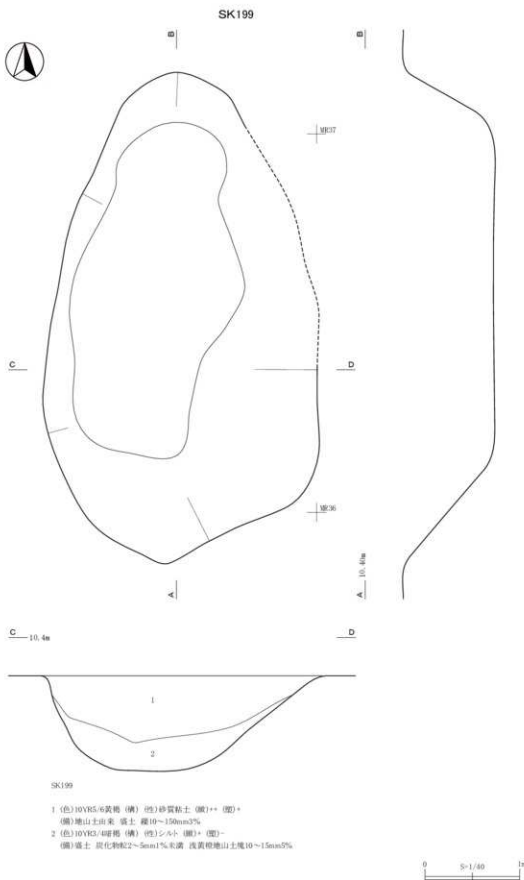
第186図 江戸時代(南西部)遺構平面・断面図(土坑SK168)



第187図 江戸時代（南西部）遺構平面・断面図（土坑 SK169・170・171・183・187）

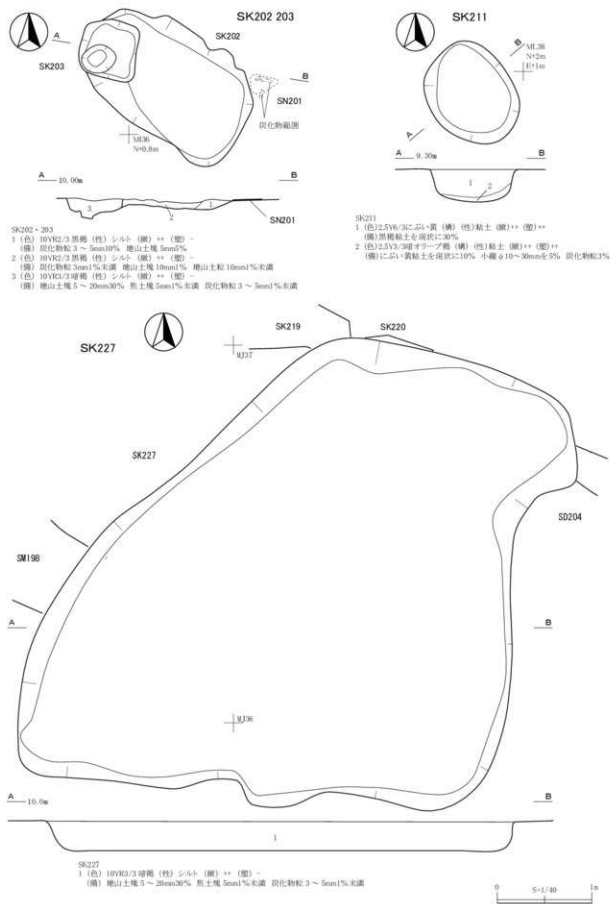


第189 江戸時代(南西部)遺構平面・断面図(土坑SK191・193・194・207・242)

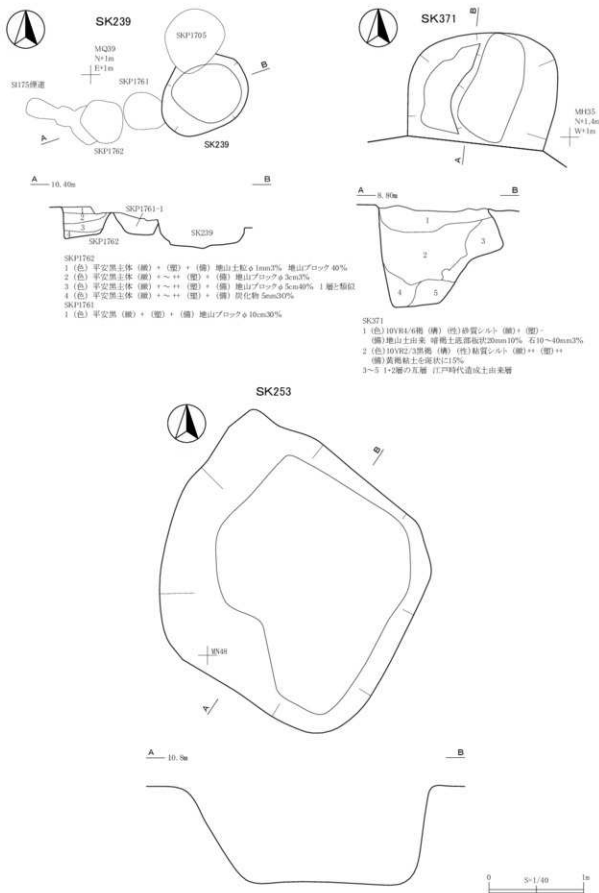


第190図 江戸時代(南西部)遺構平面・断面図(土坑SK199)

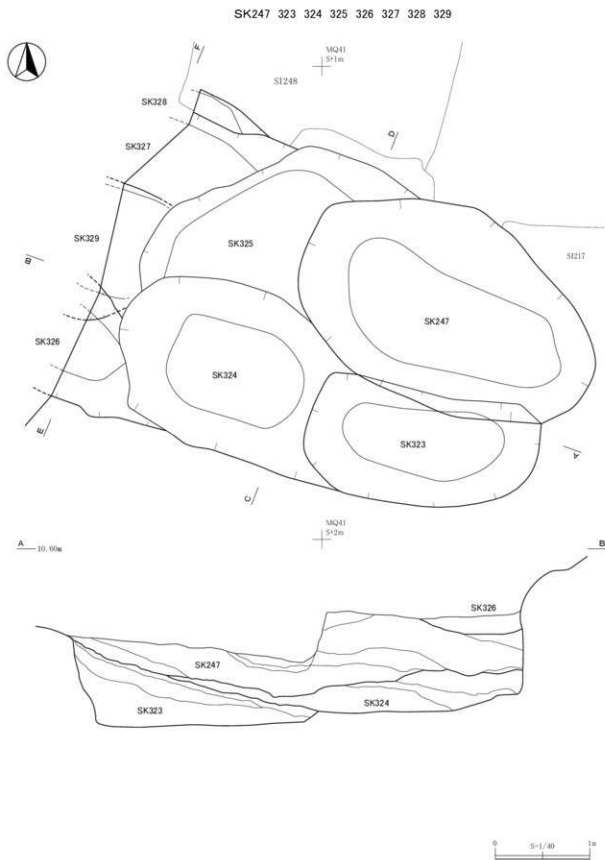
第3章 発掘調査の方法と成果



第 191 図 江戸時代 (南西部) 遺構平面・断面図 (土坑SK202・203・211・227)



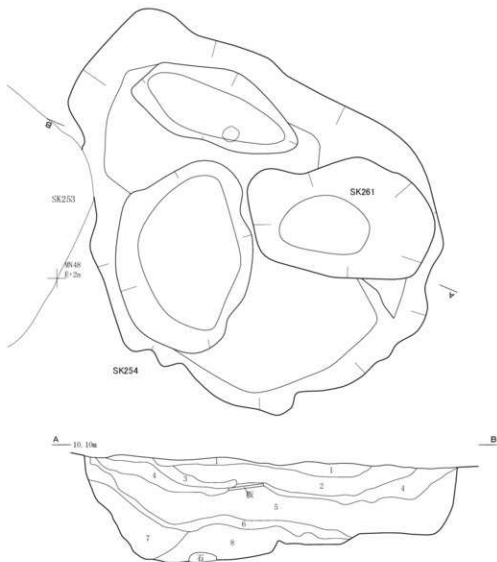
第192図 江戸時代(南西部)遺構平面・断面図(土坑SK239・253・371)



第193図 江戸時代（南西部）遺構平面・断面図
 （土坑SK247・323・324・325・326・327・328・329）



SK254 261



SK254

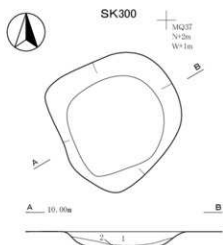
- 1 (色)10VR2/1(黒性)シルト (黒)・(黒) (黒)に灰・黄褐色粘土を帯状に5% 灰白粘土を較・ブロック状に5% 少量の有機物
- 2 (色)10VR1.7/1(黒性)粘質シルト (黒)++ (黒) (黒)増灰黄粘土をブロック状に5%灰白細砂を帯状に10% 多量の有機物
- 3 (色)5V2/1(黒性)粘質シルト (黒)・(黒) (黒)多量の有機物 灰白・黄褐色粘土ブロック3%
- 4 (色)7.5V2/1(黒性)粘土 (黒)++ (黒)小礫φ5～100mm3% 炭化物を帯状に10% 黒褐色粘土ブロック3%
- 5 (色)10VR2/1(黒性)粘土 (黒)・(黒) (黒)黒褐色粘土ブロック5% 極めて多くの有機物
- 6 (色)10VR7/1(灰白色)粘土 (黒)++ (黒) (黒)黒褐色粘土を帯状に5% SK254造成時の黒褐色粘土

SK261

- 7 (色)10VR3/2(黒褐色)有機物層 (黒)・(黒) (黒)極めて多量の有機物
- 8 (色)12.5V3.3(暗オリーブ褐色)粘土 (黒)・(黒)++ (黒)に灰・黄粘土、灰白粘土を帯状に30% 炭化物を帯状に10%

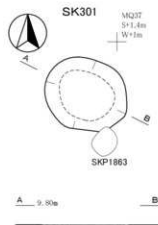


第194図 江戸時代(南西部)遺構平面・断面図(土坑SK254・261)



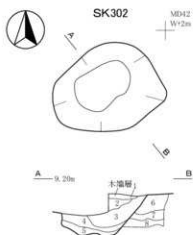
SK300

- 1 (色)10YR3/3暗褐色(性)粘土 (調)・(調)±
(備)自然堆積 炭化物粒φ1mm1%
- 2 (色)10YR4/4褐色(性) (調)・(調)±
(備)自然堆積 炭化物粒φ1mm1% 地山土粒1～5mm2%



SK301

- 1 (色)10YR3/3暗褐色(性)粘土 (調)・(調)±
(備)自然堆積 炭化物粒φ1mm1%



SK302

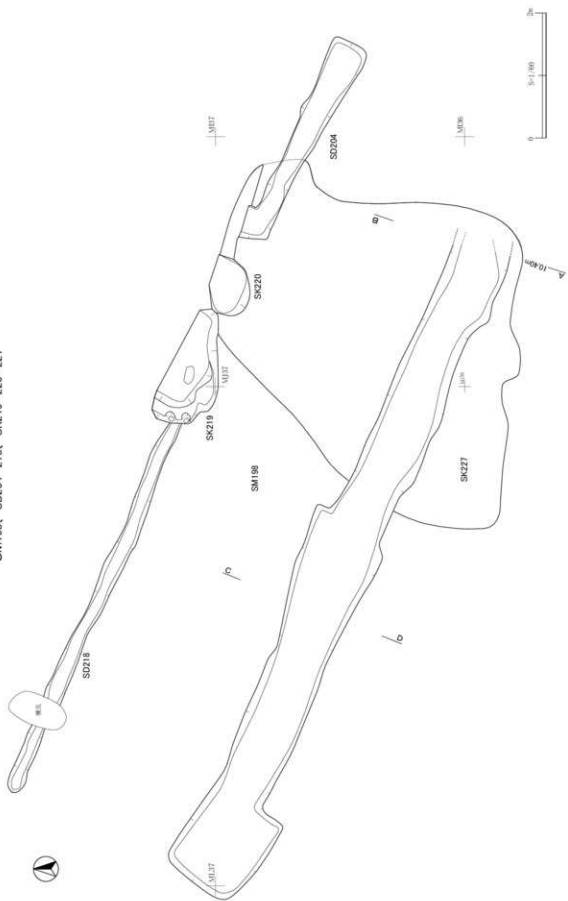
- 1 (色)10YR2/3黒褐色(性)砂 (調)・(調)・(備)木片を多く含む、木片層。
- 2 (色)2.5Y4/6オリーブ褐色(性)粘土 (調)++ (調)++ (備)暗褐色粘土を柱状に30%
- 3 (色)10YR3/2黒褐色(性)シルト (調)++ (調)++ (備)暗褐色粘土を柱状に30% 細礫φ10～30mmを全体に10% 偽礫を柱状に3%
- 4 (色)10YR5/4に広い黄褐色(性)粘土 (調)++ (調)++ (備)黒褐色土を柱状に10%
- 5 (色)10YR2/2黒褐色(性)シルト (調)・(調)・(備)に広い黄褐色粘土を柱状に10%
- 6 (色)10YR3/1黒褐色(性)シルト (調)++ (調)++ (備)黄褐色粘土を柱状に20% 細礫φ10～30mmを全体に5% 偽礫を柱状に3% 炭化物を柱状に3%
- 7 (色)10YR5/4に広い黄褐色(性)粘土 (調)++ (調)++ (備)明黄褐色を柱状に20% 黒褐色土ブロック20% 細礫φ10～30mmを3%
- 8 (色)10YR3/2黒褐色(性)シルト (調)++ (調)++ (備)黒礫砂を全体に10%

(備)1～5層がSK302、6～8層が江戸後土。

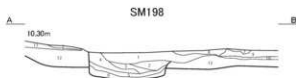


第195図 江戸時代(南西部)遺構平面・断面図(土坑SK300・301・302)

SM198、SD204・218、SK219・220・227

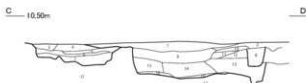


第196図 江戸時代(南西部)遺構平面図・断面図(道路状遺構SM198、SD204・218、SK219・220・227)



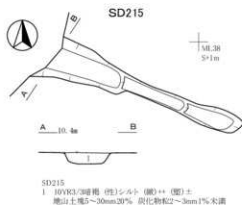
SM198

- 1 10YR3/2暗褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊5~30mm20% 炭化物粒2~3mm1%未満
- 2 10YR4/2灰黄褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊1~3mm10% 地山土塊5~20mm3% 炭化物粒3mm1%未満
- 3 10YR3/2暗褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊5~10mm15% 地山土塊1~5mm1%
- 4 10YR3/2暗褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊5~15mm15% 地山土塊1以下~3mm1% 炭化物粒1~2mm1%未満
- 5 10YR3/2暗褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊10~30mm40%
- 6 10YR4/1暗灰 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊10mm3%
- 7 10YR3/2暗褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 焦土粒1以下~5mm1%未満 炭化物粒1以下~1mm1%未満
- 8 10YR3/2暗褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊5~15mm3%
- 9 10YR5/6黄褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 灰白地山塊1~15mm1% 灰白地山塊粒1~3mm1%未満 炭化物粒1以下~1mm1%未満
- 10 10YR2/3黒褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊3~5mm1%未満 炭化物粒2~5mm1%未満
- 11 10YR2/3黒褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊5mm3% 炭化物粒1~2mm1%未満
- 12 10YR4/6褐 (性)シルト質粘土 (黄)++ (黄)++ 地山土の硬土
- 13 10YR4/6褐 (性)砂質シルト (黄)++ (黄)土 石50mm5% 灰白地山塊10~50mm20% 赤地山硬土



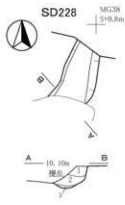
SM206

- 1 10YR3/2暗褐 (性)シルト (黄) (黄)土 地山土塊5~20mm10% 地山土塊1以下~5mm1% 炭化物粒3~5mm1%未満
- 2 10YR3/2暗褐 SDではない。
- 3 10YR4/6褐 (性)粘土質シルト 地山硬土
- 4 10YR3/2暗褐 SDではない。
- 5 10YR3/2暗褐+4/6褐 10YR3/2暗褐70% 10YR4/6褐が塊状10mmで混入20%
- 6 10YR3/2暗褐 炭化物粒3mm1%未満 地山土塊10~15mm1%未満 地山土塊1~3mm1%未満
- 7 10YR7/2紅+黄褐 (性)粘土質シルト (黄)++ (黄)++ 粘り土60% 赤地山硬土
- 8 10YR3/2暗褐 地山土塊5~10mm20% 焦土粒2mm1%未満 炭化物粒1mm1%未満
- 9 10YR6/2紅+黄褐 地山土塊5~20mm10% 増殖土20%
- 10 10YR6/3明黄褐 石10mm1% 増殖土20%
- 11 10YR6/3明黄褐
- 12 10YR6/3明黄褐 増殖土粒2~5mmアーク1状3%
- 13 10YR6/3明黄褐 増殖土粒3~20mm30%
- 14 10YR4/6褐 石20~30mm3% 増殖土3~5mm2% 錆化
- 15 増殖土10mm20% 赤14.2%錆化強い。
- 16 10YR3/1黒褐 (性)シルト質粘土 (黄)++ (黄)++
- 17 10YR4/6褐 地山硬土



SD215

- 1 10YR3/2暗褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊5~30mm20% 炭化物粒2~3mm1%未満

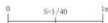


SD228

MG38 S=0.8m

SD228

- 1 10YR3/2暗褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山塊 5mm1%未満 地山土塊 3~5mm1%未満
- 2 10YR2/3黒褐 (性)シルト (黄)++ (黄)土 地山土塊 10~15mm3% 地山土塊 3mm1% 地山土塊 1~3mm1% 炭化物粒 2~3mm1%
- 3 10YR3/2暗褐 (性)砂質シルト (黄)++ (黄)土 炭化物粒 3~5mm10% 自然混入砂質土入る 赤1+2層は埋戻土



第 197 図 江戸時代 (南西部) 遺構平面図・断面図 (道路状遺構SM198、溝SD215・228)

7 敷地北東部の遺構

(1) 厩舎を構成する遺構群

S B 376は、内部を小溝 S D 378～381によって幅2.1m前後の小部屋に区画される（第199～201図、第3分冊図版203～207）。中村氏所見は「馬屋か。南北方向を桁行とする身舎梁間三間の掘立柱建物。東面に一間の庇ないし下屋を持つ。周辺遺構の様相から総合すると、身舎西半は土台が入る板敷の仕様で、馬房が四つあった可能性が高い。身舎東半は土間の通路、庇ないし下屋部分は土間ないし土座の作業空間であろうか」。

すると中央を南北に貫く S D 345（第3分冊図版207）は、厩からの排水溝であろう。北端で1辺1mの大形柱穴 S K P 2454に連結する。底面が硬化しており、調査時は柱穴と考えていたのだが、S D 397を介して S D 396との中継となることや正方形の掘り方から集水弁である可能性が高い。S B 376の中央を通る S D 345上端標高が9.9mであるのに対し、S B 376の馬房を分ける小溝 S D 379から S D 381の上端標高は、南端にある S D 381が9.9m、北端の S D 379が9.65mである。S D 376の上端標高が S D 379～380より若干高い。調査時も最初に検出したのは S D 345と S K P 2425であり、他の小溝は1面下げてから検出した。そのため、調査時には S D 345・S K P 2425と S B 376を構成する柱穴や小溝とは別時期と考えていたが、排水系統を考えると一連の排水路網とすることができる。

S D 345と軸を合わせて14m北東に S B 305 S D 1の南端がある。S B 301 S D 1の下端標高は9.1mで S D 345・379～381より0.55～0.8m低い。しかし、厩の排水を正門へ流すことはあり得ないから、S K P 2454に集水して屋敷外へ排出したのだろう。S K P 2454から東への経路は不明である。S D 345と S B 305 S D 1の軸が一致することは、排水系統の設計が同時に行われたことを示唆する。

『淡江和光日記』第3巻文政3年8月11日（1820年 秋田県公文書館1998）の条に「四拾貳坪厩」とあり、S B 376が該当するかも知れない。ただ、42坪は $1.8 \times 1.8 \times 42 = 136\text{m}^2$ であり、S B 376は庇を含めても長軸8.53m × 短軸8.3m $\approx 71\text{m}^2$ であるから、おおよそ半分の規模しかない。本来は馬房を8つ持つ厩だったと考えられる。

(2) 厩舎以外の掘立柱建物跡

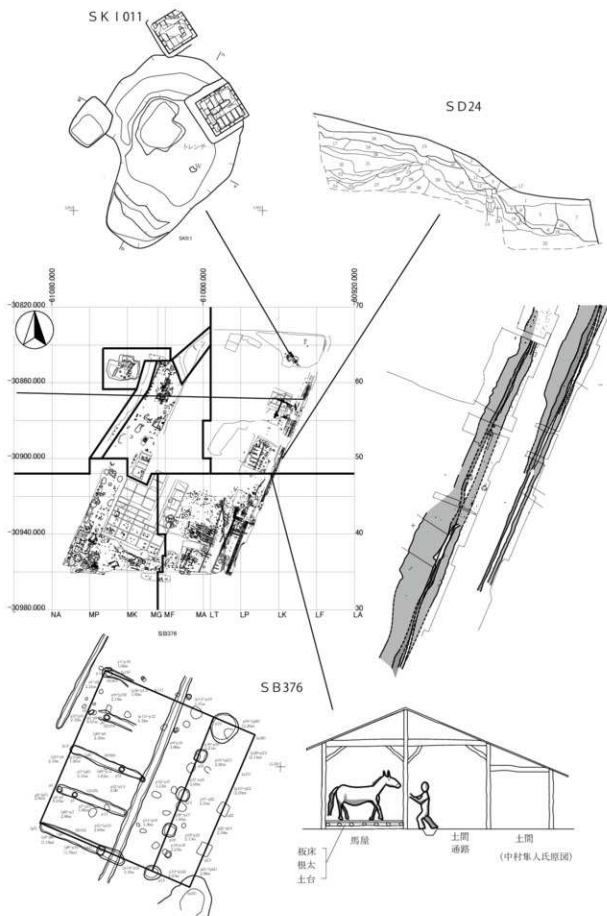
S B 533は東辺が、S B 376西辺と重複する建物である。中村氏所見は「桁行方向は不明。庇・下屋は無い」。西側を削平されている。柱筋が重なるので別建物とした。

S B 534は S B 376の北側に柱間1間分重なる。新旧は不明である。中村氏所見は「北方向を桁行とする身舎梁間二間の掘立柱建物。庇・下屋は無い」。北側1間分の短辺中央を S D 396が通る。S B 376の縮小版または簡略版に見える。上記2棟は S A 537（後述）と柱筋の方向が合致する。

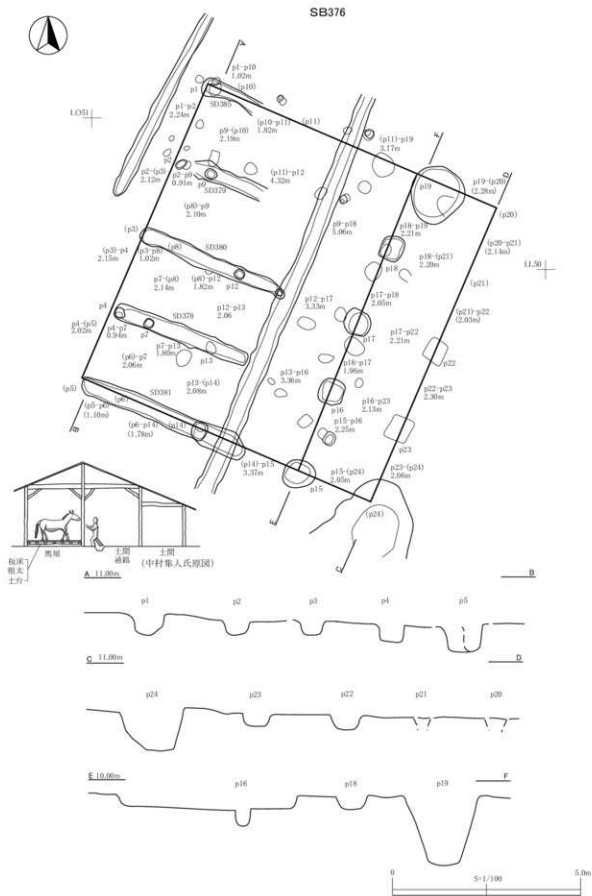
(3) 柱穴列

S A 04・S A 06・S A 08は調査区北東隅で検出した（第203図）。柱間1間か2間の櫓である。S A 08は柱穴1基のみの検出だが、他の2基と規模や堆積土が似ている。近隣に他の柱穴が見当たらないことから、S A 04・06と組んで機能したと考えた。

S A 536・S A 537は S B 376と重複する（第200図）。中村氏の見解は「南北方向を桁行とする三間の塀ないし櫓」。S A 537は上記 S B 533・534と柱筋の方向が一致しており、それぞれの位置を意識して建てられているように見える。厩 S B 376との新旧関係は不明だが、S B 534の北側に取り



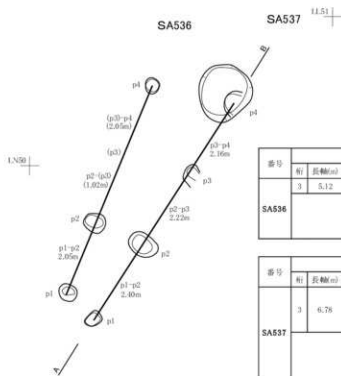
第198図 江戸時代（北東部）遺構配置図



第 199 図 江戸時代（北東部）遺構平面図・断面図（据立柱建物跡SB376）

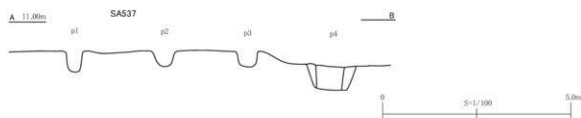
第3章 発掘調査の方法と成果

番号	長軸					角 N		短軸					
	相	長軸(m)	柱間数	柱間	距離	角度	E-W	相	短軸(m)	柱間数	柱間	距離	
SB376	4	8.53	19	1-2	2.24	23	E	2	8.30	14	1-(p10)	1.02	
				2-(p3)	2.12						p10-(p11)	1.82	
				p3-4	2.15						p11-19	3.17	
				4-(p5)	2.02						2-9	0.91	
				p5-7	2.96						9-18	5.06	
				7-(p6)	2.14						p5-(p6)	1.02	
				p6-9	2.10						p6-12	1.82	
				9-(p10)	2.19						12-17	3.33	
				p11-12	4.32						4-7	0.94	
				12-13	2.06						7-13	1.80	
				13-(p14)	2.08						13-16	3.30	
				15-16	2.25						p10-(p6)	1.10	
				16-17	1.96						p6-(p14)	1.78	
				17-18	2.05						p14-15	3.32	
				18-19	2.21								
				p20-(p21)	2.14								
				p21-22	2.03								
				22-23	2.30								
				23-(p24)	2.06								
				合計	42.48							合計	30.50
				平均	2.24							平均	2.18
				SD	0.50							SD	1.22

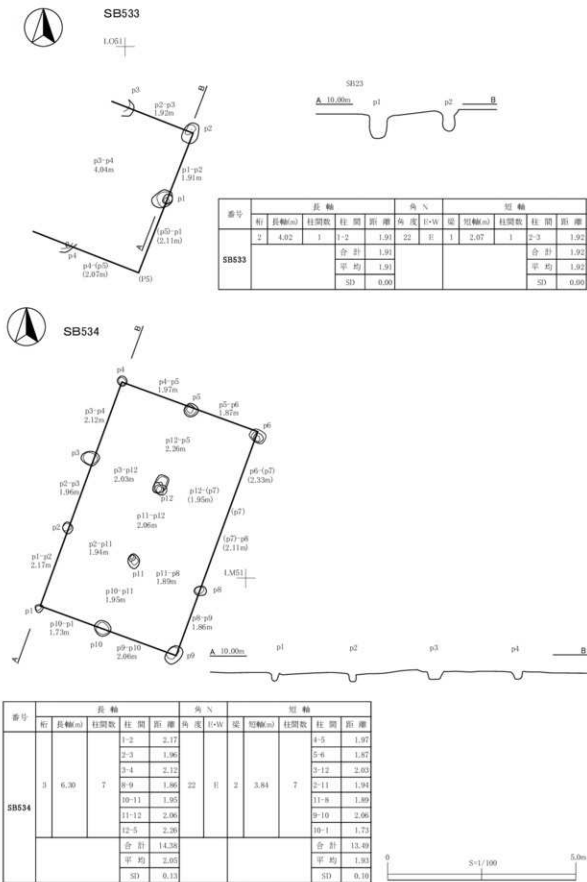


番号	長軸					角 N	
	相	長軸(m)	柱間数	柱間	距離	角度	E-W
SA536	3	5.12	1	1-2	2.05	23	E
	合計	2.05					
	平均	2.05					
				SD	0.00		

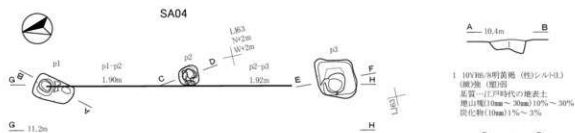
番号	長軸					角 N	
	相	長軸(m)	柱間数	柱間	距離	角度	E-W
SA537	3	6.78	3	1-2	2.40	34	E
				2-3	2.22		
				3-4	2.16		
			合計	6.78			
			平均	2.26			
			SD	0.10			



第200図 江戸時代（北東部）遺構平面図・断面図（掘立柱建物跡SB376、柱穴列SA536・537）



第 202 図 江戸時代（北東部）遺構平面図・断面図（据立柱建物跡SB533・534）



- 1 10YR6/8明黄褐色 (性)シルト(II)
(順)中 (順)弱
基質-江戸時代の地表土
埋山堆(10mm~30mm)10%~30%
炭化物(10mm)1%~3%

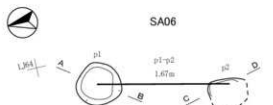


- 1 10YR5/3こげい黄褐色 (順)強
(順)中 二層に大レキ5割程度
2 10YR6/8明黄褐色 (性)シルト(II)
(順)強 (順)弱
基質-江戸時代の地表土

番号	長軸				角 N		
	桁	長軸(m)	柱間数	柱間	距離	角度	E-W
SA04	2	3.82	2	1-2	1.90	11	11
				3-4	1.92		
				合計	3.82		
				平均	1.91		
			SD	0.01			



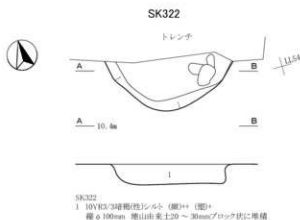
- 1 10YR5/赤い黄褐色 (性)シルト(II) (順)中
(順)中 柱筋跡(角柱3寸~5寸)
基質-江戸時代の地表土
埋山由来シキ(15mm~20mm)1%
埋山堆(2mm~7mm)2%
炭化物(10mm)1%~3%
3層土由来(2~3層も同様)
2 10YR6/8明黄褐色 (性)シルト(II)
(順)強 (順)弱
基質-江戸時代の地表土
埋山由来シキ(20mm~30mm)15%
炭化物(10mm)1%~3%
空2層(北側)は抜き換置込土



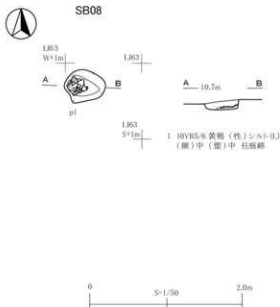
番号	長軸				角 N		
	桁	長軸(m)	柱間数	柱間	距離	角度	E-W
SA06	1	1.67	1	1-2	1.67	12	11
				合計	1.67		
				平均	1.67		
				SD	0.00		



- 1 10YR5/6黄褐色 (性)シルト(II) (順)中 (順)中 柱筋跡
2 10YR6/8明黄褐色 (性)シルト(II) (順)強 (順)弱
- 1 10YR5/赤黄褐色 (性)シルト(II) (順)中 (順)中 柱筋跡



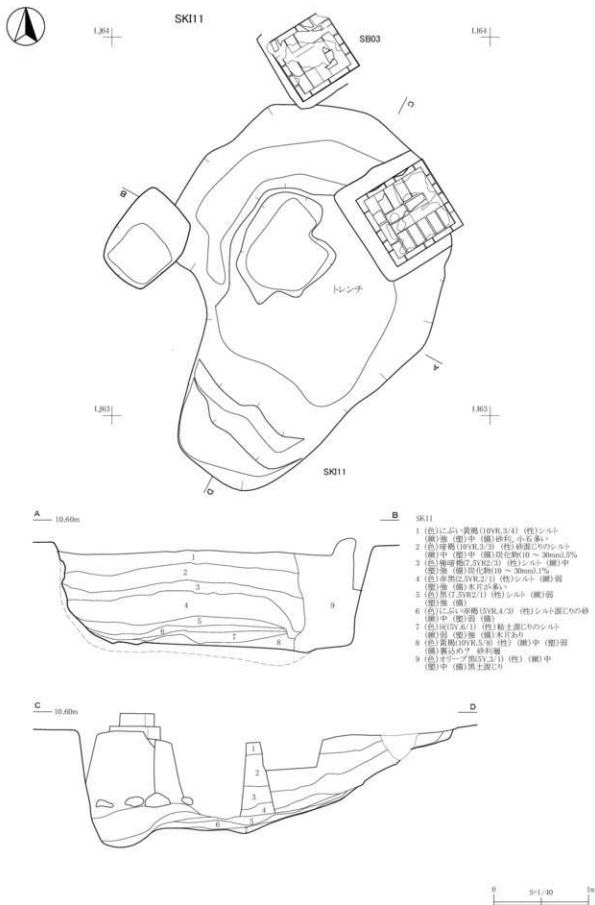
- SK322
1 10YR3/3暗褐色(性)シルト (順)中 (順)中
層φ100mm 埋山由来土20~30mmブロック状に堆積



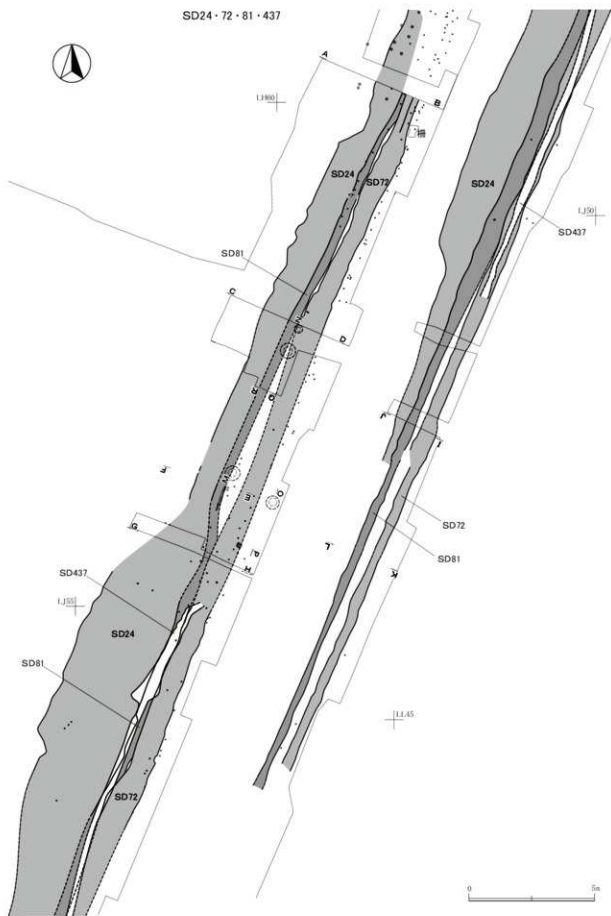
- 1 10YR5/6黄褐色 (性)シルト(II) (順)中 (順)中 柱筋跡



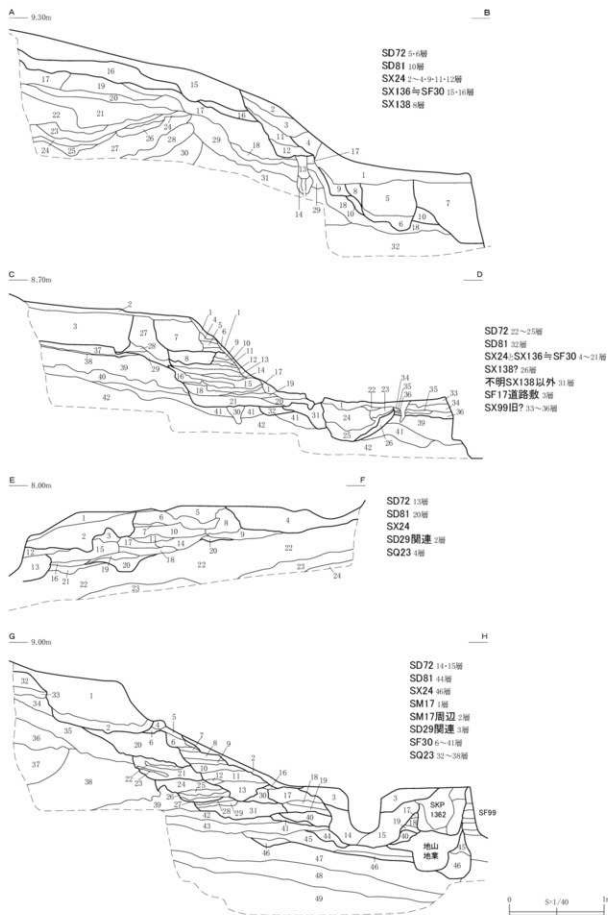
第203図 江戸時代(北東部)遺構平面図・断面図(柱穴列SA04・06・08、土坑SK322)



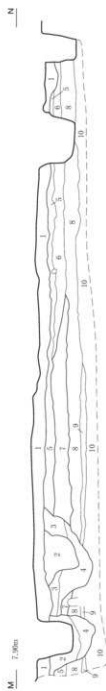
第204図 江戸時代(北東部)遺構平面図・断面図(竪穴状遺構SKI11)



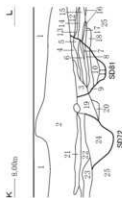
第205図 江戸時代（北東部）遺構平面図（SD24・72・81・437）



第206図 江戸時代（北東部）遺構断面図（SD24・72・81・437）



盛土 25・45・125・150・160層
 SD72 1層(5318)
 SD73 2層(5319)
 SD81 15・16層(5310)
 平安時代の表土 17層
 新移置 19層
 地山 19層



盛土 21・22・23層
 SD72 2層(5318)
 SD81 7・11層(5311)
 地山 25層



SKP1360
 SKP1020-SKP1015間断面
 SKP1360 2~4層
 SX99盛土 5~8層
 盛土 9~18層



盛土 1~18層



第207図 江戸時代(北東部)遺構断面図(SD24・72・81・437よび周辺の柱穴様ピットと盛土)

付くSD396も含めて機能を共有する一連の建物群と考えたい。

(4) 堅穴状遺構

SKI11は調査区北東隅で検出した(第204図、第3分冊図版208～210)。近代の門SB03p1に切られる。入口は南西を向く。堆積層は泥炭化した木質遺物で建築部材を多く含む。

(5) 溝跡

切岸中腹から裾にSD24・72・81・437がある(第205～207図、第3分冊図版211～213)。これらは脚板を杭で固定したり素掘りのままであったりする。調査区東辺では現中土橋通りの地下に接しており、江戸時代に行われた道路造成の為の版築工法を見ることが出来た(第207図、第3分冊図版213-3)。本地点は、県民会館解体工事進捗状況による制約のため、坪掘りを継ぎ足すような調査となった上、切岸造成時の版築基盤と混在して分離することが困難な部分も多く、連続した溝跡として捉え切れていない。

8 敷地南東部の遺構

(1) 井戸跡

SE434は盛土が最も厚い敷地東縁地点に設けられている(第209図、第3分冊図版214～219)。そのため、敷地地表面標高9.5mから湧水面まで4m以上掘り込んでいる。方形掘り方の内部に柱を建て、横に板を渡して構造体を作り、井戸桶を3段以上入れている。現地表標高8mからさらに3m下けても底面には到達できず、調査を中止した。SE606と似た作りである。

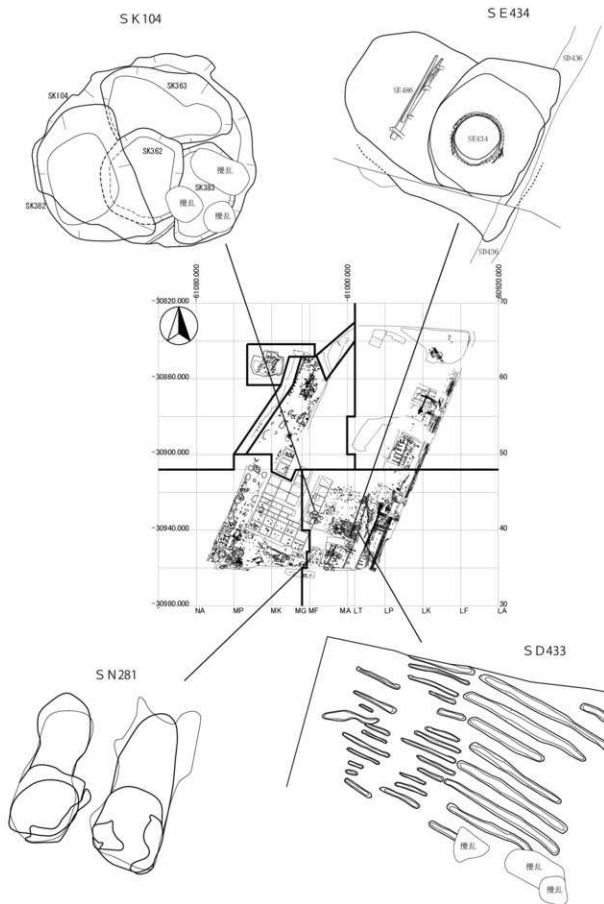
(2) 土坑

本地点の土坑も南西地区の土坑と同様ゴミ穴として使われたものが多く、掘削と埋め戻しを繰り返した結果、大形化したものが多い。SK104はSK362・363・362・363と重複する(第210図、第3分冊図版220～223、第4分冊)。元々SK104として調査を始め、精査する過程で掘削単位を細分した結果、複数の土坑が重複したことがわかった。本遺構からは、木製品が大量に出土しており、1600年代から1700年代初頭の資料として秋田県立大学木材高度加工研究所との共同研究「渋江屋敷発掘調査における木製品の樹種データベースの構築」を行った(第5分冊第1章第2節・第2章第1節)。その過程で年輪幅標準年輪曲線構築のためのデータ作成も合わせて行った。本遺構からは、卒塔婆状の木簡が出土しており「空風火水(梵字) 間箭[]」と書かれていた(第2分冊第160・161図)。

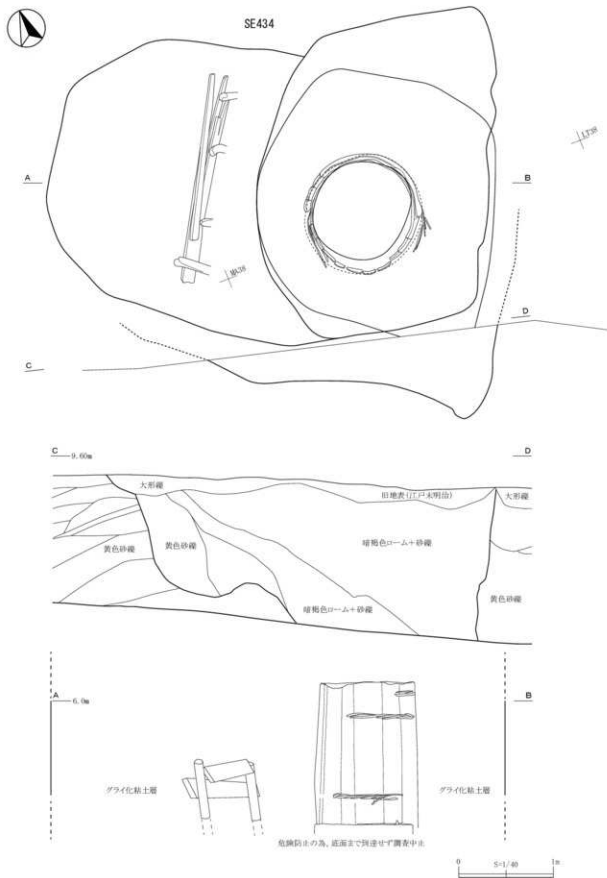
SK270・273(第211図、第3分冊図版227・232・233)、SK303・313・377(第212図、第3分冊図版223～226)も同様に大量の木製遺物を含む。SK270からは「太秦」と線刻された硯が出土した(第2分冊第264・265図、第3分冊図版227)。

(3) 焼土遺構

造成前の旧地表土上、MD35～MF37の4・5mほどの狭い範囲に焼土遺構SN280～283がまとまっていた(第3分冊234～236)。これら4基は、長軸1m前後でイチジク形から楕円形の平面形を持つ所謂壺状遺構である。長軸も同じ方向をそろえており、同時に使われていたと思われる。敷地造成時の盛土で直接埋められており、SD433畑跡(後述)の耕作者か、敷地造成に携わった作業員達の炊事痕跡と推測している。

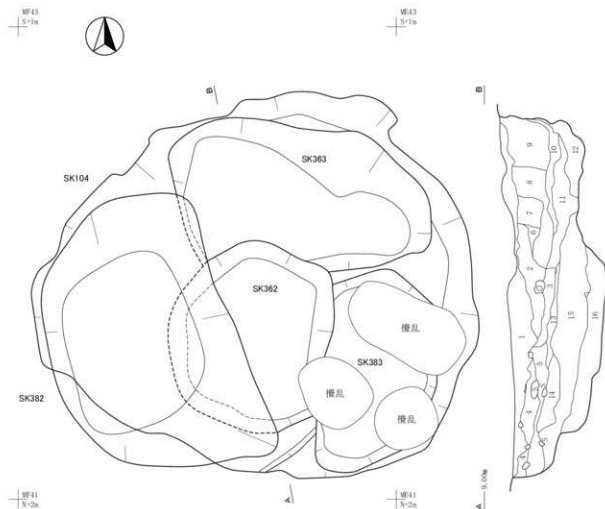


第208図 江戸時代（上屋敷南東部）遺構配置図



第209図 江戸時代(南東部)遺構平面図・断面図(井戸跡SE434)

SK104、SK362・363・382・383

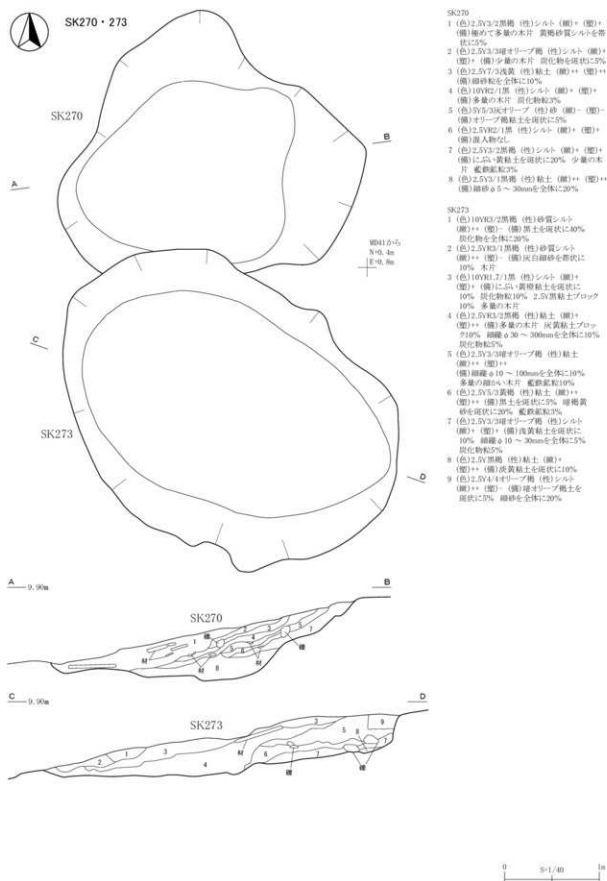


SK104

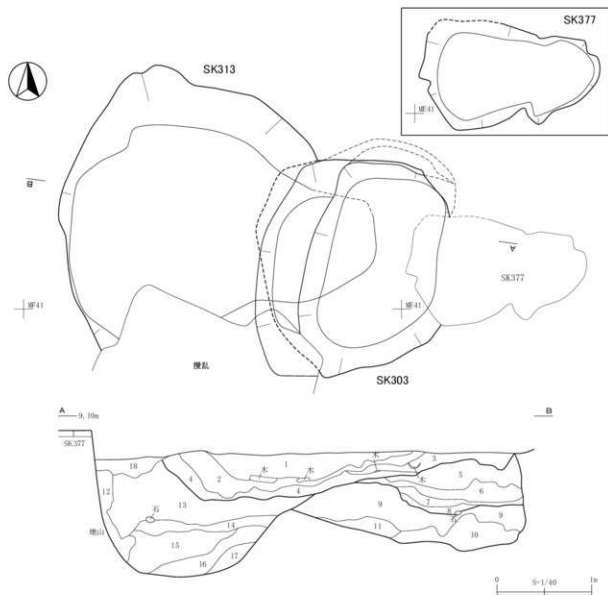
- 1 (色)2.5V2/2暗オリーブ層 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)多量の木片 小径 ϕ 10～200mmを全体的に10%、洗炭砂ブロック5%
- 2 (色)2.5V5/3黄褐色 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)黒褐色土を帯状に20%、細砂 ϕ 10～50mmを全体に20%、炭化物粒5%
- 3 (色)2.5V2/2暗オリーブ (性)砂 (層)++ (型)++ (備)に \pm 0.5黄褐色土を帯状に20%、炭化物粒5%
- 4 (色)2.5V3/1原褐色 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)オリーブ褐色粘土帯5%、細砂 ϕ 10～40mmを全体に10%、炭化物粒5%
- 5 (色)2.5V3/2暗オリーブ層 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)2.5V1/4オリーブ褐色粘土を帯状に40%、細砂を帯状に5%
- 6 (色)2.5V2/1黒 (性)砂 (層) (型) (備)明黄褐色土25%、細砂 ϕ 10～30mm5%、炭化物粒を全体に多く含む。
- 7 (色)2.5V3/3暗オリーブ層 (性)砂 (層)++ (型) (備)黒褐色粘土、黄土粘土、黒砂、に \pm 0.5黄褐色土をそれぞれ20cm間隔で柱状に含む。
- 8 (色)2.5V5/3黄褐色 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)暗オリーブ褐色粘土を柱状に30%、細砂を全体に10%
- 9 (色)2.5V6/2に \pm 0.5黄 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)黒褐色土を帯状に30%、炭化物ブロック5%
- 10 (色)10V8/1黒 (性)シルト (層)++ (型) (備)明黄褐色粘土を帯状に10%、多量の木片
- 11 (色)2.5V7/6明黄褐色 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)黒褐色土を帯状に30%
- 12 (色)10V8/5に \pm 0.5黄褐色 (性)シルト (層) (型) (備)黒褐色土を帯状に20%
- 13 (色)2.5V7/6明黄褐色 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)黒褐色土を帯状に5%
- 14 (色)2.5V3/1原褐色 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)炭化物を柱状に含む、細砂、細砂 ϕ 10～30mmを全体に10%
- 15 (色)2.5V6/2に \pm 0.5黄 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)黄褐色土ブロック5%、炭化物、黄土を帯状に10%、細砂 ϕ 10～40mm、砂を全体に5%
- 16 (色)2.5V6/2に \pm 0.5黄 (性)粘土 (層)++ (型)++ (備)黒褐色粘土を帯、帯状に10%、細砂5%



第210図 江戸時代(南東部)遺構平面図・断面図(土坑SK104・362・363・382・383)



第211図 江戸時代(南東部)遺構平面図・断面図(土坑SK270・273)



SK303

- 12 (色) 地山由黄土
 13 (色) 2.5V7/4浅黄(性)粘土 (硬)・(堅)++ (備)黒粘質シルトを混・帯状に30%
 14 (色) 2.5V5/2暗灰黄(性)粘土 (硬)・(堅)++ (備)埋オリーブ褐粘土を混状に10%
 15 (色) 10YR1.7/1黒(性)シルト (硬)・(堅) (備)オリーブ褐粘土を混状に3%
 16 (色) 2.5V6/4に灰黄(性)粘土 (硬)・(堅)++ (備)黒土を混状に3% 微細砂を全体に3%
 17 (色) 10YR8.6黄橙(性)粘土 (硬)・(堅)++ (備)炭化物和3% 納塵土か?

SK313

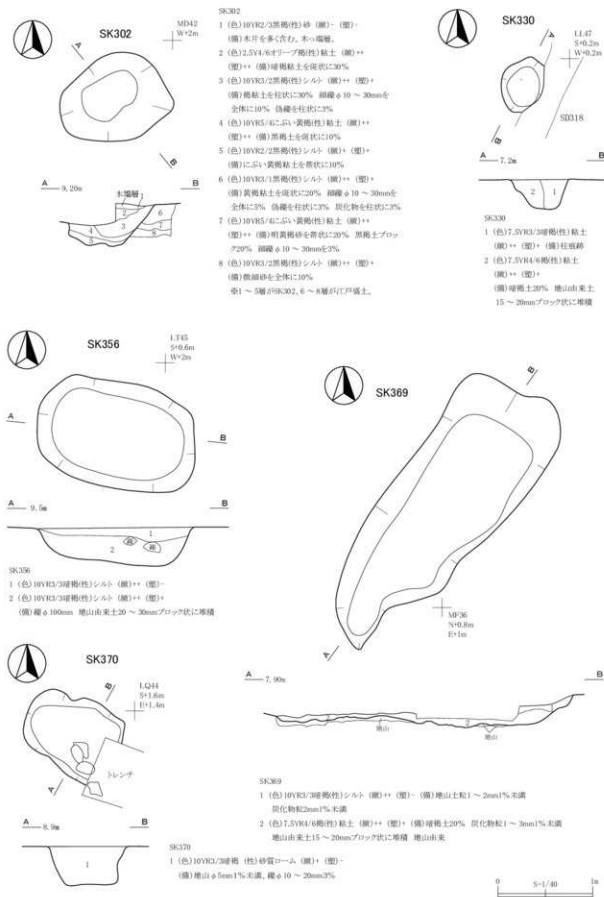
- 1 (色) 7.5YR2/1黒(性)シルト (硬)・(堅) (備)下層に木片を多く含む。に灰黄粘土を混・帯状に10% 細砂φ10～30mmを全体に10%
 2 (色) 10YR6/4に灰黄(性)粘土 (硬)++ (堅) (備)黒土を混状に10% 浅黄砂を帯状に3%
 3 (色) 2.5V2/1黒(性)砂質シルト (硬)・(堅) (備)多量の木片
 4 (色) 2.5V4/3オリーブ褐(性)砂質シルト (硬)・(堅) (備)浅黄粘土を混状に20% 黒粘土を混状に10% 微細砂和3%
 18 (色) 10YR1.7/1黒(性)シルト (硬)・(堅) (備)黄粘土をブロック状に3% 上層に細砂φ0.1mmが帯状に堆積する。

SK377

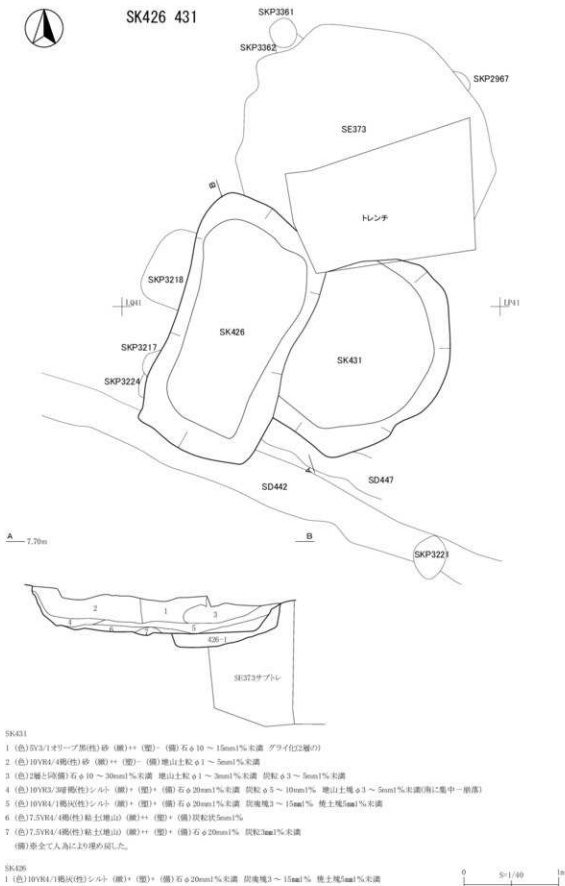
- 1 (色) 7.5YR2/1黒(性)シルト (硬)・(堅) (備)下層に木片を多く含む。に灰黄粘土を混・帯状に10% 細砂φ10～30mmを全体に10%

第212図 江戸時代遺構平面図32 (土坑 SK303、313、377)

第3章 発掘調査の方法と成果

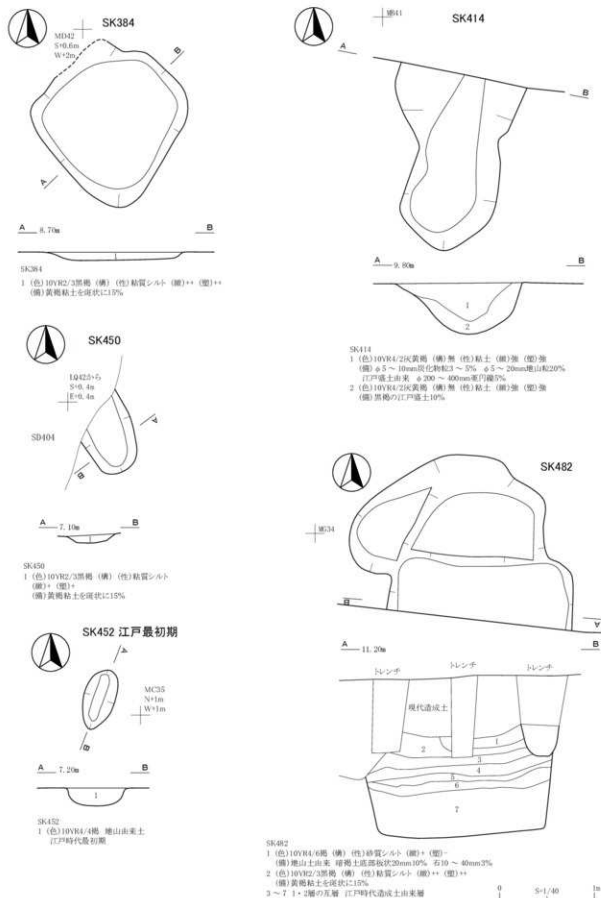


第213図 江戸時代(南東部)遺構平面図・断面図(土坑SK302・322・330・356・369・370)

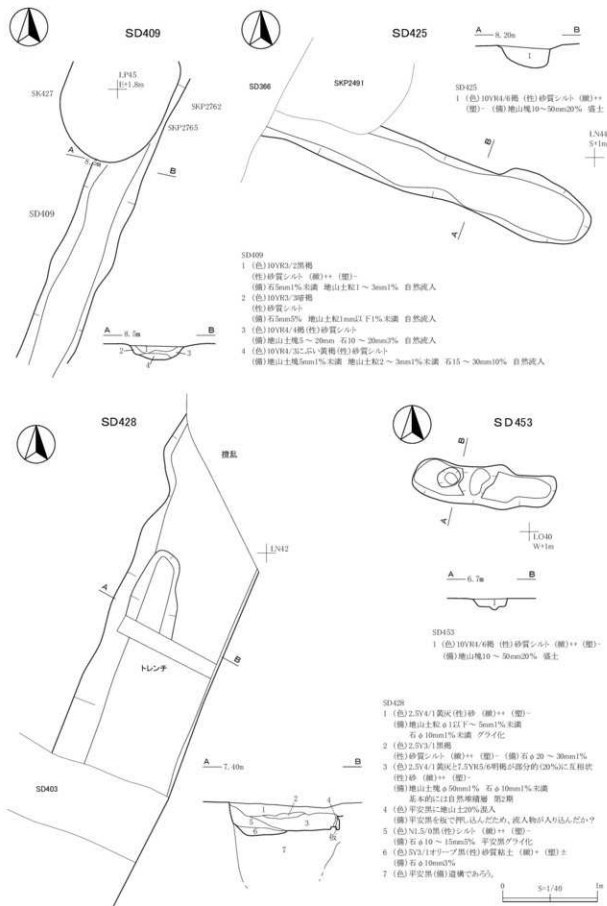


第214図 江戸時代(南東部)遺構平面図・断面図(土坑SK426、431)

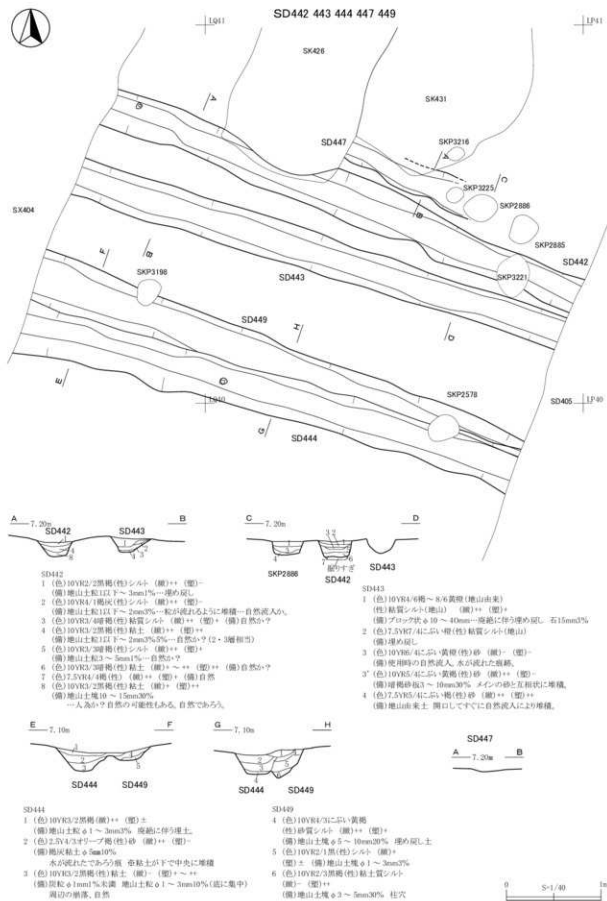
第3章 発掘調査の方法と成果



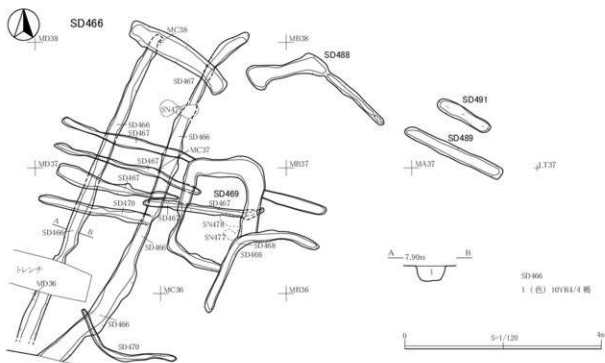
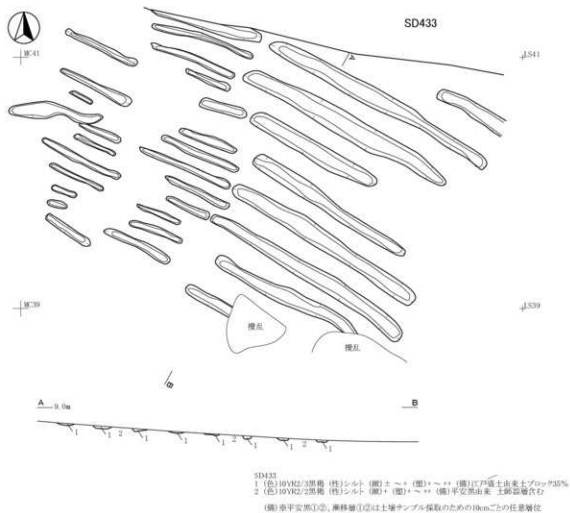
第 215 図 江戸時代（南東部）遺構平面図・断面図（土坑 SK384・414・450・452・482）



第 217 図 江戸時代 (南東部) 遺構平面図・断面図 (溝跡SD409・425・428・453)



第218図 江戸時代(南東部)遺構平面図・断面図(溝跡SD442・443・444・447・449)



第219図 江戸時代(南東部)遺構平面図・断面図(畑跡SD433 466)

(4) 溝跡

S D416 (第216図、第3分冊図版112) は中土橋通り S M368の古段階に掘られている。S D404古段階より新しく、新段階よりも古い。従って、S D404古段階と同時に機能しており、中土橋通り S M368の嵩上げと S D404新段階への切り替え時点で廃絶したものである。S D444他(後述)よりも新しく、敷地内の通路がある程度決まった段階で掘られた溝跡と考えた。S B544・545の西側と S D404の東側に挟まれた狭い通路を通ることから、S B544・545の雨だれラインに伴う排水溝が通用路と考えた。

S D428 (第217図、第3分冊図版114) は調査区東縁で検出した。敷地東縁に沿う大形の排水溝である。検出長は4m程であるが幅が1.3mあり、側板を杭で止めている。S D403を介して S D405に連続する。S D442・443・444・447・449 (第218図、第3分冊図版113) は、中土橋通りを横断する狭い溝の集まりである。幅・深さとも20cm強で、盛土由来の黄褐色砂礫土、または旧地表由来の黒色土で埋められている。S M386を横断し、S D404・405・406よりも古く、これら排水路の系統とは異なる。堆積土が造成土であることから、江戸初期の敷地造成前、または造成過程で機能した溝跡と考えた。

(5) 畑跡

造成土に直接埋められる短い溝群があり、畑跡と考えた。S D433・466 (第219図、第3分冊図版238-241) は旧地表面の黒色土上に掘られている。渋江家造成に伴い廃絶した。

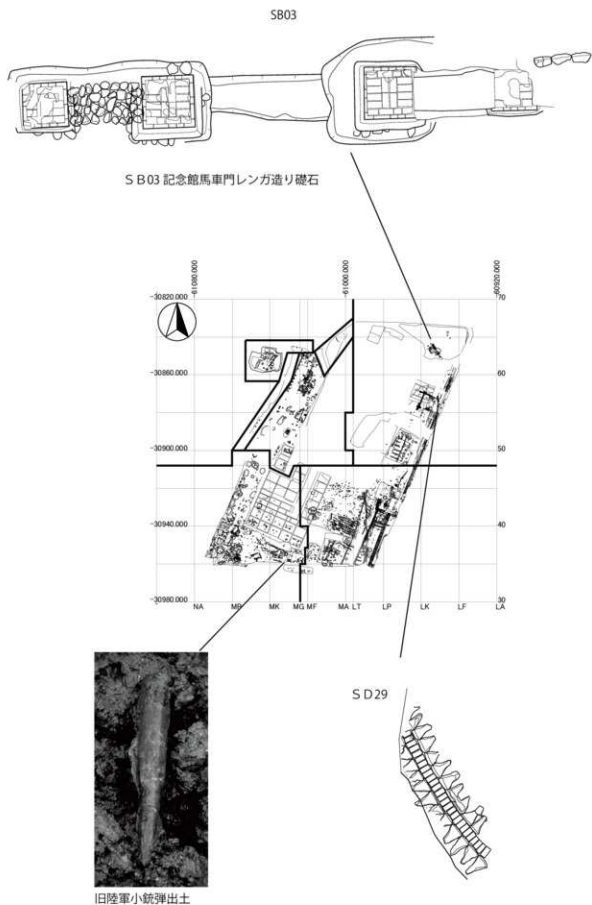
4 近現代

県民会館の前身建物として大正天皇御成婚記念館・公会堂がある。建物は焼失したがレンガ造りの建物基礎は、県民会館の基礎から外れた地点で検出されたものがある。これらは調査期間の制約上記録を取ることが出来なかった。他に敷地北東部に設けられた馬車道斜路と排水溝、そしてレンガ造りの門柱基礎が検出された(第220図、第3分冊図版248)。

レンガ造り門柱基礎 S B3 は調査区北東部、東海林太郎公園の背面台地上に造られた(第221図、第3分冊図版249・250)。コンクリート製の基礎上にレンガ造りの柱が4本並ぶ。レンガの積み方は、長軸と短軸を互い違いに組み合わせしており、イギリス積みになる。コンクリート製の基礎は、直径10~20mmの玉砂利が多く混ざれている。現 J R 奥羽本線が旭川を渡る地点の橋脚(明治35年10月竣工のプレートを持つ)に使われたコンクリートとそっくりである。門柱 p1 は江戸時代の堅穴状遺構 S K I 011 を切って造られており、基礎が他の2柱よりも深い。また、S K I 011 上面にはコンクリートを混ぜて固めたレンガ溜まりがある。S K I 011 を埋めた跡が軟弱で凹みが出るのをレンガ溜まりで簡易舗装した物であろう。本遺構は焼失前の記念館を撮った古い写真にも写っている。また東海林太郎公園は、記念館時代は広い階段となっていた。

S B03に至る斜路に設けられた排水溝が S D29である(第3分冊図版250-2~4)。側面は間知石、底面はレンガ敷きである。途中数m壊され、2か所に分断された。

調査途中に小銃弾が発見されたことから、旧軍関係遺物の残存調査を行い、もう1点の小銃弾を発見した(第3分冊図版248・250-5)。他にも戦時中の防衛食器(第2分冊第112図3~5)や戦車が描かれた茶碗が出土しており、図示しなかったが「将校倶楽部」と書かれた徳利など、県民会館が隣接する第17連隊の将校クラブとして利用されていた可能性を示した。



第 220 図 近代（北東部）遺構配置図

第3章 発掘調査の方法と成果

第11表 江戸時代時代遺構一覧(1)

遺構番号	遺構種類	大土ワット	大土ワット	X	Y	Z	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	西向き	東西	時代	詳細	第3分洞開取番号	備考	
1	SF	LT	66	-30834.775	-60997.814	11.021	南北17.6m 高さ6m(敷地内から)	幅12-15m				江戸	43-2 46-1-2-3-4-5-6-7-8 49-2 50-1-2-3 51-1-2-3-4 52-1 52-1-2 53-1-2 62-1-2 63-1-2 64-1-2 127 128-1-2 129-1-2 130-1 131-1-2-3 200	90 99 92 93 94 95 96 97 98		
1	SF	MP	62	-30851.311	-61008.492	11.43						江戸				
1	SF	MP	62	-30848.821	-61019.261	11.59						江戸				
1	SF	MP	62	-30844.456	-61020.705	11.28						江戸				
7	SA	MH	38	-30897.928	-60951.989	13.94	6.01	1.96				江戸	103	47-1-2-3-4-5 48-1-2-3	S A01-3.05×0.25×0.10m S A01-3.05×0.46×0.10m S A01-3.05×0.40×0.10m S A01-3.05×0.61×0.10m S A01-3.05×1.01×0.10m	
4	SA	L	61	-30847.183	-60955.939	10.06						江戸				
1	SA	L	61	-30841.461	-60951.430	10.06						江戸				
6	SA	L	61	-30844.469	-60956.271	10.16						江戸				
6	SA	L	61	-30846.176	-60956.743	10.33						江戸				
7	SQ	MP	61	-30833.053	-61021.344	12.699	1.70	0.92		-	35	E	江戸	163	54-1	S1607の遺石を覆覆
8	SA	L	62	-30840.057	-60953.251	10.41						江戸				
8	SA	L	62	-30848.188	-60952.726	10.40	0.48	0.42				江戸				
9	SK	MI	53	-30884.537	-61035.614	10.158	4.80	2.02	1.10	35	E	江戸	145 154	149-1-2-3 150-1-2-3-4	壁穴状遺構	
10	SK	MI	53	-30887.992	-61017.803	10.366	1.12	1.48	0.32	13	W	江戸	154	156-3-5		
11	SK	L	61	-30845.961	-60954.712	9.19	3.58	3.16	1.15	31	E	江戸	198 204		壁穴状遺構	
12	SK	MB	64	-30841.888	-61004.203	10.965	2.19	0.64	34	W	江戸	154	66-2	S F01を掘り込む土取り穴を埋めのための		
13	SK	MK	53	-30887.995	-61043.299	10.060	4.92	1.96	15	E	江戸	154		S F01を掘り込む土取り穴を埋めのための		
16	SD	MP	61	-30853.033	-61019.532	11.189	1.80	0.67	0.62	71	W	江戸	99		切戻し壁	
18	SD	MP	61	-30853.033	-61019.532	11.189	1.80	0.67	0.62	71	W	江戸	99		切戻し壁	
20	SD	MD	62	-30851.429	-61015.692	10.223	2.66(残)	0.83	-	-	-	江戸	163 164	45-1-4 54-2 55-1-2 56-1-2 57-1-2-3-4 5 58-1-2 59-1-2	S D20-32(新)→SK P 1178(古)	
21	SA	MP	62	-30892.682	-61022.5	11.842	1.90	-	-	44	W	江戸	103		S A21(1.64×1.23m) 遺石を切り、内部の埋土	
22	SD	LH	55	-30879.21	-60960.023	7.092						江戸				
24	SD	LG	59	-30863.099	-60945.222	7.74	34.70	1.38	-	-	-	江戸	198 205 206 207	201 211-1-2		
25	SD	MG	60	-30857.019	-61025.867	11.329	21.29	0.79	-	-	-	江戸	99	61-1-2 65-1-2 66-1	S D01遺土層下、観込地帯 上に幅0.5m深さ20cm	
26	SQ	MP	62	-30850.861	-61021.199	12.619						江戸				
27	SB	MI	55	-30877.71	-61033.14	10.863	2.85	1.66	-	26	E	江戸	145 146		S F01を掘り出した 部分の埋土に 設置 S F02を掘り出した 部分の埋土に 設置	
27	SB	MI	55	-30876.867	-61043.553	10.974						江戸				
27	SB	MI	55	-30877.737	-61035.438	10.531						江戸				
27	SB	MI	55	-30879.085	-61035.803	10.883						江戸				
28	SA	MG	59	-30863.769	-61027.895	10.943	20.80	1.84	-	25	E	江戸	104	45-1 58-1-2 59-1-2 60-1-2 61-1-2	S A280.75×0.61m S D01 遺土層下、観込地帯に、φ 50cm深さ30cmで積載物が 見えきよように見える。	
28	SA	MG	59	-30863.769	-61027.895	10.943	20.80	1.84	-	25	E	江戸	104	45-1 58-1-2 59-1-2 60-1-2 61-1-2	S A280.75×0.61m S D01 遺土層下、観込地帯に、φ 50cm深さ30cmで積載物が 見えきよように見える。	
28	SA	MG	59	-30861.692	-61027.291	10.719						江戸				
28	SA	MG	59	-30860.503	-61026.544	10.848						江戸				
28	SA	MH	58	-30867.106	-61029.903	11.047						江戸				
30	SF	LG	58	-30866.713	-60947.343	7.42	1.35(残)	0.74(残)				江戸				
31	SK	ME	60	-30838.256	-61018.153	10.411	2.62	2.36	0.58	27	E	江戸	145 151	147-1-5 148-1-2	S D20-32(新)→SK P 1178(古) 埋土層上	
32	SD	ME	61	-30848.448	-61017.132	10.473	15.91	0.66	-	-	-	江戸	164		S D20-32(新)→SK P 1178(古) 埋土層上	
33	SD	L	56	-30875.458	-60962.817	8.733						江戸				
33	SK	MP	58	-30961.131	-61024.13	11.043	0.94	0.91				江戸	114	156-7 157-1		
35	SK	MP	59	-30960.282	-61023.677	10.921	1.35	1.13		89	W	江戸	151	157-2-3		
36	SD	MP	57	-30849.741	-61021.896	10.791						江戸				
37	SD	MP	57	-30849.741	-61021.896	10.791						江戸				
37	SD	MP	57	-30863.913	-61021.142	10.829	6.68	0.25	-	-	-	江戸	164	161-6		
38	SK	MP	58	-30957.125	-61025.862	10.361	0.78	0.82	0.67	74	W	江戸				
38	SK	MP	57	-30894.899	-61024.179	10.616	0.74	0.62				江戸				
40	SK	MP	58	-30964.826	-61019.818	10.755	1.66	1.06				江戸	146	157-4-5-6		
41	SK	MP	58	-30956.314	-61020.275	10.721	2.06	1.24				江戸	156	157-7-8		
42	SK	MP	58	-30964.826	-61019.818	10.755	1.66	1.06	0.12	36	W	江戸	158	158-1-2	SK P126(新)→SK41(古)	
43	SK	MP	58	-30965.642	-61019.288	10.548	0.88	0.84		69	E	江戸	156		SK43(新)→SK P1181- 1180→SK74(古)	
45	SK	MP	61	-30820.014	-61018.358	11.021	0.50	0.18		10	E	江戸	155			
46	SQ	MP	59	-30861.798	-61021.366	10.742	0.98	0.94	0.18	71	W	江戸	157	158-2-4 159-1		
47	SK	MP	58	-30965.271	-61019.668	10.267	0.82	0.58		30	E	江戸	136			
48	SK	MP	58	-30960.021	-61022.556	10.514	0.78	0.37				江戸	160	161-1		
49	SK	MP	57	-30869.204	-61018.828	10.642	1.98	1.77		92	W	江戸	152	159-2-3-4-5-6		
50	SK	MP	58	-30966.783	-61023.778	10.808	1.76	1.47	0.12	19	E	江戸	157	153-7-8		
51	SK	MP	57	-30968.251	-61021.608	10.361	0.93	0.21	0.44	20	E	江戸				
52	SK	MP	58	-30974.488	-61016.674	10.842	0.84	0.82	0.60	35	W	江戸	158			
53	SK	MP	56	-30874.145	-61020.527	10.651	1.90	1.78	0.10	90	W	江戸	157			
54	SK	MP	57	-30870.805	-61022.15	10.139	1.99	1.19	0.45	86	W	江戸	158			
55	SK	MP	56	-30875.294	-61020.699	10.214	1.44	1.40	0.39	21	E	江戸	158	160-1-2		
56	SK	MP	54	-30881.191	-61021.613	10.020	1.24	1.60	0.84	69	W	江戸	159	160-3-4-5		
57	SK	MP	54	-30880.053	-61021.129	10.463	0.86	0.82	-	-	-	江戸	159			
58	SK	MP	57	-30886.139	-61020.301	10.145	0.74	0.67				江戸				
59	SK	MH	55	-30870.496	-61029.42	9.903	1.91	1.61	0.73	61	W	江戸	158	160-6-7		
60	SK	MH	55	-30878.835	-61031.218	10.182	2.25	1.99	0.59	28	E	江戸	160	160-8 161-1		
61	SK	MH	57	-30870.438	-61033.611	10.179	0.66	0.63	0.68	27	E	江戸	160			
71	SD											江戸				
72	SD	LG	57	-30868.974	-60946.605	6.99	34.77	0.89	-	-	-	江戸	205 206	211-3		
73	SD	MP	57	-30868.964	-61022.827	10.907	0.52					江戸				

第12表 江戸時代代遺構一覧(2)

発掘番号	遺構種類	大穴 ワット	X	Y	Z	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	西	東	北	南	傾斜	第3分組図番	備考
74	SK	ME	58	-30865.745	-61016.769	10.26	2.46	2.43		89°E	W	U.F.F	156	161-2-3	
76	SK	MP	54	-30880.093	-61033.129	10.003	6.26	4.42	-	-	-	-	U.F.F	159	
77	SK	MP	55	-30877.896	-61022.973	10.114	0.78	0.52					U.F.F	160	167-1-2
78	SK	MP	55	-30876.749	-61028.884	9.119	1.09	0.91	1.00	79°W			U.F.F	161	152-1-2
79	SK	MG	52	-30890.766	-61025.176	10.92							U.F.F		
80	SE	MI	52	-30890.351	-61032.142	7.62	4.78	2.01	2.71	31°E			U.F.F	145 152	145 152-3-4-5 153-1-2-3-4-5 153-1-2-3-4
81	SD	LG	39	-30862.877	-60944.813	7.502	8.14	0.84	-	-	-	-	U.F.F	205 206 207	
82	SD	MP	37	-30866.61	-61021.966	10.829	1.66	0.37	-	-	-	-	U.F.F	154	
83	SD	MP	37	-30865.43	-61022.111	10.26	1.59	0.40	-	-	-	-	U.F.F	148	
84	SD	MI	31	-30865.74	-61029.531	10.803	0.70	0.21	0.07				U.F.F	165	
85	SA	MP	62	-30849.007	-61031.417	11.487	1.88			76°W			U.F.F	105	
86	SKP	ME	62	-30849.706	-61031.703	11.126	0.79	0.77	0.55	23°E			U.F.F		
87	SD	MI	49	-30902.085	-61039.297	10.138	2.31	0.41	0.07	22°E			U.F.F	195	162-3-4
88	SD	MI	48	-30907.064	-61036.757	9.659							U.F.F		
89	SD	MI	50	-30899.475	-61032.193	9.888	4.05	1.48	10.7	63°W			U.F.F	145 166	145 162-1-2
90	SD	MI	49	-30901.619	-61029.281	9.971	3.96	1.31	0.43	71°W			U.F.F	145 166	145 162-1-2
91	SD	MI	49	-30903.096	-61027.849	9.031	0.71	0.62	0.37	26°W			U.F.F	161	161-1
92	SKP	MI	49	-30901.186	-61028.292	10.129	0.83	0.72	0.27	61°W			U.F.F	161	
93	SK	MI	50	-30899.565	-61038.743	10.055	1.80	0.50	0.27	37°E			U.F.F	161	
94	SK	MI	50	-30898.791	-61035.113	9.849	1.60	0.90	0.35	39°E			U.F.F		
95	SK	MI											U.F.F		
96	SK	MI											U.F.F		
97	SE	MI	48	-30900.441	-61031.964	9.696	1.51	1.28	1.59	62°W			U.F.F	153	155-5-6 156-1-2
98	SK	MI											U.F.F		
99	SK	MI											U.F.F		
100	SK	MI	47	-30900.98	-61033.221	9.641	0.42	0.20	0.16	23°E			U.F.F		
102	SK	MI	47	-30900.71	-61032.819	9.287	1.66	1.00	1.69	1°E			U.F.F	214 15	161-5
104	SK	ME	41	-30922.274	-61019.797	8.62	4.53	3.76					U.F.F	208 210	211 220-1-2-3 221-1-2-3-4 222-1-2-3-4-5 223-1-2
106	SK	MM	40	-30928.682	-61048.682	10.01	0.56	0.32	0.27	28°E			U.F.F	175	
107	SK	MM	40	-30928.112	-61049.028	10.057	2.12	1.03	0.40	28°E			U.F.F	175	
108	SK	MM	40	-30926.729	-61051.021	10.196	0.32	0.38	0.40	79°W			U.F.F		
110	SK	MM	46	-30927.192	-61059.987	10.021	0.61	0.32	0.40	23°E			U.F.F		
111	SKP	MM	40	-30927.428	-61048.211	10.137	0.59	0.56	0.29	13°E			U.F.F		
112	SKP	MI	40	-30927.4	-61047.236	10.081	0.45	0.38	0.35				U.F.F		
113	SK	MI	41	-30929.67	-61047.272	8.852	4.53	3.76					U.F.F		
114	SK	MI	41	-30929.67	-61047.272	8.852	4.53	3.76					U.F.F		
115	SK	MI	46	-30931.126	-61049.207	9.123	0.51	0.36					U.F.F		SK104土直敷
116	SK	MI	39	-30941.318	-61059.987	9.477	0.91	0.62	0.11	78°E			U.F.F	176	
117	SK	MR	47	-30911.864	-61042.512	8.99	3.18	2.51	0.86	31°E			U.F.F	177	179-3-5-6 176-1-2-3-4 177-1-2
118	SK	MG	38	-30947.337	-61051.266	9.638	0.47	0.61					U.F.F	176	
119	SK	MI	46	-30927.081	-61052.633	9.411	0.98	0.61	0.24	21°E			U.F.F		
122	SK	MI	49	-30901.892	-61048.711	10.012	2.12	1.29					U.F.F	177	
123	SK	MI	43	-30926.945	-61050.613	10.343							U.F.F		
125	SK	MI	45	-30920.676	-61051.441	9.35	0.89	0.61					U.F.F	133	
126	SK	MI	45	-30925.482	-61056.031	10.314							U.F.F		
128	SK	MI	45	-30918.014	-61056.511	10.56	1.30	0.30					U.F.F		
128	SK	MI	36	-30955.151	-61071.274	10.449	3.19	0.71	0.61				U.F.F	176	165 177-3-4-5
128	SK	MS	36	-30954.493	-61072.864	8.41	3.09	0.70	2.51	21°E			U.F.F		
129	SK	MI	39	-30962.33	-61074.803	10.321	1.85	1.08	0.51	67°W			U.F.F	162	
130	SK	MP	59	-30901.895	-61057.054	10.454	1.17	0.81	0.6	6°W			U.F.F	162	
131	SA	MI	53	-30886.929	-61047.603	11.07	3.64						U.F.F	105	45-3 48-4-5 49-1
131	SA	MI	53	-30885.482	-61046.966	11.022							U.F.F		SA13 0.68×0.48m SA13 0.77×0.63m
132	SA	MI	53	-30884.106	-61052.573	11.289							U.F.F		
133	SK	MM	39	-30911.198	-61049.997	8.96	2.56	2.16					U.F.F	175	178-1-2-3-4
135	SA					6.73				68°W			U.F.F	105	130-1-2-3-4-5
136	SK												U.F.F		
137	SK												U.F.F		
139	SK	LR	43	-30925.432	-60980.286	8.02							U.F.F	175	
151	SK	MM	43	-30924.907	-61019.118	9.252	3.95	0.70	0.36				U.F.F	171	168-1-2-3
152	SK	MI	36	-30943.088	-61071.893	9.411	1.80	0.61					U.F.F	178	
153	SK	MR	36	-30945.513	-61071.038	9.33	2.45	0.81					U.F.F	180	179-1-2-3-5
154	SK	MI	46	-30913.196	-61053.217	9.78	3.48	2.56	1.05				U.F.F	172	180-1-2
155	SK	MO	44	-30922.553	-61056.302	9.27	1.70	1.63					U.F.F	182	180-3 181-1-2-3-4 182-1
156	SK	MI	46	-30914.731	-61046.731	10.01	0.50	0.19	0.08	67°W			U.F.F		
157	SK	MM	39	-30940.276	-61031.143	9.111							U.F.F		
158	SK	MI	43	-30917.286	-61046.614	9.229	0.52	0.41					U.F.F	178	
159	SK	MI	55	-30824.921	-61024.533	10.06	4.05	3.60					U.F.F		
160	SE	MS	46	-30914.477	-61043.611	7.64	1.58	1.11	2.34				U.F.F	166 174	165 171-1-2 172-1-2 172-1-2-3-4 173-1-2
161	SK	MI	47	-30903.286	-61045.311	6.96	3.39	2.45	0.61				U.F.F	166	169-1-2-3
162	SK	MO	36	-30955.174	-61059.118	10.21	1.00	0.82					U.F.F	178	185-1
163	SK	MI	43	-30926.551	-61044.889	8.11	0.86	0.65					U.F.F	178	182-2
164	SK	MI	35	-30968.71	-61056.893	9.56	3.62	2.61					U.F.F	173	165 170-1-2-3
165	SK												U.F.F		SK104土直敷
166	SK	MO	37	-30951.165	-61059.965	9.889							U.F.F	178	185-3-4
166	SK	MP	36	-30956.646	-61060.331	10.07							U.F.F		
166	SK	MP	37	-30951.944	-61060.599	10.11							U.F.F		
167	SK	MP	35	-30956.235	-61061.267	10.09	1.88	1.26	0.41				U.F.F	178	186-1-2
167	SK	MP	36	-30956.656	-61061.531	10.09	1.83	1.21	0.41				U.F.F	178	
167	SK	MP	35	-30956.965	-61061.357	10.08	1.31	1.08	0.28				U.F.F	187	
170	SK	MI	35	-30938.289	-61065.109	10.22	0.88	0.91	1.00				U.F.F	187	
170	SK	MI	36	-30938.656	-61066.0	9.88	2.01	0.81	0.35				U.F.F	187	
172	SK	MI	43	-30929.225	-61073.829	9.63	3.88	3.26	1.46	0.41			U.F.F	188	186-3-4 187-1
173	SK	MI	37	-30950.751	-61069.402	10.34	1.82	0.80	0.91				U.F.F	188	
174	SK	MP	46	-30913.033	-61048.976										

第13表 江戸時代時代遺構一覧(3)

遺構 番号	遺構 種類	大塚 ワッド	大塚 ワッド	X	Y	Z	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	角度	東西	時代	検出 時期	第3分相図版番号	備考
179	SK	MP	42	-30928.609	-61000.487	9.19	4.70	2.11				江戸	182 183	180-3 181-1 182-1 2-3-4 183-1	
180	SK	MP	36	-30954.533	-61026.914	9.96	1.53	1.06	0.29			江戸	179	186-2	
181	SK	MS	41	-30918.127	-61034.161	7.26	1.40	1.10	2.00	70	W	江戸	185	174-1 175-1 182-1	
182	SK	MO	43	-30925.234	-61057.239	9.25	0.94	0.03				江戸	185 184	181-1-2 183-2 184-1 1-2-3	
183	SK	MO	36	-30919.966	-61006.795	10.24	1.07	1.23				江戸	182	181-3 189-3-1	
184	SK	MO	35	-30959.479	-61028.445	9.90	1.59	1.11	0.49			江戸	179	189-5	
185	SK	MO	37	-30950.914	-61029.515	10.3	2.30	0.81	0.64	1.00		江戸	179	189-6	
187	SK	MO	35	-30959.333	-61024.513	10.32	1.61	1.47	0.28			江戸	182		
188	SK	MO	35	-30958.628	-61024.513	10.24	1.61	1.81	0.74	0.61		江戸	179		
189	SK	MS	44	-30923.026	-61054.602	9.45	2.04	0.29				江戸	182 183	180-3 181-1 182-1	
190	SK	MO	44	-30923.139	-61056.405	9.27	2.52	1.22				江戸	182 183	180-3 181-1-2 182-1	
191	SK	MS	45	-30914.349	-61054.614	9.32	1.31	1.30	0.65			江戸	180	189-7	
192	SK	MO	34	-30940.118	-61056.561	6.99	1.90	0.81	1.16	0.11		江戸	190	190-1-2-3 191-1	
193	SK	MO	35	-30957.593	-61059.513	10.24	0.92	0.78	0.16			江戸	189		
194	SK	MP	36	-30955.185	-61061.219	10.26	1.97	1.06				江戸	189	191-2-3	
196	SD	MS	29	-30944.824	-61035.725	6.99	1.59	1.17	0.30	-	-	江戸	198	198-2-3	SM198の遺構 SM196の遺構
197	SD	MI	36	-30958.276	-61031.149	10.24						江戸	198	198-2-3	
198	SM	MI	35	-30956.377	-61034.606	9.73	11.41	1.19	-	-		江戸	196 197	165 198-2-3	
199	SK	MR	36	-30952.105	-61069.013	9	5.01	2.68	0.11			江戸	190	179-2-3-4-5	
200	SK	MO	35	-30958.363	-61057.518	10.18	0.79	0.41	0.53	0.11		江戸	179		
201	SK	MI	36	-30955.195	-61031.943	10.01						江戸	197	-	
202	SK	MI	36	-30954.291	-61031.283	9.81	1.81	1.11	0.11			江戸	191	191-1-3	
203	SK	MI	36	-30954.167	-61032.832	9.78	0.60	0.58	0.30			江戸	191	191-1-5	
204	SD	MI	36	-30903.033	-61031.413	9.77	2.42 (北東)	0.59				江戸	196		長い遺構の為計測は2か所 に区切っている
205	SK	MI	36	-30953.039	-61034.439	10.07	4.51	3.94	-	-		江戸	197	197-2-4	
207	SK	MS	45	-30918.133	-61054.699	9.62	1.58	0.22	0.29	-	-	江戸	189	190-1	
211	SK	MS	38	-30946.431	-61043.119	8.85	1.08	0.87				江戸	191		
212	SK	MI	36	-30955.841	-61033.988	9.77	1.73	0.45				江戸	182 183	188-1	遺工単位
213	SD	MI	37	-30949.066	-61024.116	10.12	2.10	1.81	0.45			江戸	197	197-5	
214	SK	MS	38	-30954.593	-61031.283	9.81						江戸	196	197-6	
219	SK	MI	37	-30951.506	-61036.213	9.98	1.90	1.91	0.82			江戸	196		
220	SK	MI	36	-30952.033	-61033.886	9.5	0.87	0.63	0.41			江戸	196		
222	SK	MI	36	-30959.809	-61043.023	9.91						江戸			遺工単位
223	SK	MI	36	-30958.676	-61044.576	9.94						江戸			遺工単位
224	SK	MI	36	-30958.676	-61044.576	9.94						江戸			遺工単位
225	SK	MI	36	-30957.892	-61047.243	9.96						江戸			遺工単位
226	SK	MI	31	-30964.824	-61043.832	9.64						江戸			遺工単位
228	SK	MI	31	-30961.368	-61043.671	9.53						江戸			遺工単位
229	SK	MI	36	-30952.955	-61032.395	9.48	4.90	1.06				江戸	191 196		
231	SK	MI	36	-30948.684	-61030.118	9.23	0.66	0.41	0.22	15	E	江戸	197		
232	SK	MP	36	-30955.421	-61036.117	10.03	0.54	0.48	-	-		江戸	197	197-3	
233	SD	MP	39	-30942.925	-61061.872	9.78	6.21	4.01				江戸	196 197	165 196-1 197-3-4-5	
234	SK	MI	36	-30954.593	-61031.283	9.81						江戸	196	196-1 197-3-4-5-6-7-8	
234	SK	MS	35	-30959.829	-61055.014	10.18	1.90	1.81	0.21			江戸	196	197	
235	SK	MI	36	-30952.955	-61032.395	9.48						江戸			
236	SK	MS	31	-30949.786	-61032.395	9.47	1.53	0.66				江戸			
237	SK	MI	36	-30943.474	-61041.672	9.72	0.99	0.41				江戸	197		
240	SK	MO	44	-30922.006	-61059.088	10.7	3.01	0.28	0.41			江戸	183-2	184-1-3	
241	SK	MR	37	-30949.459	-61069.489	10.25	1.50	1.91	0.83			江戸	188		SK 192がテラスで版 石敷入
242	SK	MS	45	-30929.41	-61054.249	9.48	1.65	1.47	1.30	0.25		江戸	189	189-7 190-1	
243	SK	MP	42	-30931.138	-61060.085	10.31	0.05	0.03				江戸	182 183	188-1-2-3	
245	SK	MP	42	-30928.926	-61061.672	8.94	1.90	0.64				江戸	182 183	188-1-2-3	
247	SK	MP	39	-30940.245	-61062.267	8.72	3.33	2.12				江戸	193	192-3-4-5-6-7 193-1-2	
250	SD	MP	35	-30956.974	-61060.232	9.4	5.99 (北東)	0.99	0.20	34 1 303	W	江戸	199	199-1-2-3	長い遺構の為計測は4か所 に区切っている
253	SK	MI	48	-30907.65	-61050.098	9.77	2.73	2.55				江戸	192		
254	SK	MI	48	-30907.911	-61018.906	8.56	4.51	3.28	1.11			江戸	194	194-1-2-3	
254	SK	MI	48	-30907.911	-61018.906	8.56	4.51	3.28	1.11			江戸	194	194-1-2-3	
255	SK	MI	42	-30931.593	-61062.273	9.01	2.51	0.77				江戸	182 183		遺工単位
260	SK	MP	41	-30933.17	-61032.287	8.73						江戸	201	207-1 203-4 203-1	
271	SK	MR	44	-30922.27	-61054.489	7.78	1.86	1.91	1.90			江戸	208	208-1 203-4	
272	SK	MR	42	-30922.28	-61054.489	7.78	1.69	1.52	1.66			江戸	208	208-1 203-4	
273	SK	MI	40	-30936.062	-61042.828	9.01						江戸	211	211-1 211-1-5	
274	SK	MI	41	-30935.113	-61031.658	9.33						江戸	203	203-2-4	
280	SK	MI	36	-30942.828	-61031.658	9.33						江戸	203	203-2-4	
281	SK	MP	36	-30955.511	-61030.201	8.18						江戸	208	211 205-2-4 206-1-2	
282	SK	MI	36	-30956.271	-61035.784	7.88						江戸	206	206-3-4	
283	SK	MI	36	-30953.901	-61031.501	7.91	0.25	-	-	-		江戸	206	206-5	
284	SK	MI	36	-30952.624	-61028.515	8.96						江戸	198	198-1	
285	SK	LI	43	-30922.51	-60977.498	7.8						江戸	123		遺工単位 PNS105p
286	SAP	LK	45	-30918.828	-60972.172	6.97	1.10	0.83	0.80			江戸	123	123-1 92-1 2-4-5-6-8	遺工単位 PNS105p PNS106p SM198の遺構上土
287	SK	MI	41	-30933.17	-61032.287	8.73						江戸	128	88-1	
288	SD	LQ	42	-30931.864	-60984.328	7.29	6.38	1.21	0.30			江戸	128 129	83 88-1 89-2 90-1 1-2 91-1 94-1 95 -1 96-1 2-4 97-1 2 98-1 2-3 1-5 6-7 99-1 1-2 100-1 2-3-4 101-1 104-2 108-1	陥門溝
292	SK	MR	37	-30948.261	-61069.602	8.94	3.38	1.84	1.41			江戸	195	195-1	
292	SK	MI	41	-30932.638	-61031.443	8.52	1.11	0.80	0.43			江戸	195 212	209-1 203	
300	SK	MI	41	-30934.439	-61031.518	8.49	2.33	1.68	0.81			江戸	212	221-1 225-1 226-1 2-2 228-1	
301	SK	LK	37	-30920.158	-60983.995	9.9						江戸			遺工単位

第14表 江戸時代時代遺構一覧(4)

発掘番号	遺構名	大塚 ワット	大塚 ワット	X	Y	Z	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	西度	東西	時代	詳細	第3分室取組回数	備考		
305	SB	LI	57	-30871.081	-60655.281	8.61	2.30	2.75		65	W	EJ.F	100/107 108 109/110 111	67-1 68-1 69-1 70-1 71-1 72-1 73-1 74-1 75-1 76-1 77-1 78-1 79-1 80-1 81-1 82-1	正門		
306	SB	LI	57	-30871.135	-60655.022	8.71						EJ.F			正門		
307	SB	LI	57	-30870.166	-60657.196	8.72						EJ.F			正門		
308	SB	LI	57	-30870.141	-60656.231	8.71						EJ.F			正門		
309	SB	LI	57	-30870.163	-60656.822	8.8						EJ.F			正門		
310	SB	LI	57	-30870.091	-60656.026	8.93						EJ.F			正門		
311	SB	LI	57	-30882.061	-60661.806	9.15						EJ.F			正門		
312	SB	LI	58	-30877.528	-60660.733	8.14						EJ.F			正門		
313	SB	LI	58	-30875.861	-60660.641	8.76						EJ.F			正門		
314	SB	LI	50	-30897.115	-60699.277	9.61						EJ.F			正門		
315	SK	MC	42	-30928.555	-61008.079	9.14	1.65	1.52	0.58			EJ.F		290-1 2 291-1 3			
316	SK	MC	43	-30927.42	-61008.894	9.5	1.29(内 前部が)		0.41			EJ.F			230-1 2 231-1 3		
317	SK	MR	36	-30925.688	-61070.989	9.74	0.84	0.82	0.26			EJ.F					
318	SK	ME	41	-30925.721	-61019.471	7.55	3.08	2.25				EJ.F	212	224-1 2 225-1 2 3-4			
319	SK	LL	45	-30918.14	-60687.576	6.92	0.26(内)	0.40				EJ.F			227-1 2 3		
320	SK	LI	51	-30895.312	-60657.135	6.66	24.07(内)	0.37				EJ.F			227-1 2 3	遺土層位	
321	SK	LI	51	-30883.507	-60656.659	9.85	0.79	0.44(内)				EJ.F			227-1 2 3		
322	SK	MP	39	-30941.288	-61062.319	8.64	2.42	1.18				EJ.F	193	193-2	320-3 321-3 324-3 325-3 327		
323	SK	MQ	39	-30940.468	-61064.211	8.77	2.21	1.77				EJ.F	193	193-1 2	320-3 321-3 324-3 325-3 327		
324	SK	MQ	39	-30940.468	-61064.211	8.77	2.21	1.77				EJ.F	193	193-1 2	320-3 321-3 324-3 325-3 327		
325	SK	MQ	40	-30939.231	-61065.644	8.93	2.81	1.66				EJ.F	193	193-1 2	320-3 321-3 324-3 325-3 327		
326	SK	MQ	40	-30939.598	-61066.146	8.97	1.23(兼)	0.74(兼)				EJ.F	193	193-1 2	320-3 321-3 324-3 325-3 327		
327	SK	MQ	40	-30938.112	-61064.676	9.05	1.05(兼)	0.65(兼)				EJ.F	193	193-1 2	320-3 321-3 324-3 325-3 327		
328	SK	MQ	40	-30937.322	-61065.167	9.56	0.81(兼)	0.24				EJ.F	193	193-1 2	320-3 321-3 324-3 325-3 327		
329	SK	MQ	40	-30939.431	-61066.219	9.78	1.51(兼)	0.36(兼)				EJ.F	193	193-1 2	320-3 321-3 324-3 325-3 327		
330	SK	LL	46	-30924.792	-60961.831	6.78	0.37	0.44				EJ.F	213		228-3 229-3 230-3	遺土層位	
331	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
332	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
333	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
334	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
335	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
336	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
337	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
338	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
339	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
340	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
341	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
342	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
343	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
344	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
345	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
346	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
347	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
348	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
349	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
350	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
351	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
352	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
353	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
354	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
355	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
356	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
357	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
358	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
359	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
360	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
361	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
362	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
363	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
364	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
365	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
366	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
367	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
368	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
369	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
370	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
371	SK	MO	36	-30961.655	-61057.804	9.02	0.61	0.51				EJ.F			228-3 229-3 230-3	遺土層位	
372	SK	LL	47	-30890.658	-60687.265	7.36	11.47 (縦長)	0.56	0.04 D=0.04	1.17 1.32	112.94	104	88	W	EJ.F		227-4 5
373	SE	LP	41	-30934.196	-60681.908	6.65	2.36	1.76(内)		252	80	W	EJ.F	129/137	83 88-1 89-2 90-1 91-4 92-1 93-2 101-1 101-1 124-1 125-6 125-1 124-1 125-1 22-2 24-5	残高276p・0.81×0.74×0.75m	
374	SB	LM	48	-30905.612	-60970.648	9.48	8.33	8.30			23	E	EJ.F	198/199 200/201	201 202-1 2-3 204-1 1-2 3-4 5-6 205-1 2-3 3-4 5-6 206-1 2-3 4-5 207-1 2	残高350p(内)70p・0.82×0.30m 残高350p(内)60p・0.82×0.20m 残高350p(内)50p・0.38×0.11m 内-P14C・内高6.22m	
375	SK	MD	41	-30925.066	-61053.653	8.45	1.88	1.02			89.5	W	EJ.F	212	225-5 226-1 229-4		
376	SK	LN	49	-30902.334	-60927.374	9.24	3.73	0.45				EJ.F	201	201-5 202-1			
377	SK	LN	49	-30901.311	-60924.522	9.25	0.26	0.27				EJ.F					

第15表 江戸時代時代遺構一覧(5)

遺構番号	遺構種類	大塚ワット	大塚ワット	X	Y	Z	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	角度	東西	時代	緯度	第3分相図版番号	備考	
403	SD	LN	41	-30934.68	-60975.187	6.54	10.56(9)	0.81				江戸	126 128 129 130 131	83 88-1 89-2 90-1 91-4 94-4 95-1 96-1 97-2 98-2 98-3 99-4 99-1 100-1 101-2 101-3 101-4 102-1 102-2 103-1 103-2 104-1 104-2 111-1 111-2		
404	SD	LS	35	-30958.204	-60994.652	6.49	32.04 (総延長)	0.48				江戸	126 128 130	43-1 83 88-1 89-1 90-1 91-4 94-4 95-1 96-1 97-2 98-2 98-3 99-4 99-1 100-1 101-2 101-3 101-4 102-1 102-2 103-1 103-2 104-1 104-2 111-1 111-2 124-1 241-1	長い遺構の為計測は2か所に区切っている	
405	SD	LQ	35	-30957.84	-60987.098	6.22	29.44 (総延長)	0.84(内側)				江戸	128 129 131 132 133 134	44-1 83 84-2 85-2 88-1 89-2 90-1 91-4 94-4 95-1 96-1 97-2 98-2 98-3 99-4 99-1 100-1 101-2 103-2 104 104-1 104-2 104-3 107-1 108-1 108-2 109-1 109-2 110-1 110-2 110-3 111-1 111-2 124-1 241-1	枕木24cm 長い遺構の為計測は2か所に区切っている	
407	SK											江戸			床上瓦葺	
408	SP	LN	41	-30932.399	-60975.504	7.05	13.00	4.30	1			江戸	128 129	88-1 90-1 92 99-1 101-1	S/F53とテマリ、S/F68と区別	
409	SD	LO	43	-30924.043	-60976.654	8.21	63(9)	0.58				江戸	117	94-2 3		
410	SA	LO	43	-30927.437	-60976.766	8.16	3.30	0.30				江戸		90-1		
411	SK	MC	31	-30960.362	-61010.313	9.78	2.96	0.77(9)				江戸		94-3		
411	SK	MA	40	-30937.626	-61083.029	9.11	1.83(9)	0.84				江戸	215	231-2		
416	SD	LQ	39	-30942.868	-60986.651	7.05	30.59 (総延長)	1.43(溝)				江戸	216	106-1 3 112-1	長い遺構の為計測は3か所に区切っている	
421	SD	LO	41	-30935.022	-60975.28	7.18	3.06(9)	0.17	0.06	3.1		江戸	136			
425	SD	LN	43	-30957.78	-60974.696	7.77	3.46	0.65	0.19	69	W	江戸	217	88-1		
426	SD	LN	43	-30958.038	-60984.913	6.49	2.97	1.41	0.14	36	W	江戸	218	126-3 6		
427	SK	LN	45	-30919.124	-60975.282	6.49	1.42(9)	1.08				江戸	128			
428	SD	LN	41	-30932.053	-60973.063	6.61	3.00	1.30	0.33	35.5	E	江戸	128 129 130 131 132	30-1 30-2 88-1 114-1 2		
430	SA	LP	37	-30950.124	-60981.868	6.61						江戸	100 101 102	85-2 3		
431	SK	LP	41	-30935.947	-60980.841	6.78	2.13	1.30	0.51	35.5	E	江戸	214	126-5		
432	SD	LS	38	-30941.766	-60985.019	7.38						江戸	124	228 219 241 228-1 2 229-1		
433	SD	LS	39	-30942.911	-60995.950	7.79						江戸				
433	SD	LS	39	-30943.741	-60995.655	7.66						江戸				
433	SD	LS	40	-30938.438	-60990.796	7.85						江戸				
433	SD	LS	40	-30939.144	-60993.478	7.83						江戸				
433	SD	LS	40	-30939.911	-60991.545	7.81						江戸				
433	SD	LS	40	-30940.678	-60993.262	7.72						江戸				
433	SD	LS	40	-30941.445	-60996.011	7.69						江戸				
433	SD	MA	38	-30941.192	-61001.404	7.96						江戸				
433	SD	MA	39	-30940.139	-61001.436	8.16						江戸				
433	SD	MA	39	-30940.653	-61003.413	8.01						江戸				
433	SD	MA	39	-30941.259	-61002.971	8.15						江戸				
433	SD	MA	39	-30941.867	-61002.945	8.1						江戸				
433	SD	MA	39	-30942.481	-61003.359	8.09						江戸				
433	SD	MA	40	-30939.657	-61001.186	8.31						江戸				
433	SD	MA	40	-30938.398	-61000.627	8.46						江戸				
433	SD	MA	41	-30935.811	-61006.164	8.17						江戸				
433	SD	MB	39	-30940.011	-61005.339	8.39						江戸				
433	SD	MB	39	-30940.412	-61006.12	8.4						江戸				
433	SD	MB	39	-30940.668	-61006.728	8.35						江戸				
433	SD	MB	39	-30941.061	-61007.465	8.36						江戸				
433	SD	MB	40	-30939.171	-61004.377	8.5	0.88	0.01		62	W	江戸			断面12cm×9.6cm	
433	SD	MB	40	-30937.486	-61004.829	8.48						江戸				
433	SD	MB	40	-30940.653	-61006.018	8.45						江戸				
433	SD	MB	40	-30938.101	-61006.847	8.55						江戸				
433	SD	MB	40	-30938.635	-61005.018	8.45						江戸				
433	SD	MB	40	-30939.653	-61005.018	8.45						江戸				
433	SD	MB	40	-30939.821	-61004.942	8.4						江戸				
434	SE	LT	38	-30947.791	-60996.876	7.57	6.80(溝)	3.38(穴)			64	W	江戸	208 209	214 216-1 2 217-1 2 218-1 2 219 220-1 228 241-1	
437	SD	LI	52	-30888.358	-60955.105	6.22	9.44(9)	0.77				江戸	205 206 207	145-1 2 25 2 25 3 25 3 25 3	長い遺構の為計測は3か所に区切っている	
441	SK											江戸			瓦葺	
442	SD	LQ	40	-30936.836	-60984.737	6.78	5.27(9)	0.50	0.16	64	W	江戸	218	113-1 2 3		
443	SD	LP	40	-30938.921	-60981.713	6.81	5.30(9)	0.43	0.17	72	W	江戸	218	84-2 113-1 2 3		
444	SD	LP	40	-30939.287	-60983.811	6.66	5.21(9)	0.28	0.36	72.5	E	江戸	218	113-1 2		
446	SD	LP	42	-30929.452	-60984.777	7.66	5.82(9)	0.71(溝)				江戸				
447	SD	LP	40	-30957.862	-60982.061	7.01	4.86(9)	0.36		67.5	W	江戸	218			
449	SD	LP	39	-30940.866	-60980.217	6.53	5.37(9)	0.55	0.4	66	W	江戸	218	113-1 2		
450	SK	LP	41	-30939.081	-60983.154	6.94	0.65(9)	0.56	0.09	24	W	江戸	215			
453	SD	LI	40	-30935.582	-60977.735	6.42	1.36	0.86				江戸	217		SH12の調査	
466	SD	MC	35	-30965.076	-61010.803	7.48	4.34	0.31				江戸	219	15-1 83-2 84-2 240-1 241-1		
467	SD	MA	36	-30953.465	-61002.994	7.51	8.66	2.76		74	W	江戸				
468	SD	MA	36	-30954.269	-61003.667	7.45	4.91 (総延長)	0.40		60	E	江戸				
469	SD	MB	36	-30965.083	-61006.122	7.55	7.96 (総延長)	0.70				江戸				計測5箇所

第16表 江戸時代時代遺構一覧(6)

発掘 番号	遺構 種類	大穴 形状	大穴 ワット	X	Y	Z	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	角度	東西	時代	詳細	第3分層図回番号	備考
470	SD	MA	36	-3095.477	-61003.032	7.44	3.00	0.24	0.15	117	E	江戸		240-1 241-1	計測4箇所
471	SN	MB	35	-3095.052	-61005.555	7.22	0.68	0.51	-	62	W	江戸			
472	SN	MB	35	-3095.031	-61005.081	7.97	0.64	0.51	-	64	W	江戸			
473	SN	MB	35	-3095.203	-61007.199	7.49	0.62	0.53	-	64.5	W	江戸			
474	SN	LI	36	-3093.231	-60997.114	7.26	0.00	0.38	-	59	W	江戸		259-3 261-1	
475	SN	MB	35	-3095.785	-61007.853	7.41	0.50	0.58	-	102	W	江戸		15-1	
476	SN	LI	37	-3094.048	-60992.656	7.55	0.00	0.42	0.2	20	W	江戸		259-3 261-1	
477	SN	MB	35	-3095.089	-61004.999	7.41	0.67	0.50	0.2	30	E	江戸			
478	SN	MB	35	-3096.192	-61001.81	9.21	1.34	0.42	0.0	90	E	江戸		240-3	
479	SN	MB	35	-3095.156	-61005.457	7.60						江戸		240-3	
479	SN	MB	37	-3090.239	-61007.734	7.71	1.20					江戸		236-6	
480	SN	MA	37	-3095.904	-61003.422	7.61	0.32	0.11	-	30	W	江戸			
482	SK	MP	35	-3096.149	-61022.455	9.19	1.68	2.00	1.15	0.5	E	江戸	215		
486	SN	LI	37	-3094.286	-60999.852	7.08	2.23	0.17				江戸		261-1	
487	SD											江戸		240-2 241-1	
488	SD											江戸			
489	SD											江戸			
490	SD											江戸			
491	SD											江戸			
492	SN											江戸		240-4	
493	SB	LR	35	-3095.289	-60988.081	6.22	2.61	2.17				江戸	120	43-1 44-1 83 86-1 1-2 87-1 2-3 3 111-1	随門S1404 p 1
494	SB	LQ	36	-3093.513	-60987.189	6.33	2.26	2.19				江戸	120	43-1 44-1 83 86-1 1-2 87-1 2-4 6 111-1	随門S1404 p 1
495	KAP	LR	36	-3095.535	-60990.134	1.81	2.29	2.15				江戸			随門S1404 p 2
496	KAP	LR	37	-3091.281	-60990.968	3.09	2.26	2.03				江戸			随門S1404 p 2
497	SD	LO	41	-3093.597	-60977.272	6.48	2.54	1.00		31	E	江戸	128 129 131 132		
498	SD	LO	41	-3093.786	-60977.107	6.59	0.98	0.40		182 249	W	江戸	128 129 131 132		計測2箇所
499	SN	LN	44	-3091.539	-60972.036	8.33						江戸			随門
500	SD						1.73			30	E	江戸	106 113		随門
503	SB	LJ	55	-3087.885	-60956.517	8.51	1.15	6.70		70	W	江戸	109 114		随門 元S100(分)随門跡
504	SB						5.95	1.85		22	E	江戸	106 116		正門
507	SB						1.80	1.80		69	W	江戸	108 117		正門
508	SB						5.30	1.90		26.5	E	江戸	106 117		正門
509	SB						3.35	2.35		23	E	江戸	106 117		正門
510	SB						7.20	2.00		33	E	江戸	106 117		正門
511	SN	LI	34	-3090.092	-60999.156	8.6	2.86	1.69		21	E	江戸	109 119		正門付耳門建物
513	SN	MB	62	-3085.079	-61087.033	10.698	4.31	1.48		30	E	江戸	146		
514	SA	MA	60	-3082.523	-61043.601	10.143	3.67	2.1		21	E	江戸	146		
515	SN	MB	58	-3096.418	-61018.131	10.267	6.03	3.80		62	W	江戸	112		
516	SB	MP	38	-3086.901	-61022.366	10.749	1.89	1.89		62	W	江戸	118		
517	SB	MP	39	-3082.474	-61014.099	10.061	7.11	2.58		24	E	江戸	148		
519	SB	MP	44	-3080.755	-61051.574	10.181	6.69	3.90		25	E	江戸	149		
520	SA	MA	40	-3090.197	-61011.553	9.78	11.53	3.90		25	E	江戸	149		
522	SN	MI	41	-3093.194	-61038.729	9.659	8.14	6.01		22	E	江戸	168		
523	SA	MA	40	-3092.828	-61038.668	10.714	9.21	6.01		68	W	江戸	170		
524	SA	MQ	40	-3093.029	-61044.31	10.26	13.90	4.0		62	W	江戸	170		
526	SN	MP	37	-3094.247	-61061.991	9.21	5.53	4.91		73	W	江戸	169		
527	SA	MG	37	-3098.18	-61025.19	9.861	10.71	3.90		23	E	江戸	170		
528	SB	MP	36	-3094.415	-61026.051	9.95	3.84	4.01		12	E	江戸	168		
531	SD						-	-	-	-	-	江戸			
533	SB	LN	30	-3099.992	-60973.017	9.08	4.02	4.07		29	E	江戸	202		江戸(家裏)水堀上土層→F土層
534	SB	LN	30	-3098.821	-60973.591	10.01	6.30	3.84		29	E	江戸	202		
536	SA	LI	49	-3093.125	-60971.252	10.14	1.72	1.72		27	E	江戸	200		
537	SA	LI	48	-3090.138	-60970.521	9.1	6.78	3.01		31	E	江戸	200		
540	SA	LI	45	-3078.269	-60967.559	6.658	4.44	2.0		20	E	江戸	202		
543	SB	LP	32	-3092.979	-60981.479	7.48	2.07	2.03		61	W	江戸	142		随門
544	SB	LP	40	-3098.113	-60980.531	6.96	3.78	3.46		25	E	江戸	124		
545	SB	LP	39	-3094.171	-60984.124	6.74	6.82	3.28		26	E	江戸	125		
546	SA	LI	37	-3094.315	-60983.674	6.93	2.1	2.1		24	E	江戸	125		
600	KAP	MI	62	-3085.164	-61039.541	6.729	1.03	0.92	0.94	70	W	江戸	142	143-4 5	
602	SN	MI	62	-3085.185	-61038.586	7.814	15.30	1.10	0.2	41	W	江戸	142	141-2 3	
603	SN	MB	62	-3084.618	-61032.367	7.45	1.82	0.71	0.24	61	W	江戸	142	141 143 144 145	
604	SN	MI	62	-3084.897	-61037.314	7.522	1.72	0.82	0.12	65	W	江戸	142	141 143 144	
605	SA	MI	62	-3084.897	-61037.314	7.522	1.72	0.82	0.12	65	W	江戸	142	141 143 144	
606	SE	MI	62	-3085.098	-61038.801	5.997	4.16	1.92	3.64	61	W	江戸	142	141-4 143-1 143-2 3-4	
607	SE	MK	62	-3083.321	-61043.028	4.872	1.20	1.03	3.39	62.5	E	江戸	138 140 142	142 138-1 2-3 4-5	
608	SD	MI	61	-3085.472	-61028.709	7.426	7.48	0.38	0.12	38	E	江戸	142	143-1 2-3	
609	SN	MI	61	-3085.016	-61039.201	7.15	2.04	1.62	0.56	18.5	E	江戸	142	141 142 143 144	
610	SN	MI	61	-3085.016	-61039.201	7.15	2.04	1.62	0.56	18.5	E	江戸	142	141 142 143 144	
611	SK	MP	60	-3085.361	-61043.425	7.086	0.94	0.78	0.38	51.5	W	江戸	144	142-4	
612	SE	MK	60	-3085.952	-61042.216	6.818	1.42	1.22	2.42	79	E	江戸	138 139	127 139-1 2-3 4-5	
613	SK	MK	62	-3085.176	-61041.821	6.746	1.36	1.35	0.56	41	E	江戸	144	142-5 6	
614	SA	MI	61	-3082.904	-61045.471	5.361	1.52	0.82		127	W	江戸	144	142-7 8	
615	SA	MI	61	-3082.904	-61045.471	5.361	1.52	0.82		127	W	江戸	144	142-7 8	
616	SA	MI	61	-3082.904	-61045.471	5.361	1.52	0.82		127	W	江戸	144	142-7 8	
617	SE	MK	62	-3084.975	-61044.302	6.913	1.80	1.50	0.8	-	-	江戸	144	142-7 8	
621	SE	MK	62	-3084.637	-61040.7	7.031	-	-	-	-	-	江戸	142	141-1	
2888	SN	LP	43	-30925.339	-60981.44	7.22	3.32	1.97		36	E	江戸	122 123 128 129	83 90-3 91-1 2-3 96-1 2-4	随門

第17表 近代遺構一覧

発掘 番号	遺構 種類	大穴 形状	大穴 ワット	X	Y	Z	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	角度	東西	時代	詳細	第3分層図回番号	備考
17	SN	LI	63	-3084.607	-60983.05	10.276	7.29	1.11	1.02	28	E	近代		248 249 250	本宮堂の母体4基 明治の築直営及ロープ 塔の付直営
89	SN	LI	36	-3087.127	-60951.572	8.722						近代	220	250-2 3-4 5	

5 江戸時代の遺物

2次調査では、23基の土坑堆積土等を篩い掛けし、木製品及び食料残渣を含む自然遺物の回収に努めた。現地では5mmメッシュによる水篩いを行い、重量・体積を減らした上で事務所を持ち帰り再度篩い分けた。室内に持ち帰った重量は約7,962kg、土嚢袋5,056袋分である。

1 陶磁器・土器

陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問である大橋康二氏に同定していただいた。令和4・5（2022・2023）年度にそれぞれ5日づつ合計10日間で2075点である。2075点の内訳は磁器1533点、陶器530点、その他12点である。

遺構ごとに出土陶磁器・土器の年代を破片数で示した（付表7）。複数時期にまたがる場合は案分した。年代の傾向として1600年代に偏った傾向を示す。1700年代第3・4四半期が非常に少なく、1800年代に若干増加するが多いとは言えない。

付表7には、陶磁器の帰属年代を出土量の多い順に、(多)赤→橙→黄→白(少)と色分けした。出土量多寡の基準は、中央値よりも多い資料に着色した。

比較資料とした貝風炉は未だ編年が定まっていないが、山村（2009）が出現期の下限を18世紀後半と分析しているのでこれに従う。本遺跡の出土資料が反復利用されたゴミ穴の出土品である事を考えると、陶磁器の年代と廃棄年代が合致しない可能性が高い。陶磁器の生産年代では1600年代の資料が多いが、貝風炉出土の有無で18世紀後半に攪乱されているかが判明する。

肥前産磁器碗の直径と高さの変化を50年ごとに追ったのが第225・226図である。直径を横軸、高さを縦軸にとって散布図とした。概ね一定の線形分布を示すことから、近似直線を求め傾きと切片を示した。1600年代前半の傾き0.29から1700年代後半の0.55まで順次傾きが強く変化するが1800年代にいたって0.33と緩くなる。切片については1600年代前半の3.7から1700年代後半の-0.5まで切片は小さくなり、1800年代に2.14と増大する。

1600年代から1700年代の傾き・切片の変化は、器高さが直径に対して低くなり、1800年代には再度器高が直径に対して高くなる。切片の変化も同様で、1600年代前半と後半では1.6cm低くなり、1800年代には再び高くなる。

皿では、1600年代前半から後半にかけて傾きが弱く、切片は増加するのでより平べったい形態に変化している。そして1700年代前半も同様の傾き・切片となって安定するが、1700年代後半から傾きが強くなりそのため切片は減少する。つまり再び直径に対して高さが高い深皿のような器形となる。

碗と皿では傾き・切片の変動時期が1時期ずれるが、高さが直径に対して高い器形から、低く変化した後で、再び高くなる方向へ変化する点が共通している。

2 木製品

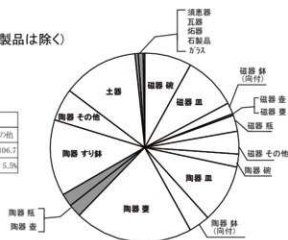
各器種ごとの分類図を掲げた（第239～251図）。出土品の詳細は第2・4分冊に示した。使用樹種はスギが多いものの、アスナロの比率も高い。特に折敷についてはアスナロが卓越して使われている。スギとアスナロは材としては大変似ており、顕微鏡下での同定が必須である。

3 金属製品

SK161から巻頭釘がまとまって出土した。頭部の状態が良いものを選んで巻き方の違いを分類した（第254図、第30～32表）。巻き方に対する頭部の傾きを比較したところ、左右の傾きはほぼ等しいことが分かった。釘職人の製作時の癖よりも大工による打ち込み時の傾きと考えることが出来る。

第21表 遺構内出土遺物集計（重量 木製品、金属製品は除く）

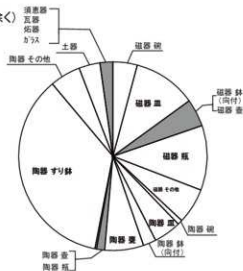
	総計							
	竈	皿	鉢(向付)	壺	甗	瓶	その他	
遺構内 合計(g)	40735.7	45837.3	10026.3	423.1	604.6	13789.3	18887.7	
百分率(%)	8.1%	9.0%	2.2%	0.1%	0.1%	2.8%	4.0%	
	陶器							
	竈	皿	鉢(向付)	壺	甗	瓶	すり鉢	その他
遺構内 合計(g)	11952.0	50267.2	17099.4	191743.7	19411.2	11239.0	65617.0	27106.7
百分率(%)	2.2%	10.1%	3.4%	30.4%	1.8%	2.3%	13.2%	5.3%
	土器							
	甗	壺	鉢	瓶	石製品	すり鉢	その他	
遺構内 合計(g)	45339.7	2349.0	37985.2	1067.2	31.4	34.2		
百分率(%)	13.2%	0.5%	0.9%	0.2%	0.0%	0.0%		
合計(g)	498152.4	130314.6	295027.1	22810.7				
百分率(%)	100.0%	26.6%	58.8%	14.6%				



①遺構内出土遺物集計（重量 木製品、金属製品は除く）

第22表 遺構外出土遺物集計（重量 木製品、金属製品は除く）

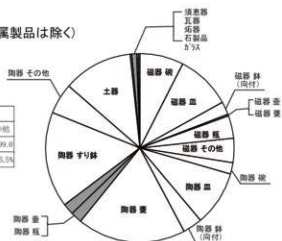
	総計							
	竈	皿	鉢(向付)	壺	甗	瓶	その他	
遺構外 合計(g)	2377.6	8481.5	3563.0	0	58.4	8663.5	4872.2	
百分率(%)	4.2%	12.2%	4.6%	0.0%	0.1%	11.1%	6.6%	
	陶器							
	竈	皿	鉢(向付)	壺	甗	すり鉢	その他	
遺構外 合計(g)	691.2	3641.1	1805.2	5075.8	1193.3	275.7	27878.0	4192.3
百分率(%)	0.8%	3.1%	2.3%	6.5%	1.3%	0.4%	35.7%	5.0%
	土器							
	甗	壺	鉢	瓶	石製品	すり鉢	その他	
遺構外 合計(g)	2747.6	56.4	33.7	5.7	0	1552.2		
百分率(%)	3.5%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%		
合計(g)	78074.0	29017.2	44661.8	4395.0				
百分率(%)	100.0%	38.7%	55.6%	5.0%				



②遺構外出土遺物集計（重量 木製品、金属製品は除く）

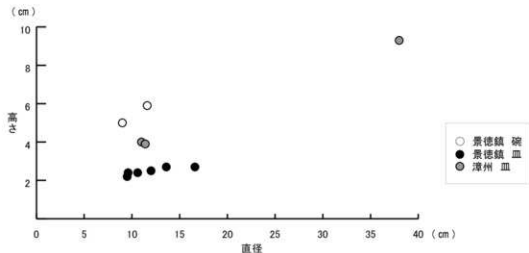
第23表 遺構内外出土遺物集計（重量 木製品、金属製品は除く）

	総計							
	竈	皿	鉢(向付)	壺	甗	瓶	その他	
遺構内外合計(g)	44113.3	54319.4	13589.3	423.1	664.0	22828.3	23799.9	
百分率(%)	7.6%	9.4%	2.5%	0.1%	0.1%	3.7%	4.8%	
	陶器							
	竈	皿	鉢(向付)	壺	甗	すり鉢	その他	
遺構内外合計(g)	11653.2	54408.2	18895.6	100818.7	11604.5	11514.7	93495.0	31299.0
百分率(%)	2.0%	9.2%	3.2%	18.5%	1.0%	2.0%	16.2%	5.5%
	土器							
	甗	壺	鉢	瓶	石製品	すり鉢	その他	
遺構内外合計(g)	68277.7	2405.4	3831.9	1072.9	31.4	1586.4		
百分率(%)	11.8%	0.4%	0.7%	0.2%	0.0%	0.3%		
合計(g)	576226.4	150331.8	339688.9	77205.7				
百分率(%)	100.0%	28.2%	58.4%	13.4%				

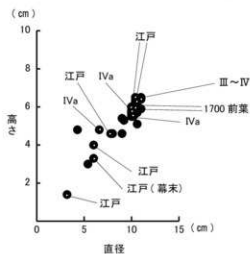


③遺構内外出土遺物集計（重量 木製品、金属製品除く）

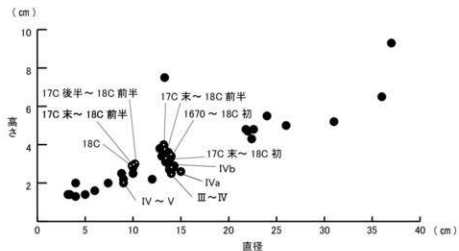
第223図 出土遺物集計（重量 木製品、金属製品除く）



①中国磁器散布図

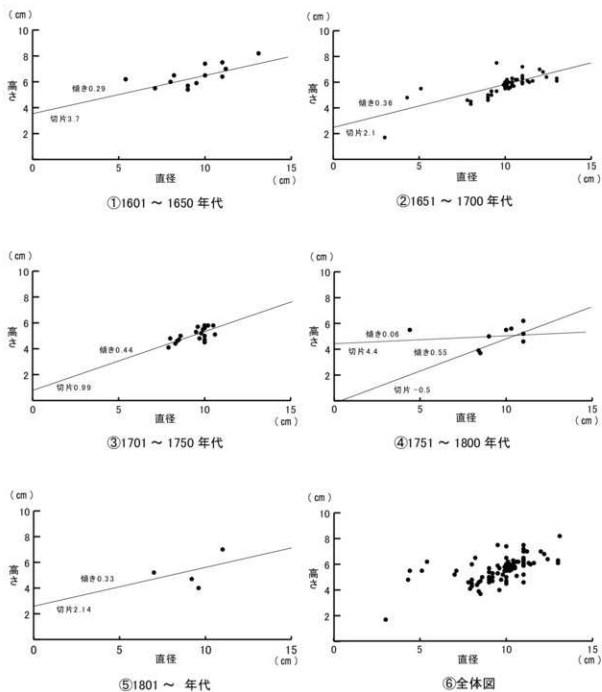


②SK104 肥前産磁器碗の散布図

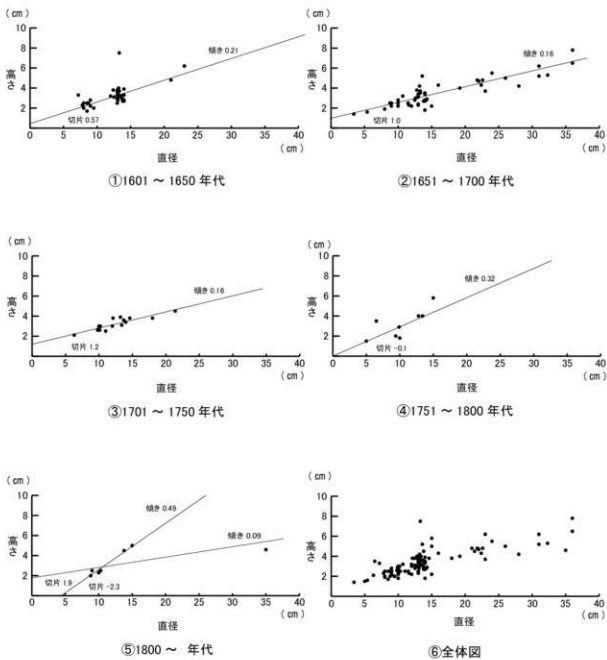


③SK104 肥前産磁器皿の散布図

第 224 図 磁器法量散布図



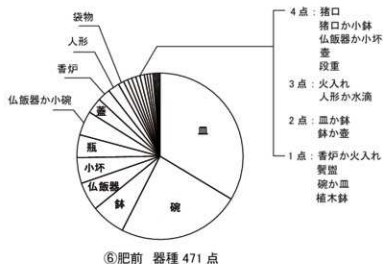
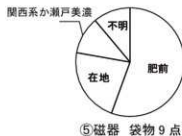
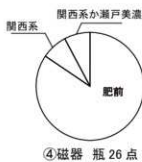
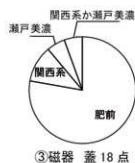
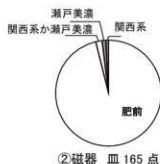
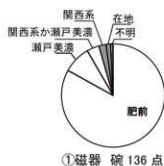
第 225 図 肥前産磁器碗法量散布図



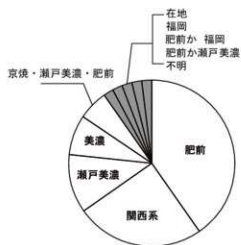
第 226 図 肥前産磁器皿法量散布図

第24表 報告書掲載分磁器の産地別個数（中国陶磁を除く）

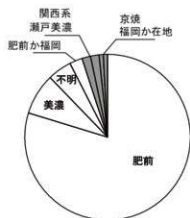
器種	肥前	瀬戸美濃	関西系	在地	関西系か瀬戸美濃	関西系か在地	不明	合計(点)
碗	113	12	3	2	5		1	136
皿	159	2	1		3			165
小坏	23							23
猪口	4							4
猪口か小鉢	4							4
蓋			1		1			2
鉢	31	2						33
皿か鉢	2							2
鉢か壺	2							2
壺	14	1	2		1			18
茶こぼしの目皿		1						1
香炉	12							12
火入れ	3							3
香炉か火入れ	1							1
仏飯器	26							26
仏飯器か小碗	22							22
仏飯器か小坏	4							4
瓶	22		2		2			26
壺	4							4
漆物	5			2	1		1	9
土瓶				2				2
土瓶か急須						1		1
餐盤	1							1
段重	4							4
碗?鉢?		1					1	2
碗か皿	1							1
蓋物					1			1
植木鉢	1							1
人形	10							10
人形か水滴	3							3
防衛食器							3	3
合計	471	19	9	6	14	1	6	526



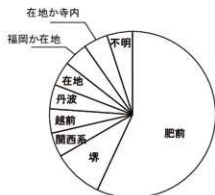
第227図 磁器 産地別



①陶器 碗 52点



②陶器 皿 124点



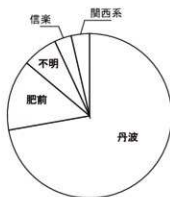
③陶器 擂鉢 21点



④陶器 瓶 14点

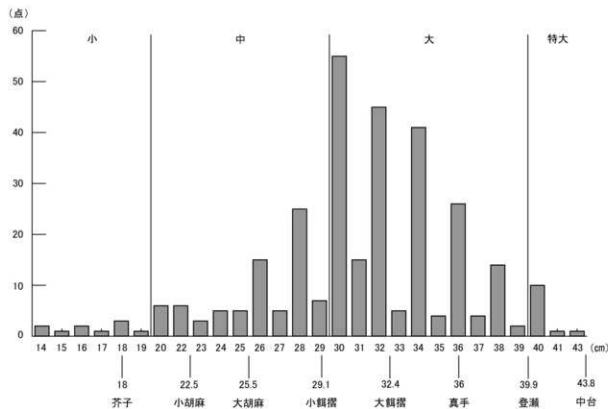


⑤陶器 壺 6点



⑥陶器 鉢 29点

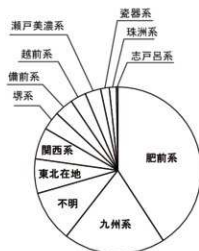
第228図 陶器 産地別



① 播鉢 口縁直径分類計数表

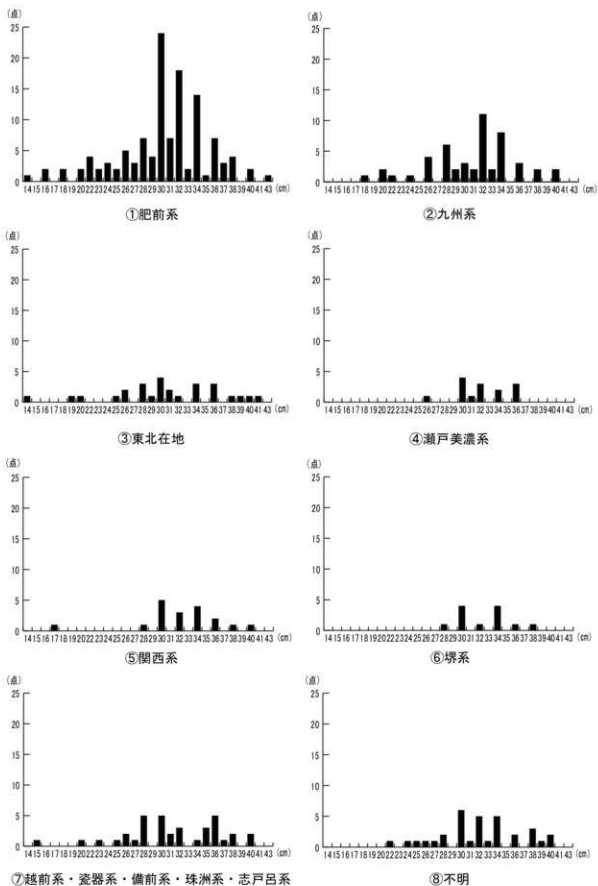
第 25 表 播鉢産地別数量集計表

産地	個数(点)	百分率	重量(g)	百分率
肥前系	416	41.1%	36166	38.7%
九州系	198	19.5%	17071.8	18.3%
東北在地	68	6.7%	4635	5.0%
瀬戸美濃系	30	3.0%	1732	1.9%
関西系	62	6.1%	6628	7.1%
堺系	36	3.6%	3024	3.2%
備前系	36	3.6%	2202	2.4%
越前系	33	3.3%	3775	4.0%
瓷器系	17	1.7%	2854	3.1%
珠洲系	13	1.3%	512	0.5%
志戸呂系	2	0.2%	106	0.1%
不明	102	10.1%	14789.5	15.8%
合計	1013	100%	93495.3	100%



② 播鉢産地別数量

第 229 図 播鉢集計表



第230図 播鉢 産地別 口縁直径棒グラフ

第26表 大橋氏確認 2075点における有田と波佐見

①2075点中

材質	数量(点)
磁器	1529
陶器	534
瓦器	4
土製品	2
石器	6
合計	2075

②磁器1529点中

産地	数量(点)
肥前	1283
瀬戸美濃	34
関西系	23
在産	6
関西系か瀬戸美濃	15
関西系か在産	2
中国	160
不明	6
合計	1529

③江戸時代

国産 産地	数量(点)
肥前	672
有田	575
波佐見	36
合計	1283

④中国産 産地別数量

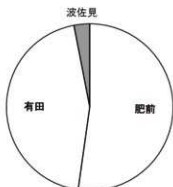
中国産 産地	数量(点)
景徳鎮	106
漳州	51
龍泉	3
合計	160

⑤有田産 器種内訳

有田	数量(点)
碗	174
皿	227
鉢(向付)	44
壺	6
瓶	15
蓋	16
小坏	9
猪口	21
段重	3
袋物	8
香炉	6
合子	3
蟹盥	1
水漬	1
把手	1
人形	4
牛形	2
鳥形	2
唐子	1
その他	31
合計	575













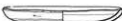






⑥波佐見産 器種内訳

波佐見	数量(点)
碗	5
皿	29
鉢(向付)	2
合計	36

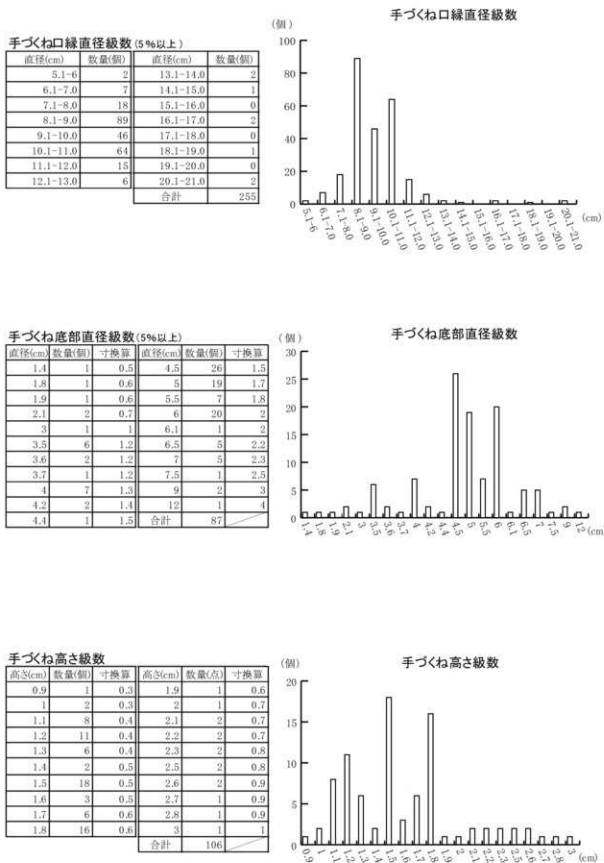


①磁器 江戸時代 産地比率

第231図 有田と波佐見

分類	手づくね成形		ロクロ成形	
大 φ16.5 cm 以上	外 面 バ ン ド	2 段差凸  第1図2		
中 φ16.5 cm 未満 ↓ φ9.5 cm	外 面 バ ン ド	1 沈線  第1図5	2 段差凸  第1図4 底部凹み	4 ナデ・削り  第1図8
		 第2図3	 第3図11	 第1図9
		3 「く」の字  第1図10	4 ナデ・削り  第1図3 底部凹み	なし
		なし  第2図1 指圧ドーナツ	 第4図3	 第2図13
小 φ9.5 cm 未満	外 面 バ ン ド	1 沈線  第4図4 底部凹み	2 段差凸  第4図6	
		 第4図5	 第5図5 底部凹み	
		3 「く」の字  第4図9	4 ナデ・削り  第4図11	
		なし  第5図1		

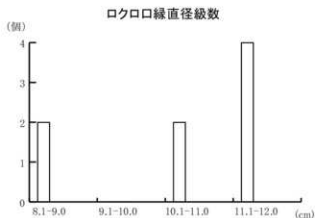
第232図 かわらけの分類



第 233 図 かわらけ法量度数分布 (1)

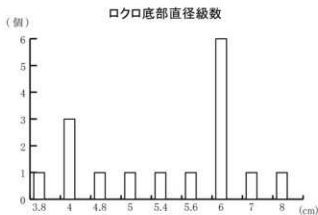
ロク口縁直径級数

直径(cm)	数量(個)
8.1-9.0	2
9.1-10.0	0
10.1-11.0	2
11.1-12.0	4
合計	8



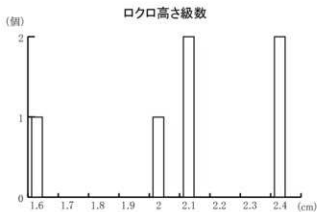
ロク口底部直径級数

直径(cm)	数量(個)	寸換算
3.8	1	1.3
4	3	1.3
4.8	1	1.6
5	1	1.7
5.4	1	1.8
5.6	1	1.9
6	6	2
7	1	2.3
8	1	2.7
合計	16	



ロク口高さ級数

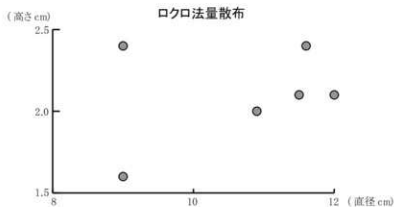
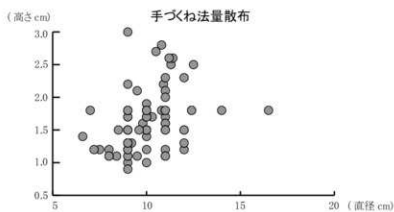
高さ(cm)	数量(個)	寸換算
1.6	1	0.5
1.7	0	0.6
1.8	0	0.6
1.9	0	0.6
2	1	0.7
2.1	2	0.7
2.2	0	0.7
2.3	0	0.8
2.4	2	0.8
合計	6	



第234図 かわらけ法量数分布(2)

手づくね法量散布(88個)

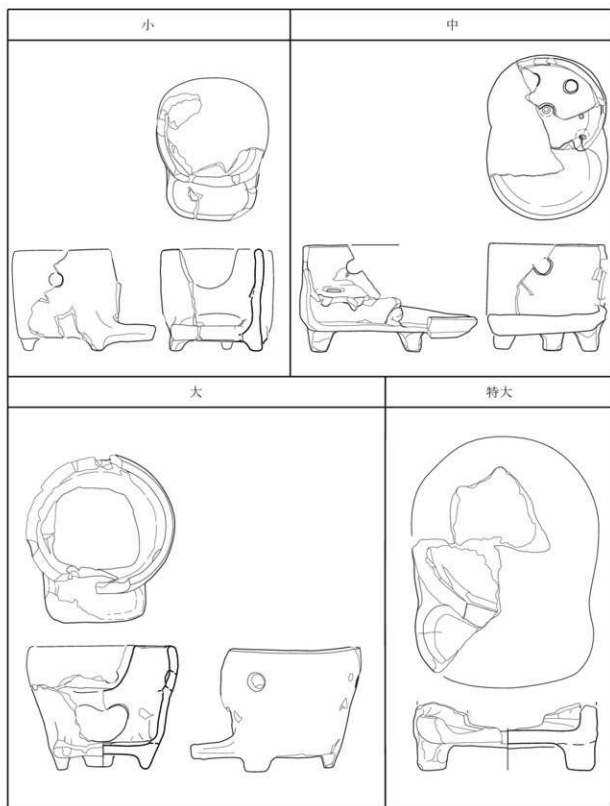
口縁直径(cm)	高さ(cm)	口縁直径(cm)	高さ(cm)	口縁直径(cm)	高さ(cm)	口縁直径(cm)	高さ(cm)
6.6	1.4	9	1.5	10	1.5	11	1.5
7	1.8	9	1.5	10	1.5	11	1.6
7.2	1.2	9	1.5	10	1.5	11	1.6
7.5	1.2	9	1.5	10	1.5	11	1.7
8	1.1	9	1.5	10	1.5	11	1.8
8	1.1	9	1.5	10	1.5	11	1.8
8	1.2	9	1.7	10	1.7	11	2
8.4	1.1	9	1.7	10	1.7	11	2.1
8.5	1.5	9	1.8	10	1.8	11	2.3
9	0.9	9	1.8	10	1.8	11.2	2.6
9	1	9	1.8	10	1.8	11.3	2.5
9	1.1	9	1.8	10	1.8	11.4	2.6
9	1.1	9	2.2	10	1.9	12	1.2
9	1.2	9	3	10.3	1.7	12	1.3
9	1.2	9.2	1.3	10.5	2.7	12	1.5
9	1.2	9.5	1.1	10.8	1.8	12	1.5
9	1.2	9.5	2.1	10.8	2.8	12	2.3
9	1.2	9.6	1.5	10.9	2.2	12.4	1.8
9	1.3	9.8	1.6	11	1.1	12.4	1.8
9	1.3	10	1	11	1.1	12.5	2.5
9	1.3	10	1.2	11	1.2	14	1.8
9	1.3	10	1.4	11	1.5	16.5	1.8



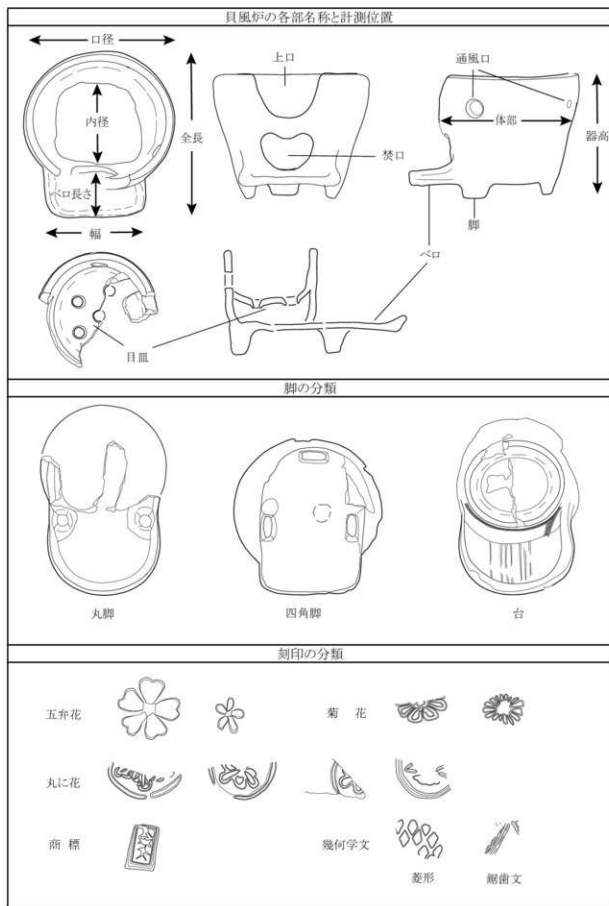
ロクロ法量散布(6個)

口縁直径(cm)	高さ(cm)
9	1.6
9	2.4
10.9	2
11.5	2.1
11.6	2.4
12	2.1

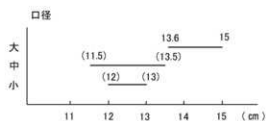
第 235 図 かわらけ法量度数分布 (3)



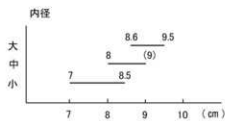
第 236 図 貝風炉分類図 (1)



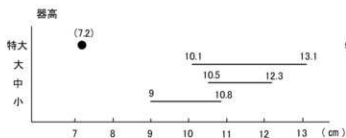
第 237 図 貝風炉分類図 (2)



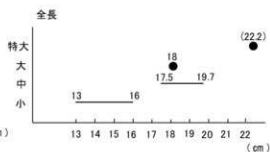
①口径



②内径



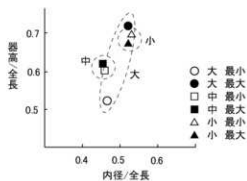
③器高



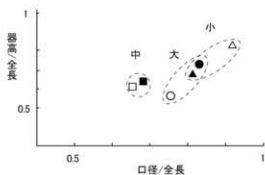
④全長

第27表 貝風炉計測値(最大・最小)

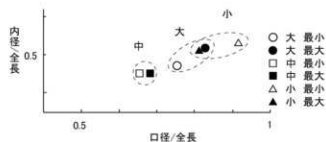
	口径/全長		内径/全長		器高/全長	
	最小	最大	最小	最大	最小	最大
特大	-	-	-	-	-	0.32
大	0.76	0.83	0.48	0.53	0.56	0.73
中	0.66	0.69	0.46	0.46	0.60	0.62
小	0.92	0.81	0.54	0.53	0.69	0.68



⑤法量散布図(1)

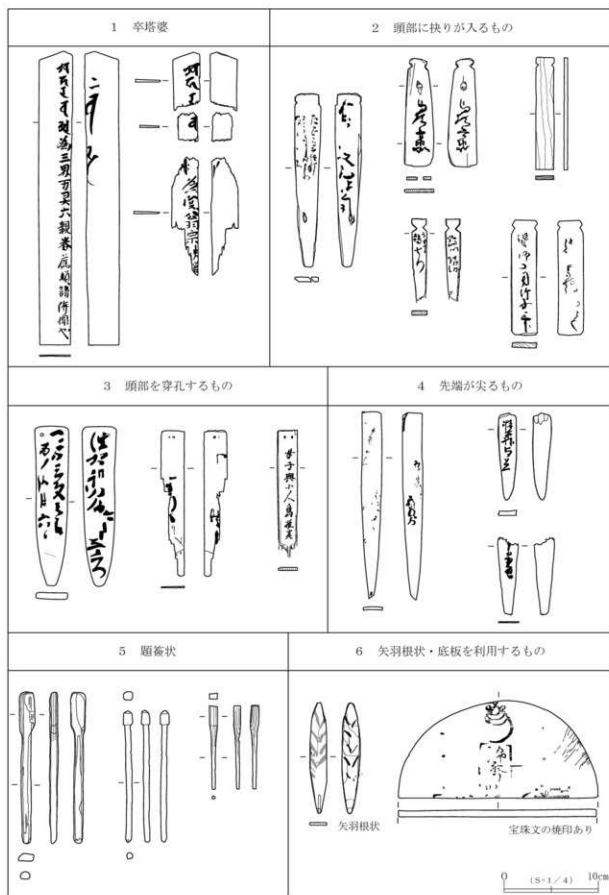


⑥法量散布図(2)

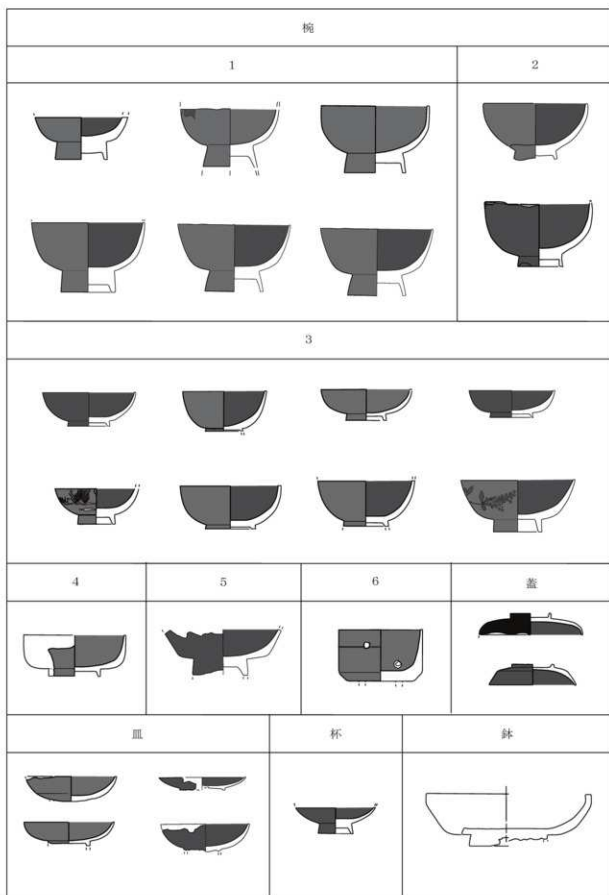


⑦法量散布図(3)

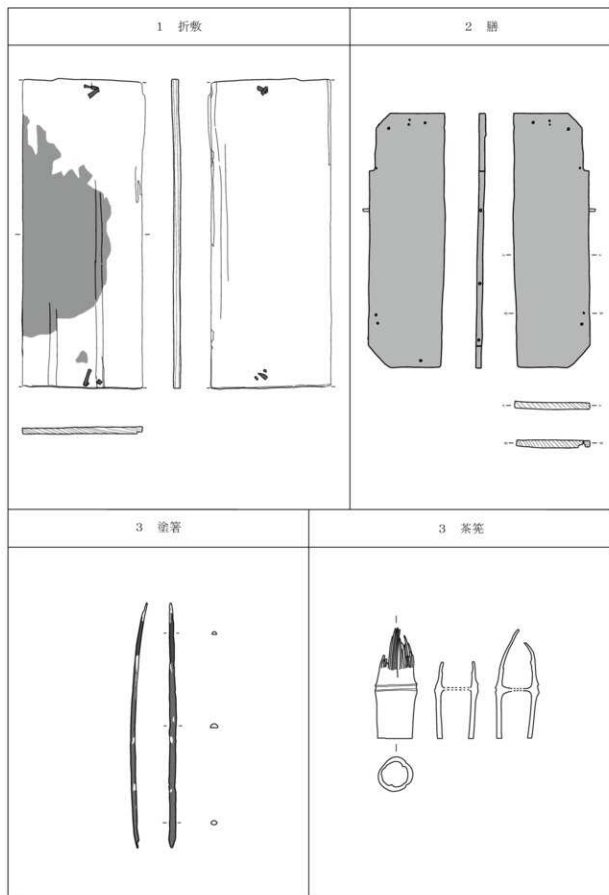
第238図 貝風炉法量分析



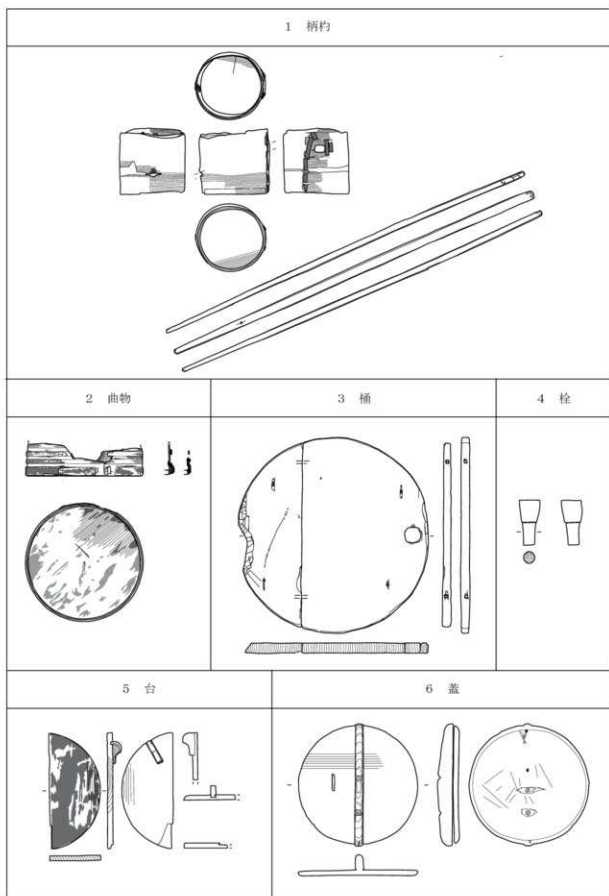
第 239 図 木簡分類図



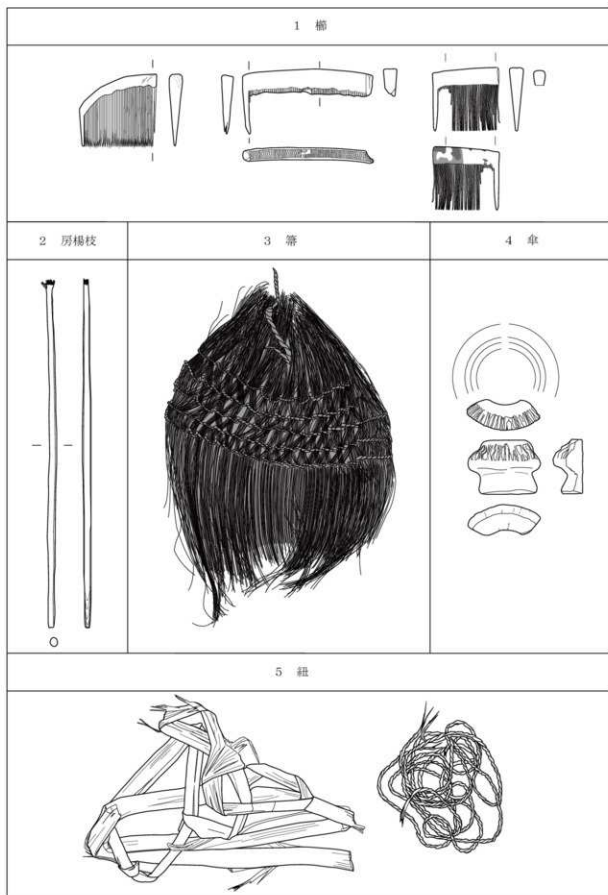
第 240 図 碗分類図



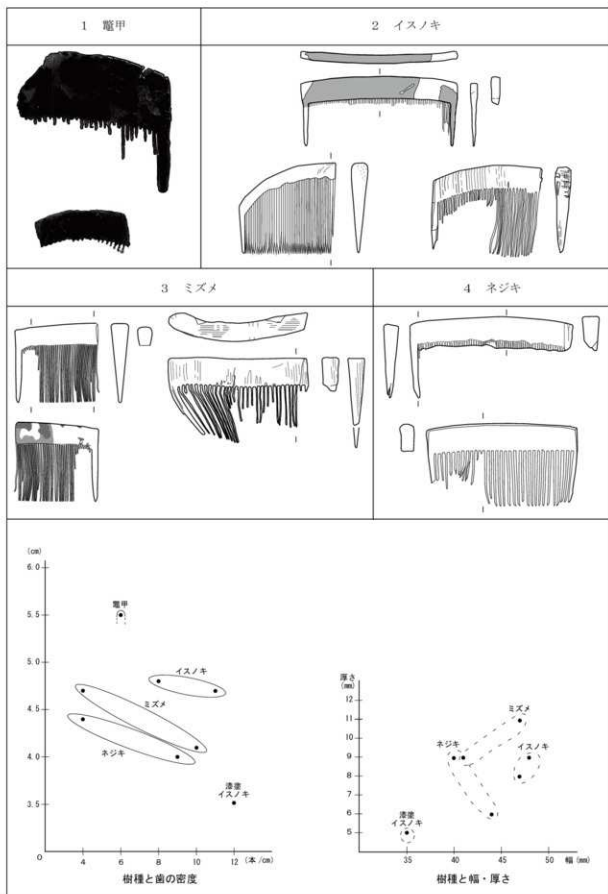
第 241 図 食器分類図



第 242 図 容器分類図



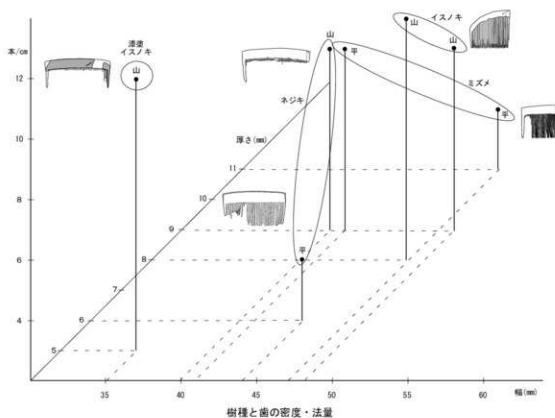
第 243 図 衣分類図



第 244 図 櫛分類図

第28表 櫛の材種と加工の特徴

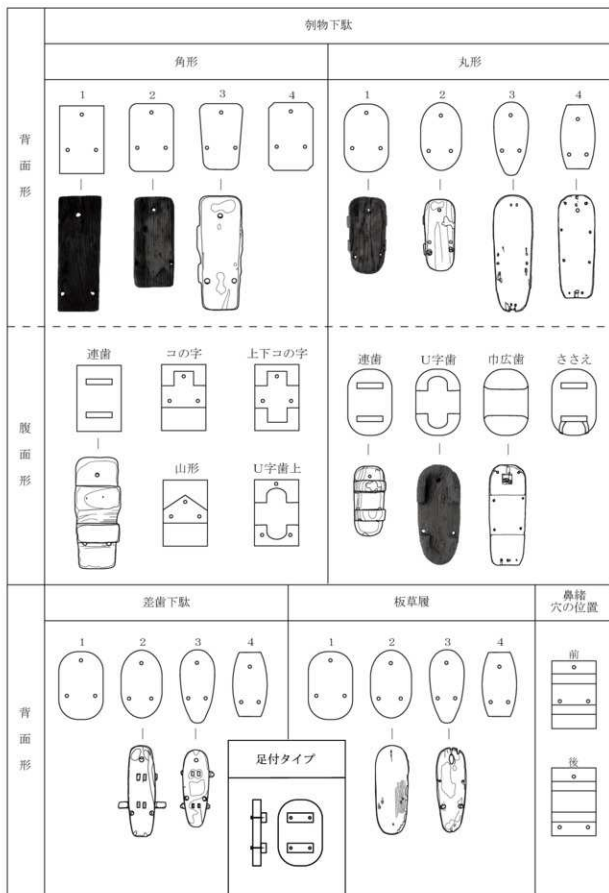
遺構名	棒図	番号	長さ	幅(cm)	厚さ(cm)	本数	10mm当たりの本数	鋸の当て方	背中のカーブ	樹種	塗色	
SK104	190	3	7.5	3.5	0.5	90	12	細かみ	山	緩い	イスノキ	黄色
SK104	190	4	3.9	4.1	0.9	38	10	細かみ	平	緩い	ミズメ	×
SK104	190	5	7.7	4.0	0.9	72	9	細かみ	山	緩い	ネジキ	×
SK273	190	6	7.3	4.7	1.1	31	4	広い	平	緩い	ミズメ	×
SK134	190	8	4.4	4.7	0.8	50	11	細かみ	山	強い	イスノキ	×
SK272	190	9	5.9	4.8	0.9	50	8	細かみ	山	強い	イスノキ	×
SK271	190	10	7.0	4.4	0.6	30	4	広い	平	緩い	ネジキ	×
SD404	190	1	5.0	5.5	0.1	29	6	—	—	強い	麗甲	—
SB305	190	2	3.3	1.8	0.1	19	6	広い	—	強い	麗甲	—



鋸の当て方

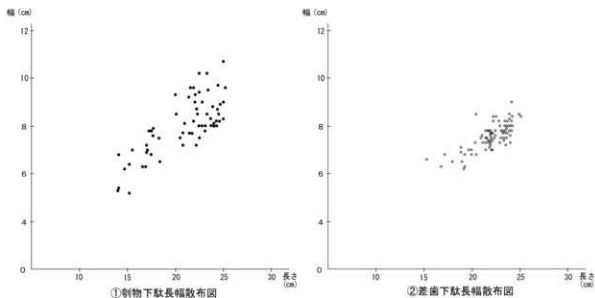


第245図 櫛と歯の集計表と樹種と歯の密度



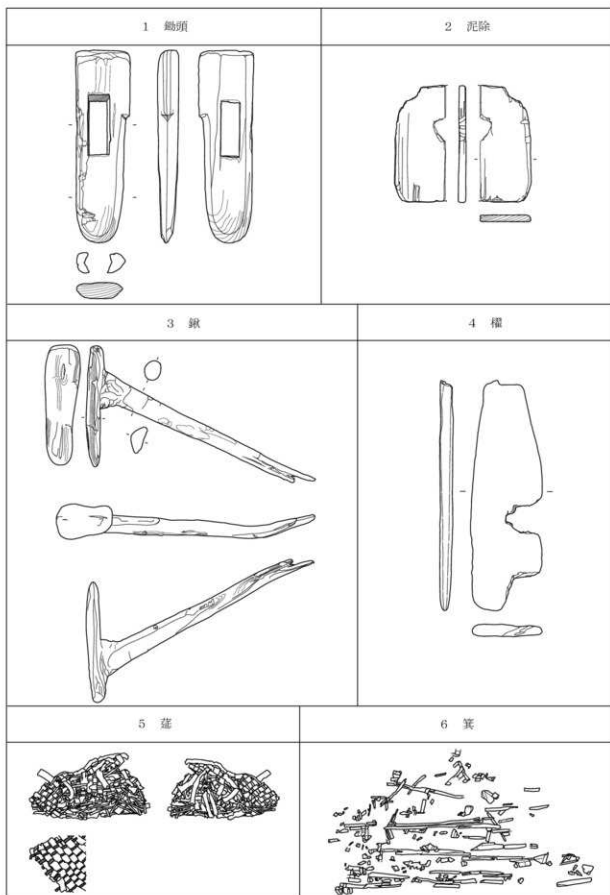
第 246 図 下駄分類図

第3章 発掘調査の方法と成果

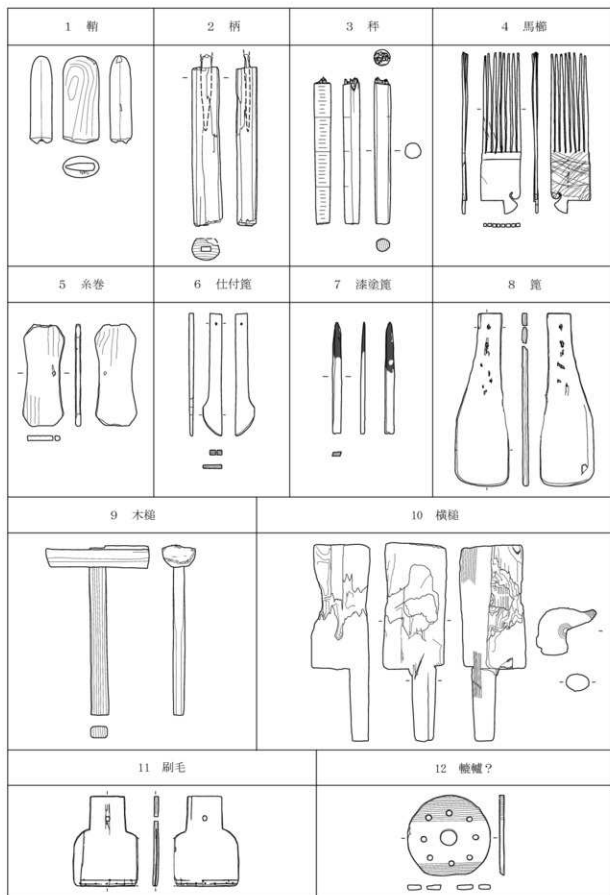


割物下駄				差歯下駄				板草履			
縦 (cm)	点数	横 (cm)	点数	縦 (cm)	点数	横 (cm)	点数	縦 (cm)	点数	横 (cm)	点数
14.0以下	1	5.1-6.0	5	14.0以下	0	5.1-6.0	0	19.1-20.0	1	6.1-7.0	1
14.1-15.0	4	6.1-7.0	10	14.1-15.0	0	6.1-7.0	16	20.1-21.0	0	7.1-8.0	0
15.1-16.0	3	7.1-8.0	25	15.1-16.0	1	7.1-8.0	58	21.1-22.0	0	8.1-9.0	3
16.1-17.0	4	8.1-9.0	28	16.1-17.0	1	8.1-9.0	16	22.1-23.0	2	9.1-10.0	0
17.1-18.0	6	9.1-10.0	10	17.1-18.0	2	9.1-10.0	0	23.1-24.0	1	合計	4
18.1-19.0	2	10.1-11.0	3	18.1-19.0	3	10.1-11.0	2	合計	4		
19.1-20.0	1	11.1-12.0	0	19.1-20.0	6	11.1-12.0	0				
20.1-21.0	5	12.1-13.0	0	20.1-21.0	4	12.1-13.0	0				
21.1-22.0	8	13.1-14.0	0	21.1-22.0	21	13.1-14.0	0				
22.1-23.0	13	14.1-15.0	0	22.1-23.0	16	14.1-15.0	1				
23.1-24.0	10	合計	81	23.1-24.0	24	合計	93				
24.1-25.0	11			24.1-25.0	11						
25.1-26.0	1			25.1-26.0	1						
合計	69			合計	90						

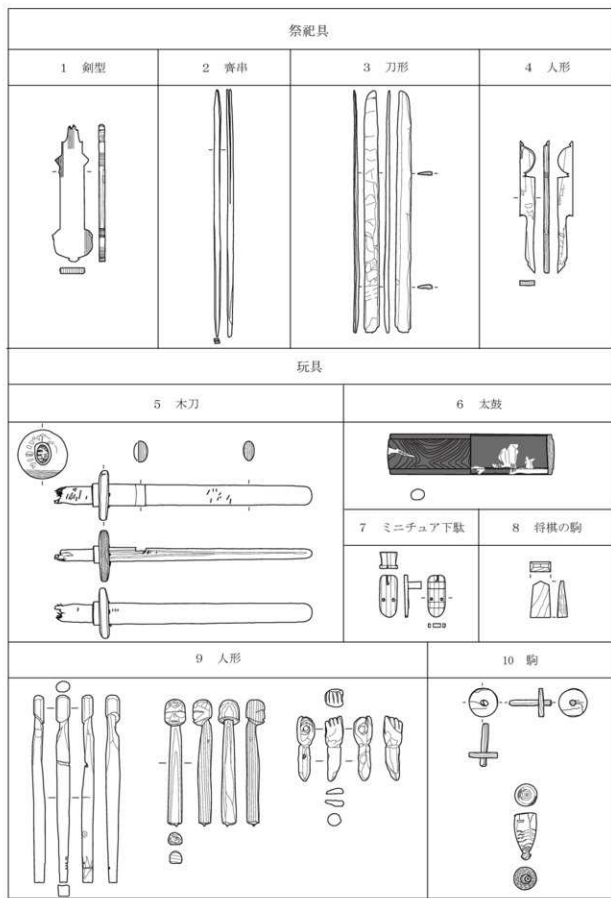
第 247 図 履物度数分布表



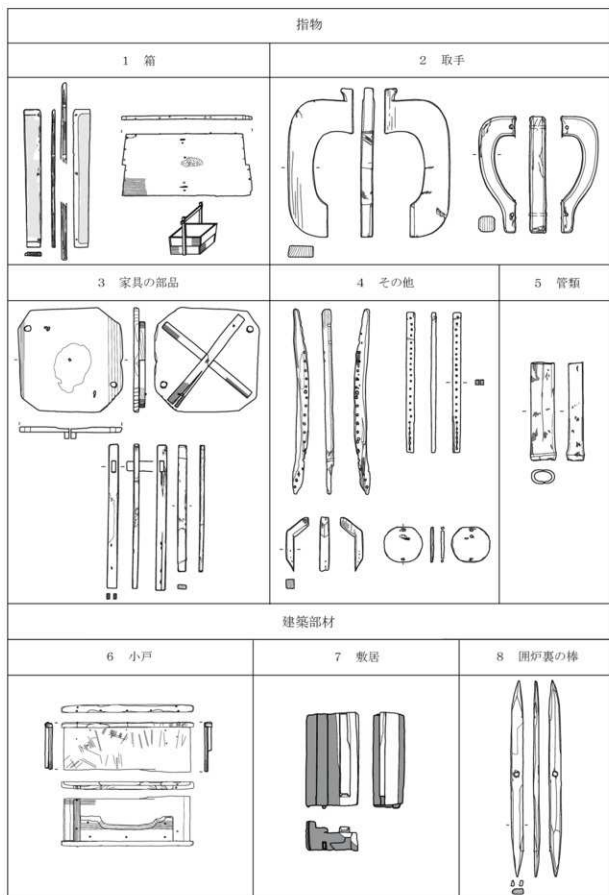
第248図 農具分類図



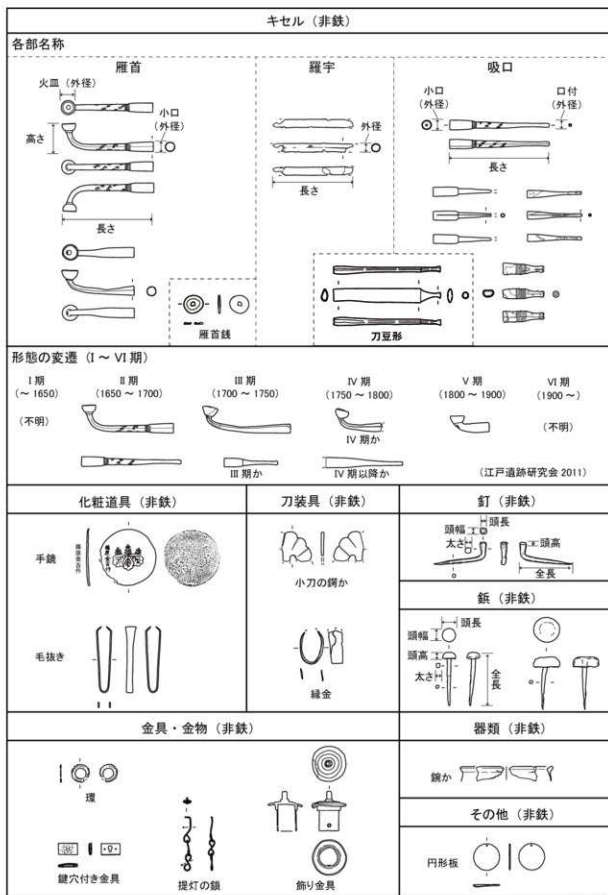
第 249 図 工具分類図



第250図 祭祀具・玩具分類図


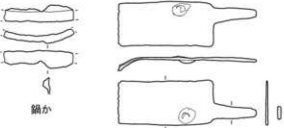

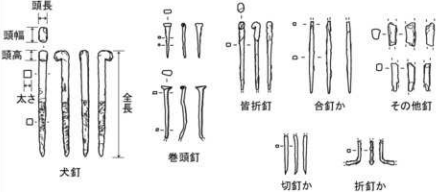
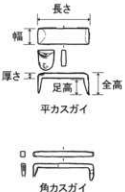
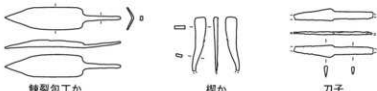





第251図 指物・建築部材分類図



(鏡貸除)

第 252 図 金属製品分類図 (非鉄)

刀装具（鉄）	台所用品（鉄）	
 <p>小柄</p>	 <p>鍋か 包丁か</p>	
鋏（鉄）		
 <p>頭幅 頭長 全長 太さ 工頭高</p>		
釘（鉄）		カスガイ（鉄）
 <p>頭長 頭幅 頭高 全長 太さ 大釘 巻頭釘 管折釘 合釘か その他釘 切釘か 折釘か</p>		 <p>長さ 幅 厚さ 工 足高 全高 平カスガイ 角カスガイ</p>
工具類（鉄）		金具・金物（鉄）
 <p>鎌裂包丁か 楔か 刀子</p>		 <p>花環丸か</p>
鉄関連		その他（鉄）
 <p>羽口 埴塙 椀型滓</p>		 <p>加工物・製品の一部</p>

第 253 図 金属製品分類図（鉄・鉄関連）

第29表 巻頭釘集計表

(注) 巻頭釘473点(巻頭313点・巻頭?160点)のうち、確実に巻頭と分かる313点を集計対象とした。

道構	端点	層位	点数	百分率
SP01	0	0	1	0%
SK89-2	0	0	1	0%
SP80	0	0	1	0%
SK104	0	0	20	6%
SK117	0	0	10	3%
SK128	0	0	1	0%
SK134	0	0	16	5%
SK155,189,190	0	0	2	1%
SK160	0	0	2	1%
SK161	0	0	114	36%
SK164	0	0	3	1%
SK165	0	0	3	1%
SK176	0	0	1	0%
SK179	0	0	15	5%
SK182	0	0	1	0%
SK223	0	0	1	0%
SK247	0	0	3	1%
SK254	0	0	4	1%
SK270	0	0	12	4%
SK271	0	0	8	3%
SK272	0	0	12	4%
SK273	0	0	23	7%
SK285	0	0	1	0%
SD288	0	0	9	3%
SK302	0	0	1	0%
SB305	0	0	3	1%
SK313	0	0	18	6%
SE373	0	0	1	0%
SK377	0	0	1	0%
SD403	0	0	6	2%
SD404	0	0	3	1%
SD405	0	0	3	1%
SK413	0	0	1	0%
SKP1015	0	0	1	0%
0	2区14房	0	1	0%
	2区24房	0	1	0%
	4区	0	1	0%
	4区南	0	1	0%
	4-3区	0	4	1%
	4-7区	0	1	0%
	4-7-8区	0	1	0%
	不明	0	1	0%
合計			313	100%

第30表 巻頭釘の頭部形状

頭部形状(注)	点数	百分率
①	17	5%
②	78	25%
③	51	16%
④	61	19%
⑤	24	8%
左①・右②	2	1%
左②・右③	1	0%
左②・右④	2	1%
左③・右⑤	3	1%
左⑤・右⑤	1	0%
不明・その他	73	23%
合計	313	100%

(注) 頭部形状を以下の①から⑤に分類

- ① 丸められている
 ② 2回折られている(1回目の折りが深く、軸の内側に入り込んでいる)
 ③ 2回折られている(1回目の折りが浅く、軸の外側に出ている)
 ④ 2回折られている(折りの深淺不明)
 ⑤ 1回折られている(半巻き)

第31表 巻頭釘の頭部幅・傾き点数

		頭部傾き(正面から見て)				合計
		左傾	なし	右傾	不明	
頭部幅 (正面から ら見て)	左広	34	11	7	1	53
	均一	25	52	32	2	111
	右広	7	18	32	3	60
	不明	15	11	14	49	89
合計		81	92	85	55	313

第32表 巻頭釘の頭部幅・傾き百分率

		頭部傾き(正面から見て)				合計
		左傾	なし	右傾	不明	
頭部幅 (正面から ら見て)	左広	11%	4%	2%	0%	17%
	均一	8%	17%	10%	1%	35%
	右広	2%	6%	10%	1%	19%
	不明	5%	4%	4%	16%	28%
合計		26%	29%	27%	18%	100%

第33表 巻頭釘の軸部断面形状

軸部断面形状	点数	百分率
正	22	7%
正ウ	18	6%
長	227	73%
長ウ	7	2%
正ウ長?	37	12%
不明	2	1%
合計	313	100%

① 丸められている



② 2回折られている(1回目の折りが深く、軸の内側に入り込んでいる)



③ 2回折られている(1回目の折りが浅く、軸の外側に出ている)



④ 2回折られている(折りの深淺不明)



⑤ 1回折られている(半巻き)



第254図 巻頭釘 頭部形状分類

第4章 総括

①平安時代

(1)「三本柱遺構」の検出

本遺跡から検出した4棟の掘立柱建物跡の内、S B391・439の2棟は柱配置が特徴的である(第66・67図、第3分冊図版17-22)。両者とも中央1本の主柱を左右と中央後ろの3本が支える。左右柱は主柱と同等の大きさで直径半分から1つ分背後にズレる。S B391は中央主柱の底面標高が左右柱よりも10cm程度高い(掘り方が少し浅い)。両遺構とも、中央後ろの1本は控えを取るように細い。S B391は主柱・左右柱の掘り方が70cmを超えるほど大きく深い。また、S B439は中央後ろの控柱掘り方に丁寧に裏込石を充填している。特に斜めになった支柱には、支点・作用点として潰す力がかかる主柱側上部と、撥ね上げの力が働く底面主柱反対側に対して、念入りに礎を配置している。

この様な柱配置を取る構造物は、秋田城跡の著名な2基の3本柱遺構S B786・963、北秋田市胡桃館遺跡のA1建物東西柱群、大館市片貝遺跡の土坑群S K166・167・168が上げられる。遺構の組み合わせは、秋田城跡、胡桃館遺跡例でも2基1組であり、本遺跡と共通する。

これらは秋田城跡が8世紀、他は10世紀前半の遺構である。高(高2020)の集成によると、この様な「利竿遺構」は、現在16都道府県で30遺跡検出されているという(高は「利竿遺構」を提唱しているが、ここでは通りの良い「檜竿支柱」を用いる。また氏は集成に秋田城跡の三本柱遺構を含めていないので、これを入れると31遺跡となる)。高の集成では7世紀に始まり、10世紀では愛知県豊橋市市道廃寺S I-1、奈良県橿原市山田寺跡S X445、北秋田市胡桃館遺跡例、12世紀では岩手県平泉町毛越寺跡No2柱穴を取り上げている。8世紀が多いものの10世紀の例も皆無ではない。

検出遺跡の性格は、寺院や廃寺の名前が付かないのは30遺跡中胡桃館遺跡のみであり、他は全て寺院遺跡である。秋田城跡三本柱遺構S B796・963は、四天王寺関連施設であるし、胡桃館遺跡も発見当初から「祀堂的」と言われ、船木(船木1994)によってB2建物扉に打ち付けられた「雨奉」木簡が発見され、現在は仏教施設の存在が記載されるに至った(山本・高橋2006)。従って、現在檜竿支柱が検出された遺跡は、全て寺院か仏教に関係する遺跡となる。

大館市片貝遺跡では、長辺13.2×短辺11mのコの字形溝跡S D49の真南56mに3基の大形柱穴が二等辺三角形に配置される。これらの土坑を報告書(秋田県教育委員会2018)では縄文時代の土坑としたが、利部(利部2019)は土坑群がS D49の真南にあり、かつ真東には山岳信仰の対象である達子森があるという位置関係を根拠に、S D49との遮蔽となるS A68も含めて土坑群を平安時代の帰属とした(利部に従い、平安時代の大形柱穴群に訂正する)。利部は、S D49の性格を「寺院相当建物が存在しその主体部が削平された」と考え、村落内寺院の可能性を指摘した。実際、S D49と軸方向を合わせて北西28mには墨書土器「寺」が集中して出土したS I06がある。墨書土器は赤色墨と黒色墨で「寺」と書いた坯を4組以上重ねて置いたような出土状況を示した。利部に従い、片貝遺跡も村落内寺院を持つ集落遺跡とする。

ところが上記遺跡に対して本遺跡では、灯明皿の出土比率が高い以外には仏教を示す遺物は出土しておらず、遺跡の性格は土師器生産を行う集落であって、寺院関連遺跡ではない。それにもかかわらず檜竿支柱と思しき構造物が造られていることは、10世紀になれば宗教施設でなくてもこの様な建造物を持つように変化したか、千秋公園の丘陵に未発見の仏教関連施設がありその一部を本遺跡が担っていたと考えることが出来るだろう。

②江戸時代

(1) 正門の変遷

正門では新しい順に、S B305・339・502・503・504・507・508と7棟の建物が変遷した。これらの内、残りが良いS B305・339・503・504の4棟を抽出して変遷を示す。なお、正門建物群は、S B305礎石上面の標高がおおよそ9.3mである。洪江家敷地内部標高が10.3mであるのに対し、1m前後低い。来訪者は正門をくぐった後、さらにもう1段登って敷地内へ入ることになる。

【古段階】 S B504。掘立柱の冠木門か薬居門。

【中段階】 S B503。掘立柱の冠木門か薬居門。

【1682年】 火事で大きな被害を受ける。焼土面形成。正門もおそらく焼失。

【新段階1】 S B339。礎石建物。焼土面に直接乗る。

【新段階2】 S B305。礎石間を地覆石で連結し、排水施設を石造化する。三和土形成。宝暦9年(1759年)以後。

【新段階3】 明治以後。S B305 p 1・2柱筋の北側に大きな浸食痕跡。それを埋め公会堂・記念館への斜路形成。

(2) 脇門の変遷

脇門は、建物の開口方向と焼土面との上下関係、石造化した排水溝の下に埋め殺しとなっていた排水路側板から3段階の変遷を考えた。その過程を以下に示す。

【古段階】 脇門は東に開口。S B402、S E373が機能する。井戸は正保国絵図に描かれた。

【中段階】 脇門が東開口から南開口のS B288へと変化。それに伴い、小土塁S F408が造成されその上にS A410がならぶ。中土橋通りS M368から脇門への進入路としてS M368斜路と、S D288古段階(木製側板を杭留め)、S D366が整備される。

【1682年】 火事で大きな被害を受ける。焼土面形成。S B288の前身である脇門建物が焼失する。

【新段階1】 脇門建物S B288が建つ。

【新段階2】 S D288の石造化。脇門はS B288である。19世紀には石造化を完了。

【新段階3】 脇門廃絶。S D288の蓋石を1か所どかし掘石1点を砕き円礫で埋める。「城割り」。

(3) 中土橋門の変遷

【古段階】 S B493・494。創建期。掘立柱の冠木門。土塁食違部よりも内側。この時点では中土橋通りの位置が決まっただけで、土塁は未完成かも知れない。

【新段階】 絵図に描かれるように土塁S F01と田原美土塁の食違部分を塞ぐ。調査では未検出。

(4) 穴門周辺の変遷

【古段階】 S F01は割り出し。S D16・25が佐竹小路に開口。旭川河道の埋め立ては未完成。

【中段階】 1600年代中葉(唐津Ⅱ期)以後、S F01を盛土で拡張。旭川河道はおそらく埋め立てが終わっていない。正保絵図に描かれるような整然とした形態にはなっていない。埋め立てが終わって土地が安定するのは1600年代の後葉以後と推定。

【1682年】 火事の影響不明。

【新段階1】 S F01を切ってS D20が石造化。東からの支線が傾斜を持って連結し溢水防止に蓋石をかけていることから、通用口が開口している可能性がある。

【新段階2】 新政府への引き渡し時か。S D20蓋石を外して埋め戻し。排水機能が失われる。

敷地内の使い分けについて、中村氏所見によれば「敷地形状と門の序列から敷地内の空間構成を類推すると、敷地北半が「表」、敷地南半が「奥」となる」。

第4章 総括

引用・参考文献

- 青森県史編さん古代部会2008「第Ⅱ部4 秋田県出土の墨書・刻書土器」『青森県史資料編 古代2 出土文字資料』青森県
- 秋田県教育委員会2018「片貝遺跡－大館工業団地開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－」秋田県文化財調査報告書第509集 秋田県教育委員会
- 秋田県公文書館編 1998「浜江和光日記」文政三年八月十一日条 477頁 秋田県
- 秋田市教育委員会2008「秋田城跡 瀬木地区」秋田市教育委員会
- 秋田裕哉2002「ものと人間の文化史104 下駄 神のはきもの」295頁 法政大学出版局
- 市田京子2000「江戸時代の下駄」江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』26-54頁 吉川弘文館
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012「木の考古学」449頁 海青社
- 江戸遺跡研究会編 2001「4 漆碗編年表」『江戸考古学事典』柏書房
- 大山幹成・星野安治2013「年輪年代学から見た江戸遺跡出土木質遺物」『江戸遺跡研究会第26回大会 江戸と木の文化 発表要旨』29-42頁
- 小川望2000「出土遺物から見る江戸の「タバコ」」江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』192-217頁 吉川弘文館
- 利部修2019「第2章第4節 片貝遺跡の平安時代土器」『考古学研究とその多様性－東北からの視座－』154-169頁 雄山閣
- 梶原勝2020「近世都市江戸における灯火具としてのカワラケ」『灯明皿と官衙・集落・寺院』119-132頁 クバプロ
- 神野志2020「古代都城の灯火具－灯火観察のスヌー」『灯明皿と官衙・集落・寺院』27-51頁 クバプロ
- 小泉和子・渡辺由美子2020「ものと人間の文化史184 掃除用具」318頁 法政大学出版局
- 越村篤2013「江戸遺跡出土木製品の概観」『江戸遺跡研究会第26回大会 江戸と木の文化 発表要旨』69-89頁
- 高正龍2019「日本古代寺院における「幢」の考古学的研究」菱田哲郎・吉川真司編『古代寺院史の研究』55-70頁 思文閣出版
- 鈴木伸哉2013「近世の森林植生と木材利用」『江戸遺跡研究会第26回大会 江戸と木の文化 発表要旨』7-27頁
- 谷田有史 2000「江戸時代のたばこ」江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』171-191頁 吉川弘文館
- 土井喜久一 1970「ウィーバーの組み合わせ分析法の再検討と修正」『人文地理』第22巻5-6号 1-18頁
- 中井さやか 1992「近世の漆碗について－その器種と組み合わせを考える－」江戸遺跡研究会編『江戸の食文化』180-204頁 吉川弘文館
- 長佐古真也2022「Ⅳ-3 江戸遺跡からみた初期の肥前磁器産量碗」大橋康二先生喜寿記念論文集編集委員会編『大橋康二先生喜寿記念論文集 陶磁器と考古学』241-250頁 雄山閣
- 萩尾昌枝 1992「江戸時代初期の宴会の食器類－東京大学医学部附属病院中央診療棟建設予定地点「池」出土の木製品－」江戸遺跡研究会編『江戸の食文化』205-219頁 吉川弘文館
- 原祐一2013「江戸時代の木製品研究について近世の森林植生と木材利用」『江戸遺跡研究会第26回大会 江戸と木の文化 発表要旨』133-160頁
- 船木義勝1994「板屋の墨書文字」『秋田県立博物館ニュース』No97 4頁 秋田県立博物館
- 星野安治・大山幹成 2010「第5章第2節 秋田県森吉山ノ前A遺跡の年輪年代学調査」『森吉山ノ前A遺跡（第3次）－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅡ－』秋田県文化財調査報告書第453集 191-196頁 秋田県教育委員会
- 脇野博2013「江戸と林業」『江戸遺跡研究会第26回大会 江戸と木の文化 発表要旨』43-51頁
- 山村剛2009「秋田における貝風炉の一考察と下駄の編年について～久保田城下の発掘調査から～」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第23号 38～51頁 秋田県埋蔵文化財センター
- 山本崇・高橋学 2006「胡桃館遺跡出土木簡の再訳説について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第20号 55～69頁 秋田県埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	くぼたじょうあと							
書名	久保田城跡							
副書名	あきた芸術劇場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 (第1分冊 本文・遺構図版編)							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第532集							
編著者名	磯村亨 村上義直 宇田川浩一 櫻庭悦央 武藤祐浩 山田祐子 山村剛							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター			TEL (0187) 69-3331				
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市弘田字牛嶋20番地							
発行機関	秋田県教育委員会			TEL (018) 860-5193				
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王三丁目1番1号							
発行年月日	2024 (令和6) 年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くぼたじょうあと 久保田城跡	あきたし 秋田市 せんしゅうめいこうじょう 千秋明徳町 2-52	050201		39° 43′ 00″	140° 7′ 30″	1次 20180618- 1214 2次 20190212- 0726 3次 20210216- 0331	12,310 ㎡	あきた芸術劇場整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
くぼたじょうあと 久保田城跡	狩猟場	縄文	陥し穴 溝跡	10基 1条	縄文土器 石器 弥生中期土器	平安時代の特殊な掘立柱建物を2棟検出。笹竿支柱と思われる。江戸時代に家老職を歴任した浪江家の屋敷を全面調査。正門・脇門と久保田城創建期中の土橋門を検出した。正門は礎石建ちであり、石造U字溝が設置されていた。中土橋通りを通る排水溝には内法幅60cmの本樋が30mにわたって敷設されていた。		
	散布地	弥生・縄文	なし		後北C2D式			
	集落	平安	掘立柱建物跡	4棟	灰陶器・土師器			
	生産地		竪穴建物跡	8軒	須恵器			
			土師器焼成遺構	2基	国産陶磁器 (肥前他九州・瀬戸美濃・関西系・信楽・越前・備前他)			
			井戸跡	2基				
			焼土遺構	13基				
		煙跡	1か所					
	城館	江戸	土塁 礎石建物跡 掘立柱建物跡 竪穴状遺構 井戸跡 道路跡 土坑 溝跡 焼土遺構 煙跡	3か所 1棟 30棟 7軒 14基 2か所 173基 64条 22基 2か所	中国陶磁器 (龍泉窯・景德鎮・漳州窯・交趾止) 土器 (かわかけ・焙烙・貝風・卯・土師・土鈴・土製品) 木製品 (本樋・漆器・指物他) 石製品 (礎・温石・礎石他) 非鉄金属製品 (銭貨・新・キセル他) 鉄製品 (刀子・釘・鋸他)			
	公有地	近代	門跡	1か所	防衛食器・レンガ他			
要約	縄文時代の狩猟場に始まり、平安時代の集落・生産地を経て、江戸時代には久保田城三の丸南西隅に置かれた上級武士の邸宅遺跡。藩の家老職を歴任した浪江家の屋敷跡を全面調査した。浪江家は1604年頃から明治維新後、新政府に引き渡すまで260年以上に渡って本遺跡で生活した。調査地南東部を中土橋通りが併形を形成し、創建期中の土橋門を検出した。1682年に起きた火事痕跡と思しき焼土跡を道路東側に広く認め、屋敷正門・脇門とも焼土面の上下に検出された。1759年以後いつかの段階で正門が礎石建ちとなり、脇門の排水施設が石造化した。平安時代の笹竿支柱と思しき特殊な掘立柱建物跡を検出した。							

秋田県文化財調査報告書第532集

久保田城跡

—あきた芸術劇場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行	令和6(2024)年3月
編 集	秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 大仙市弘田字牛嶋20番地 電話 (0187)69-3331 FAX (0187)69-3330
発 行	秋田県教育委員会 〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号 電話 (018)860-5193
印 刷	秋田中央印刷株式会社

